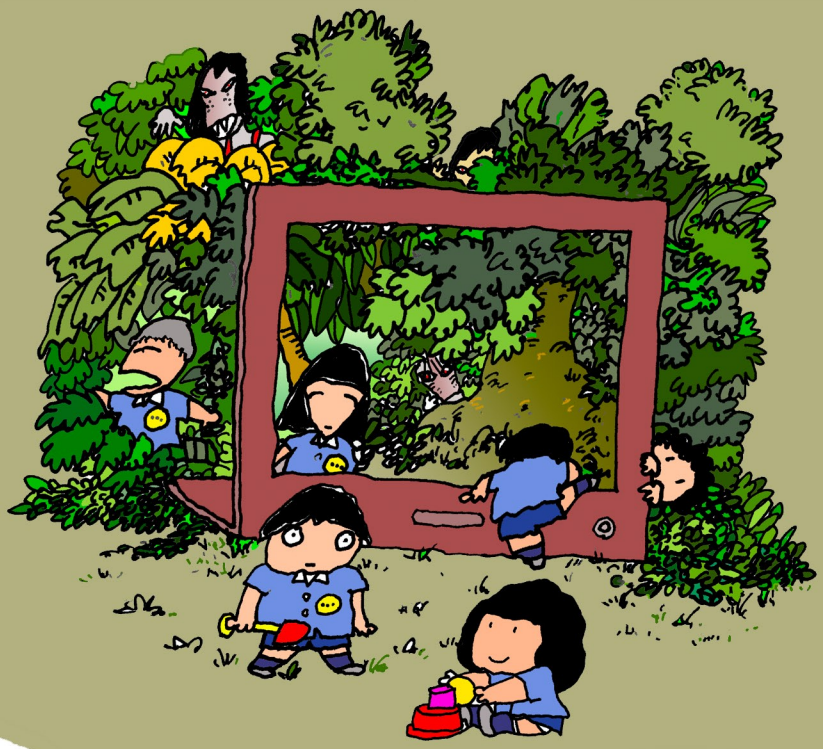
連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 13 No. 3

第51号

December 2022

対人援助学会

No.51　M O K U J I

目次		002-004
ハチドリの器	見野　大介	005
執筆者@短信	執筆者全員	006-018
障害者福祉援助論	千葉　晃央	019-021
臨床社会学の方法（39）	中村　正	022-031
人を育てる会社の社長が、今考えていること（休載）	団　遊	
コミュニティの中で（休載）	藤　信子	
カウンセリングのお作法（33）	中島　弘美	032-034
エア絵本　－ビジュアル系子ども・家族の理解と支援－	岡田　隆介	035-048
晩年 D・A・N 通信	団　士郎	049-059
社会的養護の新展開（休載）	浦田　雅夫	
幼稚園の現場から（51）	鶴谷　主一	060-065
福祉系対人援助職養成の現場から（51）	西川　友理	066-071
ああ、相談業務（11）	河岸　由里子	072-076
生殖医療と家族援助（休載）	荒木　晃子	
ドラマセラピーの実践・研究・手法（10）	尾上　明代	077-080
きもちは言葉をさがしている（48）	水野　スウ	081-088
ノーサイド（38）	中村　周平	089-090
路上生活者の個人史（6）	竹中　尚文	091-093
男は痛い！（45）	國友　万裕	094-100
役場の対人援助論（43）	岡崎　正明	101-105
臨床のきれはし（19）	浅田　英輔	106-108
発達検査と対人援助学（10）	大谷　多加志	109-111
対人援助点描（29）	小林　茂	112-113
講演会＆ライブな日々（33）	古川　秀明	114-116
立場が変わると何かが見える（3）	坂口　伊都	117-122
周辺からの記憶　－東日本大震災家族応援プロジェクト－（37）	村本　邦子	123-131
精神科医の思うこと（27）	松村　奈奈子	132-134
馬渡の眼（休載）	馬渡　徳子	
東成区の昭和　やぶにらみ日記	柳　たかを	135-142

心理コーディネーターになるために	山下　桂永子	143-145
そうだ、猫に聞いてみよう（28）	小池　英梨子	146-152
先人の知恵から（38）	河岸　由里子	153-158
うたとかたりの対人援助学（24）	鵜野　祐介	159-162
ああ結婚（24）	黒田　長宏	163-165
PBL の風と土（23）	山口　洋典	166-171
接骨院に心理学を入れてみた（22）	寺田　弘志	172-178
現代社会を『関係性』という観点から考える（22）	三浦　恵子	179-183
保育と社会福祉を漫画で学ぶ（18）	迫　共	184-187
「余地」―相談業務を楽しむ方法―（21）	杉江　太朗	188-191
統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡　園子	192-194
生体肝移植ドナーをめぐる物語（19）	一宮　茂子	195-199
盲ろう者として自分らしく生きる（休載）	中條　與子	
こころ日記『ぼちぼち』partⅢ（休載）	脇野　千恵	
フリースクールでの SW 実践を考える（5）	高名　祐美	200-203
原田牧場 Note（11）	原田　希	204-206
みちくさ言語療法（8）	工藤　芳幸	207-210
かけだ詩（11）	川畑　隆	211-215
応援、母ちゃん（11）	玉村　文	216-219
HITOKOMART（11）	篠原ユキオ	220-226
キャリアと文化の心理学（休載）	土元　哲平	
フランスのソーシャルワーク（6）	安發　明子	227-267
新潟水俣病を学び、考えたこと	本間　毅	268-272
川下の風景（8）	米津　達也	273-274
一語一絵（8）	畑中　美穂	275-277
福祉教育への挑戦（8）	高井　裕二	278
対人援助をリブートするこの一冊（9）	渡辺　修宏　他	279-282
対人援助をリブートするこの一冊（10）	小幡　知史　他	283-285
対人援助をリブートするこの一冊（11）	二階堂　哲　他	286-287
対人援助をリブートするこの一冊（12）	長谷川　福子　他	288-291

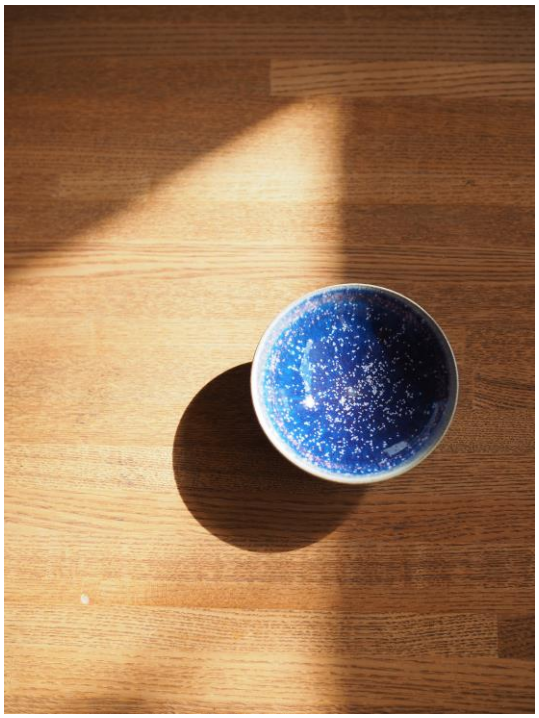
島根の中山間地から Work as Life（7）	野中　浩一	292-299
かぞくのはなし（5）	きむらあきこ	300-303
ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（3）	高木　久美子	304-307
連載 2 回目 先生のための 16 のことば（2）	原田　孝	308-309
連載 2 回目 こかげのにちじょう（2）	鳴海　明敏	310-311
連載 2 回目 私はここにいる　−現象学としての書道−	櫻井　育子	312-313
新連載 社会教育の周縁（1）	山本　竜司	314-315
新連載 コソダテ ノ シンリ（１）	中谷　陽輔	316-318
特別連載 家族面接の実践から里親家族支援を考える その①	早樫　一男　他	319-325
対人援助学マガジン読書会報告	編集部	326
編集後記	編集長＆編集員	327-328
対人援助学会第 14 回大会参加記	大会参加者	329-



ハチドリの器　34

見野 大介

Mino Daisuke





左上：翠釉スープカップ
左下：珈琲碗と波紋皿
右上：蒼天釉平盃
右　：花菱皿と波紋皿
右下：梟釉土鍋





第51号

執筆者@短信

山本　竜司　新連載

「社会教育って対人援助なの？」という素朴な問いかけを受けたことが、対人援助学会に興味をもったきっかけでした。社会教育も学習支援という対人援助の一つだと単純に思っていた私は、あらためて「教育」や「支援」「援助」とは何かについて考えざるを得なくなりました。社会教育主事としての現場経験を言語化したくて通信制大学院に社会人入学した私。現場、研究、日常を通して、社会教育の周縁を縁取りたいと思います。

社会教育の周縁
P314～

中谷　陽輔　新連載

初めましての方も多いこの学会で、ご縁があり連載を始めさせていただきます。

私は、社会福祉法人 盛和福祉会というところに勤めており、12 年目となりました。正式な肩書としては、児童養護施設『京都大和の家』の家庭支援専門相談員　兼児童家庭支援センター『山城こども家庭センターだいわ』の相談員と、えらく長い名称になってしまうので、ふだんは端的に、「児童福祉施設の相談員」と自己紹介します。拙稿にも、自己紹介がてら、家族のことを少し書かせていただきました。

家族でいうと、この短信を書いている時、妹に第一子が生まれたという嬉しい報告がありました。かたや自分の家庭では、この１週間ほど、季節の変わり目で妻と 1 歳の娘が風邪をひいてダウンし、4 歳でやんちゃ盛りの元気な息子も含めて、それぞれ質の異なるケアを展開する日々でした。かと思えば、その息子が、とある NHK の番組に少しだけ映ることになって親が無邪気に喜んだりもして、なかなか慌ただしい日々を過ごしています。

そうやって、いろんな家庭が、現在進行形で動いたり変化したりしているのだなぁと、身近なところからしか考えを展開できない私は、しみじみ感じています。

それではこれから、よろしくお願いいたします。

コソダテ ノ シンリ
P316～

櫻井　育子

あるとき、誰かから「ひとり公共事業」と言われて、言い得て妙だなと、やや自虐的に自分の仕事について語ることがあったのだが、最近は、いろんな人がひとりずつ、ひとり公共事業を展開していけたら、ちょっとしあわせに近づいていくんじゃないか、など考えてニヤニヤしている。で、こんなことを考えてニヤニヤしている状態そのものが、しあわせな図だな、とあらためて思う。ご機嫌な大人が増えたらいい。気前のいい大人が増えたらいい、とそんなことばかり考える最近です。

わたしはここにいる
P312～

原田　孝

最近、いろいろなところで支援教育の在り方についてお話しする機会を与えていただいています。今回の私の文章でも触れていますが、考えてみると教育がそれ自体で子どもたちの成長発達の支援ととらえることができます。そこで子どもたちの成長発達をきちっととらえることができれば、それに必要な支援がおのずと見つかると私は考えています。そのような視点で、今回の私のお話しをお読みいただければ嬉しいです。

先生のための 16 のことば
P３０８～

鳴海　明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設（現在は、児童心理治療施設）の園長を引き受けてから、13年目に入っています。

学園の各部屋には、それぞれ愛称がつけられています。職員室は「ほしぞら」、事務室は「あさひ」、医務室は「はるかぜ」、相談室は「こなゆき」という具合です。二階の子どもたちの居室には、オリオン、シリウス、タイタンなどの名前がついています。

この施設の開設を決意し建物を建て、私を園長に呼んでくれた前の理事長の、夢や希望が込められているような気がしています。園長室には「こかげ」という愛称がつけられています。ということで、サブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。紹介する子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

青森の秋は、冬支度に追われ慌ただしく、あっという間にすぎてしまうことがおおいのですが、今年の秋は、晴天がつづき、例年に比べて秋を楽しめているなあと感じています。それは、もしかしたら、10月中に車のタイヤを交換してしまったからなのかも知れません。夏タイヤに比べると冬タイヤは減りやすいと思っているので、これまではできるだけ、ぎりぎりまで交換せずに行こうと辛抱してきたのですが、今年はそんなところで節約・倹約してもしょうがないだろうと、奥さんとも意見が一致して、早々と交換したのでした。

児童心理治療施設の園長室から
～こかげのにちじょう～
P３１０～



高木　久美子

無事に 3 回目の連載の投稿をすることができほっとしています。

この 3 か月間は、対人援助学会への初参加や、主宰するボランティアグループでの視覚障害の友人のコンサート他、音楽関係の支援が2つ。そして意思疎通支援の活動の新たな連携と充実した楽しい期間

でした。3 回目の投稿に、その一部をご報告できることをうれしく思います。

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！
P304～

きむら　あきこ

またしても、本編は、「病」の話です。11 月、コロナ感染しました。

夏に公開された映画、ベイビーブローカー、公開当初 2 度も続けて観ました。3 度目は、是枝監督のトークショーと抱き合わせ観る予定でチケットを購入していましたが、コロナ感染で、見事にダメになりました。がっかりです。健康は、つくづく大事だと感じます。

対人援助学会の年次大会には、オンラインで参加することができました。マガジン執筆者の方とも画面を通し交流することができました。「対人援助」になっていない、私の本編ですが、私自身の生きる力にはなっているようにも感じます。そんな解釈で、また、今号も書き残すことができました。

次号は「病」ネタにならないように、元気な冬を過ごしたいと願いつつ･･･

かぞくのはなし
P300～

原田　希

毎年夏は、搾乳手袋の中が蒸して汗疹に悩まされるのですが、今年は手のひらや指の節々が真っ赤に腫れ上がるくらいに重症化してしまいました。アルコール消毒の日常化も肌には悪く、涼しくなっても治る気配なし。一時的に仕事を休んだり、水仕事などの家事も極力控えめに、ハンドケアに励みました。搾乳&水仕事で使うビニール手袋の下には綿の手袋をして、湿気ったら何回でも変える、めんどくさがったら治らないですよ、と病院の先生に言われて実行しています。パソコンで原稿を書くときも、車の運転をするときも、寝るときも、ハンドクリームを塗ってから綿手袋。たかが手湿疹、でも仕事や家事をやらないわけにはいかない。一生治らないかもなあ…と洗濯した大量の綿手袋を干しながら暗い気持ちに。そこへ手伝いに来た夫が一言「千手観音？」なんて言うので吹き出してしまいました。笑いって心に効くよなあ。一瞬で暗い気持ちが飛びました。今回の原稿では、一番近くの一番小さなコミュニティ＝夫婦のことをあれこれ書きました。結局ノロケやん！になりがちなテーマでアレですが、お時間ありましたらのぞいてください。

原田牧場Note
P204～

野中　浩一

私が住む島根県、その県庁所在地にある松江駅の周辺で、ここ 1～2 年空き店舗が増えています。つい先日はコンビニが撤退し、次に何が入るのかと見ていると入居募集の看板が。駅近くでいくつもの空き店舗が埋まらない状況を見るのは、16 年住んでいて初めてのことのように思います。

松江駅にICカードが導入されたのが 2016 年 12 月。東京でICカードが導入された 2001 年 11 月、当時東京に住んでいた私が、その日導入されたばかりの Suica を小岩駅に買いに行ってから 15 年が経っていました。都市部の発展が届くまでに 10 年以上かかる一方で、感染症や不景気の影響はすぐに届く印象の地方。

マイナスはすぐに届き、プラスは 10 年かかる。そんな時差がある地方の冬をどう乗り切るか。身近で寄り集まって、長い冬にだれもが暖をとれるよう算段しなければと危機感を募らせる昨今です。

「島根の中山間地から Work as Life」
P292～

畑中美穂

娘が子を連れて帰省した。滞在中に、ずり這いが、高這いに。つかまり立ちが、一人で立てるように。その子の、ある日の『今日のお仕事』。

①いちょうの葉っぱをちぎってほかす（50 枚ぐらい）。②お気に入りのぬいぐるみを、好き好きする。③風に吹かれながら、口笛をふく。④だっこひもの様子を調べる。⑤おかあさんのおにもつをたなから引きずり落とす（そしてなかを調べる）。⑥家庭内暴力 2件；お気に入りのぬいぐるみが放り投げられる。もうひとつのお気に入りが蹴られる。⑦びよーんとなるものを びよーん として調べる（そしてなめる）。⑧階段を 16 段登る。

起きて、食べて、遊んで、寝て、また起きて。目に見えての“初めて”のことが毎日のようにあって。本当は私にも、気づいていないだけで“初めて”のことが毎日、起こっているのかもしれない。そのように思うと、いつまでも「まだまだ若造だな。ふふ」と思えてきた。シンプルな、喜びに満ちた日々であった。

一語一絵
P275～

渡辺修宏

「早く行きたければ一人でいけ、遠くへ行きたければみんなで行け（If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.）、とは誰の言葉だったのか？

たぶん、アフリカのことわざがルーツでしょう。一人で身軽に、早々とあそこにいくのもいいですが、ちょっとのんびり、でもがっつりきっちりみんなで進むのも悪くないと思う今日このごろです」

対人援助実践をリブートする
この一冊
P279～



米津達也

山に登ると、山を登った自慢の話や、登り方の講釈、アクシデントに見舞われた武勇伝を、大方4割増しで語るオッちゃんが多い。それを見も知らぬ女性に語っているのだから、老害だろうとしか思わないが、自分もそうならないように気を付けないと…。しかし、山のオバちゃんたちは、そんな語り方はしないなぁ

川下の風景
P273～

高井裕二

長時間のデスクワークが続いています。肩凝りが酷く、勤務先でも常に肩を回したり、揉んだりしていたところ、その様子を見ていた某先生から「ロイヒつぼ膏」の大判サイズをいただきました。大判サイズって

あったのですね。貼ってみると血行が促進されたのか、気持ちいいです。常備しておこうと思います。いただいた先生に感謝です。

福祉教育への挑戦
P278

本間　毅　退院支援研究会

フォトエッセイ集『MINAMATA』の冒頭、作者のユージン・スミスは、ジャーナリズムにおける客観性のしきたりを除き、複雑な状況を主観的に理解することが重要[1]であると強調しました。また漱石は『草枕』で、四角に生きるべきところを、常識と名の付くひとつの角を摩滅した中に生きるのが芸術家である[2]と説いています。



この原稿の締切りの 6 日前に、私は新潟から第 14 回大会開会を宣言します。コロナ禍が始まる半年前の 2019 年夏、私は「新潟水俣病資料館」で水槽越しにニゴイの「貴方に伝えて欲しいことがある」という聲を感じました。今号では、それから 3 年後の 2022 年夏、医師であり思想家でもある齋藤恒先生の物語を聞き、新潟水俣病の舞台となった阿賀野川流域に生きた人々の足跡を辿る旅を経て考えたことを述べたいと思います。



新潟水俣病概論　Ⅱ
（症候と認定基準の変遷）
P268～

土元　哲平

2022 年 11 月 20 日に、『転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー』（土元哲平，著）が、ナカニシヤ出版様より刊行されました！！出版社の方をはじめ、関わってくださったすべての方に感謝してもしきれません。

これは、オートエスノグラフィーと文化心理学の接点を探究した著作であり、博士論文に基づいています。海外で滞在しての議論や、さまざまなキャリアに悩みを抱える人との出会いがなければ完成しませんでした。これをスタートラインとして、文化心理学や、熟慮的オートエスノグラフィーについて深めていきたいと思います。よろしくお願いします。



キャリアと文化の心理学
休載

玉村　文

今月、対人援助学マガジンの読書会に参加させてもらいました。子育て経験者からの、「子どもがいることが人生にどんな影響を及ぼすか」という質問には、豊かな表現で応答があり収穫でした。この号では、子どもの病気のときの働き方について、経験から気づいたことをまとめました。そうしてみると、子どもの病気自体はネガティブな出来事ではあったのですが、学び得たことが見つかりました。子どもの病気をすべて予防できるとは思いません。その上でどのように働けるか、働く姿を見てもらえるのかを考える機会となりました。

応援　母ちゃん！
P216～

川畑　隆

この秋は長女の子どもの七五三（七歳）と次女の赤ちゃんの宮参りが続きました。七五三参りは伏見の御香宮、宮参りは宇治の宇治上神社。七歳の着物は孫娘が自分で選んでレンタル、赤ん坊の上にかける着物は長女の宮参りから使っているから 37 年目の代物。両日ともとてもいい天気で、祖父母の私たち夫婦は、孫たちと一緒に久しぶりにお祓いもしてもらって少し厳かな気持ちになれたし、きれいな景色の一部にもなれたし、おいしんもんも食べられたし、いい日でした。

宇治に住んでいるから宇治上神社が身近なんですが、平等院・萬福寺・三室戸寺…の次に世間では宇治上神社があがってきません、世界遺産なのに。でもそれがいいのかもしれません。あのひっそりと佇む地味さは何物にも代えがたい。

その宇治上神社に代わって四番目に…じゃなくて、平等院もおさえてトップに躍り出ている（??）のが、パンの「たま木亭（たまきてい）」。エライ人気で各地から訪れる人で朝から大行列。たしかにウマイ！　他の店のパンとちょっと…どころかだいぶ違う！　おすすめはパイシュー？　いや何でも good。JR・京阪黄檗駅で降りるんです。パンを買い込んで、店の向かいの京大宇治キャンパスの芝生の上でパクつくのがおすすめだけど、12 月じゃあ寒いですね。それは春まで待ってください。ちなみに営業は木金土日。

かけだ詩
P211～

高名祐美

2年半ぶりに電車で旅をした。大学の先輩が、県外での研修会に講師として招かれ、そのアシスタントをするためである。

移動する電車の車中では、パソコンを開いて研修の打ち合わせをしたり、近況報告をし合ったり、駅弁を食べたりとしているとあっという間に時間が過ぎ去る。そして夜はご当地メニューなるものをいただきながら、また話す。パソコンの画面越しではなく、直接会って話をすることが楽しくてたまらない。

研修会が終われば、おみやげを急いで買って、帰路につく。おみやげ選びもまた楽しい時間である。「旅行支援」の割引適用もしっかり受け、ご当地クーポン 3000 円分もおみやげや食事で使い切る。慌ただしいが旅気分を満喫できた県外への研修会参加であった。

コロナ禍でオンライン研修が主流となっ

たが、対面集合型研修も少しずつ実施できるようになってきている。対面では参加者の反応を目の当たりに感じ、講師と参加者のライブでのやりとりがスムーズにできる。反応がストレートに伝わってくる。グループワークもブレイクアウトルームではなく、会場内を歩いてすべてのグループを見て回ることができる。参加者一人ひとりの発言が聞こえてくる。全体も見渡せる。マスク着用でも、フェイスシールド着用でも、マイクの消毒をその都度しながらでも、対面集合型研修にはその魅力がある。オンライン研修は移動時間がなく、気軽に参加できるが、対面集合型研修には移動＝旅気分という嬉しいおまけがついてくることを体験した。

フリースクールでのSW実践を考える
P200

岡田隆介

「こども・家族の理解と支援」というテーマで、実際の講座をイメージして作ってきました。この歳までしゃべってきたことや感じたことを、こういう形で残せてよかったと思います。書き残しも思い残しもないので、これで終わりにします。書き残す機会を与えてくださった方々、見ていただいたみなさまに感謝いたします。

エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P35～

ありがとうございました。（編集長）



一宮　茂子

【「りくりゅう」フィギュアスケート NHK 杯優勝】

皆さまは「りくりゅう」って知っていますか。それは三浦璃来さん（20 歳、145 ㎝）と木原龍一さん（30 歳、175 ㎝）のフィギュアスケートのペアの選手のことです。身長差 30 ㎝、年齢差 10 歳ですが、いつ見ても 2 人の笑顔に癒され、観客の笑いを誘うような演技や、会場から拍手がおきて、今まで経験したことがないほどに楽しく温かい気持ちになります。2022 年の 2 月におこなわれた北京オリンピックのフィギュア団体で日本勢初となる 7 位入賞、10 月のカナダスケートでは優勝、11 月の NHK 杯でも優勝。今まで日本人のペアでここまで結果を残した選手はいないそうです。「りくりゅう」は今シーズンのアイススケート大会に出場した全ての大会で表彰台に上がり、日本人ペア史上最高順位を連発しています。大型画面に映し出される 2 人の演技はもちろんスバラシイ。また 2 人の演技に笑顔が多くて、しぐさが爽やかでカワイイのです。私は一度見ただけで彼らの虜になりました。そんな場面が映し出されると会場からは沢山の拍手や笑いが生じます。そのため憂鬱なときの私は「りくりゅう」の動画を観て元気をもらっています。ずーとペアでいてほしいな。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P195～

松岡　園子

今回の原稿は、声で書いてみました。スマホの音声入力で思っていたよりも早く仕上がりますし、キーボードを打つ時間が短くなったことで肩もこらずに済みました。家事や移動をしている間に、スマホに話しかけているだけで原稿が仕上がって嬉しくなります。

キーボードを打つことで肩がこる方には、おすすめの方法です。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども
P192～

杉江　太朗

子どもの福祉領域で働く杉江です。動物園に行く機会があり、それぞれの動物の出生地や生活歴などを見ていると、特に絶滅危惧種と呼ばれる動物は、その種の保存を意図して人にコントロールされてはいますが、限られた範囲の中でエコマップやジェノグラムが成立していることを知りました。例えば、ゴリラは、日本に 20 頭しかいませんが、その内の 16 頭が、東京、京都、名古屋の3つの動物園にいて、ジェノグラムとしても繋がっていたりします。そして、その繋がりが、少し調べただけで把握出来てしまうほど狭い範囲に収まっていることや、その繋がりの成立に人為的な要素が多分に作用していることを知りました。ゴリラだけではなく、社会の中には様々な繋がりがあります。そうした繋がりに興味があることを再認識しました。

「余地」−相談業務を楽しむ方法−
P188～

浅田　英輔

冬である。雪がないところのほうが、風が寒かったりすることがあるが、それでもやっぱり雪はいやだ。ゼロじゃなくていい。それほど困らない程度にならないものか。頼むよ、令和ちゃん4歳。青森県（とか北東北とか）の自殺率の高さは、雪が関係あると思う。外に出て！人と会わないとね！！

臨床のきれはし
P105～

三浦　恵子

久しぶりに対面型の学会に出席した。気になっている本や資料の受け渡しもスムーズで、自由発表もシンポジウムも盛り上がった。開催校において様々なサポートをしてくださった先生や学生さんにも感謝あるのみだった。

シンポジウムでは指定討論者を務めたが、その際に考えさせられたのが、まさしく「家族」の在り方だった。私自身、単身赴任を重ねながら介護家族としての人生を歩んでおり、子どももいない。こうしたことがスタンダードな家族ではないことは、地方にいけばそれとなく、時には率直に指摘されることも慣れた。

ただ、母の葬儀を契機に、震災遺児孤児支援の組織につながり、母の命日に合わせて少しばかりの支援金をお送りすることを続けたり、御縁があった子どもたちの施設とつながることで、血縁はないが「育ちを応援する子ども」たちはたくさんいる。また、仕事も将来の子どもたちの育ちを支える社会の屋台骨を育てるような面がある。そう思えば、私の人生は、多くの出会いに恵まれていると思う。

更生保護護官署職員
（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という

観点から考える
P179～

迫　共

安倍元首相の銃撃事件から明らかになった、自民党議員と統一教会の関係、宗教団体による高額献金や宗教 2 世などの問題…。2022 年の中盤はこの問題に大きな注目が集まりました。私自身が宗教 2 世であり、親との関係に葛藤を抱えてきたことから、前回の「毒親」、今回の「宗教 2 世」のテーマは、自身を振り返る機会になりました。

「宗教 2 世」は、保育や社会福祉のテーマとして考えるには、まだ早いかもしれません。書評エッセイというスタイルだからこそできる問題提起として、書かせていただきました。

職場では 2 年ぶりの対面での学園祭（関係者のみ公開）が実施され、少しずつ日常を取り戻しつつあるように思われます。さわやかな秋風の中、「どぶろっく」のお笑いライブを楽しみました。学生が選んだにしては、しぶい人選だなあ。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P184～

黒田　長宏

本や雑誌以外は特に欲しいという小物がない時期にさしかかったようだ。多分。9 月にスマートウォッチを初めて買ったが、私は基本的にネットで調べて欲しい物の最低限の最安値のものを買うことに決めているので今回は3千円の物を勝ったが、スイカでタッチして電車に乗ることもないし、心拍数その他もそんなに気にしないが、電話がスマートフォンを取り出さなくても発信や受信ができるのは便利だと思う。電池の持ちを長持ちさせるためらしいが、時計の表示が5秒ほどで消えて真っ黒になるのが最初許せなかったが、いつの間にか許せるようになっているようだ。それもこれも一番安い段階の物を買うからである。お金のことを気にしなければ、スイカその他が付いていたり、常時時計が表示されているものもあるのだ。だが、あまりまだ使っている人も私の周囲では見ないような気もする。このように日常のアイテムで進歩を知ることになるが、進歩して心配なのは、ドローンが普及しすぎてしまい、頭に堕ちてきて大変なことにならないかということである。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚
P163～

尾上明代

朝ベランダに出ると、このところ毎日のように、カマキリが日の当たるスリッパのところにいる。大きさが違うので、別々の個体だ。植木鉢の寒さ除けのための段ボール箱の中で死んでいた個体もあった。寒くなってきて、そろそろ寿命が尽きるころなのだろうか。今日はスリッパの近くに巨大なのが一匹、棚の上の鉢植えのところに中型が一匹いた。中型君は私が棚の前を通ったとき、鎌を大きく振り上げ、「あの～、ちょっと～」と何かを訴えている。前の庭に行きたいのかなと思ったが、私に頼まなくても飛べばいいじゃない、と思った。でも、もしかして飛ぶ力がないのかもと思い直し、落ち葉に載せて庭に置こうとするとそのまま私の手に乗り腕を這ってくる。「それは辞めて！」と何とか振り下ろした。「そうだ、巨大君も一緒にしてあげたら、寂しくないかも‥」と例により私の「擬人化発想」で、二匹を庭で引き合わせた。二匹は予想外の出会いにびっくりした表情。ギョロ～っと目玉を回したかと思うと次の瞬間、驚くほど激しい取っ組み合いに。明らかに中型君がやられているので、「喧嘩はダメ！」とそれぞれ遠くに引き離した。そういえば、カマキリはもともとメスがオスを食べるほどの習性だったと後で思い出した‥。

エネルギーがまだあれだけあるのは良かった。皆、それぞれ与えられた環境で精一杯生きているんだね、と思う。寿命を全うしてほしい。

ドラマセラピーの実践・手法・研究
P76～

松村奈奈

今年の遅い夏休みは、北海道の東部から襟裳岬にドライブ旅に。その途中の小さな町、大樹町。宇宙交流センターが出来て、ホリエモンが移住してロケット打ち上げたりしている町です。でも、私がこの町に来て驚いたのは、海岸沿いにいくつも並ぶ戦争遺跡のトーチカでした。ネットで調べてみると、太平洋戦争末期に旧日本軍が北海道東沿岸に造ったもので、網走から十勝・胆振地方にかけて90基程あるそうです。実際に米軍は上陸せず、使われることはなかったといいます。こんなところにトーチカ造ってたのかぁ・・・知りませんでした。

誰もいないさみしい海岸で、波にさらされ崩壊しつつあるトーチカに触れながら、いろいろ考えてしまいました。



精神科医の思うこと
P132～

柳　たかを

奇妙な時代を見つめる 本当に今は奇妙な時代だと思います。私は外出するときには一応マスクはつけますが、スーパーやコンビニに入る時以外はあごマスクです。店内では口までマスクし鼻は出して鼻呼吸していま す。この騒動が始まった当初から今も、情報はほぼ SNS から得ています。 ちなみに家にテレビはありますが、私はテレビを見なくなって久しいです。

最初は中国武漢から始まったと噂され、日本ではクルーズ船の乗客に感染者が出て政府が乗客の 下船を止めて連日メディアで船に閉じ込められた乗客の様子・健康状態が報じられました。 騒動を横目で見ながら、友人達との集まりでは冗談で「これは生物兵器がアレしたのかもね」とささやいたりしてました。

そのうち、アメリカ・ヨーロッパなどでも感染が広がり、人が集まるカフェなどが休

業するよう になりました。数週間後、日本国内でもスポーツやイベント興行が無観客で行われるという異常 事態を目の当たりにします。

やがて唯一の救済策として緊急承認された注射薬が輸入され始め、これを接種すれば封じ込めが 可能とのことで自治体のトップ、国の対策委員会、有識者とされる教授らがそろって接種を勧め始めました。映画で見たような厳重な感染防止設備と防護服の医療関係者が、酸素吸入装置を装着したベッド に横たわる患者の治療にあたるニュース映像が流れるとやはり緊張感を感じ、こうした報道を毎日 毎日見ていると「接種なんてまだ早い」が「考えた方がいいのかな？」に変わり、勤め先のトップから強く勧められ、強制ではないが打たないと周りの目が厳しいので、楽になりたいがために・・・

思うに(打つ)・(打たない)の間には非常に深い溝があるように思います。注射が感染防止に効果が あるのか無いのかはともかく、打った人は打たない人の気持ちに寄り添って接種すべきかを考える努力をしなくなるように思うのです・・・もう打ってない人には戻れないのですから。

病院や接客業で患者さん・お客様と接する機会が多い立場だと接種を断るのは難しいと思いま す。でも自分は打ったからもう責任は果たしたと接種について考えることをやめるのは私は非常に 残念なことだと思うのです。

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P135～

団遊

先日、同じく連載執筆者の幼稚園園長・鶴谷主一さんと話をする中で、彼が幼稚園の職員採用面接や入園を希望する保護者への説明に、この連載を活用しているという話を聞きました。自分がどういう考えで幼児教育に向き合っているか、行事とは何か、職員はどういう存在か、それらはすべて「連載に書いてあるから読んでおいてください」とメッセージしているそうです。聞いていて、「それはいいな」と思いました。

そこで早速、私も「連載に書いてあるから読んでおいてください」とレスポンスできるような連載に鞍替えしようと思い考えてみたところ、受ける質問は「経営」に関することが多いので、「給料とは何か」「採用とは何か」「売上にはどう向き合うべきか」など、自分が実践の中で積み上げてきたものを単元化してまとめてみようと思い立ちました。

タイトルを「団遊の経営言論」として早速書き始めたのですが、まず着手したのが「給料」だったのが良くなかったのか、なかなかまとまりません。私はいくつか会社をしているのですが、振り返ると、個社ごとに給料との向き合い方が少しずつ違っていて、それらを包括する言論を述べようとすると、筆が止まるのです。

「筆が止まる」ということに出会えたのは、私的には発見であり、内省を深めるよい機会になったのですが、筆が止まると提出する原稿はありません。宿題は、次回に持ち越しさせてもらうことにしました。

休載

村本邦子

9 月、セカンドステージに入った「東日本・家族応援プロジェクト＋」で多賀城、白河、いわきに 4 泊 5 日で行った。

今年は長年あたためてきた婦人相談員の物語に取り組んでいるので、その後、東京、岩手、青森、沖縄、山形、福岡とあちこちインタビューして回った。週末に出張が入ると、休日がなくなるだけでなく、その分のしわ寄せが平日にいってかなり忙しくなるのだが、それでも、コロナにもかかってしまったし、大きく型が変わらない限り今しばらくは大丈夫だろうと、調子に乗って、週末ごとの出張を楽しんだ。

多くの場合、温泉つきで、隙間の時間にプチ観光もねじ込んだ。気がつくと、あっという間に年末だ。インタビューのまとめがまったくできていないが、年末年始に頑張ろう。我ながら元気だなあ。

周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクト―
P123～

國友万裕

大学の非常勤講師歴、いよいよ 30 周年を迎えます。

毎年、この時期になると来年の仕事は大丈夫なのかなあと不安になります。非正規雇用の場合は不安定なので、この 30 年間、その不安と毎年闘ってきたのです。でも、その一方で、融通が効かなくて、こだわりの強い性格の僕は、自分の好きなところでなかったら教える気力がなくなるだろうなあという懸念もあり、非常勤であることに満足している面もありました。

その僕もいよいよ来年の 2 月で 59 歳。大学の専任教員にはなれませんでしたが、京都の5大学で非常勤として教えられて、英語の他に、映画やジェンダーの授業も持っています。仕事の方は満足です。生活もどうにか成り立ち、貯金もわずかですがあります。非常勤講師として、一生を終えることができそうな見通しがたってきました。非常勤の定年は遅いところで 73 歳ぐらいなので、あと 14 年間、頑張るのもこれまでの半分の期間です。

これだけ自分のこだわりに執着して生きてこられたのは、ある面幸せです。これから人生の残り 3 分の1。こだわりはどうにか全うできるでしょう。幸い、キリスト教も勉強していて、死後の世界は必ずあるという確信も出てきました。

あとは、過去のトラウマを全て浄化して、多くの人に愛を与えて、心を清めて、クリスチャンにふさわしい人格になりたいと思います。それが僕の終活です。

男は痛い！
P93～



古川秀明

二回連続で対面の講演会＆ライブを書かせて頂きました。以前なら当たり前のことで、こんなに幸せな気持ちになれるなんて・・・。

「幸せを手に入れるんじゃない、幸せと思う心を手に入れるんじゃい」という、甲本ヒロトさんの名言がありますが、まさにその通りだと思います。

まだまだコロナウイルスは安心できませんが、この「幸せだと思う心」を持ち続けることができるように精進したいと思います。

講演会＆ライブな日々

P114～

西川友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

今回は記録について書きました。記録と言えば、実習日誌をデータで作成してもいいという現場が最近いくつか見られるようになってきました。保育士の実習ではかなりレアですが、社会福祉士の実習ではちらほらと出てきています。もちろん情報管理には十分注意した上で、プリントアウトしたもの、時にはデータでの提出を許可しているような施設もあります。こういう実習先にあたった学生は、大幅に日々の日誌の負担が減ります。

「今回、日誌がめっちゃ楽になりました～！」

「よかったですねぇ、PC で書けると便利よねぇ」

「いや、PC 苦手です。書けません。」

「え。ど、どうやって書いてるの？」

「全部スマホで書いて、プリントアウトしてます」

「えー！スマホで？すごい！！」

「私からしたら PC のキーボードに慣れてる方がスゴイですよ！」

そういって、電光石火の速さでスマホで記録、時には小論文なども書いてしまう学生たち。

かと思えば、「G メールって、スマホアプリだと思ってたんだけど、パソコンからインターネットをつなげば見られるんですね！便利！」という学生もいます。

発達凸凹、という言葉がありますが、学生の IT 関係の知識の凸凹は、なかなかびっくりさせられます。

などと言いながら、自分自身も IT には強い方ではありません。学生にビックリできるような自分ではないよな、私もきっと誰かにビックリされているよなぁ、と苦笑いです。

福祉系対人援助職養成の
現場から
P66～

坂口伊都

この 11 月 19、20 日に Zoom で対人援助学学会がありました。初日の最初にマガジンの短信のワークショップがあり、楽しみにしていたのですが、何を勘違いしたのか午後からだと思い込んでしまいました。よく見ると 9:30 からになっています。気づいた時には終了。

「やっちまった」

話聞きたかったです。私の場合、本文の方は原稿の締め切りに向けて、今回は何を書いていこうかなと思考を巡らせますが、短信は割とギリギリに書くことを決めます。そして、それが思いつかないことが多々あります。本文より唸っている時もあります。皆さんの短信で楽しませていただいているので、書くことがないとそれなりにショックを受け、つまらない私が柳の下にうらめしやと出てくる姿が浮かびます。

学会の 2 日目の昼休みには、お気に入りのマグカップを割ってしまいました。学会の内容も濃かったですが、家の中でジタバタする私も濃かった 2 日間でした。

家族と家族幻想
P117～

河岸由里子

【宗教の問題】旧統一教会の話が、ずっと続いている。この問題は以前大騒ぎになって、その後いつの間にか消えていたので、考えもしなかった。安倍元首相が殺害されたことで、大問題になって、国会議員、自民党などに大きな波が起こった。安倍氏のことが無かったら、これから先もずっと取り沙汰されずに終わったのだろう。こうした宗教がらみの問題は、決して統一教会のみの話ではない。ものみの塔、真如苑、真光、エホバ、等々沢山あるのだ。そこで調べてみた。

現在、日本において一定規模で持続的に宗教活動を展開している宗教の教団は350～400教団ほどと考えられ、新宗教の信者は日本人のおよそ1割を占めると推定される（Wikipedia）とのこと。右図は平成28年度のものであるが、聞いたこともないものも沢山ある。

あれだけ問題になった旧統一教会もまだ56万人もの信者がいるという。

人は弱い生き物である。心のよりどころが欲しいのはわかるし、人生のどん底にいる時は、紛い物だろうと何だろうと助けてくれるならすがる。「溺れる者は藁をもつかむ」のだ。



一つの宗教を信じることが悪いこととは言わないが、財産の全てを投げうってまで宗教に没頭するのは異常でしかない。

二世の問題もテレビで放映されているが、筆者の相談室にも以前某宗教の二世の方が相談にいらしたことがある。個人の財産を認めない、子どもは親と離れて集団生活をする、小中学生以外は領地から出ない、小中学生も学校の授業のみで、部活動などはできないし他児と遊ぶことも許されないなどの中で、おかしいと思って逃げてきた方だった。こうした方が他にもたくさんいるはずである。旧統一教会だけではない。

筆者も含め、余り宗教に拘らず、クリスマスを祝い、正月も祝い、神社のお祭りも楽しむような人間がほとんどのこの日本で、こんなに苦しんでいる人がいることを、対人援助職である我々はもっと意識していかねばと思う。

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

ああ、相談業務
P71～
先人の知恵から
P153～

岡崎正明

人と家族の支援を仕事にしたおかげで様々な気づきをもらい、自分の幸せにつながっているなーと感じることが最近よくある。

先日、九州に住む妻の祖母が亡くなっ

た時のこと。100 歳を超えて老衰で亡くなった祖母は、ひ孫たち（私たち夫婦の子）を大変可愛がってくれていた。数年前までは在宅で、長期休みに帰れば遊んだり食事を共にしていたし、施設に入ってからも帰省の際には必ず面会に行っていた。

祖母が亡くなったのは金曜の朝。昼過ぎにはその日の通夜と、翌日の葬儀が決まった。

最初妻は自分だけが帰るか、もしくは中学生の長男と小学校低学年の次女だけ連れて行こうと思うと言った。コロナ禍の葬儀。極力少人数でというのが今の傾向だし、小学校高学年の長女は、翌日朝から陸上記録会を予定しており、本人も楽しみにして練習していた。それを誰よりもそばで見ていた妻は、記録会に出られなくなるのはかわいそうだから…と述べた。

私は「できるだけみんな祖母とのお別れをしたほうがいい。今晩の通夜だけでも長女も連れて行こう。3 人は葬儀まで残り、私と長女だけ夜の新幹線で帰ればいい」と提案した。タイトだが記録会には出られると。

それは私なりに「祖母と子どもらの関係性」「きょうだいの関係性」「長女の性格」などを考え出した答えだった。身近な人の死に向き合うことは、悲しいことだが子どもたちにとって大切な経験だとも思った。死は誰もが不可避なのに、現代社会では日常から見えないようにされすぎている。子どもらのことを大好きだった祖母が、それを身をもって示そうとしてくれている貴重な機会を、大事にしたいと思った。無機質な仏壇やお墓ではなく、棺で眠る祖母の姿とちゃんと向き合うことでしか、子どもらが学べないものがあると確信していた。

結果バタバタと私の提案通りで動いた。長女はとんぼ返りの移動で疲労していたが、葬儀に残りたいような発言もあり、会ってお別れできて良かったとも述べていた。もし自分だけお別れが出来ていなかったら、きょうだいとの差を感じてモヤモヤしていたかもしれない。子どもらみな初めてのお焼香や、棺に収まる祖母の姿を見て、いろんなことを知り感じる機会になったと思う。

後で妻から、義父母や親族も子どもらの参加に感謝していたよ、と聞かされた。しばらく会っていない親族も多い中、子どもの存在が場を和ませたり、話題をつなげる役割を果たしたそうだ。特に次女は最年少で、誰かれ構わず手遊びをしたりと可愛がられたという。

そういえば作家の五木寛之が何かの本で、葬儀の読経で赤ん坊の泣き声がするのが好きだと書いていたのを思い出した。命は必ず終わる。けれどつながり、続いていくことを感じるのだと。すごく共感を覚えた話で、それ以来私は葬儀や通夜の場にいる子どもをみると、なんだか少し嬉しくなって見てしまう。

対人援助の仕事を長年していなかったら、こんな風に子どもや家族のことに想いを馳せられる自分になっていただろうか？自らの行動選択をできていただろうか？と思う。だから本当に私は運がいいというか、人に恵まれているというか。ありがたいことだなーと素直に感じている。

役場の対人援助論
P100～

大谷多加志

先日ついに家庭内でコロナ陽性が発生し、濃厚接触者となって、さまざまな仕事を再調整することになりました。自宅で仕事をこなしつつ、感染対策を取って過ごしていましたが、幸いにして家庭内感染には至らずでした。最小限で乗り切れたことはありがたくも、コロナ禍も 2 年を過ぎてついに第 8 波にのまれた…と感じます。

11 月 19 日･20 日は対人援助学会第 14 回大会に参加しました。対人援助学マガジン編集部でワークショップを企画し、「リアルタイム執筆者短信」と称して、大会に参加していた執筆者に近況報告をお願いし、そのお話を受けて参加者との交流を図りました。詳細は巻末に学会参加記を掲載していますので、ぜひご覧ください。

また、12 月 23 日（金）の 20 時から、対人援助学会研究会でお話させて頂くことになりました。現在の連載テーマを中心にお話しする予定です。オンライン開催です。よろしければぜひご参加下さい。

今年度から対人援助学会の常任理事になりましたが、想像以上に学会関係の動きが増えることになりました。結果的にたくさん刺激を頂いて、充実して過ごせているので満足なのですが、やってみないとわからないことって、あるものです。

発達検査と対人援助学
P132～

団士郎



60代の前半に、娘に勧められて加圧トレーニングに通い始めた。よく続いていたがトレーナーの事情で7年余で中断になった。しばらくタイ式マッサージに断続的に通ってみたが、その後、Dr.ストレッチに出会い、担当者が三代目（日野、小泉、藤井）になった。身体ケア歴12年余になる。

人間ドックは40歳になって、職場の案内で受けることにしてから35年間、ほぼ毎年。検査結果には反応しないことにしているので無駄かもしれないが、年に一度の身体モニターのつもりだ。

老化による当然の変化はあるが、緊急加療を要するようなことは今のところなく、飲み続ける薬もない。

精神的にはストレスを抱えたりする性分じゃないので、主観的には至って元気だ。

よく似た仕事の仕方（膨大な web マガジンを編集･発行し続け、自著の出版やパフォーマンスと多方面に活発）で気になっていた S 氏が、参議院議員に当選した後、鬱で休業中と聞いた。いくつになっても意欲的なのは良いことだが、新しいことで急激なストレスを抱え込むのは良くないのかもしれない。

私はやり慣れた世界で、出来ることだけを楽しんで生きていこうと思う。

晩年 D･A･N 通信
P49～

鶴谷　圭一

令和4年9月5日に牧之原市の幼保連携型認定こども園において、送迎バス内に取り残された子どもが亡くなるという大変痛ましい事故が発生しました。ありえない腹立たしい事故でした。

さらに杜撰な園の杜撰な管理不行き届きにより起こした事故を受け、きちんとやるべきことをやっている園にも負担を強い

ようとしています。機械的な装置の設置を義務づけるというのです。そこで、原町幼稚園ではバスの後ろの窓に「後部座席確認済」というA4サイズのラミネートしたパネルをぶら下げることで回避できる方法を考えました。

そして、以下の文書を行政にも送ったのですが、残念ながら装置の設置は義務化されそうです。補助金に多額の費用をかけて故障のリスクのある装置を付けることって、現場からしたら全く無駄なことだと思うこの頃です。

行政に送った文書（前略）『装置の設置義務など必要以上に費用をかけなくても私どもの園で一ヶ月以上以下の手順で行ってきて、装置と同等のルーティーンを作り出しています。更に、止まっている車輛を誰が見ても一目瞭然というところ、加えて故障や故意にスイッチを切るなどの回避行動ができないことから、音などの方法より効果が高いと考えております。』

後部座席
確認済◎



原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P60～

水野スウ

この秋は、うれしいことに各地への憲法おはなし出前があいつぎました。各地、といってもその 3 分の 1 くらいは zoom によるオンライン出前。いつも「紅茶の時間」をしている現場である自宅から、ライブ実況中継でお届けします、と言って語り始めます。

2 年半前は、オンライン出前はとても無理、自分には向かない、とハナからお断りしていたけど、せっかくの種まきの機会を自分から手放すのはもったいないかも、と思い直して 2 年前から少しずつトライするようになりました。とはいえ、パワーポイントはいまだつくれない私、もっぱら画用紙に手書き文字を大きく書いて、話しながらそれを画面でお見せする、パワポならぬ“ハンドポイント”方式で話しています。リアルと全く同じ、というわけにはもちろんいかないけど、それでも工夫さえすれば、オンラインでも、紅茶の場の空気感ごと、かなり伝えられる／伝わる、そんな手応えも今は感じるようになりました。

今号マガジンは、オンラインやリアル会場で最近話していることを中心に、私自身の語りアーカイブを兼ねて綴ったものです。ウクライナのことから、終わらない戦争、13 条を生きるということ、統一教会のこと、改憲案のこと、いま沖縄で起きていること、そして「ぼろぼろの平和を繕え」という言葉について、などなど。

毎週の「紅茶の時間」は 11 月でまる 39 年がたち、40 年目にはいりました。今日は、先週おはなしにいった中学校の保健室の先生が、生徒さんたちの感想文を持ってはじめて紅茶にきてくれました。締め切りギリギリでこの短信と原稿を発送したのち、さあ、今から中学生たちの感想を読むことにしましょう、熱いミルクティをいれて、ね。

きもちは言葉をさがしている
P80～

脇野　千恵

今、学校に行けない子どもたちの居場所（適応指導教室？とも言いうけれど、何に適応しないので指導するのかよくわからないが）で働いている。子どもたちは、ぽつりぽつりとやってくる。「明日いきます！」と言って「やっぱり無理！」なんていうのは、日常のこと。学校現場にいた頃を思うと、なんとゆっくりと時間が流れていくことかと思う。

今教室で人気のコミュニケーションは、「人生ゲーム」。昔、自分の子どもたちともよくやった。2回ぐらい買い替えたように思う。今教室には「平成版」「ジャンボドリーム版」がある。その時代を映しているゲームで、本当に飽きることがない。例えば職業では、パティシエ、工芸職人、タレント、エンジニアなど。火星に行って35万ドル払う時もあり、ギャンブルコース、キャリアアップなんてコースもある。たとえゲームであっても、人生はそうは上手くいかない。最終ゴールして一番たくさんお金を持っている人が1位。なかなか1位になれない子どもは、「なんでなん！」と悔しそうに言う。算数が苦手なのに、いつも銀行係を買ってでる中学生。なぜかお金の価値はわかるようで、テキパキとしている。一瞬でも夢や希望を持てること、学校では味わえないドキドキワクワク感が人気の秘密なのかな。子どもたちと対等に過ごせる時間を楽しんでいる。

こころ日記「ぼちぼち」part Ⅱ
休載

中村正

10 月は大きなことがあった。病気になったのだ。慢性硬膜下血腫。そういえば夏に頭をうったことがある。家のなかですべったときだ。加齢による影響だろう。三ヶ月かけて頭に血が溜まっていくことになった。それが脳の圧力を変化させ、言語に関する脳機能部分に圧がかかった。ろれつが回らなくなった。特定の言葉が思い出せなくなった。上手く書けない字がある。これはおかしいと思い、脳の画像をとってもらった。初期だった。脳外科の医師は、まずは漢方で様子をみましょうと。第1選択肢は五苓散という水の流れをよくする漢方なのだ。ひと月経過した脳画像は綺麗になりつつある。進行していたら頭蓋に穴をあけ、血を抜く手術だという。ごく小さな認知症体験をしたことになる。その初期の症状は数日間続いたのでずいぶんと勉強になった。因果関係は究明できていたので安心して自分の症状を観察できた。まだ完全ではないので数ヶ月は漢方のお世話になる。身体を東洋医学から眺めることになった。漢方の理解はまた別の世界観や思想が必要だ。

そしてもうひとつ。お爺さんになった。娘に子どもがやってきた。しかし低体重児ということでひと月ほど入院となった。これは娘にはつらかったようだ。母親も面会禁止なのだ。搾乳をして二日に一回、一時間だけ会える。娘を励ますことしかできなかった。その一時間のうちに SNS で動画を送ってくれた。産まれた直後、一週間、一緒にいることができただけである。その後、ほどなくして退院。今は母子蜜着的に暮らしている。父親も育児休暇を取得できた。家族の蜜月である。あすはわら天神に家族でお参りにいくという。近所なのでついていくことにした。いろんなことがあるものだ。

臨床社会学の方法
P22～

千葉晃央

京都市の伏見には縁がある。私の本籍は京都市伏見区になっている。一人暮らしも、結婚生活も伏見区で始まった。結婚と同時に、本籍を伏見に移した。今も本籍地はそのままである。時々、当時住んでいた賃貸マンションの前を通る。20 年以上が経過しても懐かしい。伏見の職場には 20 年近く通勤をした。担当利用者さんの家庭訪問もした。家族療法にも出会ったし、先生の仕事もさせてもらった。マガジン編集長にも大谷さんにも出会ったのは伏見である。

そして今日は、伏見区の大手筋商店街のサンマルクカフェでこれを書いている。仕事の前の隙間時間である。気分転換に商店街を歩く。昔と変わらない街並みもあるし、変わったところもある。インドカレー屋があり、酒かすラーメン屋があり、スーパーがあり、マクドがあり、昔ながらのパン屋も、お茶屋も、牛乳屋も、本屋もある。いろんなことがこの街から始まった。私にとってはパワースポットである。

「もし、あの時ああしていたら、こうなっていたかも…」とよぎることもある。人は決定を重ねて生きる。1 日 3 万 5000 回選択決定をしているという話もある。そこそこの「決定」にはドラマがある。伏見はその決定をたくさんした舞台である。映画『すずめの戸締り』でも描かれた、時間の次元が同時に併存する描写はこれまでのSFでも取り上げられてきた。そういったことを人は本能では感じているのかもしれない。そういえば、ゲシュタルト療法でも過去に起こったことは過去にあるのではなく、それを思い出す、その人の「今ここ」にある！ととらえる。そして「今ここ」にしかない！ととらえるとするならば、「今ここで」扱っていくことになる。そんなこと思いながらの帰りの「おけいはん」道中な伏見っ子でもある。今年も伏見区には定期的に通っている。それも私の元気の源だろう。

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
P19～

篠原ユキオ

『積み重ねる時間』

昔の漫画のアイデア帳をパラパラめくっていると、とても面白いのになぜか清書しなかったアイデアをたまに見つけることがある。その時は多分面白いと思わなかったものである。

若い頃に見た時は退屈だなと思っていた映画が歳を取ってその面白さに気づく事がある。自分の生きてきた時間がやっとその場所に誘ってくれるのだと思う。

本もそうだ。読み出してなかなかその世界に入りこめず、途中で挫折した本がある。つまらない映画は目をつぶってしまえば良いが、つまらない文章を我慢しながら読み続けるのは辛いものだ。だから読むのを止める。当然、そこには小さな文字を追うのが辛くなるという要素もあるのは否めない。

そんな中、先日からそういう過去の挫折本を読み直してみようと思った。目が疲れたと思ったらさっさとやめる。ちょっと時間があればまた読み出す。

とこれが、なかなか新鮮でスイスイ読み進められる。ちょっと得した気分になる。

慌てず、急がず、じっくり時間をかけて熟成させなければならないモノがたくさんある。そういう事を人との関わり方にも感じるようになってきた。
『悟り』という大袈裟なモノではないが、良くも悪くも、これが『老い』という事なのかもしれない。



HITOKOMART

P220～

山下桂永子

今年もあと 1 か月。今年を振り返ってみると、2 回旅行に行けたこと（沖縄と小笠原諸島）はとても良い経験でした。動き回ってその土地の文化を知り、美味しいものを食べ、その土地の方の話を聴くと、まわりまわって自分の人生が豊かになっていくような気がします。やはり私は、体験でいろいろと気づくタイプなんだなとつくづく思います。「Experience is, for me, the highest authority.」は確かカール・ロジャーズの言葉だったかと思うのですが、旅をしているとまさに体験を通して知識が理解になっていくのを感じます。今年は依頼を受けて人前でお話をする、という機会もありました。緊張と多弁のせいで 1 時間ほどで声がカッスカスになったのですが、やってみると知識を伝えるだけでも大変なのに、それを理解に落とし込むなんてなんという偉業に挑まねばならぬのかと戦慄しました。今回は、伝えることと、共有することについてのお話です。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P143～

小林　茂

年何回か、異様にいろいろな予定や締め切り日が重なる月や日がある。それぞれの活動や取り組みは、ほぼ関連がないはずなのに、これでもかという程、同月同日となる。以前は、こうした状態がひどくストレスを与えるものであったが、最近は圧倒されることなく、一つひとつ解消する気構えみたいな意識が持てるようになってきた。

しかし、どうにも一つひとつのことがやっ

つけ仕事の感じがして消化不良のような残念さや気持ち悪さが残る。こればかりは、体力や課題に欠ける時間の限界があるので悩みが残る。自分のさらなるステップとして、自分の抱えることのできることの選別力やコントロールする力を養いたい。

生きることに課題が尽きない。

対人支援点描
P112～

藤　信子

コロナ下の状況で、不自由だと思うことが、考えや見解とも言えないようなことを、友人と話せないことではないかと気づいた。そのようなことを話すことは、会話と独語の中間にあるような類の機能だと思う。これは、思考を進めるうえで結構役割を果たしているようだ思う。私は、退職とコロナの始まりが殆ど同時だったので、家族以外と機能的ではない時間を持つことが無くなった。精神医療の状況が 30-40 年前と、あまり変わらない部分があるということは、時々話題に出るけれど、そのことを考えるには、日本の医療の状況、地域社会、精神医療にかかわるスタッフの教育-ところで、精神病のことを今ではどのように教えているのだろう？-、その他、広くあれこれ連想を進めることが必要な気がする。そういう時、会話と独語の間のような話をしたいとふと思っている。このような状況で思考がまとまらず、原稿執筆できなかったという言い訳をしている。

コミュニティの中で
休載

竹中　尚文

10 月 17 日(月)に富山市に出かけた。今夏に亡くなった青木新門氏を偲ぶ会の案内状をもらったからだ。青木新門氏の『納棺夫日記』を読んだ本木雅弘氏が映画化したのが『おくりびと』だった。青木氏は映画が原作の意図を読み違えていると原作とすることを拒否したそうだ。富山市まで行くなら、上越市に行くことにした。姫路から往復 1200 kmを夫婦で運転した。

◆上越市は浄土真宗の開祖である親鸞聖人の流刑の地である。私はこの地に立ってみたかった。私は親鸞聖人の教義を理解し、賛同して信徒になった。一方で親鸞聖人の人生観に共感もしてみたいと思っている。18 日の上越は、冷たい雨が降っていた。親鸞聖人が上陸したであろうという砂浜に立った。灰色の空から連なるかのような日本海の波を眺めた。



◆宗教には理性と感情があるように思う。私には何も解らずありがたいと思うことなどない。一方で、理解だけで共感のない姿勢には「みずくさい」とも「無慈悲だ」とも感じる。今、話題の宗教団体の教義にどのような理解があったのだろう。また、そこにはどのような共感があったのだろうかと思う。そこがまったく語られない宗教問題なんて、何を語っているのだろう。

路上生活者の個人史
P90～

寺田　弘志

サッカーワールドカップ初戦、優勝候補ドイツに日本代表が逆転勝ちしましたね。翌日や翌々日、来院された患者さんに「観ましたか」と尋ねると、普段スポーツの話題が出ない方まで、全員観ましたという答え。寺田接骨院の患者さんの視聴率は相当高かったようです。

試合前は「ドイツに勝てる気がしないんですけど」と患者さんと話していましたが、そんな予測をしたことが申し訳なくなりました。患者さんたちにも「勝つことを予測していましたか？」と質問すると、これまた全員が「勝つとは思っていなかった。良くて引き分け」という答えでした。

「こんなチームでは勝てない」と解説者に言われたり、大会前の親善試合でカナダに負けたりして、期待されていなかったのがかえって良かったのかもしれません。ドイツも日本をなめて、油断したのでしょう。患者さんに「スペインに7－0で負けたとはいえ、コスタリカをなめてかかったら、どんでもないことになりますよね」と話していました。

そうしたら案の定、1－0で敗戦。終始攻め込んでいましたが、コスタリカにワンチャンスをものにされてしまいました。「コスタリカには勝てる」、だれもがそんな期待をしていなかったでしょうか？

コスタリカ戦の翌日や翌々日に来た患者さんたちにたずねてみたら、これまた全員が「コスタリカには勝てる」と思っていたそうです。

日本を油断させるためにスペインにわざと大敗して見せたとしたら、コスタリカは相当なクワセモノです。日本もスペイン戦は捨てて、コスタリカ戦で死力を尽くすべきでした。

今度は日本が追い詰められました。日本は必死になるでしょう。スペインがドイツに勝ってくれればよかったですが、引き分けたのでスペインも負けてはくれません。

でもスペインは引き分けでもいいので、守りを固めて体力を温存し、点を取りに来た日本の裏を突いてくるのではないでしょうか。この号が出るころには結果が出ていますが、どうなっていることやら。

本文では「期待されすぎると筋緊張が高まって、100%の力が発揮できなくなる」という話を書きます。

接骨院に心理学を入れてみた
P172～

山口洋典

8 月末からジムに通い始めました。事務でも、寺務でもなく、ジムナジウム、身体を動かす場所に、です。運動と言えば社会運動しかしていない、などと軽口を叩いてきたのですが、いよいよ自分で身体の重さを実感することになり、一念発起した、という次第です。1 週間に 1 時間という、長きにわたって続けられそうなところから始めてみることにしました。

「なぜジムに来ようと思ったのですか？」というトレーナーの方からの問いに「健康寿命を延ばしたいので」と、ふと口について出てきました。人生 100 年時代という表現にはリアリティがないのですが、年始に父を亡くしたことの反動として、既に折り返し地点は過ぎているのではないか、という思いから、今のうちにできることから始めてみました。そうこうしているうちに、いわゆる老眼と呼ばれる現象も自覚するようになってきました。学生時代、中村正先生から「老いるショック」というギャグを聞いたとき、当時の私にはリアリティがなかった

のですが、今になって「なるほど！」とガッテンしています。



PBLの風と土
P166～

見野 大介

10月の個展も終わり、相変わらず溜まっている仕事を必死に仕事をこなす日々。気付いたらW杯も始まってるし、クリスマスムードにもなってきて、年末感が一気に押し寄せてきた。年内にどれだけ溜まっている仕事を納めることができるか、不安でしかない。

ハチドリの器
P5

荒木晃子

この春、不妊治療の保険適用が始まり、生殖医療現場では医療者と患者からの困りごと、開 業相談室では当事者から新規受診先の医療機関を、さらに通院中の不妊カップルからは転院 先や保険適用に該当する治療内容に関する相談が続いている。 そのさなか、子宮のないロキタンスキー症候群女性を対象に、子宮移植の臨床研究の実施 計画が報道された。海外では 98 例の子宮移植により、これまでに 52 人の子が生まれている（2022 年 10 月時点）。国内でも、2017 年カニクイザルの子宮移植により妊娠が確認され たとの報告はあるが、人を対象とした臨床研究の申請は今回初である。対象は、国内に推定約 3,500 人いるとされているロキタンスキー症候群女性のうち、20～30 代の女性 3 人の予定 で、移植前に「体外受精で妊娠可能な受精卵ができている」こと、パートナーの継続した理解 と協力が必須との理由から、「法律上の婚姻関係にある」ことなどの条件がある。 子宮移植は、提供者と移植を受ける人の双方に大きな負荷がかかる手術が必要である。子 宮がない女性が自分の卵子を使って子を持つ方法としての代理出産は、現時点で国内では認められておらず、また代理母が産んだ子は実子として認められない。確かに、子宮移植は法 律上の母親（実親）になるための唯一の方法ではあるものの・・・。

生殖医学の進化についてゆけず（気持ちの整理がつかず）、今号はお休みです。 そんなこんなの日常に、先月以降、2 件の出産報告と 2 件の妊娠報告が届きました。年齢に関係なく、妊娠する喜びや、子を持つ幸せのおすそ分けをいただき、少しだけ救われた気分です。

生殖医療と家族援助
休載

工藤　芳幸

最近の Facebook より。「11/16 毎日複数の業務でいっぱいなので、それ以外の好きなこともしようと、少し前のことですが仕事帰りに能楽を観ました。能は「邯鄲」、狂言は「簸屑（ひくず）」。11 月前半はオンラインで友人のインド舞踊の公演を観たり、同僚や長女が貸してくれた本を読んだりしました。人から借りる本は、自分だけでは選ばない本なので面白いです。これで今年の読了は 20 冊目。途中まで読んでいる本が多数。目標の 50 冊読了まではまだまだ。」新年の目標として、授業関係で読む本以外に 50 冊読み切ると決めたのは、業務に追われて読書体験が乏しくなっていたからなのですが、今年も業務でいっぱいなのは変わりなく暮れていこうとしています。

複数の業務のうちの大きな1つが学会開催準備。来年の 7 月に勤務校の関西福祉科学大学で「第 49 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会」の開催をすることになり、1 年ほど前からぼちぼち準備を開始しています。この学会は言語やコミュニケーションの障害に関わる医療や福祉、教育の援助職や学校教員が会員です。もうすぐ演題登録が開始するので、最近は具体的な作業に取り掛かっているところ。今回は団先生にもご講演いただく予定で、今から楽しみにしています。

学会開催を引き受けた理由は、アカデミックな議論を深めることをつないでいく意味もありますが、どうも希薄になっている人と人のつながりを作る機会になれば・・・という思もあります。オンラインで気軽に参加できるものは随分増えましたし、そこでつながることもいろいろありますが、何かを共同で作る機会が随分と減ってきたように思います。開催準備委員会を立ち上げて、これまで一緒に何かをやってきた人たち、新しく出会った人たちと議論しながら作ってみる。そこで作った場で全国の参加者に新しいつながりができる。即効性はないかも知れませんが、だいぶ先の先になって何かを生み出せば良いなと思って頑張っています。

みちくさ言語療法
P207～

中村周平

前回、短信すらも送り忘れてしまい、本当に申し訳ありません。忙しさを言い訳にすることもできず、ただただ私自身の日々の怠慢だと感じております。編集長の団先生にもお詫び申し上げます。

近況は、現在同志社大学で行っている研究活動が少しずつ形になっていることをご報告させていただきます。多くの方々に自身の思いが伝わっていること、また当事者目線だけでなく、学術的な観点から情報発信できる術を学べている今の環境と素晴らしい指導教員の存在に感謝しかありません。

10 月と 12 月に、日本スポーツ法学会という学会のシンポジウムで発表させていただく機会を頂きました。もしこの短信を読んでいただき、関心を持っていただけましたらぜひお越しいただければ幸いです。

ノーサイド
p88

安發明子

去年通い始めた在宅支援の現場で、1年半の間に子どもたちの調子がみるみる良くなり、話していることが理解できなかった子どもの言葉が明確になり、とても元気をもらった。

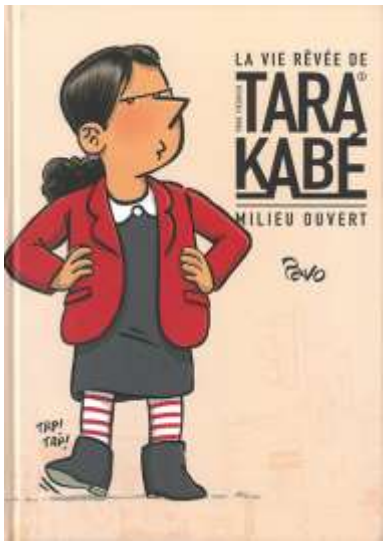
今回の記事にも出てくる女の子はいつもプレイモービルを 4 体持っていて、それは自分とお母さんとワーカー2 人。家族の

一員のように自分のそばにいる専門職。しかし、記事で書いたり口頭で「こんなに素敵な仕事なんです！」と伝えても異国の人の動き、話し方、関係性を伝えることは容易ではない。

そこでフランスの子育て在宅支援の元ワーカーが描いた漫画を日本語訳で出版する企画をしている。家庭をどのように支えることができるか、親子ともに支えられて困難を乗り越える、

日本の福祉の発展に少しでもヒントになることがあればと願っている。

http://thousandsofbooks.jp/project/tara/



フランスのソーシャルワーク
P227～

中島弘美

2022 年 11 月 19 日 20 日、第 14 回対人援助学会の大会が「新潟水俣病と私たち」をテーマに開催された。大会前に新潟水俣病についての研究会が 2 回あり、事前学習ができたこともとてもよかった。

また、企画ワークショップで、「サステナブル（持続可能）な研究会のつくり方　～学会設立以前から 13 年続く、対人援助学会研究会のセブンルール～」を研修交流委員会で行った。これまでのふりかえりと、今後につながるポイントをそれぞれの立場で話し、参加者からの意見もいただけたので、これからも継続可能！が約束された気がする。ありがたい！

次回は早速、第 52 回 2022 年 12 月 23 日（金）20～22 時大谷多加志さん（心理相談員　京都光華女子大学）検査と対人援助学。さらに、第 53 回 2023 年 2 月 24 日（金）20～22 時　中鹿直樹さん（立命館大学）（仮）実践と研究を交差させる！実践現場を科学する！が予定されている。楽しみにしています！

カウンセリングのお作法
P32～

鵜野祐介

11 月下旬のよく晴れた午後、妙満寺の取材がてら、岩倉へ紅葉狩りに行きました。実相院門跡の床紅葉の美しさもさることながら、岩倉駅から門跡へと続く川沿いの小径は、「これぞ日本の原風景」とつぶやきたくなる眺めでした。中でも、葉っぱが散りつくした後、朱い実だけが残っている柿の木はなんとも言えない風情です。これ以上観光客が戻ってこないことを願いつつ、来年もまた来ようと心に誓った次第です。

うたとかたりの対人援助学
P159～

小池英梨子

従妹の結婚式があり、久しぶりに実家に帰省しました。その日は静岡では珍しい規模の台風が直撃。鉄塔が倒れ、長時間の停電に一部地域では断水。式場は停電と浸水で結婚式は当日に延期が決まりました。しかし、AUケータイは通信障害も発生してしまい、「結婚式が延期になった」という連絡を回すことにも一苦労。被災しに帰省したような感じになりましたが、実家で姉家族と両親と暇を持て余した従妹のの子どもたちとのんびり遊ぶ時間は、それはそれで充実した時間でした。

そうだ、猫に聞いてみよう
P146～

早樫一男

随分久しぶりの執筆です。現在は社会福祉法人「盛和福祉会」の児童養護施設/乳児院「京都大和の家」と併設している児童家庭支援センター「やましろ子ども家庭センター　だいわ」の責任者の役割を担っています。この間、児童相談所から大学、そして、児童福祉施設と従事するフィールドは変わりました。一方で、変わらないのは「家族理解」を視野に入れた「ジェノグラム」と「家族造形法」の活用です。この二つは、元気で働ける限り、ライフワークとして続けたいと考えています。

家族面接の実践から
里親家族支援を考える
P319～

中條與子

しばらくご無沙汰しています、中條與子です。

11 月 1 日に編集長から「51 号締め切りのお知らせ」のメールをいただきました。今回も「エッセイ」は難しそうだと思いましたが、せめて「執筆者@短信」だけでも書きたいと意気込みました。あっという間に 11 月 30 日の今日がやってきてしまいました。

言い訳になってしまいますが、本業も毎月同じ時期に締切があり、こなすことが精一杯で、いつも編集部に今号もお送りできない旨のお詫びのご連絡をしていました。

ずっと同じことを繰り返しているので、一生書くことができないと思い、少しでも書こうと、今回は、まっすぐ家に帰宅して、パソコンに向かって打っています。

エッセイは、今号もお休みをさせてください。しばらく書けそうもないのですが、久しぶりに自分の連載を読み返して、続きを読みたいと思いました。

自分の身体の全部からエッセイの続きを捻出することを考えると、それだけでクラクラと疲れてしまいますが、自分が続きを読みたいと思うと、クラクラとする疲れが軽くなります。この気持ちを忘れないように、本業をしながら、書くことができるように、考えていきたいです。

有り難うございます。これからも宜しくお願いいたします。

休載

浦田雅夫

かなりな多忙になり、今回は休ませていただくことにしました。毎回、締切りにも間に合わない状態が常態化し編集長はじめ編集委員の皆様にはご迷惑ばかりで恐縮です。すきなことを書かせていただける機会があるというのは本当にありがたいことです。感謝しております。

社会的養護の新展開
休載

障 害 者 福 祉 援 助 論

- これから現場に行くあなたに！ -

第９回

連携とは何か？

千葉 晃央

多職種連携が語られて久しい。福祉の様々な立場の職種や医療や教育機関との連携は日夜行われている。今回は、他機関や他の職種との協働を行う上で必要なスタンスを取り上げたい。基本的には直接支援と同様なところも多い。やはり人と関わるという共通のテーマなのである。

未来志向と継続性

他機関との協働は文字通り協力して働くことである。地域で支援をしていくと、繰り返し同じ機関と連携し、同じ専門職とも、地域の方とも連携する。連携は今回だけではない。これからもあり続ける。まず、重要なのはこれまでよりも「これから」である。過去はどうしようもないが、これからをどうつくるかは自分たちにできることがある。これまでの経緯を気にし過ぎては、ニーズに対応した創造的な支援を構築することはできない。こうしたソーシャルワークの「開発的機能」を働かせることができなければ前例主義に陥ってしまいかねない。状況はさらに固定的になる。「ソーシャル」を「ワーク」させる上では、変化も新陳代謝も成長も含まれていなくてはならない。

つまり未来志向である。連携も「これからこうしませんか？」という未来に向けた方向を貫く。「以前こうでしたよね」というような意地悪は禁物である。それでは積極的動機付けにはならない。クリエイティブに「こういうことできたりしますか」「一緒にしませんか」など提案するよう進めたい。

やります！となる情報を提供

支援の協力はクライエントの思いを実現するという願いから始めたい。パーソンセンタードケア、来談者中心主義などいろいろ言い方はあるが、昔から言われてきたことである。

こうあるべき！というような「あるべき論」で語りすぎないことも大切である。人は自分で気づいて行動する方がはるかに心地良い。相手に言わ

れてしたら、相手の指図に従ったことになる。従わされたとなるし、やりたくなくなる。自分から「やります！」となるよう、話を進めていくことが理想である。

つまり、相手に言ってもらうことが理想である。これは相手に「華（はな）」を持たせる意味もある。自分が主体的にそうしました！という自負を相手に持ってもらうのである。こちら側の手柄ばかりを上げてはいけない。

「私たち」を主語に語る！

「私たちが一緒にできたからこそ、いい支援ができましたね！」という姿勢である。「相手のおかげで！」「おかげさまで！」ということを伝えていく。そうすることで相手機関も自信を深め、次の支援でも能動性を持つことにつながる可能性が高くなる。

「私たち」を主語にするのも良い。私たちだからできた、私たちのチームだからできた、私たちの地域だからできた、こうした言い方がわれわれ感情を醸成する。共に成し遂げる経験を共有することが次の連携につながるのである。

担当者を育てる！

店長をだせ！というようなことを言いたくなるようなことが他機関との連携の中ではあるかもしれない。実際に向こうの上司に出てきてもらって、伝えて、それでもうまくいかなければこっちの上司も出す…こういった泥沼のような構図も見かけることがある。その契機になった事といえば、こちらが思っている支援プランのとおりに向こうが動いてくれないということであったりもする。ある人は施設長をしている時に部下に目立つように名刺に「施設長」と書いて欲しいと言われたそうである。権威で相手を動かすことはやり方として必要な時もある。しかし、それでは結局は上司の手柄になってしまう。担当者である部下の面目は丸つぶれである。

課題の緊急性、即応性との兼ね合いもあるができれば、担当者間での対話を繰り返すのが基本だろう。会う機会を増やす、会う機会を定例化する、その担当者の耳にも入るようなところにその人の支援への感謝も伝えていく…。地道ではあるがこうした蓄積が必要だろう。

上司をいかに育てるか？と同様に、連携相手も育てる。そうしてお互いに育ちながら、どんな環境でも結果が出せる！これを目指すのが良い。

ミスへの対処は連携チーム協力で

時には連携先の相手がミスをするかもしれない。連携している者同士で協力して、私たちで全力で挽回をする姿勢も大切である。万全を期していても、ミスはゼロにはできない。その時に、助けてもらった経験があれば、助けてもらえる可能性は高まる。恩を売る、借りをつくるというような言い方もあるが私の好みではない。相補的に全力で取り組む実践の蓄積さえできればよいのである。

自分がミスをしたら素直にオープンにする必要がある。率直に謝罪をするところから始める。ごまかすことは事態を余計に混乱に陥れる。「嘘は短期戦略である」といわれるように、事態の開示からしか始まらない。正確な状況を連携先も把握できたら、自分たちのミスでなくても、できることをしてくれる可能性も出てくる。

職場のチームでも大切なことであるが「ミスを憎んで、人を（機関を）憎まず」の姿勢である。ミスの発生しないようには改善を全力で行う。そ

して、人や機関を否定したり、拒否したりするのは間違いである。ミスが発生しない状況をいかにつくるか、ミスが発生しない環境をいかにつくるかである。その担当者がたまたまそこに居て、そのタイミングで発生することもある。よって、ここでも未来志向である。これからどうするかのアイディア出しと、実現に注力すればよい。

新任という危機には、情報を

新任は不安である。人事異動後の数か月など分からないことだらけである。それでも仕事はくる。気に入られたい、なめられたくない、前任者を超えたい！という心情もまじりあっている。「～すべき論」「そもそも論」もすぐに飛び出す。「前例主義」にもなる…。つまり、よちよち歩きの頃は失敗はつきものである。それを肩書や立場で押し切ってばかりいると誰も連携をしたくない機関になってしまう。起こっていることは圧倒的な情報不足である。これまでの経過も、足を運ぶ機会も、他者と協働経験も圧倒的に不足しているのである。そのためにも、新任が来た時にはそういった話を身内も連携先からもどんどん耳に入れていかなくてはならない。そこで断絶が起こると状況がそのままになってしまう。

役割、肩書を超える

その立場にいるから、付き合うではなく、あなたがその立場に居てくれてよかった！になるとよい。ワークライフバランスという言葉があるが「ワーク」も「ライフ」である。不可分ではないだろうか？仕事だから一緒に居るよりも、仕事でなくても一緒に居てもいいという割合をあちこちで増やすと良い。そのためには仕事以外での接点を何らか持てると良い。同じ方面なので一緒に帰る、お茶をする、同じ趣味の話をする、家族のことも話題にする、ＳＮＳで接点を持つ…。いろいろ手段はあるだろう。つまりは自己開示で、それも変化は「自分から」である。

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論」

1～9　連載中！

対人援助学マガジン 43～51

2020 年 12 月～2022 年 12 月

「援助職の未来 1～2」

対人援助学マガジン 41～42 号

2020 年 6 月～2020 年 9 月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」

対人援助学マガジン 16 号

2014 年 3 月

「障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会」

対人援助学マガジン 6 号

2011 年 9 月

「1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 1～40」

対人援助学マガジン 1 号～40 号

2010 年 6 月～2020 年 3 月

臨床社会学の方法

(39) 脱暴力支援のソーシャルワーク

中村 正

1．暴力の加害者対策再整理

雑誌『現代思想』(2022 年 7 月号、青土社) が「『加害者』を考える－臨床・司法・倫理－」という特集を組んだ。私は、「加害行為研究の視界-加害性・暴力性・暴力の文化・マイクロアグレッション」と題した論考を寄せた。犯罪は刑法などの刑罰法規に規定された構成要件に該当する違法な行為のことである。したがって、加害者のなかでも犯罪者は法律に基づき裁きの対象となるが、私が関心を寄せている加害は広い意味である。犯罪の枠内には収まらない諸相をあつかう。

たとえば、いじめ（いじりも含む)、各種のハラスメント、DV、虐待（子ども、高齢者、障害者など)、指導における暴力、ヘイト行為、社会的差別など、禁止の対象ではあるがすべて犯罪とはなっていない一連の行為がある。加害者に対して民事上の損害賠償を請求するなどで裁判になることはある。刑事事件として処罰されるものもあるし、まだ犯罪化されていないものもある。一部は徐々に犯罪とされている。加えて、何よりも防止や予防についての取り組みが有効である。さらに、「介入と支援」について、従来にはない対策の議論が必要である。重大な問題行動となれば、既存の法律で対応されるが、DV 罪、虐待罪、ハラスメント罪が創設されればよいというわけでもない。そして、対応する際に、刑事罰だけがよいとも限らない行為群である。ようやく暴力問題として浮かび上がってきたこれら諸問題への対応には、暴力排除のための介入はもちろん必要だが、支援、つまり脱暴力化支援も組み合わせることが必要である。

また、社会問題として可視化されていない問題群も多い。たとえば、2017 年の刑法改正で男性への性被害が浮かびあがり、実態調査がなされているが、これも社会問題として構築されてこなかった。こうしたテーマは多い。それをどのように社会制度として組成すべきかについての理論的根拠、政策・制度のあり方、臨床的な手法の開発など、課題は山積していることは本連載で繰り返し指摘してきた。

こうした文脈で「介入と支援」を展開する場合、支援の内容は脱暴力化、再発防止である。それは罰だけでは難しい。諸外国の先行する取り組みからすると、ジェンダーの観点を活かした、社会教育的・心理

教育的なアプローチが必要である。現在、性加害、ハラスメント加害、DV や虐待の加害、体罰など、暴力加害後への脱暴力支援をめざす、いわゆる「加害者対応」を根拠づけるための制度は、保護命令・接近禁止命令制度以外に、公的には存在していない。民間のクリニック、心理相談の組織や団体、当事者主導型のグループ、援助職者個人、研究グループが自主的に取り組んでいる段階である。公的な制度を構築すべく、DV を扱う内閣府が加害者対策についての調査研究事業として、加害者プログラムを自治体と協力して試行的に実施するところまできた。

私は、男性性ジェンダーに関心をもつ臨床心理士・公認心理師らと、いずれ日本社会においても本格的な加害者対策が組織されるだろうと考え、任意に参加することのできる、男性を対象にした脱暴力のグループワークを二箇所で実施している。

一つは京都府の支援で取り組む DV 加害男性向けの脱暴力グループワークである。月に 2 回を 4 ヶ月で 1 クールとしている。それを 3 クール実施し、合計 24 回となる。クールとクールの間にリフレクション個人面接を実施し、クールでの変化と次のクールでの課題を明確にする。これで一年かかる。状況の変化を見ながら、もう一年続ける。全部で 6 クールとなり、合計 48 回のセッションである。第 1 クールの前に、5 回の個人面談を実施し、グループワーク参加への準備を行う。これは初回面接も兼ねており、自分の問題の認識具合、他罰性の度合い、行動変容の可能性、グループワーク参加への動機、問題の理解の促進、グループワークへの導入、自らの課題の設定などを行う。

もうひとつは大阪市・大阪府・堺市と立命館大学人間科学研究所臨床社会学プロジェクトが連携して取り組む、虐待する父親のための男親塾である。児童相談所との連携なのでケースワークと紐づけている。私は、当該自治体でカウンセリングも担当しているので、家族のケースにかかわる SV 的な役割も果たしている。

この二つのグループワークには違いがある。虐待の加害親に関しては児童相談所の虐待対応のケースワークが機能し、伴走型の支援ができる。家庭裁判所が関与していることもあるのでケースワークが重要になる。DV 加害にはそうした機能はなく、ケースワークはできない。配偶者暴力相談センターは児童相談所とは異なるからである。

こうして DV 加害者に寄り添うケースワークをどのように構築すべきなのかが、今後の制度づくりの課題である。本稿ではそれについて考えてみたい。

2. 司法との関係づけも必要

諸外国ではケースワークを機能させる司法の関与が強くあり（米国の DV 特別裁判所など)、加害者プログラムが整備されている。諸外国のような受講命令・参加命令制度は日本にはない。偶発的ではある司法が関心をもつことがある。個別の裁判や離婚調停の過程において、司法が脱暴力プログラムに参加している当事者について関心を寄せることがある。事後的に、脱暴力支援のプログラムが、司法の

審議の過程で紐付けられる。私は次のような事案を経験した。

〇虐待による傷害罪で在宅起訴され、執行猶予付きの判決となった父親である。男親塾に参加していることの証明を弁護人から裁判所に提出し、更生についての努力をしていることを説明した事例がある。判決の際にこのことを裁判長が指摘し、判決後も子育てのあり方を考え続けることを説諭した。傍聴していた新聞記者が男親塾について取材をしたいと要請があった。
〇意見書を書いた DV 加害事件がある。これは妻による復讐型の殺人事件で、夫の DV に耐えかねた上での事件である。背景事情として夫が DV 加害をしていたことの影響は無視できないという意見書を書いた。私的鑑定である。
〇歪んだ親密関係に陥り、恋人を殺害した事件の裁判所鑑定を担当した。殺人罪で起訴された若者の情状鑑定を要請された。判決は、嘱託殺人罪となった。背景に子ども期の虐待の影響（逆境的境遇）があることを指摘した。これは公的鑑定である。
〇離婚調停中に DV グループワークに参加する DV 加害男性は多い。突然、妻子が家を出たという点も共通している。身体的暴力はもちろんあるが、関係性の暴力としてのモラルハラスメント事案が多い。この場合、グループワークに参加する動機としては、どうしてこうなったのかという不安を和らげるという心理的安定を得ることが目的である。また、離婚調停を進める際の交渉材料にするという功利的な動機も働く。私は、「結婚には失敗したが離婚には成功する」という動機形成を重視している。暴力が原因なのでそれを直視し、内省を深め、慰謝料や養育費の支払いに応じるという「責任の召喚」をテーマにすることにしている。もちろん離婚それ自体による男性性ジェンダーの傷つきについてはケアすることになる。さらに親子関係が持続することへの父親の責任も強調している。脱暴力や暴力の気づきへと変換していく契機になる。
〇DV に警察が介入し、傷害の被疑者として、留置もしくは拘置され、取り調べを受けることがある。釈放後の男性、在宅起訴中の男性が参加する。不起訴や略式の事例もある。略式起訴され虐待の傷害で罰金刑となり、並行して児童相談所のすすめで男親塾に参加している父親もいる。
〇監護者によるわいせつ事案がある。グルーミングのようにして思春期の娘の胸を触った事例がある。触れ合い、親密さ、家族らしさという意識が背景にあったようだ。性犯罪ともなりうるという意識はない。娘が嫌な思いをしていると学校で訴えた。児童相談所に通報され、警察による取り調べを受けた。刑法改正の直後だったので、厳しく聴取され、最後は検察官による説諭もあったようだ。児童相談所は引き続きこうした意識を修正すべく関与を続けることになり、男親塾にオファーされてやってきた。

私たちが取り組む DV 男性相談や男親塾へと、当然だが、司法に指示され参加してくる男性はいない。弁護人、児童相談所、裁判官、警察・検察官など、暴力に関係す

る専門家たちが、その仕事の範囲において脱暴力を志向し、加害者の現実をクリアにするために、加害者プログラムに関心を示したということになる。この意味では、あらかじめ脱暴力のための加害者対策プログラムが制度化され、参加・受講命令制度があるわけでないが、効果的に利用されているともいえるだろう。児童相談所のケースワークの実践、刑事弁護人のケースセオリーの構築にそくしてこうした加害者対策が活用されている。

私は、内閣府の DV 加害者対策の制度構築に関与しているが、当面、受講命令・参加命令などの加害者対策が制度化されることはない。とはいえ、いずれ脱暴力プログラムが組み込まれることを想定しつつも、現行法の枠内でできることをし続けることを模索している。制度化となれば、動機づけられていない当事者たちが多数、表面化してくるので、脱暴力化の支援者もまだ慣れていないクライアントたちを相手にする必要がある。

これは非自発的な、抵抗する、動機形成が必要な加害の当事者へのアプローチとなる。プログラムの内容の工夫だけではなく、加害者をささえるケースワーカーも必要になると考えている。

これらの加害者対策の実践は、かねてより本連載で紹介してきた、脱暴力支援の根拠となる「治療的司法」という概念によって構成されている(本誌第 28 号で「臨床社会学の方法―治療的司法」)。私の諸実践は「概念実証」という取り組みである。これらの事例は、脱暴力支援の根拠となる概念にもとづいている。概念実証 proof of concept（PoC）という。さしあたり、「治療的司法」という概念によって実践している。いずれに司法による命令制度ができた時に対応できるようにしておきたいからである。末尾にそれに関する書籍の書影を掲載してある。

３．社会の関心の持ち方の工夫―関係コントロール型暴力の理解

虐待、DV、ストーキング、いじめ、ハラスメントなどの対人暴力についてはメディアが高い関心を示す。多くは事件報道的でセンセイショナルである。私は、事件検証風の報道には付き合うことにしている。最近では、福岡県中間市で起こった虐待と DV の重なる事案があり、それをドラマにした上で、検証的に報道をしたいというので、関与した。3 歳男児の虐待死亡事件である。

2021 年 8 月 15 日夜、自宅アパートで養父 (23) に頭を殴られて意識不明となり、27 日に死亡した。福岡県警は傷害容疑で養父を逮捕した。その後、男児の口にペット用の砂を入れるなどしたとして暴行容疑でも再逮捕され、母親 (22) も逮捕された。9 月 25 日、両者はさらに別の傷害容疑で再逮捕された。二人は殺人罪となり 12 年の懲役が確定した。女性は DV の影響による精神的支配の結果であり、傷害致死罪だとして控訴した。しかし共謀だとして認められず、確定した。

この事件に児童相談所は関与していないので児童福祉制度から検証はできない。これを社会の側から検証すべく、担当ディレクターが、裁判を傍聴し、判決後は刑務所に通い、両人に面会し、手紙のやり取

りを続けた。

この事件の特徴は、SNS による関係コントロールである。ラインでのやり取りが 25000 通あった。それを分析して、取材の成果も反映させ、ドラマも制作して番組の特集が組まれた。「日常が溶ける・検証 コロナ禍の虐待事件」と題したハートネット TV である（初回放送日は 2022 年 11 月 16 日)。「息子のように虐待で苦しむ子どもたちが増えないため」３歳児を死亡させた母親が取材に応じたという。「学資保険をため定期健診を欠かさなかった母。しつけにこだわった父。この家族に何があったのか。傍聴、面会、100 通を超える手紙、さらに出会いから逮捕までの半年間におよぶ２万５千超の LINE を追った」として番組がつくられた。

私は、この番組制作の過程で取材を受け、ドラマの脚本にもコメントした。特に、ラインによるコミュニケーションの独特さがあり、その短い文章から、暴力を発現させまいとして、母が彼の意識を先読みしていく会話が目立つようになり、それを「マインドリーディング（先読みと予期)」としてとらえ、「関係コントロール型の暴力」に自ら嵌りこんでいく様子が見られることについて話をした。「きちんとしつけしなさい」という彼の意向にそうようにラインに応答して、ラインに既読がつくかつかないか、その瞬時に「すいません、ごめんさない」というメールを返信する様子が赤裸々に残されていた。SNS による、この連載で幾度も指摘した「関係コントロール型暴力」の典型であるとコメントした。

DV と虐待の重なりあいが悲劇を招いた。加害男性は、親密な関係性を構築する際に独特な恐怖心や嫉妬心が機能していることも見られた。女性を失うことへの不安である。それが関係コントロールとして発現する過程が 25000 にもわたるラインメールから伺えたのである。

死亡事件は検証され、教訓化して、被害者支援と加害者対策に活かすことになる。児童相談所が関与していない事件であったとしても、死亡に至る経過のなかに社会的な介入の契機を探ることになる。

裁判では、DV 被害者的な母親の状況は考慮されず、養父と共謀していたとして、同じ懲役 12 年を課せられた。養育の責任を母親に帰すことが多い社会意識が蔓延しているので、そこまで追い詰められた母親は、コロナ社会が拍車をかけるかたちで、子育てについて気軽に相談できない事態のなかを生きてきた。社会的に孤立していた。死亡した男児の実父は行方不明で、余儀なく母子家庭となった様子も垣間見える。この母親が家庭をつくる出発点からジェンダーによるハンディが覆い被さっているといえる。

しかしそれは争点とならない。そして、加害者となった養父が登場する。男性への依存も垣間見える母親の心理もある。母親の控訴は、共謀させられていたという主張に基づいている。ようやく主体的に意思決定ができた。この事案では、実母・養父・子どもという密室化された関係が社会的に孤立していく様子がよく見えた。子育ての責任を前提に追い詰められていく母親のライフストーリも指摘できる。この事件から教訓化すべきことは多いとコメントし、社会病理としての様相

を指摘する番組となった。

4．脱暴力に向けたケースワークのために－ケースフォーミュレーションに学ぶ

本格的な DV 対策にするためには、虐待において児童相談所のケースワークが作用しているように、事案に寄り添いながらコントロールに巻き込まれているアクター(関係者)を再関係づけするマネジメントが必要である。ここでは、今後、本格的に導入されることが望ましい、DV 事案におけるケースワークについて考えてみたい。それはケース・フォーミュレーションとケースワークの視点である。

ケース・フォーミュレーションは、心理臨床、精神医療の領域で用いられる。事例定式化と訳される。クライアントへの臨床について、その個人の経過をみながら、回復にむけてフレームを設定し、よい方向へと向かう臨床実践の定式化を行うことを意味する。既存の理論や先行事例をもとにして定式化する際、①その主訴となる問題はなぜ、どのようにして生じたか、②その問題はどのように変化しているのか、③しかし問題が消失せずに続いているのはなぜか、④その問題は本人にどのような役割や機能をもって生起し、存在しているのか、⑤その問題を改善するためにはどのような支援が有効かつ必要なのかなどをプロセスとして考慮し、定式化する作業を意味する。

ケース・フォーミュレーションはその領域で確立されたアセスメントをもとにして組み立てられ、個々の事例に有効な支援と実践の計画を立てるために必要となる。様々な問題理解のための理論と臨床の理論を用いながら組成される。特に暴力などのリスクのある事案にはこれは不可欠だ。ケース・フォーミュレーションが行われないと、支援が、援助者の恣意的な思いつきによって展開されることにもなりかねない。

ケース・フォーミュレーションで強調されるのは「課題の明確化・個別化」と「問題解決への仮説の構築とその検証」である。「課題の明確化・個別化」とは、クライエント一人ひとりの問題や状態を現実的に捉えることである。共通に定式化できる脱暴力のプランをもとにしつつも、その当事者の個人別脱暴力計画を目指す。

「問題解決への仮説の構築とその検証」では、支援の仮説の組み立て、その妥当性を援助の過程で確かめながら進める。対話だけではなく、関係コントロール型の暴力という仮説を想定し、加害性を広く視野に入れる。身体的暴力だけではない関係コントロールによる加害性を対象にして理解を促すケース・フォーミュレーションにするべきである。脱暴力のための仮説を関係性の変化のなかで再構築し、適宜、修正を加えていくことになる。

援助のプロセスを通じて、クライエントの変化を観察したり測定したり、常に仮説の正しさを検証しつつ援助が進められる。

また、ケース・フォーミュレーションはプロセスとして進行する。①当事者の問題の明確化と課題の確認、②脱暴力化に向かう仮説の模索と構築、③フォーミュレーション作業として男性性ジェンダーの視点も加味して対話を続ける。

５．脱暴力へのソーシャルワークとケースワーク

一般に、脱暴力支援は、援助を求めないクライエントへの対応という面がある。虐待、ＤＶ、非行、ストーキング、ハラスメント、いじめなどの加害者の特性は共通にある。非自発的な、抵抗する、動機づけられていないクライアントといわれている点である。この人たちに働きかけるケースワークや対話となる。

ケースワークとは、困難な課題、問題をもった対象者が主体的に生活できるように支援、援助していくソーシャルワーク（社会福祉援助技術）のことである。個別援助技術のことでもある。ケースワークは、クライエントの生活における諸問題（生活困難、問題解決、社会生活に関するニーズの充足など）について、改善を行うこととされている。

古典となっているが、「バイステックの 7 原則」がある。これはアメリカのケースワーカーで社会福祉学者のフェリックス・バイステックが 1957 年（尾崎新ほか訳『ケースワークの原則-援助関係を形成する技法』 誠信書房、2006 年）に示したケースワークの原則である。現在においてもケースワークの基本として認識されている。次の 7 つのことである。

・個別化－当事者の抱える困難や問題は、人それぞれの問題であり同じ問題は存在しない。この原則において当事者のラベリング（いわゆる人格や環境の決めつけ）とカテゴライズ（同様の問題をまとめ分類してしまい、同様の解決手法を執ろうとする事）はできない。

・受容－当事者の考えは、その人生経験や必要や必然の思考に由来する。個性ともいえる。たとえ司法の当事者で、犯罪や暴力の課題をもっていても、その当事者個人については受け入れることになる。当該の問題行動を許容するわけではない。人を受け入れることと道徳や社会のルールに反する行為を受け入れることは違うとし、あくまで「ケースワーカーが受けとめる対象は現実である」と述べている。そのような意味でケースワーカーはクライエントをあるがままの姿で捉えることが必要であるとバイステックは主張している。

・意図的な感情表出－当事者の感情表現の自由は認める。特に抑圧されやすい否定的な感情や独善的な感情などを表出させることで当事者自身の枠を取り払い、逆にクライエント自身が自らを取り巻く外的・内心的状況を受け入れやすくする事が目的である。またワーカーも当事者に対しそれが出来るように、ミラーリング効果を発揮すべきである。つまり自らの感情表現を工夫する必要がある。

・統制された情緒的関与－ワーカー自身が当事者自身の感情に呑み込まれないようにする。当事者を問題解決に導くため、ワーカー自身が当事者の心理を理解し、自らの感情を統制していく事である。

・非審判的態度－当事者の行動や思考に対して、ワーカーは善悪を判じないこと。ワーカーは補佐であり、現実には当事者自身が自らの課題を解決せねばならないため、その善悪の判断も当事者自身が行うことを目指す。一般に人間は、基本的に

自分のことを否定するものは信用しないので、受容の観点からも、これは重要となる。

・利用者の自己決定－あくまでも自らの行動を決定するのは当事者である。問題に対する解決の主体は当事者である。ここから、ワーカーによる当事者への命令的指示は退けられる

・信頼と秘密保持－当事者の個人的情報・プライバシーはもらしてはならない。「個人情報保護」のことである。

これらは、利用者と援助者間の「信頼関係（ラポール)」を構築するための倫理と行動の原則として指摘されている。加害者対策のなかの脱暴力支援で寄り添いながら（伴走型)、暴力行動の変容にむけて協働することになるのが加害者プログラムの実施者なので参考にしている。

しかし、加害者プログラムの内容ではなく、ケースワークの仕組みがないので、ケース・フォーミュレーションとともに、この原則に配慮していくのが現実的だろう。私たちの取り組む京都府と協働した男性問題相談事業はこれを目指している。

６．加害者対策へのソーシャルワークの構築

グループワークでは、以下に述べるような手法を用いながら、各人の変化を反映させる柔軟なケース・フォーミュレーションとしている。

加害者対策の基本として、暴力の背景に男性性ジェンダー問題を置いている。加害男性の置かれた状況は千差万別だが、暴力発現の構造として、男性性ジェンダー問題が存在している。当事者にもジェンダー問題について理解を深めてもらうことが重要だと考えている。

男性性ジェンダー問題からの暴力論やマイクロアグレッション論をもとにして、①関係コントロール型の暴力であることの理解、②自己理解としての男性性ジェンダーの視点からライフストーリワーク、③脱暴力に向けた語彙と文脈の獲得（ナラティブアプローチ)、④そのためのナラティブの様式化と脱暴力を目標にした戦略的な人生の再構成（ストラテジックシェアリング)、⑤シェアリング的なコミュニケーションをとおした親密さと共感能力を養うこと、⑥他罰性をなくして責任を召喚すること、⑦「I」メッセージの練習、⑧アサーションとアファメーションを会得することなどを加害者プログラムに組み込んでいる。この連載では、第 48 号(2022 年 3 月)に「臨床社会学の方法(36)暴力の文化—Micro Action for Violence-Free プロジェクト構想—」として紹介した。

加害者臨床は、動機づけられていない当事者たちなので、複雑、困難なケース運びを余儀なくされる。私たちの前には、不本意な当事者として現れる。不甲斐ない面もある。社会的には「介入」という局面を経験しているからである。子ども虐待では児童相談所（行政）や家庭裁判所、警察が保護のために家庭に介入する。夫婦・男女間の暴力は妻からの非難や家出がある。また、地方裁判所が保護命令を発出し、警察に通報があり、暴力による離婚となると調停が機能すること事案もある。ス

トーキング行為があれば接近禁止命令が発出され、生活安全のために警察が動く。

こうして加害者化がすすむ。責任回避もおこる。他罰的な言動もみられる。抵抗する、非自発的な、不本意な当事者として立ち現れるである。こうした加害者たちとのグループワークである。

プログラム内容とは別に、それが当事者の問題状況や克服すべき課題にそくして作用するようなケースワークがどうしても必要となる。

7．グループワークに伴走する脱暴力ソーシャルワーク

私たちが京都や大阪で取り組む脱暴力化支援は、固定的なプログラムありきのものではなく、参加者の出来事や課題が明確になるように、ボトムアップを重視しつつも男性性ジェンダー、家族関係論、対人暴力理論の基本問題から自らを省察できることをめざした「内なる知識生成」を重視している。仮にグループワークで男性性ジェンダーにもとづき 20 個くらいの暴力理解の省察的概念（家父長制、関係コントロール型暴力、男性性ジェンダーなど）が当事者男性の内部に形成できる。それをもとにして脱暴力にむかうグループワークへの参加動機と自分の課題構築の内容を組んでいく。脱暴力にむかう次なる段階へのマイクロアクションの体系化という意味である。個別のコンサルテーションも必要となるので、グループワークの合間に個別面談も実施している。

たとえば、京都のグループワークの参加者である 70 歳代の A さんは、自らの体験から「家父長制」という概念に行き着いた。B さんも男性性ジェンダーに気づかなくてもよい「無自覚的存在としての男性」に気づき「男らしさの鎧」という言葉が降りてきた。この視点から、情緒的関係性としての家族ではなく勝ち負けを家族に持ち込んでいた。ビジネスモードでの家族運営者という気づきも得た。S さんは、愛情表現できない、離れてしまうという恐怖に基づき女性をコントロールしていた「関係コントロール型行動」という概念が腑に落ちたという。そんな対話をとおしてグループワークの成果の共有をする。重視していることは、個人の課題の明確化である。自らの体験を社会問題と重ねていく。新しい語彙を獲得する。ナラティブのもとになる。

私は、マイケル・ホワイトらの厳密な意味でのナラティブ・セラピーを男性問題相談実践に活用している。これは先の第 48 号でも記した。こうした概念と暴力へと至るライフストーリワークが重なりあうようにグループワークを展開している。自分史のなかに暴力の発現の必然性を探る機会として 2 年間のグループワークはケースワーク的に機能する。パートナーとの関係がどのように変化しているかについても理解をしたいので、初期面接を担う担当者（グループワークのファシリテーターではない）がパートナーコンタクトをすることもある。子ども虐待に関わる児童福祉の枠内での脱暴力化支援のための男親塾とはまた異なる DV 加害男性向けのグループワークの特徴である。児童福祉の枠ではなく、ジェンダー問題の枠による意味づけのグループワークで

ある。暴力性には気づくが加害性には気づきにくい男性たちとの協働作業である。

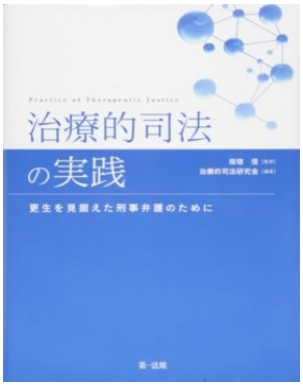
○概念実証(「治療的司法」についての論考や書物)



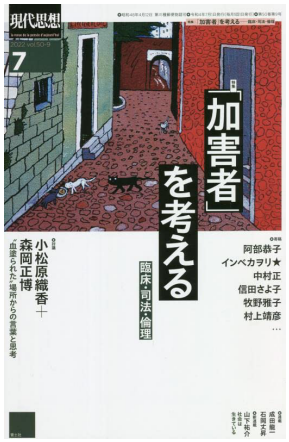
『季刊 刑事弁護』64 号、現代人文社、2010 年 10 月 15 日



『法と心理』法と心理学会誌
(第 18 巻 1 号、2018 年、日本評論社)



『治療的司法の実践―更生を見据えた刑事弁護のために』(治療的司法研究会編、2018 年、第一法規)



『現代思想』誌 2022 年 7 月

立命館大学
(産業社会学部・人間科学研究科)

2022 年 11 月 30 日

カウンセリングのお作法　第 33 回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島　中島(水鳥)弘美

～家族面接初回の時間管理と話のバランス～



前回は、家族面接初回の「相互交渉段階」「目標設定段階」について話しました。

今回は、初回面接での全体の時間管理について話します。

家族面接の一回の時間はおよそ 90 分です。個人面接は 40 分～60 分ぐらいが主流です。個人面接より比較的長い時間の面接を行う理由は、来所されたご家族全員のお話をきかせていただくことが中心となるためです。面接申し込みの時点で、おおよその相談内容は把握しているものの、その情報は限られています。電話をかけてこられた方以外のご家族とは初めてのかかわりとなるため、「あなたはどうですか」と、おひとりずつお話をきかせていただきます。

初回面接での時間配分を大まかに説明する

問題確認段階で、「いまから 1 時間ぐらいお話をおききし、そのあと今後についてのまとめをします」と、だいたいの見通しをお話します。

「どなたからでも、どんなことでもけっこうです、お話しいただけますか」

と、ご家族の様子を見渡しながら、できるだけ自由に話してもらうように声をかけます。すると、ご家族の誰かが自らすすんで話される場合もありますが、とまどっておられることもあります。そのときは、一番話したそうにしている人や、家族が話してほしいと願っているような人に、

「電話で、少しうかがいましたが、お父さんからおきかせいただけますか」

などと、投げかけます。

初対面でのコミュニケーション、呼吸あわせが徐々にすすみ、このような流れに入るまでの時間経過を確認します。書類記入の時間や社交的段階のあいさつなど、ご家族の人数にもよりますが、ここまでで5〜10分かかります。

ときに、道に迷ったためや、交通機関の遅延の場合もあり、定刻に面接が開始するとは限りません。次の来談者の予約時間も固定されているため、予定通りの時間に終了することをこころがけて、面接が進行します。

時計

時計の有無は、相談機関にもよりますが、当オフィスの面接室には、クライエントさんから見えるところに、掛け時計は設置していません。それは、なによりも面接に集中してもらうためです。

時計を置いていると針の動きを目で追ってしまい、落ちついて話せない人もいます。できるだけリラックスして話していただき、時間管理はカウンセラーが手元の腕時計をそっとみて、進行します。

なかには、面接時間を超過して迷惑をかけたくないと、相談に来られる方が自ら携帯電話に時間をセットして、終了時間が近づくとアラームがなるように準備をして来所される几帳面なご家族もおられます。

話題のバランス

面接申し込みのときに、一回の面接は90分であることを伝えます。面接当日に改めて、時間の予定を説明するのは、約束をしている面接時間に無事終了できるように、協力してもらうためでもあります。面接は家族との協働作業です。

初回面接で何を話すのか、とくに事前の準備をお願いしているわけではないのですが、ある事柄の詳細ばかりが語られたり、一人の人が長く話してしまったりすることがあります。そのようなときは、あいまいな点を残さないように事実確認をし、まだ話をされていない家族の別の人にお話をおききします。

ただ、話したいことがもっとあったのに、と不完全な気持ちが残るかもしれません。話したいと思っている人がある程度、話せて、家族全員からも話をうかがい、その内容をカウンセラーが理解する必要があります。誰かだけが長く話すと、話す量の多い人とカウン

セラーの関係は築けるのですが、そのほかの人との信頼関係を築くことがむずかしくなる可能性があります。きき過ぎず、きかな過ぎにならないように、信頼関係づくりを重視しながら全体のバランスを考えて、時間を管理します。

「自由に話してください」けれど「時間を守ることには協力をお願いします」

ということが伝わるように心がけます。

ときに、納得できない状態でいやいや連れてこられた人がいる場合には、今日は来てもらったことがとってもよかったのですよという趣旨を伝え、無理に話すように促すことはありません。その代わりに、その方の話題をして、その場で家での様子などをみなさんから教えていただき、家族それぞれのことが理解できるようなバランスに配慮します。

来所していない家族との間接的な関係づくり

また、来所できなかった家族がいる場合は、

「もしもし〇〇さんが来られていたとしたら、ここで、どのようにお話されると思いますか？」

と、家族全体に問いかけます。

あるいは、〇〇さんの代弁をしてくれる適任者を推測して問いかけます。関係性の質問と呼ばれているものです。

それらの質問を通して、来談していない人の存在を家族に意識してもらいます。来所される人が限られる場合でも、家族面接では家族全員の話を受けとめてすすめるスタイルであることを理解してもらいます。

もしも、出席していない家族に対する話題がネガティヴなものであれば、さらに、

「もしも、いまの意見をご本人が聞いておられたとしたら、ここでどのようにお話(反応)されると思いますか」

と、たずねます。

来所されている人との関係づくりとともに、来所されていない人との関係を間接的に築くことができるようにします。家族に対してすべて受け入れること、そして、家族それぞれの弱みや強みを明らかにし、家族内の関係性の把握を決められた時間内にできるようにつとめます。

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

十七　子育て支援
～コミュニケーション
のクセ～



子育ては毎日の繰り返しですから、どうしてもそこで起きていることの受け止め・やりとりにクセがでると思います。子育てのしんどさは、このクセと関係している気がします。

そこで、そうしたクセとその変化について考えてみました。



子育て“あるある”
子どもに向かうおとなのクセ（1）

怒りと叱責

【クセ】子どもを叱るとき、怒りのパワーを活用してしまう。



【快感】怒りを吐き出すと一時的に快感があり、心の痛みも緩和される。この感覚が怒りグセに繋がる。

【コントロール】①「～しながら叱る」、「スモールトーク（雑談・世間話・無駄話）後に叱る」を実践する。② 怒りの誘発を目的とする行為は見てやらず、あえて”普通のこと”に注目し反応する。

子育て“あるある”
子どもに向かうおとなのクセ（2）

否定と一般化

【クセ】「どうしてあなたは○○ができないの？いつもそうじゃない」の言い方で責める。



【効果ゼロ】否定形で原因・理由を問いただして一般化すると、返ってくるのは反省ではなく反発。

【原因より目的】「何をどうしたかったの？そういうことだったら、この次は～と言ってね」と言葉による表現に導く。

子育て“あるある”
子どもに向かうおとなのクセ（3）

言葉の軽さ

【クセ】アラばかりに目が行って、ざっくり否定してしまう。



【決めつけ】「全然ダメ」「無理、無駄」「どうせ～に決まってる」など大雑把な印象で見切る。

【部分に注目】核心部分ではなく周辺部を見る。部分的な変化・違い・マシを探し出して、肯定的意味付けをする。「でも、ここのところはいい。これまでとは全然違う」。

子育て“あるある”
子どもに向かうおとなのクセ（4）

予定調和

【クセ】子どもが予測して身構えているところを責めてしまう。



【パターン化】お互いに予想通りの展開で、何一つ変わらないまま繰り返される。

【予想を外す】例えば、「カンシャク虫が暴れたんだ、悔しかったね」と外在化し、「でもいつもよりずっといい。どんな工夫をしたのか教えて」と手柄を返す。

　また、子どものクセが気になって子育てがしんどい、ということもあるでしょう。
　後半は、そこに変化をもたらすヒントを整理してみました。



子育て“あるある”
子どものクセが気になる（1）

頼み下手

【クセ】誰にも相談せず、頼ろうとしない。自分一人で抱え込んでしまう。

【経験則】「相談しても結局は同じ」「いままで人に頼っていいことはなかった」との確信がある。

【頼み方を教える】：「こっちの都合でわるいけど」「笑われるかもしれないけど」の前振り、「～してもらえたら助かる」の依頼、そして「ありがとう、おかげで助かった」の謝意で締めると全然違う。

子育て“あるある”
子どものクセが気になる（2）

付き合い嫌い

【クセ】自分は友達が少ない。みんなに好かれないのは性格がクライからと思っている。



【常識のウソ】みんなと仲良く、友達はたくさん、という大人の常套句・学校の常識の刷り込み。

【置き換え】友達なんて最小限でいい。相性や性格なんて関係ない。この世で役立つのはコミュニケーションのスキルだけ。

子育て“あるある”
子どものクセが気になる（3）

差異に過敏

【クセ】集団での立ち位置、他者の評価を気にしながら動く。



【同調圧力】他人との違いに敏感だと、同調圧力の強い集団は息苦しい。

【三つ組み活性化】“自分なりの達成感と自分勝手な役立ち感、それによる快感”が得られる行為（好きなことの周辺にある）だけで心身は活性化する。

子育て“あるある”
子どものクセが気になる（4）

引き寄せ

【クセ】不運でサイテーなことばかりに気を取られ、それをずっと引きずる。



【悪循環】思考・行動・結末がつながって回り、さらにネガティブなことを呼び込んでしまう。

【語りが変化を】「なんとなく違う、変わりつつある」ことを根拠とし、最悪とした事について「～のせいで」を「そのおかげで」、「最低」を「これで済んでまだマシ、幸運に感謝」と語ってみる。

【付録】子育て支援にまつわるランキングです（答えはついていません）。

①は、「子どもが自分の思いを伝える手段」についてです。大人の受け止めやすさ（子どもからすれば伝わりやすさ）はどんな順になるでしょうか。

②は、「子どもの心の有り様」です。満足感から強いストレスまで、どんな並びになると思いますか。



①　伝わり度ランキング
～思いを伝える手段～

(A) ことばで
(手軽さゆえに受け流されやすい)

(B) 表情・身振りで
(単独ではなかなか伝わらない)

(C) 文字で
(面倒だし、SMSやメモは幼児には難しい)

(D) 行為・行動で
(反発を受ける可能性が大きい)

(E) 心や身体の症状で
(インパクトはあるが専門家任せになるかも)

②　こころのランキング
～満足感から口惜しさまで～

(A) 話題になる
(注目を得る)

(B) 褒められる
(「偉かったね」)

(C) 無視される
(相手にされない)

(D) 役に立つ
(「ありがとう」)

(E) 叱られる
(叱ってくれる)

(F) 認められる
(評価される)



晩年

D・A・N 通信

No.2

2022.08.21～11.20

団　士郎

非コロナ騒ぎ顛末

▲月▲日

三連休前日の夜、仕事場で発熱した。休日やっている発熱外来（京都中央病院）に電話した。翌朝、スマホで問診票に書き込み、PCR 検査を病院屋外で受けた。結果は二、三日かかると言われた。その後、熱が少しおさまって安心していたら、日曜日の午後、39.6 の発熱。コロナだなぁと覚悟していたら、夜の通知電話で陰性。夕刻には微熱になっていたが、では何の発熱なんだろう？この間、診察も薬もなし。

▲月▲日

症状から夏カゼのようだが、いゃー、まいった、まいった。おかしな言い方だが、歳とって病気なんかするものじゃないな。体力や気力を持っていかれる。咳が出始めているし、微熱も不安定。回復に時間がかかる気がする。ここ数年、徐々に増えていた体重が悩みのタネだったのだが、発熱、咳などが一息ついたところで体重計に乗ってみたら、3 キロ半減っていた。びっくりして再計量。これは嬉しい、維持を目指そう。（結局、じわじわ戻ってしまったのは残念）

▲月▲日

週明け、知人からの情報に基づいて地元の通いやすい場所にあるクリニックを再受診。発熱の話はしないわけにはいかない。すると又コロナ疑念から、二回目の PCR 検査。結果の出るまでクリニック裏口のパイプ椅子で待つ。

今回は 10 分くらいで結果が出て陰性。でも、コロナでないと分かっただけで、混雑している連休明の診察は、明日以降にと言われる。この段階でも、診察は受けていないし、薬一つ貰っていない。自分の体力、回復力のみが頼りである。コロナ懸念はなくなったので、駅前のスーパーで、食品を買い込んでタクシーで帰宅。今週いっぱいは家ごもりすることに決定。

2022/08/21～

▲月▲日
　今からこれに出かける。元は女性ライフサイクル研究所というMさんが代表をしてきた組織。その応援団として、依頼されて年一回話すようになって20年近いのではないかな。とにかく長い関わりになった。
　何であれ、引き受けていることがあると準備をするから、そこで気付くことも多い。似たようなことを話すのと、同じことを話すのは全く異なる。似ているけれども違っていることを探るのが一番面白い。似すぎていて違いが判らんという聴こえ方の人もあろうが、話者としては同じことばかり話していて飽きたなんて経験はない。
　考えていると、今、どのあたりを思案しているのかが見えてくることもあって、自分が何をしているのかが面白い。



▲月▲日
　「家族の練習問題　第九巻」の校正が届いた。綺麗な色の表紙だ。いろんな人が、丁寧に編集、構成、校正してくださっているのがよくわかる。
　発売予定は12月2日。是非お楽しみください。（本のビニールカバー業者がコロナで廃業とか。ぴったりのカバーをする技術が直ぐにはないとかで、発行は年明けになった。今回の編集、構成は「牟田郁子」さんにお願いした。今書店に出ている『文にあたる』の著者でもある人気校正者だ）。
　十五年以上かけて九冊目まで辿り着くなんて、考えられなかった。第一巻を出した時のことはよく覚えているが、マンガ出版の難しさを知っていたから、売れないで、出版社を圧迫してしまうようなことがないようにとばかり案じていた。
　それが順調に刊行されて今に至るのだから、運が良いと思うしかない。あれもこれも、50歳を過ぎて公務員退職してからの出来事だ。
　児童相談所他の25年、その次の25年。ともに充実した時間の塊になった。



▲月▲日
　週末はKISWEC京都国際社会福祉センターで三十年以上継続している家族療法講座メニューから「面接演習」を二日間実施した。コロナ禍の中、七人での開催。あっという間だったと皆が感じていたらしい。
　初回家族面接を全員が繰り返し体験できるようプログラムした。皆さんの今後の業務に少しでも役立てばいいがと思う。
▲月▲日
　四回目のワクチン接種に大津京近くへ。道中のタクシー運転手は、ネットで某医師がワクチンは不要だと言っている話を延々と。
　世の中はいろんな信念が溢れていて、正しさに魅了されている人も多い。私は流行りのおマジナイだと思っているから、意見などない。そんな情報を集めたり、分析したりに時間を取られたくないのだ。なんでもかでも、にわか専門家になるのが好きな世の中に引いている。
▲月▲日
　二十余年、一度もなかったことが起きた。新作「木陰の物語」制作の毎月末スケジュールを日程から落としていた。
　KISWECのWS、ZOOM講座、ワクチン接種、マガジン50号の編集、東日本大震災家族応援プロジェクト・トークの準備、「家族の練習問題第九巻」校正等、次々と月末対応をしていたら抜けていた。

話のストックはたくさんあるから、その中から校正して、深夜から急遽、描き始めた。

▲月▲日

Nと京阪三条駅で待ち合わせて、大阪現代画廊で開催中の篠原ユキオ展に。その後、私は梅田のカフェに移動して対人援助学マガジン50号の編集。

18時からは「ぼむ」の月例会。今回はメンバー国府宅で恒例のカレーパーティー。

後で気付いたが、中之島で「岡本太郎展」をやっていたのだ。知ってたら午後の空き時間に行ったのに。終了後、仕事場に戻って深夜、「木陰の物語」の続きを描く。

▲月▲日

押したスケジュールの中、一昨日から取り掛かった「木陰の物語」新作が完成。明日から東北出張で移動が多くなるので、今日中に対応しておきたかった。対人援助学マガジンの原稿もほぼ届いて、こちらは移動中にも編集、対応可能だ。

▲月▲日

昨日から宮城県多賀城市に来ている。東日本家族応援プロジェクト＋。十年の区切りを迎えたものの継続版。今回の漫画展&トークは多賀城文化センターで。マンガの展示はこんな回廊式の壁面。カフェの窓越しにも見えたりする。良い雰囲気。



▲月▲日

福島県白河市図書館で開催中の漫画展とマンガトーク。作品「いじめた側の」の展示に合わせて、いじめ問題について、ここ二十年ほどの変化、不変化の思うところを話す。

結構ややこしい話にしたので、良かったかどうかはわからないが、私としては久々にたっぷり語った。図書館のアプローチに、このような展示で四作品。

▲月▲日

東日本大震災家族応援プロジェクト。今回は NHK の張りつき取材があって、東北エリア局のシリーズニュースとして、4 回放映された。 Web 記事のアドレスを掲載。ニュースも見られます。

宮城 NEWS WEB 仙台放送局「被災地で続く家族漫画展 多賀城」2022 年 8 月 27 日
https://www3.nhk.or.jp/tohoku-news/20220827/6000020714.html

宮城 NEWS WEB 仙台放送局「京都の大学院生 津波で前回の保育園長から震災学ぶ」 2022 年 9 月 4 日
https://www3.nhk.or.jp/tohoku-news/20220904/6000020815.html

宮城 NEWS WEB 仙台放送局「震災を描かない漫画展 被災地で支持されるのはなぜ？」2022 年 9 月 12 日
https://www3.nhk.or.jp/tohoku-news/20220912/6000020929.html



▲月▲日

楢葉町の宝鏡寺にある伝言館。大学院生達と一緒に三度目の訪問。館長早川篤雄さん、副館長安斎育郎さんが迎えてくださり、お話を聞く。

国との裁判を抱えた闘志満々の八十代の人たち。老人のふりをして逃げてちゃ、いけないなぁと自戒。

▲月▲日

久々に福島県飯館村を訪問。静かな山の中。耕作放棄してしまえば荒れ放題になるからと蕎麦を植えている花が綺麗。ここで頑張っておられるのを、訪問してお話をうかがった長谷川さんは亡くなった。

道の反対側には、もう他ではあまり見なくなった、除染土が詰まったフレコンバッグの山。




▲月▲日

漫画家仲間で feco Japan の会長でもある篠原ユキオがウクライナの漫画家六人に声をかけてマンガ展にこぎつけた。その展示手伝い（何も役には立たないのだが）に、京都・余花庵に。

このギャラリーでは毎年春先にぼむマンガ展を開いている。今回は会場を無償提供してもらっての開催だ。篠原はウクライナ語の作家紹介翻訳や作品パネル作りを一人で準備した。そういうことの得意な人ではあるが、いやはや感服した。9/25 日曜まで二週間開催だったが、この後、開催したい人、所がないものかな？

詳細は連載「HITOKOMART」のページ

▲月▲

全四巻の 1.2 巻を買って読み始めたこの本。第二巻になって、とんでもない展開に。台湾の白色テロの話、ぼんやり知っていたくらいだった。世界の歴史は言論の取り締まりと弾圧で作られている。（この後、第三巻も出た）

事なかれ主義は処世術としてはあり得るが、歴史の中では無価値の賛同者として扱われる。厳しい。



▲月▲日

妻の三回忌、娘が一番小さい孫を連れて早めにやってきている。孫と 74 歳も歳が違うなんて不思議だ。妻は妊娠は知らされていたが、この五人目の孫との対面は叶わなかった。

お爺の一人暮らしのところに里帰りする娘が、親孝行を強いられることになるのでは、何のための実家かわからないだろうから、この間はおばあちゃん役割（主夫？）をしっかり果たしている昨日、今日だ。私、家事は結構上手なのです。

▲月▲日

340 頁の対人援助学マガジン50号を印刷すると、間違いなくプリンターのインクは空になり、カートリッジ取り替えになる。そこで安価な互換製品をセットすると、警告が出たり、動かなくなったりと不安定。純正品を使えというがバカ高い。なのにインク量は少なくて、またすぐ交換しなくちゃならない。

しかもプリンターヘッドはそこそこの枚数を印刷するとエラーが出てヘッドの修理をなどと言い出す。その結果、我が家と仕事場に、使わなくなったプリンターが4台も積んであった。それぞれの機種にしか使えない買い置きのインクカートリッジは無用の長物としてごみになる。キャノンもエプソンも全くなんて商売をするのだろう。

▲月▲日

シリーズ開催している家族理解入門 zoom 講座。第 4 シリーズの最終回が今夜だった。

ここに合わせて声が出るように復活調整をしてきて、まずまずだったが、最後の最後にちょっと咳が出た。症状として残っているので、喘息の吸入薬をやっと今日の診察で貰った。咳で夜、眠れないことがあるのが辛い。



▲月▲日

長いこと立命館大学で保管してくれていた「木陰の物語」のパネルと掛け軸を、10年一区切りで引き取ることになった。自宅のピアノ室にかなりな量の活動成果物がトラックで運搬されてきた。今後はHさんの世話になりながら、ここから発送で漫画展を展開していきたい。



▲月▲日

仕事場で一日中作業をしていたので、夕飯に外に出た。雨降りは分かっていたが、少しは歩いておこうと足をのばす。錦市場を超えた辺りにこの店があるのは気になっていた。それを前を通りかかって思い出した。

初めて入った店だが美味しかったし、感じも良かった。飲み屋じゃなくて飯屋。酒を飲まない私には良い具合。（気に入ったのであの後、4回行った）。



▲月▲日

いくら何でももう衣替えの時期。半袖アロハの出番はなかろうと入替。夏物は洗濯機に放り込んで対応OKだが、考えてみると去年、冬物の対応はできていなかった。クリーニング屋とかどうしていたのかなぁ。

そうそう、エアコン不具合の修理にも来てもらった。先日の体調不良からの回復も含め、このところメンテナンスばかりにエネルギーが必要だ。

本当はものを創作していたいばかりの人間なのに。愚痴ってないで新企画原稿を書こう。



▲月▲日

朝７時半、N から電話。午前三時前に寝たばかりだ。寝ぼけた耳に、「今日、どうですか？」って何？

「産業遺産のここに行ってみたいな」と以前話してはいたけど、今日？

兵庫県の山奥、生野銀山、神子畑選鉱所跡。

まぁ他に約束も予定もないし、髪でも切りに行こうかと思っていただけなので、「じゃあ行こう！」と返事。45分後に迎えに来てくれて八時十五分出発。天気もいいし、秋の楽しいドライブ遠足になった。



▲月▲日

広島に行って帰る一日。新幹線に人が多いのが馴染まない。コロナの三年間で自分の感覚が変わっているのだろう。

京都も外国人の顔が目に見えて増えた。だから広島 WS も対面で行えるわけだが、zoom プログラムとの棲み分けも、自分の中では落ち着いてきている。まぁいいとこ取りの併用だ。結局、コロナ禍の影響は私の場合、忙しくなっただけだ。

▲月▲日

昨晩観た「パーフェクトケア」はとんでもなく悪い奴らの面白い映画だった。高齢者ネタのものでは、群を抜いてひどい。後見人に関わる法的根拠と、それを悪用しようとするアメリカ訴訟社会の姿。

体調を崩して以来、久々のストレッチに出かけた。夕刻からは立命館茨木キャンパスで東日本大震災家族応援プロジェクトの例会。毎日、なんやかやあるな。



▲月▲日

注文のしそこないで、ノンアルじゃないサングリアがきてしまった美味しいイタリアン店。一口飲んでわかったが、もう返せない。サングリアくらいならと水で薄めながら飲んだが酔っ払ってしまった。

それで思い出したのが、40年程も前のマドリードでの夜。知らずに飲んだ甘口の酒。パエージャが出来上がる前に、ふらふらに酔っぱらってしまい、妻に引きずられるようにホテルに戻った。あれ以来の感覚。帰路の JR で冷めてきてくれて助かったが、やっぱりアルコールはダメ。

▲月▲日

おおかた読み終えた頂き物のこの本が、こんなに面白いとは！結構分厚い本なのにあっという間に読了しそうだ。民話、昔話、もともとあまり関心を向けたことのない世界。なのに展開される噺を採集に巡礼する筆者の在り方も含めて、面白い。

私は「木陰の物語」で現在の民話を見える形にしているのかなぁなんて思った。



▲月▲日

衝撃的な事実が発覚した。しまうまプリントでいくつもの出版物を作ってきた。その保管期限が最長3ヶ月で、更新は何度でも可能である事は承知していた。にもかかわらずこの夏、雑事に忙殺されてうっかりしていた。その結果 complete 上下巻（計280頁）、を始め、数冊の編集完成させたマンガライブラリーのデータが全てが消えた。注文できると思っていた本が絶版になった感覚だ。



▲月▲日

久しぶりの大阪伊丹空港。道が混んでいて空港バスは、京都を二十分遅れの出発。

いつものように多すぎる余裕で空港に向かうので、動いていれば遅延も心配なし。搭乗口を通過してから、馴染みのスペースで初めてこれを食べた。

まぁ美味しかった。



▲月▲日

石狩湾の海岸近く、荒野に見える屋外にこれがある。小雨の石狩川、河口近く。講演前の空き時間に足を伸ばしてみた。

像に手のひらをしばらく当ててみたら、冷たさで震えがきた。吹雪が舞うような季節はまだだ。しかし小雨模様の海岸線の厳しそうな気配は半端ではない。さすが北海道。



▲月▲日

今夜は「ホンブロックラブ」企画の（「家族の練習問題」編集部ホンブロック）鼎談会。

マンガ「夜明け前」「宿題」を朗読して、スタッフ二人のトーク、私のトーク、三人でトークを繰り返す。

いろんな話のカケラが登場して広がるので、私一人で話すのとはかなり違ったものになる。会員向けでアーカイブスも準備している。

▲月▲日

土曜朝一番、地下鉄で二条駅に向かう。山陰線で保津川を横目に亀岡に。年二回開催で六回目になる「学びの森」での講演。快調に二時間二十分、話しまくる。

市内に戻って二条駅界隈で一息つきながら書店を覗くとこれが目についた。久々、沢木さんの長期インタビュー／ノンフィクション作品。

「今日は土曜か？」、曜日感覚もいい加減になっては来ているが、週末だ、あれこれ楽しもう。



▲月▲日

もう 11 月。あっという間に年末だ。ますます一年が短い気がするが、歳をとるとはそういうことか。

面白いと思える映画が少なくなったり、楽しめる小説が減ったりしているきがするが、ホントに楽しめるものを選ばないと！と思いすぎるからかなぁ。

他の人にはくだらなくても、私には楽しいものを選ぼう。



▲月▲日

伊丹空港に向かっている。祝日の京都八条口発リムジンバス。高速道路の混雑も読めず、乗客混み具合も不明なので、とりあえず早めに家を出る。

とはいえ、京都にはたくさん観光客が来ているだろうが、今日、出てゆく人は少なかろうと予測はしていた。そして実際がこれ。やっぱりそう、ガラガラ。



▲月▲日

午後から弘前市の依頼で講演。昨晩着いていたので、朝、ゆっくり散歩してみた。奈良美智絡みて記憶にあった「弘前れんが倉庫美術館」。面白い趣向の展示。

古い倉庫がリノベされて今に羽ばたいている。明治の産業遺産が日本のあちこちで今の光を浴びているのが面白い。



▲月▲日

弘前 WS も二十年を越した。50 回くらいはここに通っていることになる。

馴染みの人に新しい人が加わって十八人で一日。だんだん年寄り口も出てきて、我ながらうるさい奴だと思わぬでもない。それでも呼んで下さるのだから来る。あちらにもいいお歳の方も。でも敬老会ではない。

▲月▲日

夕刻から草津市での家族勉強会。参加者は新旧流動しながら、20 年以上経過。家族とか暮らしはイベントではなく日常だから、めったに卒業なんてなく続く。

家族の学びもそうだと思うので自分が飽きてしまうまで、あちこちで続けていこう。

▲月▲日

仕事場への経路、年に一度くらい寄り道をする岡崎付近。南禅寺の水路閣が好きで、子供の頃から何度も訪れている。京セラ美術館でやっているボテロ展は、あまり気乗りしていなかったが、そばまで来てるんだから、のぞいておこう。



▲月▲日

琵琶湖畔で暮らす著者(妹)の所に、多賀城市内のアパートで兄が亡くなったと知らせが入る。父子暮らしだった息子は児童相談所に保護された。駆けつけた妹は、次々と課題を片付ける。

終盤、多賀城駅前の図書館カフェで甥っ子と話す。なんだこりゃ、私絡みの場所・キーワードがてんこ盛りだ。グイグイー気読み。



▲月▲日

2019 年秋、ウクライナを旅した時、知っていることは少なかった。行って知ったこと、ロシアの侵攻が始まって知ったことも少なくない。

でもこのグラフィック・ノベルは、今のようなことになる前、ソ連時代のロシアとウクライナの出来事を、個人の暮らし向きを描くことで、詳細に知らしめている。凄いなぁとしか言葉がない。（以前、ベルリンのあちこちの街角で「つまづきの石」を目にした時も、同じことを思った。関心があったらスマホで検索してみてください。ホロコーストで亡くなったユダヤ人が収容所に連れ去られた時に住んでいた家の前の道端に、名前と略歴の記された10センチほどの金属板が埋められている）



映画「赤い闇～スターリンの冷たい大地で」（2020）でも観たが、1932–33 ウクライナで起きた大飢饉による数百万人の死をホロドモール(飢餓による殺人)と呼ぶ。

スターリンの中央政府が引き起こした人道に対する罪として、認定を世界各国に求めている。豊かな大地の実りを根こそぎ持っていかれた村々では飢餓による人喰いが…



▲月▲日

JR品川駅から徒歩 10 分の東京海洋大学をお借りして家族理解 WS、第67回目。広い会場で密にならず、十八人で六時間。

オープニングトーク、気分よく話し出したら止まらなくなって三時間一気。高齢者は運転に限らず、アクセルとブレーキ問題を考えねば！と自戒。

▲月▲日

大井町のホテルから JR 直通なので鶯谷駅に。初めての駅前から散歩。近いのか遠いのかも分からん。無事到着して他に客のいない池波正太郎文庫を楽しむ。

長野・上田市の池波正太郎真田文学館も行ったことがあるので、こちらにも来てみた。十分楽しんだ後、浅草まで合羽橋ブラブラ、目についたどぜうを食す。





▲月▲日

マンガ集団ぼむの月例会。うまくて安いスペイン料理ベジョータ　ムーチョでランチ。その後、四条烏丸スタバのこんな青空席で二時間ほどの二次会。70 歳越えの七人でワイファイじゃなくて、ワイワイ。50年もこんな月例会を続けていると、それぞれの人生、家庭にも様々な変化はある。だから昔話も今話もたくさんある。



▲月▲日

聞いたことのない出版社の新書が 35 万部も売れているとか。一年で 20 刷になっている。

この著者は読んだことはないが知っている。そんなわけで、普段購入しそうにない本を手にした。2 時間くらいで読めたが、私は「そうそう」ばかり言っていた。読んで良かったのか、読まなくても良かったのか。



▲月▲日

夜中に net flix を見ていて目についた。公開時に気にはなっていたがなかなかアニメを観に映画館までは行かない。ちょっと覗くつもりだったが、見始めたら、あらあら終わりまで。

なんやこれ？と見終わっても思うが、同時にほろりとしてしまった自分もある。いい娘だ。



▲月▲日

封切りを心待ちにしていた。久々の感覚。でも、原作が良かった小説の映画化は、たいていガッカリに終わる。そんなことも承知で、楽しみにすることに決めた。だから初日に映画館にいく予定を入れていた。

チラシは近年一番気にいっている。映画らしく別物として完成していることを願う。



▲月▲日

「ザリガニの鳴くところ」を観た。本では想像に限界のある湿地の美しさに出会えた。プロローグの画面展開は映画にしか出来ない。

ただ、原作を読んでいない人には、どの様な映画に見えたのだろうと気になってしかたがない。

それは原作も映画も、共に批判されてほしくない気持ちの現れだ。この物語の結末について、いろんな感想があったのを知っている。あんな結末でなくても良かったんじゃないかとか。

そうかもしれないし、映画もあんな法廷物にして見せなくても良かったのではとの意見もわかる。

実際どのようにバスで戻って来たのか、そのシーンがない事に、サスペンス好きの人は腑に落ちないと語るのもわかる。

でも、そんなことはどうでもいいのだ。映画も名作でなくていい。あの原作を大事に映像化されていたからそれでいいのだ。

読んでから観るか、観てから読むかは、昔からある議論だが、断然前者だ。そして原作のファンになってから、あの湿地におもむいてほしいと思う。

▲月▲日

zoom 開催の対人援助学会に参加している。今日、新潟水俣病がテーマで、日本社会の変わらぬ

構造が改めて浮き彫りになった。
　私には「嘘」という誰もが使う手のことが興味深かった。嘘とは短期戦略の人の手段なのだと考えると、嘘はいけないなんて、子どもっぽいことを言っていなくてすむ。



51・子どもが育つ園庭 その２

前回に続いて、子どもが園庭での遊びを通して育っている様子をお伝えします。
動画も視聴してください



原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

子どもの園庭でのあそびにフォーカスして、**園庭遊び環境と保育者の関わりの大切さ**について紹介したいと思います。今回は「砂場」です。

園庭あそび『砂場』

砂場というと、1990年（30年前）からロングセラーで読まれているアメリ人のロバートフルガムさんが書いた『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』という本を思い浮かべる方も多いと思います。著書では砂場でのあそび方が書いてあるわけではなく、ロバートさんの生活信条を振り返ってみると、幼稚園時代にいろんなことを学んだのだということを、幼稚園の象徴ともいえる「砂場」で学んだ、とタイトルにしたのでしょう。



たとえば、

・何でもみんなで分け合うこと
・ずるをしないこと
・人をぶたないこと
・使ったものはかならずもとのところに戻すこと
・ちらかしたら、自分で後片付けをすること
・人のものに手をださないこと
・誰かを傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと
・食事の前には手を洗うこと
・トイレにいったらちゃんと水をながすこと
・焼きたてのクッキーと冷たいミルクは体にいい
・釣り合いのとれた生活をすること　毎日少し勉強し、少し考え、少し絵を描き、歌い、踊り、遊び、そして少し働くこと
・毎日少し昼寝をすること
・おもてに出るときは車に気をつけ、手をつないで、はなればなれにならないようにすること
・不思議だなと思う気持ちを大切にすること…

など人が生きていくうえで基本的で大切なことが綴られています。

さて、話が寄り道してしまいましたが、この本の影響だけではなく**「幼稚園・保育園には砂場がつきもの！」**と思ってらっしゃる方は多いですよね。

ところが文科省が規定している幼稚園設置基準では砂場は「義務」ではなく、幼稚園施設整備指針のほうで「設置に努めること」とされているので、**砂場がない園も当然あるのです。**認定こども園は幼稚園に準じることになるので同等の設置基準も求められますが、保育園や小規模保育施設は園庭の設置すら義務ではなく、近隣の公園等を利用しても良いことになっていますので、とくに都市部では園庭の無い施設、砂場のない施設がたくさんありますね。

なんでそんなことになるかというと、文科省が管轄する教育施設と、厚労省が管轄する福祉施設の違いが設置基準に現れたもので、施設を利用する子どものことを度外視していると言わざるを得ません。日本の教育行政はまだまだ**子どもファースト**じゃないんです。

園庭の有る無し、砂場の有る無しは、**子どもの発達にかなりの差を生じさせると考えます**が…。待機児童を解消することだけを優先させ、本来の子どもの成長発達を促す環境を軽視した国の姿勢はそろそろ是正して頂きたいものです。賢い親ならそんな環境の園にお子さんを預けないほうがよろしいかと。(^^;)できればですが。
来年度創設される「子ども家庭庁」では「こどもまんなか社会」を提唱しているので、そこんとこの改善を大いに期待しています！



話が回り道してしまいましたが、原町幼稚園にも砂場があり、保育園と共有で使っています。親が公園などにお子さんを連れていって砂場で遊ばせるのは、なかなか抵抗があるという話を耳にします。そうですねー、砂で服が汚れるのは必至ですし、小さい子どもは口に入れたり目に入ったり、そばで遊んでいる人に砂をかけてしまったり、いろんなトラブルが予想されますもんね。
だからこそ、園に砂場があることは大切なことだと思います。
そして、砂場で育つことはいっぱいあるんです！

年少児の砂場あそびから

・・・ただ砂場で自由に遊ぶ・・・そこにどんな成長の場面が見られるのか・・・





●ある日の午前中、年少組が砂場を貸し切って砂場あそびを実施！

毎日のように砂場でのあそびは異年齢が入り乱れて展開されていくのだけど、わざわざ年少組だけで行うところにも意義があり、汚れてもいいパンツとTシャツになって、身体を洗うタライも、お着替え担当の先生も配置して・・・万全の体制で臨んだ。







エピソード①3歳児の世界は実に面白い、ボーダーラインのはっきりしない混沌とした対人関係。

例えば、一生懸命にスコップで道を掘っているA君の手元をBくんが足で踏んづけて道を埋めている。Aくんは道を作ることに集中しているので自分の手元しかみておらず、邪魔しにやってきた足めがけて、ガシガシとプラスチックのスコップで攻撃している。だめだとも言わずにただ攻撃して邪魔なもの取り払おうとしているようだ。その場面を見つけた先生が「Aくん、お友達の足を叩いたらダメでしょ」と諭したがAくんにはそうする理由があったのだ。年中長だと、足を出したヤツは誰だ？というほうに意識が行くが、年少だとそうはならないケースもあるようだ。



エピソード②次に見て取れたのは、雨どいやパイプのような砂場道具で水の流れる装置を作って遊んでいるグループ。そこは入れ代わり立ち代わりメンバーが変わる。水を汲みに行っていた人が、別の場所で川作りを見て面白そうだと鞍替えして



戻ってこなかったり、その逆もアリで顔ぶれが入れ替わる。誰も「水はどうした？」とか「なんでそっちに行っちゃうんだ！」なんてことは言わない。実に大らかに顔ぶれも役割も入れ替わるのだけど、必要とする場所には誰かしらがやってきて「僕がやる！」と役割を買って出てくれるのであそびが中断することは無い。なんてステキなシステム！年少ならではだよなあ～と思いながら感心して見ていた。年長なら優先順位とか所有権とか、そういうものははっきりしていて、先にそこで遊んでいた人がそこで遊ぶ優先権があり、後から来た人は当然「いーれて！」と言って加えてもらう立場になるのだが、年少の場合、突然やってきた人がその場を支配して主導権を取ったりする。

エピソード③水を流す装置の先に桶があって水が溜まってきた。そこには一人だけ入るスペースがあり、何人かが交代で出たり入ったりしていたのだけれど、急にCちゃんがやってきてその場を支配した。自分だけずーっと桶に入り続けているのだ。最初から遊んでいたDちゃんが「はいってもいい？」と何度も聞くが、「ダメ～！」と取り合わない。

はいっていい？　だめー！



その時Y先生が一緒に遊んでいたけれど何も助け舟を出さない。傍で見ていた僕はDちゃんが拗ねたりするとあそびが中断するし、取りなしてやったらいいのに、、、と思いつつ見守っていたがY先生は全くスルーだった。かなり長い時間粘っていたDちゃんは、交代してくれる可能性がないことを悟って、静かにその場を離れ、別の人が遊んでいた水たまりに行ってジャブジャブ楽しくやり始めた。

これかあ！

Dちゃんは自分の判断でその場を離れ、自分の欲求を満たす場所を見つけて遊ぶことができた。
ここで先生が取りなしていたら心の葛藤も自分の判断も、新たな発見にも出会えなかったことになる。
これが子供の非認知能力を高める関わり方の一つということか、さすがだなぁ！と思った。後にY先生に聞いたら「キツイことばが出たり手が出たら介入しようと思っていたが、それまでは任せておこうとラインを決めていた」ということだった。
もしその日にDちゃんの思いがかなわなくて悔しい思いをしても、今後のどこかで同じような場面で解決ができるかもしれない。だから子供の力を信じて待つのだ。それが結果的に子ども自身の力をアップさせることになるのだろう。

こうやって･･･立つとジャー！ね！おもしろーい！





はあー！ま･ん･ぞ･く♡



もう、おしまいだよー





砂や水、泥んこをさわりながら、物質の感覚や性質を知り、物を使ってみたりしながら発見や工夫を繰り返して体験的に**“学習”**していくのは幼児教育の基本で、砂場はいろんなアイテムが揃っている**学習の絶好の場所**というわけです。おまけに、そこには友だちという他人がいるわけで、ごっこ遊びに発展したり、いろんな思惑や交渉、共感などを伴いながら人間関係も学んでいける場所なのですねー。
ロバートフルガムさんが言われた「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」という言葉は、まさに言葉通りなのです。

おまけ「砂場の一コマ」

砂場でのちょっとした遊びの中で、子どもへのヒントを与える、保育者のさりげない言葉掛けの様子をとらえましたので、動画でご紹介します。（1分25秒）



動画が再生されないときはURLをブラウザーにコピーして下さい→https://youtu.be/UQgkfwtPsNs

《園庭はただの気晴らしの場所じゃない》

園庭というのは、保育者のねらいや目標を設定した保育計画の外側にあって、子どもたちが自由に遊びながら、周りの子どもとイレギュラーに関わったり、異年齢で関わったりしながら、それぞれ経験を重ねたり自分の思いを育む場所だなあ、と感じます。

それだけに、**園庭は重要な子どもたちの成長・発達の場**だととらえ、固定遊具や道具を配置して遊んでいる子どもたちの育ちを促す“大きな仕掛け”を保育者は考えて環境を整えることが必要不可欠だと思います。





原町幼稚園　園長　鶴谷主一（62歳）　ＨＰ：http://www.haramachi-ki.ed.jp/

＊-＊

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
第31号　幼稚園の音楽教育
（その2・こどものうた）2017.12
第32号　幼稚園の音楽教育
（その3・コード奏法）2018.03
第33号　〔休載〕（2018.06）
第34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
第35号　働き方改革って難しい（201812）
第36号　満3歳児保育について（2019.03）
第37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
第38号　プールができなくなる！？（2019.09）
第39号　跳び箱（2019.12）
第40号　幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉
（2020.03）
第41号　コロナ休園（2020.06）
第42号　コロナ休園から再開へ（2020.09）
第43号　ティーチャーチェンジ（2020.12）
第44号　除菌あれこれやってみた（2021.03）
第45号　マスクと表情（2021.06）
第46号　感染予防と情報発信（2021.09）
第47号　親子ソーラン節（2021.12）
第48号　親子コンサート（2022.03）
第49号　うんちでたー！（2022.06）
第50号　子どもが育つ園庭・その1（2022.09）
第51号　子どもが育つ園庭・その2（2022.12）

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

福祉系対人援助職養成の現場から 51

西川 友理

○○さえなければ実習は楽しい！

保育者養成校ではたくさんの科目がありますが、なんといっても「実習」は最も大きな科目になるかと思います。

いつもの学校を離れ、一定期間、時には泊まり込みで、実習現場に入る。体と頭と心を丸ごと使って、様々な学びをしてくる学生です。

「とても勉強になりました。」

「子どもめっちゃ可愛かったー！」

「面白かった！」

でも、その後皆大体同じセリフを言います。

「ただ…日誌がめっちゃ大変でした…」

「日誌さえなければ、楽しいんですけど…」

実習日誌は日々の記録や学んだことを書き起こし、翌出勤日に提出するものです。に数時間かかり睡眠時間が削られるとか、書き方がよくわからない、というのは、保育実習あるあると言えます。フォーマット

の基本は概ね決まっていますが、細部は自治体や園によって（というか、担当する先生によって）微妙に違っているので。実習前の授業などで指導しきれないところがあります。

この連載の第 32 回目にも記録の大切さという話を書きましたが、今回は、では実際にどんな記録をしているかについて、お話します。

保育実習の記録について

先述した通り、実習日誌は養成校によってフォーマットが違うので、一概にこれが正しいとは言えないのですが、よくある記録の内容を紹介します。

・日時、天気

天気の記録、実は重要です。晴れた日は子どもたちも保育者もなんとなく開放的になります。雨の日はなんとなくいつもと違う雰囲気と、外に出られないという環境のために、子どもの心や行動も変わります。外に出られないことからストレスの多い環境になることもあれば、逆に雨だからこそ出来る外遊びをする場合もあります。

・今日の実習生の目標

その日一日、どんな目標を持って現場に入らせていただくのかを考え、実習前にそれを書きます。実習現場によっては「はい、今日のあなたの目標は？」と毎朝聞かれ、それを答えてからでないとフロアに入れないところもあるとのことです。

現場には毎日様々なことが起こり、「わーすごい！」「へー！」「ほー！」と言って感心している間に、あっさり一日が過ぎてしまうことがあります。ちなみに私はこれを“テーマパーク型実習”と読んでいます。次々とアトラクションや楽しませるものがあって、その体験を消費するだけになってしまうような、お客さんとしてすごす実習です。

その日一日、何を学びたいと思っているのか目標を持つと、実習の場に対して、目的をもってかかわる、主体的な目が生まれてきます。

・環境構成／実習の内容

保育の場はどのような環境であったのか、部屋の全体図を書いたり、環境構成の配慮する点の説明を書いたりします。ゲームや何かの製作をする場合にはその手順も書きます。環境構成を詳細に書いたら、その横に実習の内容として、何時に何をしたのか、時系列に沿って、大体の行動記録を記します。朝の会や、排泄、食事など、日々の生活の流れを書きます。

・子どもの活動／保育者の援助

それぞれの保育場面で、子どもがどう動いていたのか／これに対して保育者がどう援助したのか、を書きます。例えば食事の時間にスプーンを使ってうまく食べられない子どもに「あーん」と口の中に食べ物を入れる場面については、子どもの活動欄に「食事をする」/保育者の援助欄に「子どもが楽しい気持ちで落ち着いて食事ができるように、子どものペースに合わせて言葉をかけながら食事介助をする」、と書きます。

この欄のポイントは２つあります。１つ目は、子どもを行動の主体にして書くということです。保育者は、子どもの行動をサ

ポートするためにおり、あくまでも行動の主体は子どもであるという考え方です。もう１つは、保育者の行動の意図を書くという事です。保育者の専門職としての行動にはすべて意味があると考えます。何のためにそれをしているのか、どんな思いを持ってどうしたいと思うから、どんな手段でもって、何を行うのかといったことを詳細に書きます。

この欄に、昨今の保育の基本的な姿勢・態度が如実に現れていると感じます。

・まとめ・ふりかえり

一日の実習を振り返って学んだことを書きます。この欄で大切なことは、単なる感想文にならない事です。「学習をしている」のだから、基本的に観察、考察、次への課題という構成で書き、「面白かった」「かわいかった」といった感想文にならないようにします。自分の感情の動きを書く場合でも「なぜこんな感情になってしまうのだろう」「こういう行動をしたのはこの時思わずこう感じたからではないか」と一旦その感情についても考えてみようと指導しています。

この記録をすべて書くと…

大体平均して、３時間くらいかかってしまいます。文章を書くことに慣れている学生でも２時間くらい、文書作成が苦手な学生だと、時には5時間くらいかかるという場合もあります。毎日それだけの時間を、記録に割くとなると、とても大変な作業です。その上、保育の現場は今でもパソコン入力ではなく、手書きで資料を作るように指示されることが多いのです。以上のことから、実習は、健康な心身で子どもと関わるということがとても大切なはずなのに、記録のために睡眠時間を削られ、体調不良になる学生もいます。この状況は本末転倒です。そう考える園や養成校では様々に工夫を凝らしてその他の記録の方法をとっているところもあります。

様々な記録方法～ドキュメンテーション、エピソード記録など

例えばドキュメンテーションと呼ばれるものがあります。一般的に、ドキュメンテーションという言葉は、ある事柄に関するデータや情報、記録などを、他の人が理解しやすい形式の文書として体系立ててまとめることや、そのようにしてまとめられた文書群のことを指します。しかし、保育の分野で最近記録の技術として使われているドキュメンテーションは「子どもが遊び・活動する様子、人・自然・モノとの関わりや学び・育ちの内容などを、写真とコメントで記録」していくものです[1)]。イタリアのレッジョ・エミリア教育から始まったものですが、これを実習生に課しているところが少しずつ増えてきました。

実習生は園のカメラを貸し出され、様々に写真をとり、その写真にその時誰が何をどうしていたのかを詳細に書き、これに対する解釈を書きとります。一日の記録全体を書くのではなく、「あ、これは！」と感じた一場面を写真にとり、これについて深く掘り下げます。

写真や映像を基にしているため、その場にいない保育者や実習指導教員などからも

状況が把握できやすい上に、解釈の誤解への指摘など、指導もしやすい方法です。

それから、発達心理学者の鯨岡峻が開発した記録方法で、エピソード記述というものがあります。これは「出来事に対する保育士の心境や心情を言語化して記録します。保育日誌のような時系列に出来事を羅列した記録ではなく、保育士の印象に残った一つの出来事、ある一場面についての記録」[2)]です。

鯨岡は、気持ちを向け合う人と人のあいだに生まれる独特の空間や雰囲気を「接面」と称し、少なくとも一方が他方に志向を向けて関係性を作り出そうとしていることから生じるとしました。そして接面から人は実に多様な何かを感じ取り、これが人の生にとって極めて重要な意味をもっているという考えを示しています[3)]。エピソード記述は、簡単に言うと、この「接面」を（すべては難しいですが、出来る限り）書き起こす手法であると言えます。

ある一場面だけを取り上げますが、その一場面について、①その場面に至った背景／②その場面そのもののエピソード／③エピソードに対する考察、の３つを書くことで、深く掘り下げます。大きな特徴はそのシーンにおいて保育者がどのような感情であったか、内面で生じた思い・感じ方を書き起こすところにあります。「なんてかわいいんだろうと思わず手を伸ばした」とか「ついカチンと腹が立って、背を向けてしまった」といった、その時の思いが豊かに記述され、その部分こそが大切になってきます。

客観的記述の取り方をしっかり身に着けた学生に、エピソード記述を初めて紹介すると、多くの学生は「ほぅ…」とうっとりします。

「そうそう、こうなるこうなる！」
「わかる一！」
「ここが保育の肝やし、醍醐味やんな。」
「そうそう。ここの、なんていうか、こういう、つながりやんな。」

それまで学んできた“記録は客観的な事実が大事、主観をなるべく排して書く”という方法とは真逆の記述方式に、強い感銘を受ける学生達です。

「この記述方法で、保育を振り返ることについて、どう思う？」と聞いたことがあります。すると、
「絶対に保育力が上がる！！」
「何か“省察”がしっかり出来るかんじ！」
「子どもと関わる時って、気持ちがどう動くかが、すごく影響するもの！」

さらには、
「でも…まずはこの記述を読む相手が、安心して共有できる相手かどうか、ということが大事だと思う。」
「あと、客観的記述の大切さがわかる状態になったから、これ書けるんやと思う。１年の初めからこれはしない方がいいかも…」

という回答もありました。

ドキュメンテーションやエピソード記述に見られる特徴として、「主観を重視する」という点があります。

客観的な事実を客観的に記述することは、記録の基本ではあります。専門職として、まずはそれができる様になることはとても大切です。しかしその一方で、子どもとの直接的な関わりは、目で見え、耳に聞こえる事実の背景に、その時の双方の心の動き、鯨岡のいうところの「接面」があるもので

す。そこに何があるのか、意味や背景を解きほぐすことで、どのような保育が展開されたか、解釈することが出来ます。

記録の傾向

今までの記録方法はどちらかというと子どもを“主体”にして、保育者がどのような“ねらい”に基づき、どのような“意図を持って”関わっていくか、ということが重視されていました。つまり、「“子どもと関わる前に”関わる際の自分の方向性と意図を明確に持つ」ということが中心となっている記述の仕方だと思います。無計画に保育をするわけではないのですから、意図やねらいはとても大切になものではあります。

しかし、実際に子どもと接してみると、当然ながら予定していたことではない、様々なことが生じます。意図やねらいとは全然関係ない出来事が起こった際、自分のおなかの中から生じる気持ちや、揺れ動く心から、自らの行動や言葉を紡ぎだし、行動するしかありません。

対人援助職において、自分の第一次的な生の感情はどちらかというと支援の邪魔になるモノと考えられてきました。主観的なものの見方を排し、専門職としての知識を基に、訓練された技術を使って冷静に関わることが肝要だとされてきました。しかし、実際は鯨岡先生の主張のように、子どもと自分の人間性や感情の“接面”で、保育は生成されていきます。そこで「“子どもと関わっているまさにその瞬間に”自分の方向性や意図はどのようなものであったのか」を探ることが、省察的実践としての保育を解きほぐす手段になる、と考えられるのです。

ある園の実習担当者の言葉

ここに上げたような新しい記録方法をとる園はまだまだ少数です。多くの園は、最初に書いたような、日々の時系列の流れを書き、そこでどのような意図のもとに保育が行われていたのか、という記述をしています。

ある園の実習担当者は、「毎日ルーチンで行っているプログラムの記述を繰り返すことにどこまで意味があるのか」と思い、日々の時系列の記録は実習３日目まで、そこから先は毎日任意の一場面を取り上げてエピソード記述を課すことにしたと話してくださいました。

「実習ではデイリープログラムを知ることは大事、それは間違いありません。生活の基本を知るということですから。」

「だけど、別にうちの園に就職するというわけではない学生です。うちの園のやり方、うちの園のデイリープログラムを何度も書いて、覚えさせてどうするの、と思うわけです」

「だったら、もっと立ち戻って、保育の中心になるところを理解できる実習をしてもらおうと思ったんです」

「中心になるところっていうのはつまり“自分は子どもや周囲の人とどのような関わり方をしているか”ということです。」

どの記録が正しいとかどの記録方法が間違っているというわけではありません。客

観的事実を記述する記録、意図を記述する記録も、専門職になるためには、絶対に欠かせないスキルです。

ただ、記録の方法一つにも、「保育とは何をどうすることなのか」「保育で大切な意識は何なのか」、その時代の考えが反映されるのだということを強く感じています。まだまだ主流ではありませんが、保育の現場で、保育者の“主観”がどう扱われていくか、その移り変わりの真っ最中にいるように感じています。

今回紹介した記録とは少し違う視点の記録として、環境図や園内マップなどと呼ばれるものがあります。これは園内の様子を図で示し、そこでだれがどこでどんな行動をしているか、絵に描く記録です。これらが徐々に増えてきている背景には、「環境」への着目があると思うのですが、これはまた別の機会に取り上げたいと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1）ホイクテラス「ドキュメンテーションって？」
https://hoiku.benesse.ne.jp/dmt/

2）ほいくらし「保育のエピソード記録とは？上手に書くポイントと書き方・例文」
https://hoiku.mynavi.jp/contents/hoikurashi/childminder/knowledge/9277/

3）鯨岡峻「接面とエピソード記述」
https://gpsw.doshisha.ac.jp/pdf/xDelete-s_150926a.pdf

ああ、相談業務

～香織（仮名）さんの話～

11

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

最近特に多くなったように思うが、「子どもをかわいいと思えない」、「産まなきゃよかった」、「施設に預けたい」、「泣くと口をふさぎたくなる」と訴える母親たちに出会うことが増えた。今回はそんなケースから。

家族

香織さんは 20 歳で、夫 20 歳、長女２歳の三人家族である。香織さんは専業主婦、夫は土木関係のお仕事で、市内の２K のアパートで暮らしていた。彼女の両親は、同じ市内におり、ともに 50 代で双方働いている。香織さんには、６つ下の異父弟がいる。実父は彼女が 2 歳の頃に離婚しており、別れてから会ったこともないので顔も覚えていないという。夫の両親は、車で 1 時間くらいのところに住んでいて健在。二人とも 50 代で働いている。夫には三つ上の兄がいる。兄は結婚し、子どももいるが、疎遠で、義理の父母とも、香織さん夫婦とも行き来はない。

相談の始まり

香織さんとの最初の出会いは、1 歳半児検診の時である。1 歳半児検診は、1 歳半を過ぎ、大体 1 歳 7 か月くらいの時に行われている。まずは保健師さんが簡単な検査と問診票から、発達相談につなげるかどうかを選別する。発達相談に繋げたくても母親の拒否にあって繋げない場合もあるが、発達相談に繋がった場合は、言葉の発達や知的発達、運動発達、やり取りからの自閉症スペクトラム傾向の有無などを確認していく。母親は、

発達相談に繋がったことに、やや不満を持っている様子で、しきりに「時間がないから早くして」と訴えていた。こういうことは間々あるので、特に驚きもせず、「お忙しいのにすみません」と謝る必要などないのだが謝りながら話を始めて行く。この場では、子どもの発達だけではなく、当然母親の子への声掛けや関わり方も確認する。1歳半という年齢の子は、言葉もあまり通じない上に、運動能力は上がるし、自我が出てくる時期でもあり、母親が扱いに困り始めるため、怒鳴ったり怒ったりする母親も多い。大人しくさせるために、スマホを出して動画を見せる母親も増えた。

香織さんも、子どもに注意が多く、言葉での指示ばかりで、少し乱暴な感じもあった。香織さん自身は、夏場のこともあり、肌の露出度は高く、男性だったら目のやり場に困るかなと思うような服装だった。一方、子どもの衣服は女の子なのだが、上下紺とグレーで地味だが清潔だし、物の準備などもきちんとしていて、若いお母さんにしては、しっかりしているように見えた。

一通り家族のことなどを聴いて、普段の子どもの様子、かかわり方などを母親担当が聞き、子ども担当が発達検査を遊びながらしていく。その様子を母親と見ながら、子どものカのあるところなどを伝えて、母親の不安を払しょくしつつ、それでも気になるところをどのように伝えるかを考えていく。子ども担当と母親担当が打ち合わせる時間も場もないので、その場で目配せしながら子どもの発達の様子を子ども担当が伝え、母親担当は、それを受けて家での関り方の良い面やもう少しこうすると良い点などを伝えていくのである。そして、問題なしとするか、2歳時点での確認か、療育（今でいう発達支援センター）につなぐかを判断して母親に伝える。

相談経過

このように発達相談に繋がったのは、保健師が、まずはアンケートの結果があまり良くなかったことと、健診場面での母親の関わり方に乱暴さを感じたからであった。発達面では特に大きな遅れもないが、やや人間関係が希薄で、一人遊び中心かなと思う程度であったが、香織さんと家族の話やら、家での様子やらを聴いているうちに、「この子、ほんと、みったくないよね？（北海道の方言で「かわいくない」ということ）」「大抵の母親は子どものことめんこい（これも北海道、東北地方の方言で「かわいい」の意）と思うんでしょ？産んでから一度もめんこいと思ったことが無い。」「できれば誰かに育ててほしいけど、仕方ないから世話はしている。」などの言葉が出てきたのである。

1歳半くらいは確かに世話が大変で、かわいいと思っていられるような余裕がないということはよくあるが、「産んでから一度もかわいいと思ったことが無い」という人は少ないのではと思う。生まれてすぐの赤ちゃんは、かわいいというより、小さくて弱弱しい感じがあるが、3，4か月になってくると表情も出てきて可愛さが倍増する。5，6か月になるともっとかわいくなるのだが、動き出すと大変になってくる。それでも5歳くらいのちょっと生意気な時期や、小学校高学年などもっと大きくなってしまうと、「2歳くらいまでは可愛かった、あの頃に戻したい」という母親も多い。

生まれてから1歳半過ぎまで一度もかわいいと思ったことはないというのでは、このまま、「ハイ大丈夫です。」で終わらせるわけにはいかない。そこで何とか香織さんとの関係を深めて、更に母親が抱えている何かを確認していく必要性を感じた。そこで、相談員としては、あの手この手で何とか繋ぐわけである。

「お子さんの発達に、大きな遅れはないのだけど、ちょっと人関係が弱く感じるので、遊びの場に来てもらってもう一度確認したいと思うのだけどどうでしょう？」と香織さんにぶつけてみた。案の定「え、それって強制？絶対受けなくちゃいけないの？」と返ってきた。これは想定内である。「強制ということではないけど、これから大変になる時期だし、人との関係性は早いうちに関りを

育てると後が楽になると思います。お母さんも、初めての子育てで、お話の中ではお父さんも、おじいちゃんおばあちゃんも余り手伝ってくれていないようだし、あまりかわいいと思えないということもあったら、遊ぶのも難しいでしょう。ですから、来てもらって遊びの場で練習出来たら、お子さんも楽しいだろうし、お母さんも少し楽になるかなと思うんですよ。」と続けてみた。

一般的に、発達に遅れがあると療育につなげるが、療育にある発達相談室（筆者が所属していたところ）では、療育の方につなげるほどでもなく、保育園等にもまだ入る予定のない。おおむね１歳過ぎから３歳前までの子どもたちを、多くても４，５人の小グループにして、遊びの中で発達を促す形を作り始めていたので、そのグループに誘ったのである。このグループでは、子どもたちは保育士と指導員が関わって、公園に遊びに行ったり、保健センター内で遊んだりし、母親は母親だけのグループにして筆者が関わるという形にしていた。このグループに来ているお母さんたちは色々で、母親自身の問題を抱えている人もいたので、香織さんにも良いかなと思ったのである。

香織さんくらいの若いお母さんもいたし、やはり子どもがかわいいと思えないというお母さんもいたので、そんな話をして誘ってみた。しばらく、あれこれ説得していたら、香織さんは、「じゃあ、一回だけ行ってみる。でも何も話さないよ。」というので、「そうそう、見学という感じでも大丈夫」と伝え、何とか参加するということになった。その会はMCG（注）とは違って、虐待予防ではないし、発達的には大きな問題はないが、何となく気になる子のためのグループとしていて、名前も何も付けていなかったので、いついつどこどこに来てくださいという案内でこの日は終わった。

２週間後くらいのある日がグループの日であった。１０時から２時間弱の会である。その日は、子どもが４人、お母さんも４人であった。その中に、香織さんとお子さんもいた。他の３人は、お互いもう顔見知りだったので、「今日は見学に来てくれた方です。かおりさんでいいかな？」「はい」ということで、皆さんに紹介し、他の３人も名前だけの自己紹介をしてくれた。

子どもたちは、お母さんから離れて遊びに行く。はじめのうちは中々離れないので、広い部屋の中で一緒に活動し、慣れてくると、部屋の外に出ていく。子どもたちが遊んでいる様子を見ながら、お母さんたちと話していく。香織さんのお子さんは、母親にしがみつく雰囲気はなく、他の子どもたちや遊んでくれる先生の方によって行って、おもちゃで遊び始めた。初めての場なのに、こういう反応であることは、やや心配なケースであると再認識した。

さて、母親グループであるが、だれから話すとか何かルールがあるわけではなく、自由に話したいことを話して帰るという場である。A さんがここ１か月の話をはじめた。子育てが大変で、疲れたとか、父親に対する不満などに加えて、最近の子どもの様子をあれこれと。続いて B さんが、月１回のこのグループが、心のよりどころになっていると言ってくれた。そして C さんは、もともとあまり話さない方なので、うんうんとうなずきながら、「うちも同じです」と一言話した。お母さんたちの話から、筆者がいくつか拾い上げて、その場の会話を作っていく。子どもの問題行動の話、食べない、寝ない、目が離せないという話が続く、こういう時どうしたらいいんだろうという話も出る。だんだん慣れてくるとお母さんたちの本音が出てきて、「いやあ、もう、どこかに預けたいと思うわ」と誰かが言ったときに、それまで、何となく、話を聴いているだけだった香織さんが、急に「私もだ！」と口を開いた。他の３人も、やっと口を開いてくれた香織さんの方をみると、すかさず「そうだよねえ」と相槌を入れてくれた。やっと香織さんも入り込んでくれたし、他の３人も受け入れてくれたのである。そこからは、香織さんも気を許し始め、父親の話や、舅姑の話などもし始めた。基本的には愚痴である。

子育て中のお母さんたちは、あまり褒められたり認められたりすることが無い。このグループは

頑張っているお母さんたちを労う場でもある。香織さんも含め、今日参加してくれたことに感謝し、またお母さんたちの頑張りをほめ、認めてお帰りいただく。これは必ず最後にすることであった。

また、子どもたちを見ていた保育士さんと指導員さんから、今日の子どもたちの様子、前回からの変化などを細かく伝えていく。そうすることで、またお母さんたちが１か月過ごせるのである。

このようなグループに来ているお母さんたちは、グループだけではなく、個別に相談を受けることもある。香織さんが帰るときに、今日の感想を聞いてみた。すると、「同年代の母親と話すことが無かったので、面白かった」とのこと。「だったらまた来る？」と誘ってみると、「うん」とのこと。次回については最後に皆さんに伝えているので、香織さんも了解済みだ。そのうえで、「もし個別に相談したかったら、それもできるからね」と伝えてこの日は終えた。香織さんは子どもを産んだのが早いので、友達はまだ専門学校生だったり、働いていたりで、中々話をする機会がないとグループの中で話していたので、話せてよかったのかなと単純に思っていた。

その後、月１回のグループに３回ほど参加し、他のお母さんたちの話を聴いて頷いたり、同調したり、時には、「ええ～、そんなことできないなあ」と他のお母さんみたいにはできない自分を吐露したりしていた。

ここまで来てようやく、香織さんから、相談したいことがあると個別相談の申し込みがあった。日程を調整し、発達相談室で相談を受けた。

香織さんが来た時には、子どもは保育士に見てもらって、香織さんと筆者だけで話を聴いた。「なした？なんかあった？」と気やすい感じで聞くと、「実は、自分自身のことを聴いてもらいたくて・・・」と香織さん。「うんうん、何でもいいよ。話してみて」と促す。

香織さんが話したことは、自分がどのような育ちをしたかである。実母から、香織さんはあまりかわいがられなかったという。２歳ころに実父と実母が離婚したことは聞いていたが、実母からよく「あんたは、父さんに似ていてかわいくない」と何度も言われたという。小さい時は良くわからなかったが、幼稚園くらいの時には、「かわいくない」という言葉が嫌だったという。「そりゃそうだよねえ。かわいくないなんて言われたら辛いよね」と返しながら続きを聴く。「新しいお父さんが来たのが、自分が小学校に上がるときだった。ちょうどそのころ下の弟が生まれた。弟ができたのはうれしかったけど、新しいお父さんは好きじゃなかった。なんでこの人、この家にいるんだろう。お父さんと呼べと度々叱られたけど、中々お父さんと呼べなかった。呼べるようになったのは３年生くらいかな。」と話は続いた。

そうか、やはり香織さん自身、実母から可愛がられて育っていなかったのだ。弟の面倒を見させられ、しっかり見ないと叱られたとか、かわいい洋服を着せられたけど、それが嫌だったとか、養父からは、家の手伝いをしなかったとか、弟に意地悪だとかで叩かれたという。弟は可愛くても家にいるのが段々辛くなり、早く家を出たいと思うようになった。そして高校を出てすぐ、家を出て働き、すぐ今の夫と知り合い、子どもが出来て籍を入れたという。お産の時も実母に来てほしくなかったが、勝手に押しかけて来たこと、しかも、初孫の長女を初めて見た時に、「みったくない」と言ったのである。自分自身のことと、子どものこと両方を否定され、香織さんは深く傷つき、我が子をかわいいと思えなかったのである。そんな話を聴き、辛かった日々に思いを馳せ、労い、香織さんは十分可愛いし、お子さんもとっても可愛いということを改めて認識してもらった。母親としてもしっかり出来ていることも、グループの中でも認められていることも、そして、何より、お子さんをかわいがっているということをあえて伝えた。余り十分にかかわれていなかった香織さんだからこそ、可愛がっている、上手にかかわっているとプラスに伝えることが必要だから伝えた。すると香織さんはその場で大泣きをし、泣き終えた後、とてもすっきりした顔になった。それ以来、グループの中での香織さんの表情は、更に

明るく、かわいらしくなり、お子さんも、とても可愛くなって、香織さんのところににこにこしながら飛びついていくようになっていった。香織さんもお子さんとままごとなどの遊びを上手にするようになっていった。その後半年ほどグループに参加したところで、香織さんが働くためお子さんを保育園に預けることになり、終了となった。

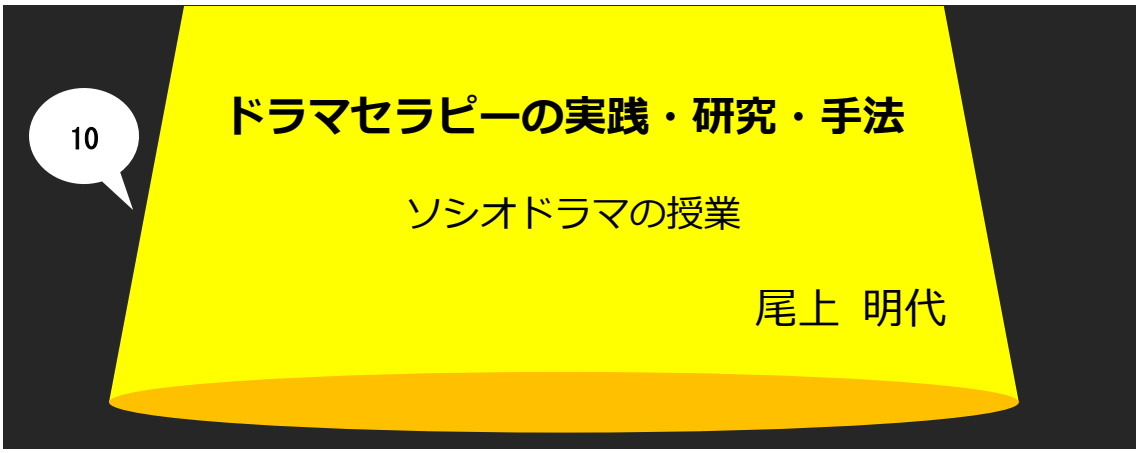
まとめ

本ケースはわずか１年足らず、しかも数回の関りで、お子さんの人関係も、母親である香織さんとお子さんとの関係も一気に改善していった珍しいケースでもある。大抵はもっと時間がかかる。このケースでは、香織さんが、自分自身のことを誰にも言えぬまま抱えてきて、それを一気に吐き出すことが出来、更にグループのカも相まって、短期で終了となったのだと思う。

自分の子どもをかわいいと思えないという母親の多くが、自分自身を好きになれず、自分自身が実母や実父から大事にされなかった経験のある人
だと経験から思う。自分の家族関係が大きく影響していて、兄弟間差別があったりすると、下の子に対してかわいいと思えないとか上の子がかわいいと思えないなど、自分自身がどういう立場だったかで同型伝達するように思える。子育ては大変な大仕事である。そこに、自分自身の生い立ちが影響するのであれば、子育て中の母親の支援が次の世代の子育てにとっていかに大事かがわかるだろう。今目の前の母親を救うことが次の世代の子育てを救うのである。

このケースは MCG などが始まる前の話なので、グループを始めたのも、グループダイナミクスだとか集団療法だとか、そんな大仰なことではなく、ただ単に、母親たちが愚痴を言える場所を提供し、子どもたちも小さなグループの中で人関係を育てるという試みでしかなかったが、やってよかったと今も思う。

注：MCG とは、Mother and Child Group のことで、子育てに悩みを抱える母親たちが、同じように悩んでいる仲間と出会い、その思いを吐き出し、人の話も聴いて、決して自分だけではない、自分がおかしいのではないという気持ちになって、孤立感を防ぎ、また日々の子育てに穏やかに臨めるようにしていくためのグループのこと。ピアカウンセリング機能を持つ。虐待予防の対策として、東京都南多摩保健所がスタートし、子どもの虐待防止センター、保健所、保健センターなどで開設されている。



ソシオドラマについては、このマガジンで何度か記述したが、今号では、直近でこの手法を実施した昨夏の授業から紹介する。ソシオドラマを開発したのは、1920 年代にサイコドラマを創った J. L. モレノである。サイコドラマは、主役となるクライエント個人の内面をドラマ化、可視化することで、行動として表現・変化させる精神治療法である。モレノは、クライエントの自発性と創造性を引き出し、精神と身体性、個人と他者との関係、個人の内面と外面との関係などを相互に作用させる道を切り拓いた。その一方でモレノは、人間の根本はその社会性であることを重要視し、社会と人間が相互作用する関係、通常は直接は見えない、精神に影響を与える社会的関係として存在しているものを具現化し、変容できるソシオドラマを提言・実行した。

詳しくはこちらをご参照下さい。　→　https://tinyurl.com/3yssktn2

立命館大学にて

人間科学研究科では、ソシオドラマに特化した授業をしている。昨夏も 4 日間、続けて院生の皆さんが選んださまざまなテーマを探索・考察した。テーマを決めるとき皆で討論するので、院生たちがどのような社会問題に興味関心があるのかがわかり、私にとってはそれが興味深い。

まず、多くの人から探索したいと挙げられたテーマは、男性というジェンダ

ーで生きることが辛いため「夫・父親」を降りたタレント夫妻の「離婚」であった。家族間の関係や葛藤だけではなく、世間（特にマスコミ）との関係を考察した。

次に実施したテーマは、宗教の理不尽な教えに取り込まれている人とその家族についてであった。これは、もちろん前総理大臣が命を落としたことから端を発した社会問題が背景となって提案されたものであったが、信者の家族、特に二世問題が現在（2022 年 11 月）ほどクローズアップされるずっと前のタイミングだったので先取りした形になったと思う。

教祖役になった院生の独創的なアイディアで「キュウリ」を神と崇める団体という設定にしたことで、現存する団体の状況には全く触れることなしに、その秀逸な比喩を使って、信者の人生や生活にまつわる具体的状況を非常に強力な感情を伴って受講生全員が、実にリアルに体験・理解することができた。もちろん本当にその状況にいる方と同じとは言えないが、教室にいるまま短時間で当事者への深い思いを馳せることができたのは、ひとえにソシオドラマという手法、そして受講生たちの創造力による。ここでは二世は中学生という設定で、学校の友人も登場させたが、友人のある言動がどれほどの助けになるかも証明されたと感じる。

さらに現実のニュース等では比較的注目されていないと思われる対象として、宗教トップの人の背景なども描き（もちろん想像で、一つの可能性として）、文字通りさまざまな立場の人への理解を試みた。ドラマの最後の介入方法として未来投影という技法がある。そこでは時間を先に進めて、未来の結果を見てみる。私は、あえて二つの未来を創った。一つは、ドラマの中心的人物であった女性（中学生の母親で、夫とはすでに離婚していて母子家庭の設定だった）が、団体と無関係の婚約者と出会い、彼の助けで団体を辞めて一般的な家庭となって生きている状況を描いた未来。もう一つは、その婚約者も教祖の薦めで団体に入信し、結婚後、妻は二代目の教祖になっているという未来だ。細かい描写は、本当の当事者でない限りはわからないことが多いが、それでも可能性としてありうる状況のエッセンスをドラマ化すると、登場人物はまるで現実のように立ち現れて、参加者の深い学びになった。

他には、小学生たちのイジメ、過干渉の親と子どもの精神的な独立についてもソシオドラマ化した。また人生の様々な不安に折り合いをつけたり不要なものを手放すメタフォリックなドラマは誰もがエンパワーされる結果となった。

ここ 3 年は毎年コロナが夏に増え、今年度（2022 年度）は、それまでで一番感染が広がった第 7 波の時期となってしまったので、安全に気を付けながらの対面・集中はエネルギー使った。受講生の方々のご協力で無事に終えられて感謝している。

東京大学にて

数年前から、東京大学教育学部・教育学研究科でドラマセラピーを使った表現実践の授業を担当させていただいている。この授業は、東京大学芸術創造連携研究機構（ACUT）という、「あらゆる分野の研究者が連携し、芸術家との協働・連携をしながら知性と芸術を結び付け、未来を切り開いていく」ために創設された科目の一つとなってる。

過去 2 年間はオンラインで実施したが、いろいろ工夫することで、対面とほとんど変わらない授業効果をあげられたと自己評価している。しかしやはり学生の皆さんは、「対面」したかったそうだ。特に、バーチャルでもドラマを通してお互いの関係性がつくられてくると、「リアルで皆に会いたい！」と思うようになり、コロナが落ち着いた後にオフ会を実施したようだ。

今年は夏の集中という形(2週続けた週末)にして2年ぶりに対面が実現した。しかしここでもコロナ対策に心を砕かなければならなかった。体調を崩したという学生からの連絡が入るたびにかなり緊張した。結局、原因不明の方 3 人ほどに休んでいただき、レポートなどで補う方法をとり、無事に全過程を終了してほっとした。結局、有難いことにこちらでも誰もコロナに罹患したという報告はなかった。

例年、さまざまな学部の学生と院生が履修するので、とても良い交流ができる。履修の理由は、ドラマやセラピーに興味があるからという人たちだけでなく、全く知らない世界だからとか、専門外だから学んでみたい、という人たちも何人かいて、とても良いことだと思う。印象に残っていることの一つは、法学部の学生たちのことばだ。「日々テスト、テストで教員の講義をひたすら聞いて自習、の連続で、気づいたら一週間誰とも話してない、なんてことがよくある」そうで、「人」と豊かに関わることができる授業として本当に喜んでいた。今年は短期間・集中の実施だったゆえに、受講生の表現力・創造力が日ごとにどんどん変化していくのを目の当たりにし、例年以上にやりがいがあった。

ここではソシオドラマだけの授業ではないが、必ず 3 回分は実施しており、受講生らの社会問題に対する意識や、日々の悩み等が良くわかる局面となる。これまでで特に心に残っているものとして、学外ではなかなか「東大生」と言えない悩みや、就活での「苦労」、バイト先での「逆差別」などがあった。東大に入りたいと思って入れなかった人にとっては、「贅沢な」悩みだと思うかもしれないが、誰にとっても、その当事者でないとわからない悩みや苦労は当然ある。そして今年は集中で対面ということもあり、学生の皆さんたちの「苦しさ」が一番、理解できた気がする。トップと見なされる場所にいることによる現在

のプレッシャーだけでなく、一生ついてくる「トップ」を踏まえて、いわば未来のプレッシャーを先取りしているような人たちもいた。中でもインパクトを受けたのは、多くの人のリクエストで、去年のある事件を取り上げたときのことだった。

その事件とは・・・東大受験は難しい、と担任教師から言われた高校二年生が入試当日、東大に刃物をもって出向き、一人の受験生と守衛の方を刺した事件である。

「東大を受けたくても受けられない高校生」の「東大を受験する人を羨む感情」は、この学生たちが一生、現実では味わえない感情である。それを、東大受験をし、受かり、入学を果たした「東大生」が、リアリスティックに感じ、演じ、考えたことに大きな意義があったと思う。ドラマ後、学生の一人は、自分は結果的に入学できたが、「でも僕は、彼だったかもしれない」と述べた。このように、自分が理解できない立場の人を、ドラマによって理解することができるだけでなく、わからない（と思っていた）人は、実は自分の中にいた、自分の一部でもあった、という発見ができるのもドラマである。

未来投影では、その高校生が東大以外の医学部にいくことができて、とても良い町医者になり、人々を助けている場面を作った。これは、ありもしない架空のドラマで無理やりハッピーエンドを作ったのではない。社会には、この人と同じような、しかしまだ事件を起こしていない誰かがいるはずではないかと思い、そのような人の、未来の一つを描きたかったのだ。そしてその筋書きの可能性はもちろんあり、そのようなドラマを受講生たちに提示し、一緒に演じることは大事なことだと考えたからである。そして肝要なポイントは、これらを身体的に、心的に、知的に、つまりホリスティックに体験してもらったことである。

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第 48 話

水野　ス ウ

終わらない戦争

2月にロシア軍がウクライナに侵攻して以来、私の中のざわざわもやもや感は一向に晴れることがありません。戦争はいったんはじまってしまったら、終わらせるのがどれだけ難しいか、日々日々、学んでいます。ロシアでは兵士がさらに必要とされて、一体なんのために戦うのかわからない人たちが次つぎウクライナの戦場にかり出されていく。

9.11が世界をかえていったように、ウクライナでの戦闘も世界をかえていっています。食料のこと、エネルギーのこと、爆撃による地球環境も、そして何より、人々の心を。

ウクライナの戦闘をテレビやネットで見て、不安なきもちがふくらんでいくのは私も同じです。日本がウクライナのようになったらどうしよう、そうならないために敵の基地を攻撃する能力持たないと、防衛費も増やさないと、って多くの人が思いたくなるきもちもわかる。けれども、核共有という言葉が飛び出してきた時にぞっとして、さすがにそれはない、ない、と私はかえって冷静になれました。

これまで、唯一の戦争による被爆国と言ってきた日本、戦争をしないと約束した9条を持っている日本。その二つで、私の住んでいる国は小さくてもユニークで目立つ国です。なのでこっそり核を持つこともこっそり9条をかえることもできません。無理やりそうすれば、それは世界にどんな強いインパクトをあたえることになることかを想像します。それは、私は敵です、闘う気があります、と自ら意思表示して周りの国々を挑発すること、相手から攻め込まれる口実をわざわざつくることのように思えます。防衛費をいきなり倍にふやそうというのも同じこと。軍拡レースにいったんはまったら、その追いかけっこはもうきりのない悪循環で、他国との緊張感を強め続けます。

自分が不安な時ってどうしても、大きなものに守ってもらいたくなる。そういうきもちが人間には働くものだということを踏まえた上で、私はどうするのか？ということを2月以来、ずっと考え続けています。私のとる行動は、世界が平和に近づく方向だ

ろうか？　それとも平和から遠ざかる方向だろうか？私にとっての羅針盤である憲法を手のひらにおいて、一生懸命考えます。

13条を生きるということ

そうやって考えている途中で、はっとした。攻められたらどうしよう、戦争になったらどうしよう、その考えの建て方自体、そもそも間違ってやしないかな。そうではなしに、戦争にさせない、戦争を始めさせない、そのために私はいったいどうあるべきか、を考えたいと思いました。

そうやって考える方向を見直した時、私が立ち返るところはやっぱり13条だ、とあらためて確信したのです。13条は、私が私らしく生きることを許して、認めているだけでなく、まわりの声に流されず、個人としての自分の考えを持って生きよ、と私に求めてもいる。2009年に13条をそのように解釈したのは娘でしたが、以来、13条は私にとってもっとも大切な憲法の条文となり、私が私であるための根拠となる条文になったのです。

21年前、9.11同時多発テロのおきたわずか3日後のアメリカ議会で、このような決議が出されました。「テロを起こした国や組織にたいしてアメリカ大統領が武力行使することを認める決議」。その時、その決議にただ1人反対したバーバラ・リーさんという下院議員がいたことを、マガジン前号で触れました。それは私の目からすると、リーさんという1人のアメリカ人女性が個人としての自分を手放さなかった、それこそおへその下に力をこめてものすごくふんばって、彼女が自身の13条をしたことだ、と思えました。

13条は私の存在そのものを認める、という意味でそれまではbe動詞と思っていたけど、ウクライナの戦争中にリーさんの存在を思い出したおかげで、13条する、という動詞にもなりうること、その時に気づきました。当時、星条旗一色のアメリカで、リーさんへのバッシングはどれほど激しかったろう。それでもたった1人で国のすることにNOと言った彼女の存在は、今も歴史に残っていて、その行動は私の希望です。

マガジン前号に書いた文章を、私自身が忘れないでいるために、ここにその一部をもう一度。

――まわりがどんどんかわって全体が一つになっていく時、それに呑み込まれない自分でいられるかどうか、リーさんのとった行動は13条を生きることの厳しさを突きつけているけど、自分をとりまく世界がかわっていった時に、「今はもうこんな世界になっちゃったんだから、平和のためには戦争も仕方ないよね」という私になっていいのかどうか、そう問われているようにも思ったのです。

あらためて強く感じることは、個人を大切にしたら戦争はできない、ということです。その意味で、13条と9条は対をなすもの。9条も13条もかなりもうぼろぼろだけども、だからといって安易に手放してはいけないものと思っています。私自身が殺す側の人間にならないためにも。

軍隊を持たない国

世界で軍隊を持たない国は26カ国あるそうです。防衛力のないそれらの国々は、他国から攻め込まれているか、といえばそんなことはありません。その一つ、コスタリカは1948年に憲法で軍隊を持たないことを決めた国です。軍隊に変わる仕事は警察がしています。軍事にお金をかけない分、この国では福祉と医療と教育と自然環境を守ることに予算をまわしてきました。

コスタリカは武力に頼らず、そのかわりに対話で世界と信頼関係を築く努力を重ねてきた。永世中立を宣言して、どちらの側にもつかない代わりに、積極的に仲介役を引き受けることを約束しています。非武装であることを強みに信頼してもらって、世界を味方につけることに成功したのです。

コスタリカは、国連のだしている国際条約をつぎつぎ国内で批准してきました。2017年に核兵器禁止条約が国連ではじめて採択されたけど、実はこの条約の原案ともいえる文書を20年も前に国連に提出し、その後も他の国々に呼びかけ続けたのがコス

タリカだったのです。

コスタリカは他国を武力で威嚇しません。そのかわりに平和を世界に輸出しています。そうすることでコスタリカに攻め入る口実を他国に与えないでやってきました。

「コスタリカの奇跡」というドキュメンタリー映画の中で、憲法弁護士のサモラさんは明確にこう言っています。

「アメリカのロケット一機がコスタリカの年間の警備予算を超える、それでも自衛軍を持ちますか？自衛できないのに？単純に無意味なんですよ」と。サモラさんの言葉はお花畑どころか、むしろとても現実的だと思います。

ちなみに彼は法学部の学生だった時にコスタリカの大統領を訴えた人でもあります。アメリカが2003年にはじめたイラク戦争、その有志連合への参加を決めた当時の大統領に対して、それはコスタリカ憲法に違反する、として裁判をおこしたのです。サモラさんは見事に勝訴。最高裁はイラクへの侵略支援がコスタリカの憲法と平和的伝統に反するという判決を下し、国は有志連合からの離脱を命じられました。（「たいわけんぽうBOOK＋」の「大胆な平和」より　水野スウ著　2018年刊）

建前の上では軍隊を持たない国になっている日本に住む一人として、コスタリカから私が学ぶことはまだまだいっぱいあると思っています。

参院選2日まえの衝撃

参院選投票日の2日前、安部元首相が銃撃されて命を落としたことは大きな衝撃でした。訃報を知った時、facebookに私はこんな投稿をしています。

7/8 20:23
武力で国を守ろうといっていた人が、武力によって倒れた。
ものすっごく残念、そして悔しい。真実は封印される。
彼のしてきたことが罪に問われることなく、むしろ称えられて、憲法をかえる流れにおおいに利用されるとしたら、それはもっと悔しい。一人の人の死を悼むことと、それは別のこと。感情の津波に呑みこまれてはいけないよ、と、私は私に言い聞かせる。

それから1日たって、「ある特定の」とされていた宗教団体が旧統一教会だったとわかった時、80年代のマスコミにたびたび登場した、大学での原理研究会、霊感商法、合同結婚式、といったいくつもの言葉がすぐ私の頭に思い浮かんで、なんとも言いがたい嫌な重たい気持ちになりました。

それ以後、この団体と政治家たちとのつながりが次々に報じられて、なんとまあ、こんなにも長い間、こんなにも深く、太く、濃く、この反社会的な団体と政治家たちが関係を結んできていたのか、と驚愕し、あげくに、辞任した大臣の秘書をしていたもと信者の人の、「統一教会は政治家を信者にして、国家予算全額を献金させようとしていた」という証言まで出てきた時には、もう頭がクラクラしました。

はからずもこの事件によって、政治家とのつながりが明るみに出て多くの人たちが知ることになり、宗教2世の人たちの苦しみが世にでることになりました。そして今国会では、この団体への解散命令について話しあいが行われています。

それにしても、この教団と政治家のつながりで一番やっかいだなあと感じるのは、選挙を支援してもらった、支援した、の関係にとどまらず、統一教会の考えと自民党の多くの政治家たちの考え方、思想、とりわけ、家庭や家族に対する価値観がものすごく良く似ている点です。

改憲オピニオン

どう似ているかがよくわかるものを見つけました。統一協会の政治部門である勝共連合のだしている改憲案です。国際勝共連合のオピニオンサイトが2017年4月に発表した「憲法に関するオピニオン」という17分の動画*を要約すると――

*https://www.ifvoc-rashinban.net/opinion/constitution/

1. 緊急事態条項の新設
大災害の時などに政府の権力を強くする。早く憲法に明記して法律で動かしていく。
（今は「災害」に加えて「戦争」も含まれているそう）
2. 家族保護の文言を加える
家族は国の基礎なのだから守ってあげないといけない。家族保護を憲法に加える目的は、「これがなければ、自然かつ基礎的単位になり得ない同性婚が広がっていく」ためで、そうしないと「社会国家の基礎としての家庭が混乱して破壊されようとしている、国家が内部から崩れていく」のだそう。その実例として、パートナーシップ制度（法的な結婚ではないものの、それに準じるものとして同性カップルを自治体が独自に認める制度）を導入した都市として、渋谷区、世田谷区、宝塚市、那覇市など、自治体の名前をあげています。
3. 自衛隊の明記
「なぜ自衛隊が存在していいのか、根拠となる言葉が今の憲法には一つもない」として「自衛軍」か「国防軍」の明記を主張しています。

この3項目とも、自民党の草案と本当に重なって見えてしまいました。ここで妙なシンクロに気づいて、思わず、あ！と声。勝共連合からこのオピニオンが出されたのが17年4月。安倍さんが「美しい日本の憲法をつくる会」のフォーラムにビデオレターを送り、「憲法に自衛隊明記」と突然に発言したのは、そのひと月後の2017年5月3日の憲法記念日。これって単なる偶然にすぎなかったのでしょうか。

「基礎的な単位」としての家族

家族に関する文言が、勝共連合では「社会国家の基礎としての家庭」となっていますが、これは2012年版自民党改正草案24条でいうところの「家族は、社会の自然かつ基礎的な単位」という表現と重なります。

自民草案では「自然かつ基礎的な単位として、尊重される」の後に「家族は、互いに助け合わなければならない」という言葉が続きます。家族が一つの単位としてくくられ、その中で助け合わなければならないと憲法に書き込まれれば、声をあげられない人、虐待を受け続ける人、家族でいることに恐怖で怯える人は、増えこそすれ減ることはないでしょう。

どんな大変な家族であろうと助け合ってなんとかしろ、とまるで憲法から強いられるよう。自己責任論の再生産です。24条改憲案のうしろのほうに、もとからある「個人の尊厳」という言葉はかろうじて残るものの、最初に上の文言が出てくる以上、「家族」が「個人」より優先されてしまいます。

安倍さんは、去年2021年9月、統一教会の関連団体のイベントに送ったビデオメッセージで、この団体が「家庭の価値を重んじるところを高く評価します」と述べていました。

家庭教育支援条例を地方議会で取り上げるよう、地道に活動してきたのもこの団体ですが、ここでいうところの「家庭の価値」とはなんだろう。家族を構成するめいめいが、自分で考えること、個人の幸福を追求すること、自由に恋愛すること、好きな人と結婚すること、そのどれもが許されない。統一教会が目指すところの家族、家庭は、個人を否定する装置としての家族ではないのか、と私には思えてなりません。現にこの団体は独自の家庭／家族観で、長きに渡って多くの家族や家庭をこわしてきました。統一教会によって自分の家庭がめちゃくちゃにされたこと、それが山上容疑者の犯行動機でした。

どうしていまだに日本では選択制夫婦別姓が認められないのだろう。学校での性教育や男女共同参画推進やジェンダーフリーや同性婚を求める運動が、なぜはげしいバッシングにあってきたのか。LGBTQの人たちへの差別を許さない法律はどうして国会を通らなかったのか。これまで度々不思議に思ってきたけれど、おそらくそれはこの団体による地方議会への熱心な働きかけと無縁ではなかったろうと思います。

この団体にはまだまだ解明されないといけないことが多々あるはず。宗教法人としての解散命令が本当に出せるのか、被害者を具体的に救済するためのきちんとした法律があらたにできるのか、国会を注視しています。

国のための個人

自民党はもともと、自主憲法をつくることを目的に結成された党です。党としての意見を大幅に盛り込んだ2012年度の改正草案を読むと、その基本に、国民のために国があるのでなくて、国家のために国民がいて、「個人」よりも「国」や「公（おおやけ）」が大事、という考え方があること、それをもとに改正案がつくられていることがよくわかります。

たとえば、「すべて国民は、個人として尊重される」とある今の13条が、自民党改憲案では「個人」の「個」が消されて「人として尊重される」になっていること。「公共の福祉に反しないかぎり」の文言が、「公益と公の秩序に反しないかぎり」になっていること。権利が縮小されて義務がふえていること。憲法を守る義務がまっさきに国民に課されている、つまり、憲法を守らねばならない人の矢印の向きが、国家権力から真逆の国民にかえられていること、などです。

フリーハンドを与えるの？

2018年以降、自民党が改憲案として具体的に掲げている項目は4つですが、その中の2項目、緊急事態条項をあらたに憲法に書き込もうという案と、憲法に自衛隊を明記する案に、私は特に危機感を持っています。

緊急事態、と聞けばすぐ、コロナ下の緊急事態宣言が思い浮かぶように、コロナを通じてこの言葉に国民はすっかり慣れっこになってしまった。けれども、コロナで緊急事態宣言を発出することと、憲法に緊急事態条項を書きいれることとは、まったく意味が違う、次元の違う話です。

緊急事態条項を憲法にいれることは、国会にはかることなしに、憲法に縛られることなしに、法律と同じちからをもつルールを内閣総理大臣がつくれること。つまり国会も憲法もとびこえて、時の政府が自分たちにつごうよく政治を動かせるようになること。いわば独裁的な政治を許すことです。権力の集中を防ぐためにある三権分立もそこにはありません。

緊急事態条項のない今ですら、国会を通さずに閣議決定だけで国の方向にかかわる大事なことを決めたり（集団的自衛権の行使を一部容認したのも、安倍さんの国葬を決めたのも、閣議決定）、野党が臨時国会を開けと要求してもなかなか開こうとしない。憲法をたびたび無視するそんな与党政治が長く続いてきたので、さらにこれ以上のフリーハンドを政権に与えることに対して、私はとても懐疑的だし、慎重でありたいです。

自衛隊を書き込むこと

2012年版の自民党草案では、9条の改憲案に「国防軍を保持する」とありますが、2017年5月3日、安倍さんが憲法に自衛隊を明記すると言ってからは、それが今の自民党の改憲案になりました。その案とは、今ある9条の1,2項のあとに3項として自衛隊をかきこむだけ。これまである条文には何のかわりもない、そのままです、と安倍さんは何度も説明していたけど、そのままのわけがありません。

2015年の安保法制で、すでに9条の中身は変質してしまっています。自国が攻められていないのに他国の戦争に参加できる集団的自衛権の行使ができる、そういう9条に安倍さんがかえてしまった（もちろん、それが憲法違反であると私は確信してるけど）後で、憲法に明記される自衛隊は、その前からあった自衛隊ではないのです。

ましてや、法には「後法は前法を廃す」という大原則があります。後から書き込まれた法が、前からある法を上書きするという意味ですが、あらたにかきこまれる自衛隊という組織が、憲法改正によってとくべつな憲法パワーを帯びることは間違いありません。自衛隊が単なる行政の一組織ではなく、憲法のお墨付きを得た公共の存在になるって、防衛予算をさらにふやしやすくなることでもあり、やがては徴兵制への道を開くのにつながることかもしれないと予想します（ロシアで実際に行われてしまっているように）。

災害時の自衛隊員さんたちの活躍には本当に感謝しているけれど、その隊員さんたちを戦場に送り出して、殺される側、殺す側の人にさせてしまうことに、私は決して加担したくないと思っています。

今が今、沖縄で

今が今、沖縄の島々では、台湾有事を想定して自衛隊が以前とは大きく違うはたらきをしています。この11月、これまでの最大規模といわれる日米共同の軍事演習が沖縄でくりひろげられています。訓練とは違い、演習というのはそれ自体が相手を威嚇する行為だそう。つまりは中国に対する目に見える抑止力としての演習。そうやってあおればあおるほど、台湾有事が現実に近づく気がしてなりません。

与那国、石垣、宮古といった沖縄のちいさな島々にミサイル配備がすすみ、軍事基地化、要塞化していっています。弾薬が運ばれ、戦闘車が島のなかを我が物顔に走り回る、日常生活の中にいきなり戦争が飛び込んできたかのよう。そんな軍事大演習の様子を伝える現地からの報告を見れば、まるでそこはすでにもう戦場のよう。

二度と沖縄を戦場にしないと決意して活動している「ノーモア沖縄戦　命どう宝の会」の人たちは、自衛隊の仕事は国を守ることであって、住民の命を守ることではないことを十分に知っています。離島の人たちを見捨てないで、という沖縄からの悲痛な声がどうして本土に届かないのか、と危機感をつのらせます。そればかりか、島の軍事化に反対する人たちを敵視するかのような、同じ島に住む人たちからの視線。その分断がほんとうに痛々しい。

クリスマスイブの朝刊

昨年2021年12月24日の朝刊で、沖縄の新聞2紙が一面でこう報じました。「南西諸島　米軍臨時拠点に　台湾有事想定　日米が計画」（琉球新報）「南西諸島に攻撃拠点　米軍、台湾有事で展開」（沖縄タイムズ）

見出しの意味するところは、台湾有事の際の日米共同作戦計画。沖縄2紙に配信されたこのスクープ記事を書いたのは、共同通信の防衛省担当記者、石井暁（ぎょう）さん。それが具体的にどういうことなのか、「ノーモア沖縄戦　命どう宝の会」の人たちが今年9月、石井さんを沖縄に招いてシンポジウムを聞きました。石井さんによる解説はこのようなものでした。

ここでいう南西諸島とは、九州南端の鹿児島県奄美大島、沖永良部から、沖縄本島、宮古島、石垣島、与那国島などに至る島々のこと。中国と台湾の間に戦闘が起きて、中国が台湾に軍事侵攻を始めるとなった時、米軍は軍事介入に備えて、沖縄の約40の島々を拠点として、海兵隊を展開します。その状態を、日本政府は「重要影響事態」と認定して、自衛隊は米軍や武器弾薬、食料などを運ぶ後方支援、つまり兵たんを担うことになります。事態がさらに進んで米中間での戦闘が始まると、日本はそれを「存立危機事態」と認定、集団的自衛権を発動して自衛隊が武力行使できるようになります。

自動装置

じゅうようえいきょうじたい、そんりつききじたい。どちらも何年も前から聞き覚えのある言葉でした。この作戦計画を可能にしたのは、2015年、安保法制で集団的自衛権を使えるようにしたから。その安保関連法案の中にこの文言、「重要影響事態」と「存立危機事態」がはいっていたのです。石井さんは、「安保法制は台湾有事にアメリカが参戦した時、自衛隊が自動的に戦争に参加するための仕掛け、装置だった。自分も野党も、だまされていたのだ」と発言されました。

2015年当時、集団的自衛権がつかえるようになればアメリカの戦争に日本が巻き込まれるのではないか、と国会質問で追求された時、安倍さんが「集団的自衛権を認めたからといってアメリカの戦争に巻き込まれることは絶対にない」と何度も言っていたこと、よく記憶しています。その安倍さんは去年、「台湾有事は日本の有事だ、日米同盟の有事だ」とはっきり言いました。

実はこの日米共同作戦計画、特定秘密保護法による「特定秘密」なのだそう。この秘密を石井記者はどうして手にいれることができたのでしょう、それは、こういう状態をおかしいと思う人が政府や自衛隊幹部の中にまだいて、石井さんに教えてくれたからです。

島を戦場に

それにしても、沖縄を戦場にすることを前提に日米の作戦計画が進んでいると沖縄の新聞の一面に載っても、その計画に沿って過去最大規模の日米軍事共同演習がこの11月に実行されても、全国紙には大きく報道されない。だから本土では知る人も少ない。そのことがくやしいし、腹立たしいし、もどかしいです。

ひとたび中国との有事になれば、全国の在日米軍基地と自衛隊基地が一斉に攻撃されることになるだろうに、在日米軍司令部のある横田基地のある東京だって攻撃の対象になるだろうに、どうしてこの話が沖縄だけのことに限定されてしまうのだろう。それ以外の場所も十分、戦場になる可能性があると、なぜ想像できないのだろう。

中国の船が領海侵犯したとか、中国が偵察機や哨戒機を飛ばしたから自衛隊がスクランブル発進、などと報じられているけれど、今回先に威嚇したのはどちらなのか。日米の大演習に中国が反応したのではないのか。それも報道で広く知らされなければほとんどの人は知らないままです。

合同軍事演習の反対行動の中で、「命どう宝の会」の共同代表、山城博治さんがこう叫んでいる映像を、映画監督の三上智恵さんが公開しています。

「島を戦場にする。これはそういう演習なんだ。77年前の戦争、復帰して50年、遂にこういう事態がやってくるんですか？　警察がそれを率先して手伝うんですか？　沖縄の空域、沖縄の海域が戦場になろうとしているんです。沖縄県民が抵抗するのは当然でしょう？　県民には、抵抗する権利があります！」

沖縄の今の状況をもっと多くの人に知ってほしいです。「ノーモア沖縄戦　命どう宝の会」の会員になると*メルマガが送られてきます。*http://www17.plala.or.jp/kyodo/202203nomore_okinawasen.pdf

石井暁さんのお話は、この会がだした冊子『また「沖縄が戦場になる」って本当ですか？』に詳しく。会にもうしこめば入手できます。一冊500円。

ぼろぼろの平和を繕え

映画「ホタルの墓」で知られるジブリの高畑勲さんは、9歳の時、故郷岡山で焼夷弾の下を逃げまどう経験をしています。けれど戦後70年目までそれを語ることは一度もありませんでした。高畑さんは、戦争の悲惨さを語るよりも、学ぶべきは悲惨になる前のこと、どうして戦争を始めてしまったのか、どうしたら始めないですむかだ、という思いから、自身の体験した大空襲についても積極的に語る気にはなれなかったそうです。

その高畑さんが2017年、戦後50年の夏、新聞のインタビュー記事の中で語った「ぼろぼろの平和を繕え」という言葉を今もよく思い出します。（2017年8月12日 北陸中日新聞）

高畑さんは、安倍政権が特定秘密保護法で都合の悪いことを国民に隠せるようにしたこと、安保関連法で日本を戦争ができる国にしたこと、共謀罪で国民を見張れるようにしたこと、この一連の動きを戦前と同じ流れではないかと言っています。「憲法ができて70年たったけれど、民主主義は成熟したのだろうか、空気を読んで流れに乗りやすいところはかわっていないのではないか」とも。

続けて高畑さんは、古代ローマの時代から信じられてきたというある警句を紹介しています。

「君が平和を欲するならば、準備せよ、戦争を」。一瞬、え？となったけど、よく考えてみればまさにその通り。ローマの昔から、戦争を始めたがる人たちはいつも、平和のためと言って戦争を準備し続けてきたし、今もその準備をしている人たちが大勢います。中国と台湾の有事を想定して、日本が日米共同軍事大演習を沖縄の島々で実行したこともまさにその一環です。

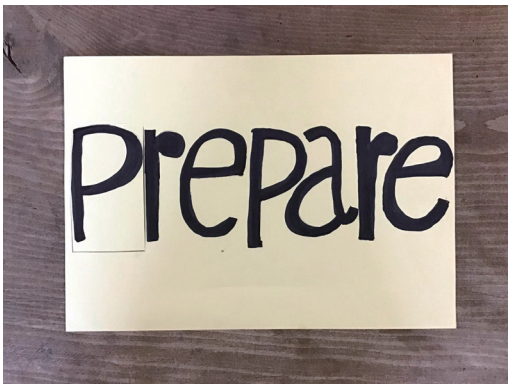
けれどもある時あるところで、この言葉を一人の詩人が見事にひっくり返しました。時は1950年代、冷戦の最中。南フランスでの大きな平和集会に集まった若者たちに向けて、「枯葉」の作詞者でも知られるジャック・プレヴェールが、この言葉をスピーチの中でこう言い換えたのです。「君が戦争を欲し

ないならば、繕え、平和を」。フランス語のprepare（準備せよ）の「p」を一文字削って、repare（繕え）とした、詩人の感性。

紀元前から人類が信じ込んできた警句を、20世紀半ばにフランスの詩人がたった一文字でひっくり返し、それを心に刻んだ高畑さんが一言加えて「ぼろぼろの平和を繕え」として、自分の単語帳に書きこんだ。それを見つけた私が今度は私の単語帳に書きいれる。壮大な、言葉と思想のバトンタッチのようです。

悲惨さを語るより、学ぶべきは悲惨になる前のこと、どうしたら戦争をはじめないですむかだ、という言葉は、いまや高畑さんの遺言のようでもあります。ぼろぼろの平和を繕う方法の一つは、過去を知って歴史から学ぶことだと思うし、高畑さんがいうように「空気を読んで流れに乗りやすいところはかわっていない」のであれば、空気を読まない、流れに乗らない自分になること、13条する自分を心がけることも、きっと繕い方の一つです。

次の戦争を防ぐ手立てを歴史から私が学べているかどうか自信はないけど、少なくとも沖縄の今に目をつぶることはしたくありません。だって悲惨になる前のことが実際にそこでもう起きているのだもの。それを見て見ぬふりすることは、過去の悲惨を繰り返させること、だからなんとかして他の人にも知らせたい、それも繕うことの一つかと。





国民主権や9条や人々の不断の努力によって政府が縛られることでかろうじて保ってきた、もうぼろぼろの平和を、私は一人一人と対話しながら繕い続ける人でありたいと思っています。

（2022年11月25日）



写真はわが家の古いこたつカバー。ほころびを見つけるたびに布を足して繕いつづけてきたら、まるでクレイジーキルトの作品みたいになりました。こうなるともう捨てられないです。

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（３８）

中村周平

第１回のラグビー事故勉強会開催に向けてまず取り組んだのは、実際にお話をしていただく事故被災者やそのご家族、ご遺族の方々（以下、事故当事者）を探していくことでした。残念ながら、スポーツによる死亡事故や重篤事故は、リスクの高いコンタクトスポーツを中心に年間で一定の件数が発生しており、そのことは研究活動の中で把握していました。

また、同志社での研究活動やスポーツ事故に関わるシンポジウムなどに足を運んだことを通して、様々な事故当事者の方々と繋がることができ、連絡先を交換していただくことができました。そういった方々の多くが、ご家族を亡くされたり、学校やチームと対立されたり、非常につらい過去や出来事を経験されたにも関わらず、再発防止を求めて積極的に情報発信をされていました。

これは本当にありがたいことなのですが、こちらから勉強会の連絡をさせて頂いた際は、快く引き受けて下さいました。現在まで勉強会が継続して開催できている背景には、事故当事者の方々の厚意的な御協力があってこそのことだと感じています。今後、開催を重ねていく上で「この人にはお願いしたい！」というリストが私の頭の中で組み上がっていきました。

次に、どのような形でお話をしていただくかということを考えていきました。事故当事者の方からお話を聞けたという時点で、開催の目的は概ね果たせていると感じていました。

ただ、そのお話を受けて、参加者それぞれの立場から自らの経験に基づいた意見や質問をしてもらうことで、お互いの考えや思いを共有することができ、より意味のある勉強会になるのではないか。会の名称に「勉強会」を付けた当初の思いに則って、事故当事者からの報告だけでなく、その後に質疑応答を交えた議論を行う形にすることで方向性を定めました。

勉強会を重ねていく上で、必ず問題の１つとして挙がってくるのが開催場所の問題でした。他府県からの利便性も考慮し、また一定の広さを確保する為には、利用料という金銭的な負担が伴います。また、重篤事故によって車いすを利用する事故当事者の方や主催者の一人である私自身の状態から、開催場所がバリアフリーであることは最優先事項でもありました。

このいくつかの条件を満たした上で、継続的な開催を考えれば、この利用料という負担は決して軽視できるものではありませんでした。その点については、研究活動の一環ということもあり、所属している同志社大学で部屋をお借りすることができました。

同志社大学は今年で創設 147 年を誇る大学であり、建物の中には歴史的価値のある建造物として登録されているものもあります。それ故に、バリアフリーが行き届いていない建物も存在していました。

その一方で、早くから障害のある学生への支援に取り組むその大学の理念は、新しい建物のバリアフリー化や当事者の意見を交えたアクセシビリティ環境といった障害のある方々への配慮が行き届いた、非常に素晴らしいものだと思います。

勉強会の開催場所として借りた教室も、エレベーターや車いす用トイレなどが完備されており、安心して事故当事者の方をお招きできる環境となっていました。

路上生活者の個人史

第６回

竹中尚文

今回、聞き取りに応じてくれたのは福岡治郎氏(仮名)である。福岡氏は自分の話を公にするのはどうかなぁ、といいながら聞き取りに応じてくれた。インタビューの最後にこの話はすべて本当じゃないと、いうことで話し終えた。従って、今回の記載も本人を特定できないようにしていることを了解して読んでいただけるとありがたい。

福岡治郎氏(仮名)1948 年生まれ。

三重県で生まれて 5 歳の時に、名古屋市に移って名古屋で育ちました。

父親は自動車部品を作る小さな工場を経営していました。経営といっても、自分が最も働く鉄工所の親父でした。私は長男ですぐ下に弟がいて、その下に二人の妹がいました。

小学校と中学校は地元の公立に通いました。高校は、私立の大学付属のところに行きました。いくつか受験をしたのですが、態度が悪かったので面接で落ちたといわれていました。自分でも、そうだろうな、仕方がないと思っていました。大学は文化系の教科が苦手だったので、工学部機械工学科に入りました。父親が自動車の特殊な部品を作っていたのが、その選択の一因だったようにも思います。

大学は中退です。21 歳の時でした。4 年生が始まったばかりの頃でした。学費も払い込んであったので、そのまま行けば卒業という年でした。酒場で仲良くなった女性と大阪に駆け落ちをしました。駆け落ちだなんて自分だけが思っていたのかもしれません。50 万円ほど持ってきたのですが、お金はすぐに無くなってし

まいました。お金が無くなると女性はいなくなりました。

今更、名古屋に帰るのもかっこ悪いと思っていたら、ヤクザの奥さんがやっていた飲み屋で使ってもらえることになりました。あんまりお金にならなかったけど、困らなかったですね。困らない点では、タダで仲良くなってくれる女性が何人もいました。その頃から花街でも働くようになりました。結婚？ まったく考えませんでした。結婚をしようといってくれた女性もいましたよ。しかし、私が一人の女性で落ち着くような人間じゃないですから、無理なことだと分かっていました。

30 代になると日雇いの仕事に行くようになりました。関西空港の工事も始まり、いいお金になりました。その頃から酒を飲んで仕事に行くのは禁じられるようになりました。関西空港の工事が済んで、神戸の方で大きな工事が続きました。神戸から帰る作業員を運ぶバスの中で飲む酒はうまかった。あれは実にうまい酒でした。

30 代から 40 代にかけて日雇いの仕事もいいお金になったし、ヤクザの兄貴がやっているテキヤの仕事も手伝ったりして、お金には困りませんでした。その頃ですよ、ヤクをするようになったのは。売人は私によくくれるのです。通常、売人はパケといってビニールの小袋に入れて売るのです。一袋が 5 グラムなのですが、袋を含めての重さなので、袋の重さが売人の儲けなのです。私にくれるのは 7～8 グラムほど入っていました。そんなことだから、私はマークされていたのだと思います。ある日、「福岡さん！」と見知らぬ人から声をかけられました。気がつけば周りを刑事に取り囲まれて、脇に覆面パトカーが停まっていました。その場で逮捕されました。

今は、よく止められたものだと思いますよ。もっともヤクを買うお金なんて全くないからかもしれません。仮に、目の前に「あげるよ」と置かれたら自信はありませんがね。でも、もうやらないと思います。60 歳の頃に、私によくしてくれた姐さ

んが亡くなったのです。手を合わせに行ってから、結婚しようといってくれた女性に電話をしたのです。そしたら亡くなっていました。落ち込みました。しばらく立ち直れませんでした。

今は、福祉の人のお世話になって１Ｋのアパートで暮らしています。ありがたいと思っています。ちょっと贅沢をすると電気代が払えなくなって、電気が止まったりすることもありますが、こんな私がいい暮らしをしています。ありがたいことです。

【記録者談】今回の話は、話者を特定しにくくしたものです。彼は路上生活者対象の食糧支援に並んでいた人です。私たちは、路上生活者だけを対象にしているつもりはなく、困っているならば支援を受けてほしいというつもりです。しかし、「路上生活者じゃないのに並んでいる」とか「住む所があるのに並んでいる」という声があります。こうした声の多くは支援対象者からのものです。ブルーシートで雨露をしのぐ人たちから見れば、住む所がある人は自分たちと同じではないといって支援の列から排除することがあります。更生者への支援によって、福岡氏のように住む所のある人たちもいます。罪を犯したこともなく、人に知られることなく路上生活者となった人にとっては、同じ程度の生活困窮者ではありません。しかし、私たちがしている支援はささやかな支援で、誰の生活も変えることもできません。どの程度の生活困窮者もこの食事支援の列に並んでもいいように思います。

今回の福岡氏のインタビューは、彼自身で自分の話す内容が自分の生活に影響を与えないか心配したのかもしれません。一方で、私は彼の人生や生活が表現されると、支援を受ける列に並びにくくなることも心配もしました。このような点からできるだけ福岡氏が特定しにくいように記述しました。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第45回

『窓辺にて』

1. 教え子との楽しい時間

10月、突然、かつての教え子と会うことになった。彼は今年の春卒業した子なのだが、俺が彼を教えていたのは1年生の頃だ。したがって、相当間があいているのだが、その彼からメッセージが来て、仕事で京都に行くから先生と会いたいというのだ。彼は体育系の爽やかなスポーツマンで、今は就職して社会人だ。教え子から、慕ってもらえるのは嬉しいけれど、「ひょっとして・・・」という一抹の不安が頭をよぎった。

もうだいぶ前だが、かつての教え子からメッセージが来て、借金の相談をされたことがあるのだ。その子は、学生の頃は大して俺を慕っていたわけではなく、卒業後もSNSで繋がっていただけで、やりとりはなかった。その彼から突然メッセージ。何かと思ったら、就職した後、複数の留学生の借金の保証人になってしまい、ところがその留学生たちからトンヅラされてしまって、どうしようもなく、藁をも縋る思いで、俺に連絡してきたみたいだった。全部で400万円くらいのお金を支払うことになるらしい。

もちろん、相手を捕まえて、お金を取り戻すことはできるのだが、裁判までの費用は彼がもつことになるし、当座のお金も立て替えなくてはならない。真っ青、真っ暗。その気持ちはわかるのだが、俺に言われたってどうすることもできない。励ますよりほかなかった。若いから今借金を背負ってもまだまだ立ち直れるだろう。気の毒だけど、そういうしかないのである。彼とはそれ以来連絡は取り合っていない。その後うまく行ったのだろうか？

その子だけではない。ある日突然、ある学生からメッセージが来て、何かと思っていたら、仕事でアンケートを取らざるを得なくなってしまったみたいで、それで誰かいないかとなって、俺に頼ってきたのだった。「なーんだ、そんなことか。俺のことが好きで連絡してきたのかと思ったのに

（笑)」と思った。

今度の教え子もひょっとしてなんかのセールスをしようと俺を呼んだのではないかと一抹の不安がよぎった。しかも対面でとなったら、深刻に借金への援助を求めて来られるかもしれない。不安な気持ちがよぎって、その子に「そういうんじゃないよね？」とメッセージしたところ、「それは全然ないです（笑)」という返事だった。

彼が俺のことを本気で慕ってくれていることは、会った瞬間にわかった。赤い車で俺を迎えにきたのだが、その時の笑顔を見ただけで、そういう気はないのだなあということは読める笑顔だった。

しかし、ちょっと見ないうちに大人になったものだと思った。彼とはまずは銭湯にいった。船岡温泉に行く予定だったのだが、たまたま行ってみると臨時休業中で開いていなくて、近くの他の銭湯に行った。そこは大して有名なところではないのだが、昭和レトロで、なかなかに風情がある。行ってよかったと思ったものだ。ここでまた一つ京都を開拓である。

彼の車で京都を走っていると、見かけたこともないような京都の風景と遭遇する。40 年も京都で暮らし、さまざまな京都散策をしてきた俺が見ても、初めてみるような風景。そして、そこに風情があるのだった。

体育系のやつがいいのは、風呂なんかでも気楽に付き合ってくれるところだ。体育系でない子の場合は先生とお風呂にいることには抵抗がある。いくら親しい先生でも、あまり積極的に入ろうとはしてくれない。しかし、体育会の子の場合は、他の男性と風呂に入るくらいは慣れているせいか、何の抵抗も感じていない。抵抗があるなんて、「そんなこと考えたこともない」というのだ。

風呂に入った後、今度はキッチンパパに行った。ここは有名な洋食屋で、お米屋さんの奥に洋食店があるのだ。これまた昭和レトロで人気のあるお店である。食べログの１位になっていて、前から行きたいと思っていたところだった。俺はハンバーグとカキフライ、彼はビーフシチューを食べて、お勘定は俺が払ってあげた。

あー、楽しい１日だった。

2. ニューエラを買う！

俺は本当に体育系の学生たちとはうまく行っている。卒業後も連絡をしてくれるし、会ってくれる。実はこの夏休みにもかつて野球部だった教え子３人と焼肉に行った。彼らは 2 年ほど前に卒業していて、今や３人とも大阪でサラリーマンである。大阪の難波の焼肉屋で会うことになった。

その焼肉屋は他にもたくさん店舗があるお店で、他の大学のバンド系の男の子から紹介してもらった店だ。安いので、奢りやすい。そう思って、難波に出かけた。俺はいつだって時間よりも早くに着くので、その日も余裕を持って１時間くらい早くに着く予定だった。

ところが、難波に着いた後、スマホのマップで必死になって店を探すのだが見つからないのだ。焦った。よくよくスマホで調べると、間違った店舗の方に俺は歩いていた。難波なんて滅多にいかない。大阪には以前は毎日のように言っていたが、大概は梅田界隈である。難波で降りたことは数えるほどにしかないのだ。

仕方がないので、学生に電話し、店の場所を確認して、タクシーで店に向かった。店に着いた時には３人とも揃っていた。1 人は元々は生まれ故郷で就職していたのが、大阪に転勤してきたばかりだった。1 人は付き合っている彼女と婚約中。もうすぐ結婚である。そしてもう 1 人は最近ボディビルをやっているらしくて、毎日のようにインスタに自分の体をアップしている。

３人ともいい子で、息子ぐらいの歳だ。俺に息子がいたらこんなふうになるのかなあとか思いつつ、１時間半ほど、食べて、飲んだ。もちろん俺の奢りだが、俺は彼らにつきあってもらっているわけだから、それくらいの失費は仕方がない。４人で 2 万円くらいだったからやはり安いお店だ。

野球部の子たちと話していて、気づいたことは

ニューエラの帽子をかぶっていることだった。前号にも書いたが、実は他にも野球部の子で繋がっている子がいて、彼はこの３人が入学するのと入れ替わりで卒業しているので、４つほど年上で既婚なのだが、彼が「ニューエラを買え」と言っていたのだった。

俺は頭が大きいことがコンプレックスで、どっちみち合うサイズなんてないだろうとラインすると、「いや、大きいのもありますよ」と言われた。

以前はニューエラの店は新京極にあったらしいのだが、今はなくなってしまって、帽子屋さんの一角にニューエラのコーナーがある程度だ。何軒か店を回って、新京極にある店でついにどうにか入るニューエラの帽子を見つけた。そして、その足で、その野球部の子の友達で、同じく元野球部の子がやっているカフェに行った。

俺が帽子のシールをはがそうとすると、「先生、剥がしちゃダメですよ」と彼らから言われた。今はサイズなどの書かれたシールをつけたままにしておくのが、流行りだそうだ。時代の流れに俺はついて行っていない。やはり、おじいさんなのである。

3. 弟の下宿

実家の弟は 50 歳である。俺が小学校３年生の時に生まれたので歳が離れている。弟は東京の大学を出た後、九州の実家に戻って、それ以来母と暮らしている。その弟が、最近になって下宿をすることを考えているというのだ。

弟は親孝行で、家族思いで、年取った母を蔑ろにするような弟じゃない。でも、母は 84 歳で、健康とは言っても高齢である。なぜ今頃になって？？？と思ったものだった。もちろん、そんな遠くに下宿するわけでもないから、何かあった時はすぐにかけつけることができる。

弟を見ていると責任を感じてしまうのだ。俺のような兄を持ったがために弟は相当迷惑だったはずだ。でも、そのことで弟は俺のことを責めたことは１度もない。弟は子供の頃から、現実的で、堅実で地に足のついた子だったため、子供の頃は成績は大してよくなかったのに、着々と勉強して東京の大学に行った。

弟の頃は子供の数が多かった頃で、受験生が多かったため、大学に入るのが一番難しい時期だった。そして卒業する頃になると就職難の時期と重なり、最初は東京で就職するつもりだったのが地元に帰るしかなくなってしまった。なんとなく運が悪い子なのだった。

だから弟にだけは幸せになってもらいたい。それは切なる願いだった。

弟は婚活がずっとうまく行かなくて、50 歳で独身だが、ひょっとして誰かできたのだろうか。これまで真面目に堅実に生きてきた弟は、少しは生活を変えたいと思って、下宿生活に踏み切る決心をしたのだろう。ここ数年、あちこちの啓発セミナーにも通っていて交友関係は広がっているみたいなので、そこで刺激を受けたのかもしれない。

しかし、問題なのは母である。母はまだ元気だし、気丈な人なので、84 歳とは言っても、まだ元気である。つい最近まで車の運転もしていた。死ぬ時も周りに迷惑をかけない死に方をしたいと思っている人だ。だけど、今頃になって突然ひとりになって大丈夫なのだろうか。この頃は電話代は安いし、母には友達もたくさんいるから、心配はないと思うのだけど・・・。

行きつけの飲食店の女性に話すと、「まだ頭がしっかりなさっているんだったら大丈夫よ」とのことだった。彼女はすでにお母さんを亡くしているのだが、死ぬ間際は彼女が故郷からお母さんを引き取っていた。

「だけど、老人の場合だと朝まで元気でいても、ころっと夕方になくなったりするから、心配なんだよねー」

「それを言っていたら、あなただって、私だって、明日ポックリ死ぬ可能性はあるわけだから笑。あなたは心配性だから。そこまで考えなくてもうま

くいくわよ」と言われた。

4. 女みたいだと言われること

そういう話をした数日後、その母と久しぶりに電話で喧嘩してしまった。俺は時々、昔のトラウマが湧いてきて、母にはそのときのことをこぼしてしまう。すると母からは、「そんなふうに愚痴愚痴いうのは女のすることなんだから。およしなさい」と言われた。

俺は電話口で母を大声で怒鳴りつけた。いったい何回言えばわかるんだ！女みたいに愚痴愚痴言うなと言われることが俺が一番嫌な台詞なのである。

今振り返ったときに、俺の人生の原点は、「女みたいなやつ」と言われるところから来ていた。

小学校の時の女の先生の体罰に悩んでいた時も、中学の時の体育教師の裸教育に悩んでいた時も、俺が誰かに相談することができていたら、俺は不登校になんかならなかった。しかし、物心つく頃から、「男なんだから」「男のくせに」と言う言葉を毎日刷り込まれていた俺は、誰にも悩みを打ち明けることすらできず、結果として、高校に行ったのと同時に心が壊れたのだった。

母にはそのことは何十年にも渡って訴えてきていた。その俺に対して、母はまだこんなセリフを言うのだった。俺が怒ると、母は、「ごめんなさい。あなたがしつこいから、つい失言しちゃったのよ。私だって、あなたの悩みを何十年も付き合ってきたんだから」と訴えた。確かに悩みを聞くのは楽なことじゃない。しかし、「女のような」「女みたいだ」と言う台詞は女が男に向かって言ってはならない言葉なのである。極端なことを言えば、男に対して「男のくせに」なんていう言葉を口にする女は、セクハラなわけだから、もっと厳しい制裁をするべきだと俺は思っていた。実際、俺は冗談であってもそういうセリフをいう女性とは、ずっと縁を切ってきたのである。

このことがあったことで、俺はしばらく母と口を聞かなかった。俺は「男のくせに」と言われたことで、感情的になって、母と縁を切ることを考えた。母の遺産なんていらない、1 人で貧しく生きていっても構わない、俺の苦しかったトラウマを理解してくれない女性とだけは俺はつきあいたくないのだ。

その翌日、福祉事務所に電話をかけた。俺は非常勤の身なので貯金だって少ない。1 人ぐらいの食い扶持だったらどうにか稼げるだろうが、いつだって気に掛かっていたのはマンションの更新だった。もうすでに同じところに 10 年以上住んでいるのだが、2 年おきにマンションの契約更新があり、その度に保証人の印鑑がいる。最初の頃は母に保証人になってもらっていたが、母が 80 歳を過ぎてからは弟に保証人を頼んでいる。

俺と弟は別に仲が悪いわけじゃない。ただ、きょうだいは他人の始まりである。もし、弟が印鑑をついてくれなくなったら、俺はマンションにいれなくなる。福祉の人に、そのことを相談すると、電話の女性は、「もし、どうしても保証人のハンコがいるけどないと言う場合は、保証人なしでも貸してくれるところを探すか、あるいは最初から保証会社と連携しているところを探すしかないと思いますね」と言われた。

もちろん、母や弟が俺を捨てるなんてことはありえない。弟は、仮に母が死んで、俺とさらに疎遠になったにしても、マンションの更新の印鑑ぐらいは押してくれるだろう。そのことがわかっていても、俺はいつだって最悪のシナリオを想定してしまう。

そして、俺の女性に対する不信感はおそらく一生消えることはないのだ。

男子にだけ体罰を与える小学校時代の担任の女の先生、女子生徒から過酷ないじめを受けた中学時代、不登校でどこに行っても白眼視され続けた 10 代、女の子たちに悪口を言われ続けた大学時代、専門学校で教えた意地悪でタチの悪い女の子たち、8 年前のジェンダーのことを何もわかっていなかった女性カウンセラーのことは今でもトラウマに

なっている。俺の人生は、いつだって理不尽な傷を女性から負わされる人生だったのだ。

女だって男から理不尽な傷を負わされた女はたくさんいる。しかし、女性の場合は少なくとも同情してもらえる。不当な扱いを受けたと訴えることだってできる。しかし、男が女に傷つけられたことを訴えたところで、男のくせにみっともないと言われるだけのことで、誰が同情するだろうか。もちろん、最近は徐々に男性も訴えられる社会にはなってきているが、少なくとも俺が生きている間は、被害者の権力は女性のものなのである。

先日、行きつけのパスタのお店でそこの女性が、「私の知り合いのお母さんが娘を大学で下宿させるので、すごく心配なさっているんですよ。女の子だから、何かあったら困るから、バイトなんかはしなくていいとおっしゃっているんです」と話されていた。

今でもこういう親はいるのだろう。女の子だから、保護しなきゃいけない。しかし、実際には犯罪に巻き込まれたり、ヤクザやチンピラに絡まれて、暴力を振るわれたり、酷い目に遭わされる確率は男の方が遥かに高いということをご存知なのだろうか。

学校での体罰やいじめの問題もそうだが、男の方が過酷なことをされやすいのである。しかし、マスコミは女性被害は大きく扱うけれど、男性被害はほとんど扱おうとしない。小さな事件としてほうむられてしまう。女は弱者だから保護してあげるべき存在だけど、男は保護してあげる必要はない。男なんだから、自力で立ち直るくらいの男でなきゃ！という考えはまだまだ根強いのだ。

この状況はいつまで続くのだろう。少なくとも俺が生きている間は、続いていくだろう。

5. 牧師の先生と話をする。

最近になって、死に対する恐怖は小康状態である。考えても仕方がない。人間だったらみんな平等に死ぬ。むしろ、死んだ後、神様にこの世の理不尽を教えてもらいたいと俺は思っている。

先日、初めて教会の牧師先生に時間をつくってもらって、１時間ほど話をした。

話した内容は、これまでの俺のライフストーリーである。不登校を経て、大学から京都に来て、だけど、なかなか上手くいかず、この年になって、キリスト教徒として安らかに余生を送りたいということを話したと思う。

まだジェンダーへのこだわりなどは詳しくは話していない。

むしろ、俺は社会運動などが肌に合わないのだということを中心に話した。大学がＲ大学で、下見もせず大学に入って、そこで学生運動に反発を感じていたこと。ジェンダーに関心があるから、社会運動にも参加したけど、結局大阪の運動家の人と京都の運動家の人、２回にわたって決裂してしまったこと。もう社会運動は自分に向いていないことがわかっているから、一生参加するつもりはないということ、できたらクリスチャンとして洗礼を受けたいけど、いつにしたらいいかわからないこと、などを話した。

「いつか洗礼を受けたいという気持ちになる時が来ますよ。その時に受ければいいんですよ」とその先生からは言われた。

そうなのだろう。そういう気持ちになる時を気長に待つのがいいと思った。

俺の悪いところはムキになって、そこに居場所をつくろうとするところだ。大学の時も、最初から憧れて入った大学ではないんだから、最初から醒めた気持ちで大学生活を送っていたら、ここまでわだかまりを残すことはなかっただろう。社会運動の時も、最初はあの人たちを庇って、あらん限り尽くしたことが、憎しみを増幅させる結果になってしまったのだった。最初から合わないことはわかっていたのに、いつまでも優柔不断にそこにいつこうとするところが俺の悪いところなのだった。尽くした分だけ、憎しみは大きくなる。つくづく、愛と憎しみは表裏一体なのだ。

教会もまだ通い始めて１年ぐらいである。少し

ずつ教会の参加者の人たちとは親しくなっている。元々、そんな家族的な教会ではないので、ほどよい距離をおいて皆んなつきあっている。

これからもこのペースで続けて行って、ある日自然な形でそういう気持ちになった時に洗礼を受ければいいのだ。60 歳近くにもなってくると、流石に気力や体力は落ちてくる。べったりしたつきあいよりも程よいのがいいのだ。

6. 老いの身支度

11 月〇日、かつての教え子と、つららというかき氷の店で話をする予定でいた。俺は、男子学生たちに付き合ってもらっている時が一番楽しいのだ。

ところが朝起きてみると彼からメッセージが来ていて、「今日は体調が悪いからキャンセルできないか」というのだ。「またかよ」と俺は思った。この子と限らず、若い学生たちは当日になってドタキャンしたり、自分から誘っといて、つきあってくれなかったりということが度々起きるのである。

振り返れば、俺だって若い頃はそうだったから仕方がない。「やれやれ」と俺は店にキャンセルの通知を入れて、その後、再び一眠りした。10 時ごろになると突然ドアのピンポンが聞こえて目が覚めた。Amazon からの配達である。その前々日にキーボードを注文していて、それが届いたのだ。まさか朝に着くとは思わなかった。

その後、キーボードの開封は後回しにして、俺は 1 人でつららに向かった。1 人だったら予約しなくても大丈夫な時間帯だった。1 人で来ている人も何人かいて、男の人もいる。決して若い女の子だけのためのお店ではないようだ。柿のかき氷を食べた。美味しかったが、それにしてもおじいさんが 1 人でカウンターでかき氷というのも寂しいなあと思ったものだった。

家に帰って、キーボードを開いた。本当はピアノを買いたかったのだが、ピアノだと高い上に置き場所がない。聖歌隊の先生が 1 回 2000 円でレッスンしてくれるというので、キーボードにしたのだ。

その先生によると 88 鍵盤くらいはあったほうがいいとのことで、それより小さいのは買わなかった。とは言っても、折りたたみできるやつなので、これだったら場所も取らないし、携帯もできる。これでしばらくは遊び相手ができると思った。

いつまでもかつての教え子に頼って、遊んでもらっているわけにもいかない。俺の FB を見ている先生たちは、「学生の面倒見がいいんだね」と言ってくれるのだが、実際には俺の方が学生に遊んでもらっているのだ。

だけど、もう 1 年で 60 歳。流石に 60 になって 20 代の子が遊んではくれないだろう。いや、くれるかな？　どっちにしろ、これからは徐々に孤独になっていくのだから、一人遊びを覚えなきゃいけないのだ。

幸い、キーボードが手に入り、教えてくれる先生も見つかった。ピアノはボケ防止になるとも聞いている。もっと長く生きろという神様のお告げなのかも知れない。生きる楽しみがある間は、神様が俺に何かさせたいと思ってくれているからなのである。

老いの身支度を少しずつ始めながらも、生きる希望は常に持っていなくては！そう思うのだった。

7.『窓辺にて』(今泉力哉監督・2022)

もう 15 年くらい前のことである。

当時通っていたスポーツクラブのプールで、ウォーキングなさっているおじいさんがいた。もう 70 代くらいの人だった。

そのおじいさん、「この間、うちの奥さんが死んでねー」と楽しそうに話されるのである。普通、連れ合いに先立たれた時に凹むのは女よりも男であると言われてきた。男は身の回りの世話を女に頼っているから、奥さんが死ぬとどうすることもできなくなる、一方で女はそもそも男がいなくても困らないから、むしろ亭主が死ぬと元気になる、

それは定説に近いものだったと思う。

しかし、このおじいさん、見事にステレオタイプから外れていた。俺は流石におかしくなってしまい、そのことを当時出入りしていたある社会運動家の人のグループの食事会で話した。

すると、「國友さんは、結婚していないから考えがナイーブなんだよ。奥さん、早くに死んでくれないかと思っている男なんて、一杯いるよ（笑）」と会の参加者の人たちからは異口同音に言われた。

その時は女性も混じっていたのだが、彼女も、「奥さんが死んだら、うるさく言われなくても済むし、第二の人生という雰囲気なんでしょう」と同意した。その時は他にも３人ほど参加者がいたのだが、俺以外は皆、奥さんが死んで嬉しい男なんて、当たり前のことという雰囲気だった。

結局、俺はステレオタイプに囚われていたのか。テレビのワイドショーの図式とはまったく違った世界が現実には存在しているのだ。

『窓辺にて』は今泉力哉監督の新作である。この人、よほど、そういう図式にとらわれない恋愛が好きみたいで、『愛がなんだ』（2019 年）『mellow』（2020 年）『his』（2020 年）『街の上で』（2021 年）『愛なのに』（2022 年）『猫は逃げた』（2022 年公開）とステレオタイプから外れた恋愛を描いていく人だ。

この映画では、妻が浮気をしていることを知っていながら、そのことに何の怒りも感じない男を主人公にしている。しかも、彼は、そういう自分が変なんじゃないかと悩んで、周りに相談しているのだ。

別に悩むほどのことじゃない。ステレオタイプに囚われる時代は徐々に終わってきている。人間は、人間らしくさえあればいい。男らしさ・女らしさにこだわるやつの方が、非人間的なのである。

俺は、この頃、そのことを断言して言えるようになった。しかし、ここに辿り着くまでには数えきれないくらいの確執と葛藤。

ぼうとは思わないだろう。まして、今はお盆だ。里帰りもあるし、友達とのバカンスを楽しんでもいる。誰が俺なんかとつきあおうとするだろうか？

これから 10 年、20 年経てば、ますます歳をとり、構ってくれる若い子は減っていく。

これからの老後を考えなくてはならない。とりあえず、75 歳までは若々しい人もいるから、それを目標にしよう。75 で死ぬのではなく、75 まではせめて若く！それが俺にとってのプラン 75 である。

役場の対人援助論

（４３）

岡崎　正明

（広島市）

その面接の、前と後

お仕事は面接

役場の対人援助職の仕事の中心は、なんといっても人と会って話すこと＝面接することである。

ケースの当事者・家族・関係機関の人と、日時を調整して約束を取り付け（ときには取り付けずアポ無しで）、訪問したり来所したり、どこかで待ち合わせしたりして話をする。そしてそれを記録に残す。その後また誰かと調整して約束し、面談しては記録する―。ものすごく単純に言うと、私たちの仕事はその繰り返しだ。

報道などでもいわれている通り、児童虐待や児童福祉の仕事はここ数年相談件数が右肩上がり。私の現仕事場である児童相談所も、日々みんなバタバタし、次々と面接をしている。「午前は Ａくんのお母さんが来所」「午後からは Ｂちゃん宅に訪問の予定」など、１日に複数の予定をこなすことも当たり前だ。

面接自体は 1～2 時間程度がほとんどなので、数字だけでみれば 8 時間労働の中で 4 件程度はできる計算だが、やっている人間の感覚からすると毎日 4 件を続けていくというのは難しいと感じる。まあ、たまにならできるだろうが。現実的には１日２件くらいがいいところで、それでも業務量としては結構なボリュームになると個人的には思う。

そんなことを言うと「医者が１日何人診察してると思ってるんだ！」「接客業なんてそんなもんじゃないぞ！」などと怒られそうだが、これには訳がある。児童相談所や一部福祉系相談業務の面接では、不測の事態が起きやすい。その中には結構な確率で、

「約束した時間に相手が現れない」

「大幅に遅れる」「直前にキャンセル」

「訪問してもいない」「連絡がつかない」
なんてケースがあるのだ。

誤解の無いよう言いたいが、別にこれは当事者への非難ではなく、そもそもニーズ（動機付け）の問題があるためだ。
こちらは会いたくても相手方は別に求めていない。いや、むしろ会いたくないと思っている。そういうことがこの業界では多々存在する。子どもの前での激しい喧嘩で通報された夫婦も、認知症の自覚がない１人暮らし高齢者も、当人からすれば「別に頼んでないし」というのが率直な思いなわけで。そんな人々が我々支援者と「会いたくない」と思っても、なんら不思議はないのだ。また当事者やその家族が様々な疾患や障害、生活上の苦労を抱えているケースも多く、予定通りに物事が進まないことが起こる確率を高めている。
そんなわけで１日４件面接しようとしても、そう簡単にこちらの予定通りには事が運ばない。いや、むしろ予定通りにいかないのが当たり前で、そんな中でいかにうまく調整や段取りをしていくか。そういうことが求められる現場であるために、面接件数だけで単純に業務量を測れない、ということなのである。

面接への道は1日にしてならず…

「面接」がお城でいう本丸なら、城門や櫓は、「連絡」や「日程調整」である。まずそこを越えなければ、目指す本丸にたどり着けないわけだが、この城門や櫓の攻略が、ときに結構な難関であったりする。
例えば 2，3 度電話してつながらないなんてのは当たり前。折り返しがないこともよくある。ならばと曜日や時間を替え、繰り返し電話をする。相手の仕事や生活状況から「朝早くがいいかな？」とか、「昼休憩なら電話に出るかも」「夕方の方がこの人調子いいよな」など、電話に応じてくれそうなタイミングを予測し、何度もトライする。時には相手がしつこいと思うくらいにかけまくる。そんな作戦が展開されることも稀ではない（もちろんすんなりつながる人も多くいるが）。
ちなみにこの作戦は他の業務と同時並行で行うことが多いため、難易度が高いと（電話に応じる時間が極端に限定されるとか）、別の長い相談電話に捕まったりしてかけそこね、翌日に延期…なんてこともよくある。

電話がダメなら他の方法も駆使する。例えばつながりやすい関係者（保育園や学校など）に伝言を頼む、なんていうのもよくある。でもそんなケースに限って、電話を相手がくれた時にたまたまこちらが面談中で出られず、すぐにかけ直したけどまた相手が出ない…なんて、古い恋愛ドラマみたいなすれ違いも起こる。
また最近は、メールやショートメッセージの方がリアクションが良い人も一定数いたりする。あるいは古典的な手紙の郵送、自宅まで行って手紙を差し置く、さらには相手の行動パターンを把握し、役所の窓口などで待ち伏せ…なんて手法もある。相手の個性や状況に合わせ、あの手この手で面接に漕ぎつける。そんな地道な努力を現場は日々繰り広げている。

そうやってなんとか苦労してお膳立てした面接も、急なキャンセルや相手方の都合で

またゼロから仕切り直し…なんてことも珍しくない。「面接」への道は、平坦なものではない。
　そんな風に考えると、この業界のお仕事は「面接」はもちろん大事だが、それと同程度に「面接の場を作る」というお仕事も、結構重要だったりしている。

作戦会議

　面接にまつわる話でもうひとついえば、最近の児童相談所や一部福祉系相談業務の現場では、複数で面接対応することが多くなってきたという事情がある。支援者側が 1 人ではなく、部下と上司、違う職種同士、同僚など、2 人以上で相手との面談に対応する。そんな形が増えてきた。
　だから調整も、1 人対応の際よりもうひと手間かかるわけだが。それでも特に若手のケースワーカーには、できるだけ複数対応するよう促している。もちろん３～４人で相手を囲んで威圧する…なんてことがないよう留意しているが。
　なぜそうまでして複数での面接対応をするのか。主なメリットをまとめると、

①　面接での聴き漏らしや受取違いを減らし、困った場面や不測の事態に助け合える。
②　後から相手方と「ああいった、こういった」というような水掛け論になることを抑制。
③　他者の面接を見ることや、互いの面接について意見交換することでの学びの効果が期待できる。

　このあたりが大きいと思う。
　先ほども述べたが福祉業界の面接では、予期せぬことが起こりやすい。同席していた幼児が愚図りだして話が滞る、相手が急に攻撃的になる、などということはもちろん、場合によっては体調不良や災害だって起こりえる。その時、複数でいるのと 1 人で対応しているのでは、危機管理上も大きな違いである。特に児童相談所は、保護者と対立的な面談をすることも多く、①②の観点は重要だ。
　また全国的にも経験の少ない若いケースワーカーが多いのが実情で、その意味では③の効果も重要となっている。

　私も職歴が 20 年ほどとなり、スーパーヴァイザー的なお仕事が増えてきた。複数対応面接でも、役回りとしては上司や先輩職員として同席することが多い。
　若いワーカーと 2 人で面接をする場合、私は事前に作戦会議をする。これをフワッとで済ませる人もいるが、私は結構しっかり協議することを意識している。それは若いワーカーにとって格好の実地訓練・OJT の場となり、私もワーカーも、相互の理解が進んで学びが深まると感じるからだ。
　具体的ポイントをあげると、

① ワーカーがこのケースをどうアセスメントし、どんな支援方針にもっていきたいのかを把握することで、ワーカー自身の力や個性、困り事などを私が理解することにつながる。
② 私なりのアセスメントや支援方針を伝えることで、ワーカーが別の視点や可能性をケ

ースに感じるきっかけとなる。
③ 互いの思いをディスカッションして戦略を練ることで、面接の具体的な目標（これだけは聞く！など）が定まり、より具体的な意図を持った面接を行うことができる。

このあたりが大きいと感じている。
ただこの作戦会議も昨今の業務多忙の中、あまりじっくりと時間はとれなくなっている。そのため業務の合間に５分、10 分とか、訪問に行く車内の時間を有効活用することが多い。
余談だが私はこの車内の時間が結構好きである。運転席と助手席で並行して話せるという位置・距離感もいいのかもしれないが、ケースの話はもとより、職場では普段あまり話さない何気ない雑談や趣味の話ができたりもして、仕事仲間のことを知る貴重な時間になっていたりする。こういう直接業務に関わらないと思いがちなコミュニケーションが、実は職場の人間関係づくりやメンタルヘルスの維持にも重要だということを、私たちはもう少し重視すべきじゃないかと思っている。

感想戦の重要性

様々な苦労を経て実施した面接。それが無事終われば、あとは記録を書いてひと段落・・・といきたいところだが、実は面接の後にも大事なことが待っている。

それは面接中に生じた感情や疑問、想いを振り返り、こちらの質問や展開が意図したようにいったのかを改めて見直し、次回の面接や支援方針を検討する作業。反省というべきか反芻というべきか。ようはそういうことだ。
１ 人での面接ならば、主に自分の中でそれを行うことになるが、複数対応の面接であれば、同席した職員と意見交換しながら行う。これを将棋に例えるなら、面接が本番の対局で、意見交換は感想戦ということになるだろう。私は個人的にこの感想戦が好きだし、とても大事だと思っている。私にとっても若いワーカーにとっても、大切な気づきを多くもらえると思うからだ。

相手の発言や反応を見てどう感じたか。当事者の主張、考え方や語り口、質問への回答。「私はこう感じたよ」「あの発言は意外だった」「あの反応は想定内だね」など、感じたことを出し合い、より深い対象者理解へつなげていく。
また支援者側の質問の意図や、本当はやりたかったことなどを話すことも、若いワーカーの育成には有用だ。経験のある職員が、どうしてその質問をそのタイミングでしたのか。何を考えて作戦会議での方針を修正したのか。そんなことを共に振り返り共有することは、面接それ自体に匹敵するくらいの学びの機会だと感じている。また、その場でちょっとしたグチや負の感情を吐き出し、共感しあうといったストレス解消の一環にもなる。

将棋や囲碁の世界では、プロでも、いやプロだからこそ試合後の感想戦を大切にしていると聞く。たった今真剣勝負をし合ったもの同士が、敵味方の立場を超えて「あの時他の選択肢はなかったのか」「どのような考えでその差し手を選んだのか」などを客観的に語り合い、さらに互いの将棋を高め合うために学び合う。そこに真摯に取り組める人ほ

ど、総じて力を伸ばすとの記事を読んだこともある。
　私たちにとっても感想戦の意義は近いものがあると思うのだが、最近はその時間も以前よりじっくり取れない気がしている。働き方改革で業務の効率化が叫ばれ、労働時間の短縮が進むのは良いことだが、残念ながら業務量自体が減るわけでもなく…。そんな中で業務の余白的な時間でされてきた、雑談やケースのグチ語り、振り返りなど、感想戦につながる時間が削られてきた印象だ。
　さらにはそこに新型コロナウイルスの流行が追い打ちをかけ、職場でも全般的なコミュニケーションへの抑制傾向が高まっている。懇親会や忘年会もなくなり、昼休憩も「黙食」が推奨されるなど、職場は以前と比べてなんだか静かに冷たくなってしまった感がある。最近ようやくその傾向は和らいできた感じだが、以前と比べればまだまだ遠慮気味な雰囲気が漂っている。
　感染対策もクラスター防止が大事なのも分かるが、「人」への興味を持つことを大切にすべき私たち対人援助職が、隣で働く仲間とすら対話できない、つながれないで果たしていいのだろうか。そんな複雑な気持ちで働く今日この頃である。

臨床のきれはし

Sheet 19

浅田 英輔

Rule Change

世の中には法律がある。

「法律は守らなければならない」と教えられる。それってホントなの？？と思うことがママある。

もちろん、法律を守ることは大事だ。法律を守ることは、自分を守ることにつながる。法を守らない人は、法に守られない。法治国家においては、「皆が一応法を守ること」が前提になっている。以前にも書いているので（きれはし８）、「法に触れなければ何をしてもいいのか」という議論はそちらに任せる。

法律とはなんぞや。「人が、みんなで守ろうぜと決めたこと」である。こういう決め事があったほうが、よりよい世の中になるだろうとえらい人たちが決めた約束だ。みんな大好き（？）キングダムの中で、法の専門家である李斯は、「法とはなにか」という問いに対して、こう言っている。

“法とは願い！国家がその国民に望む人間の在り方の理想を形にしたものだ！”

法とは、「こうあってほしい」という国家による国民への望みなのだ。

日々「法律」とか「法」とかいうけれど、結構種類がある。

一番上位にあるのは「日本国憲法」である。ほかの法律は、憲法に反するものは作れない。憲法は短い文章で書かれているので解釈の問題は出てくるが、原則的に憲法が我が国では最上位にある法といえる。

その次にあるのが、いわゆる“法律”である。児童福祉法とか、精神保健福祉法とか介護保険法、民法、刑法とかたーくさんある。公認心理師法は比較的新しい法律だ。ぱっとググったところでは 1,960 あるそうだ（正確なものは知らん）。ちなみに、六法全書の六法とは、憲法、民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法を指すようだ。まあとにかくたくさんある。それ以外に、政令とか規則とかもある。法律は国会が作るけど、政令は省庁が作る。法律に基づいて、細かいところを決めるのが政令、ということになる。さらに、都道府県や市町村といった地方自治体が作るものとして条例がある。

憲法 > 法律 > 政令 > 条例

というように順番があり、上位の法令を破るようなものは作れない。憲法に反した条例を作ることはできないのだ。ビミョウなものがあるため、時々裁判で「違憲判断」がなされることがある。憲法に反している法律はダメだよ、という判断である。

今の日本は、こういう法体系に基づいて運営されている。はず。たぶん。

日本国憲法にはこうある。

第十一条　国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与へられる。

小学校でも習った、「基本的人権の尊重」である。これ、守られてる？？そもそも、「基本的人権とはなんぞや」というところもあるので、そこをキチンとしないと守られているか守られてないかの議論もうまくいかないことになる。だいたい守られる方向ではあるけど、実際はそうでもなくね？と思うことも多い。「学校へいかなければならない」というのは、平日昼間に居る場所を決められてしまうのだから、重大な基本的人権の侵害である。そこにいなけれ犯罪だとは言わないが、よくないこととされており、学校に行くことが”普通”のこととなっている。これは、基本的人権を制限してまでも子どもは学校で学ぶことが必要だとみんなが決めたからそうなっているのである。仕事だって、「勤務時間中は執務室で仕事をしなければならない」なんて、ひどい人権侵害である。自分の人権を捧げて給料をもらっているのである。法律って難しい。

いくらかわかりやすいのは刑法だが、刑法だけでも 264 条あるようだ。「殺人」は刑法 199 条に「人を殺した者は、死刑又は無期若しくは 5 年以上の懲役に処する。」とある。殺人は古来より罪とされてきたが、それであっても「尊属殺人」（H7 に削除）やら「情状酌量」などの言葉があるように、「やむを得ず殺した場合」や「目上の人を殺した場合」に量刑がかわることもある。時代を経てかわることもあるし、絶対的な法はないのである。

上の法令の順位づけで下位にあった「条例」に至っては、変わったものがたくさんある。

青森県にも「りんごまるかじり条例」（板柳町）、「朝ごはん条例」（鶴田町）など変なものがある。法令は「罰を与えるもの」ととらえられがちだが、上にあるように「こうあってほしいという願い」といえるだろう。もちろん、りんごをまるかじりしなかったからといって罰則があることはない。板柳町民も、りんごをむいて切って食べていると思う。たぶん。

とはいえ、一般的には「守らなければならない」ものである。しかし、われわれは、守ることにこだわりすぎではないだろうか。法律にとどまらず、校則や社則のほか、慣例なども「守らなければならないもの」になっていると思う。本当にそれは、守らなければならないのか？変えることはできないのか？

仕事で今までと違う方法で何かを処理しようとする。大体、「そんなやり方していいの？」と言われる。それに対する答えは

「知らんわ！」である。慣例もバカにしたものではないが、適切な方法があるなら、そっちを試してみることがむしろ真摯な態度と言えるのではないだろうか。決めるのは誰だ？そうオマエだ！

そう考えると、伝統なんてものも怪しい。「長年続けられていること」っていうものはそれだけで尊いものであることも多いが、いらないものなのであればやめてしまえばいいのだ。

「ミステリと言う勿れ」の中で、久能整くんはこう言います。

「しきたりとかルールとか伝統とか、それって天から降ってきたわけじゃないんで。神様が作ったわけでも、自然に湧いたわけでもなくて、その当時誰かが都合で決めただけなので。」

「人が作ったものは、人が変えていいんだと思います。その時の最善の判断で変えていいんだと思います。だって人は間違うから」

憲法だって法律だって、校則だって慣例だって、変えていいんです。間違ってることはあるから。多くの場合、変えるのには大きなエネルギーが必要だし、変えて失敗することもあると思うけど、「変えられない、全部従わなければならない」というほうが大変に危険な思想であるとも思える。変えることが最善であるとはいえないが、今うまくいっていないのなら変えればいい。「変わるわけない、変えようとするのは意味がない」というのが今の選挙投票率の低さなわけでしょう？

ましてや、仕事のやり方なんて、すぐ変えられる。人口減少で高齢化で少子化で働き世代の減少で、って言ってるのに、なぜ仕事のやり方を変えないのか。コロナを経てもなお無駄な会議を減らそうとしないのか。みんな、変えることに慣れていないのだよなぁ。

県職員として、「オマエの今年の仕事のひとつは、コレコレの条例を改正することだ」って言われたら、ちょーめんどくさいっすよ。すごい手間かかるんですよ、条例改正って。でも、それが「ちょっとだけ青森県がよくなるため」ならがんばるよね。ちょっとだけ世の中が面白くなるなら、やってやるさ！

同姓婚とか選択的夫婦別姓制度とか、民法の改正を求める議論も起こっている。私は少なくともこの二つについては基本的に賛成であるが、「オマエの仕事、民法改正ね。頼むね」といわれたら、もう恐ろしい。何をどうすればいいのかわからないし、とても大変だと思う。でも、改正はできるはずだ。

法律にしろ慣例にしろ、いろいろかわってきている。「自分のところは関係ない」というのは、たぶん間違っている。多職種連携なんていうのも、「心理職とは面接室で時間を決めて面接をするものだ」という慣例的な考え方が変わってきたからだということもできるよね。

かかわったケースでも、変えられないことに囚われている人はたくさんいる。

できるところから、変えてみよう。

発達検査と対人援助学

⑩ 検査と対人援助

大谷多加志

執筆者短信にも書いたのですが、2022 年 12 月 23 日に対人援助学会の研究会でお話をさせて頂くことになりました。マガジンで連載していることを中心に、今思っていることをお話ししようと思っていたので、研究会のテーマは連載タイトルと同じで、と考えていました。先日の対人援助学会の第 14 回大会で、研修・交流委員会の千葉さんが次回の研究会について告知してくださったのですが、そのテーマが「検査と対人援助学」。あれ？微妙に連載タイトルと違うぞ…、連載タイトルは「発達検査と対人援助学」…。“タイトル違ってますよ”と言わないと…と思いつつ、ふと妙な思いが立ち上がってきました。

なんかこういうちょっとしたトラブルというか、偶然の出来事から、何か気づきを得たり、新たな展開を見つけたり…という逸話って時々耳にすることがあると思っていて、ちょっと憧れていた部分がありました。やり手の人たちは、こういう日々の何気ない場面で発見や気づきを得たりするんだ！と自分もそういうエピソードが欲しくなって、何か閃くことはないかとしばし思案しました。それで、一応それらしきことに思い至ったので、次の研究会はその筋でお話してみようと思っています。

今回の連載は、その研究会で話す内容の先出し版です。

検査をめぐって

タイトルが変わっていたのは「発達検査⇒検査」というところです。単純に考えるなら、この変化について吟味してみることになるでしょう。考えてみれば発達検査も「検査」の一種ですが、それほど日常的な、身近なものではありません。私たちが日々受けている検査と言えば、健康診断で受ける血液検査やＸ線検査、内視鏡検査…、最近ではコロナの抗原検査や PCR 検査などの方が身近かもしれません。

そもそも「検査」を受ける意味や動機は何でしょうか。多くの場合は、検査を通して、一見しただけではわからない心身の状態について、客観的な数値や映像などで示してもらうことです。そして、検査結果から、心身の状態を把握し、必要な対応を講じたいという思いがあることでしょう。発達検査も、一見して捉えることのできない、子どもの「発達」を、検査を通して発達年齢や発達指数という数値にして示そうとしている点は、他の検査と共通していると言えます。「今さらだけど、発達検査も、検査の一種なんだよな…」と考えたところで、長年自分が

いつも微妙なひっかかりを感じていたことが、うまく言語化できる気がしました。

検査からわかること

これまで、発達検査の講習会に関わったり、発達検査に関する研修を引き受けてきたりしました。研修会の中では様々なご質問を受けることもあるのですが、その中で最も多いのが、「この検査結果からどういうことが言えるのか」というものです。とても一般的な質問ですし、特に批判的に思っているわけではないのですが、お答えしながらもいつも少しモヤッとしたものが残っていました。

特定の検査項目が達成できている場合に、それはどのような能力を有していることの裏付けになるのか、達成できていない場合にはどのようにすればその能力が獲得できるのか、どういう検査結果であれば自閉症の可能性を示唆するのか…など、この質問の背景にはさまざまな意図が含まれています。

以前、知人に「この質問に違和感があるのだけれど…」と話してみたことがあります。その時は「発達検査なんだから、その結果から発達について何か明らかにしたいと考えるのは自然なのでは？」と返され、そうか…と思いつつ、それでも何か釈然としないものが残っていました。

検査をすれば…？

検査をしたのだから、目的に応じた情報が得られるはず…というのは、一見理屈が合っているようにも思えましたが、よく考えると果たしてそうでしょうか。

例えばX線検査であれば、臨床検査技師が、X線撮影の機器を使って検査を実施し、その結果として病気の兆候（例えば肺炎など）を見つけることができるわけです。ですが、例えば臨床検査技師でもない私が、X線機器の使い方を教えてもらって検査を実施したとしたら、どうでしょうか。適切にスイッチを押せば機械は動くでしょうし、撮影すれば、何らかの画像を得ることはできるでしょう。しかしながら、人体の構造に詳しいわけでもないですから、「ここらへんは肺だよね…」というくらいしか判断ができませんし、写し出された白いもやのようなものが、何らかの病気をとらえたものなのか、特に異常はないのか、そもそも正しい方法で撮影できているのか、全てがあやふやです。とてもではないですが、病気の診断や、まして治療方針を決める材料になどできないでしょう。つまり当然のことではありますが、単に機器の操作方法がわかっていればよいということではなく、人体の構造についての専門的知識が必要になります。さらに調べたい部位に応じて、臓器や関節に対してどのような角度で撮影すればよいのか、衣服や装飾品を取り除くなど配慮すべき事項はないのか、など検査の実施に際して留意すべき点もたくさんあるでしょう。

先ほどの「発達検査をしたのだから、発達のことがわかるはず…」という考えや、「あまり発達に詳しくないので、発達検査を学ぶことを通して発達にも詳しくなりたい」というニーズについて、レントゲン検査に置き換えて考えてみましょう。「レントゲンを撮ったのだから、病気の有無がわかるはず」、「人体の構造にあまり詳しくないから、レントゲン検査を通して人体に詳しくなり

たい」と置き換えてみると、少し違和感の正体が明確になった気がします。前半の「レントゲンを撮ったのだから、病気の有無がわかるはず…」については、「そうとは限らないだろう」と思えますし、後半の「人体の構造にあまり詳しくないから、レントゲン検査を通して人体に詳しくなりたい」は、かなり奇妙なニーズです。

しかし、一般的な検査に置き換えればすぐに違和感の正体が明らかになるのに、「発達」になると見えづらくなるのはなぜなのでしょうか。

人は関わり方次第？

少し話がズレるかもしれませんが、このことは「〜ができない場合、何をしたらできるようになりますか？」という問いと通じる部分がある気がしました。

病気や疾病であれば、自然治癒を待つしかない、付き合っていくしかない、という判断があることも承知しているのに、「発達」や「スキルの獲得」については何かやり方がある、あるいは少なくとも「よい変化が期待できる方法がある」というイメージがあるように思います。人は関わり方次第、ということなのでしょうか。

覚悟と責任

いつも“難しいな”と思うのは、自分自身が検査を実施した時には、検査所見に「○○に未熟さが見られる」とか「○○のような体験を重ねることが望ましい」のようなことは、書くこともあるからです。ですが、「じゃあ、同じような結果だったら、そのように書いてもいいんですね！」と言われたとしたら、そこはどうにも首肯しがたいものがあります。その所見はあくまでも、自分が検査者として実施したプロセスをすべて加味して考えたことであり、特定の検査項目の成否や数値的な結果に当てはめて考えていることではないからです。

ここでふと、自分が現場で働き始めて数年目の頃のことを思い出しました。何か確固たるスキルや見識があるわけでもなく日々子どもや保護者と関わる日々は、自覚のない不安に満ちていました。よく言えば必死に学ぼうとして、悪く言えば何か「よいやり方」を見つけようとして、本を読んだり、先輩方の取り組みを取り入れたりして、子どもとの療育に臨んでいました。しかし、結果的にほとんどうまくいきませんでした。

その時に当時の上司に言われた言葉が、「覚悟」でした。

本を読んだり、人のやり方を取り入れたり、「何か良さそう」と考えて取り組んだことは、うまくいかなくても「意外と使えないな」と思うだけで、本当の意味での振り返りや吟味を行っていません。つまり、自分の決定に対する覚悟がなく、責任を負っていなかったわけです。

その後、すぐによい取り組みができるようになったわけでもありませんが、少なくとも現在では検査報告書に書いている内容には、これは少なくとも自分自身が検査場面を通して考えたことだ、と自覚的に思えることしか書いてはいません。その意味では、最低限の覚悟と責任は負うことができるようになったのかもしれません。

何かの本に書いてあったから、どこかの先生が言っていたから、ではなく、自分自身の言葉で語るところからが、スタートなのだと思います。

対人支援点描（29）

「権威性の法則と物語性」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

はじめに.

自分の権威のなさは認めるところだが、ある時に次のような出来事を経験した。前回の短信にも触れた話題であるが、私の住むえりも町では一時期までは北海道内で子どもの出生率が一番高い状態であった。それが近年になって急激に低下した。人口４，３００人規模の町で、今しばらくは３歳児の数が１３名前後と続く状況にある。こうしたこともあり、幼稚園者を立て直す計画を断念することになったわけである。ところがある時、学園の理事長に、とある有名な先生がえりも町の子どもの数は減っておらず、若い人が働く場もあるから、私の話した状態ではないと否定したということであった。そんなこともあり、今度は理事長より私に私が学園に伝えた話と違うではないかと問われたのであった。私自身は、えりも町に住所を置き、そこで園長の業務もこなしているのだから、えりも町の動向はわかっているつもりである。しかし、そこに住んで働いていない人の言葉が信用され、自分の言が疑われたことに不快に感じるとともに、そうした状況を作りだした要因は何であろうかと思案することになった。

こうした要因として行きついた話題が、今回の権威性の法則と物語性である。

１．権威性の法則

この物語性の法則を知ったのは、まったくの偶然で、たまたま YouTube を流し観ていたら権威性の話題が話されていたことによる。権威性については、チャルディーニ, R. B. の著書『影響力の武器』において記されている。権威性とは、要は「権威のある人とか、専門家が言うこと、話すこと、行動することといった、一つひとつについて深く考えることなく人々が信用してしまう」ということである。具体的に権威は、以下のような要素で構成されている。

① 実績 … これまで取り組んだことや成果
② 肩書き… 国会議員、教授、社長など
③ 出版 … 著作物の有無や量や評価
④ 受賞歴 … 業績の評価
⑤ メディア歴 … テレビや新聞などへの露出度
⑥ 推薦 … 別の権威（者）からの紹介やつながり
⑦ 引用 … 別の権威（者）の利用
⑧ 見た目 … 美男美女、背格好が良い、など

私は①～⑧以外にも「パワー」という要素もあると考える。

こうした要素を持ち合わせることや駆使

できることが、すなわち権威がある者となるといえる。

そして、ひとたび権威を持つと、多くの人がその権威を深く考えることなく受け入れ、その人の言動が正しいと受け止められてしまうわけである。

２．権威性の法則と物語性

しかし、権威性の法則だけで、人々が動かされるのだろうか、信用してしまうのだろうか。先ほど「パワー」という要素も権威の内に含まれるのではないかと指摘したが、権威性の法則が発動するためには、まだ別の要因があるように思う。それが「物語性」の有無である。

先に権威性を構成する要素を８つ紹介したが、これら自体は、個々の要素でしかない。世の中に①から⑧の要素を持つ人はたくさんいる。だが、そのすべてが強力な権威性を発揮しているわけではない。これらの要素が活きるためには、それが「語られる」ことが重要であると考える。たとえば、実績が積み上げられるまでの苦労話やサクセスストーリーといった、人が巻き込まれ、惹きつけられるようなものがないと、履歴書以上のものにはならないだろう。権威性のほかに、さらに特別なものを印象付けるものが物語性なのである。

しかし、ここでいう物語はナラティブの意味であって、ストーリーを指すものではない。ナラティブは単なる事実の時系列の羅列ではない。そこには意味を持たせた語りがあるのである。したがって、虚構も含まれる。そういう一面を持つ。

つまり、権威性の法則が活かされるためには、その権威性を活かすことができる、「虚構」も含めた「語り」が伴う必要があるというのが私の主張である。

まとめ.

権威性の法則は、今やマーケティングなどで広く意識され活用されている。インターネットなどでも、この権威性の法則が意識されているようである。私も観ることがある YouTube でも視聴回数を増やすためにも活用されている。こうした状況は今さら止めようがなく、権威性の法則によって人々が動かされてきた事実は変わらないように思う。

しかし、今回の執筆を思い立った出来事から権威性を思うとき、権威性は「事実に基づかない事柄」でも信用されて人々が動いてしまうということであった。

このことを思うと、どうであろうか。たとえば、何かを売り出したいと考えて権威性を悪用すれば、虚構の物語を仕立てることで権威性の法則を発動させることができるのではないか。このように思うのである。中身のないものを、さぞ中身のあるものかのように物語り、その権威を作り上げていく。このようなことが起こっていないだろうか。

そのようなことを思いながら、中身のある権威が適切な形で重視されるようであってほしいと思う。

講演会＆ライブな日々㉝

古川　秀明

『生きがい大学、講演会＆ライブ』

生きがい大学というのは、地域の高齢者（６０歳以上）の方の学びの場です。

頂いたお題は「つながりを考える」

参加者の方はだいたい７０代の方が多いです。

この年代の方に私はめっぽう強いのです。

回想法を織り交ぜながら、１９５０～６０年代の時代を語ります。

回想法は１960 年代にアメリカ老年学の草分けともいわれる精神科医、ロバート・バトラー氏によって提唱された心理療法です。

高齢者が昔の話を何度も繰り返すのはよく見られることですが、当時のアメリカの精神医学では、そうした行動は一種の病的状態であるとみなされていました。

しかし、ロバート・バトラー氏は、そこに高齢者の生きる力を引き出すポジティブな意味があるととらえました。

回想法は、思い出を引き出すために写真や絵画などを使うこともありますが、原則として道具を必要とせず、支援者が受容的な態度で過去の思いを共感しなが

らコミュニケーションを重ねていく方法です。

個人で行うことも、グループで行うこともできます。

そうした手軽さもあり、当初は特別養護老人ホームやデイサービス、病院などでレクリエーション活動として行われていましたが、現在は次第に公民館や敬老館など高齢者の集いの場にも広がりを見せています。

思い出話に花を咲かせるのは、とても楽しいものです。戦時の苦しみ、高度成長期のにぎわい、子どもが育ちゆく喜び。

同時代を生き、体験が共有できる仲間と交流するのも回想法の効果の一つです。

また、若い世代に自分の生きてきた時代の苦労や喜びを伝え、歴史を教え導くのも誇らしいでしょう。

そうしたコミュニケーションを深める効果も期待されます。



回想法は、認知症・認知機能を改善する、認知症を予防するといった科学的立証がされているものではありません。

しかし、回想法によって混乱や不安がおさまり、結果として、本来あった能力が引き出せるようになり、人間関係が改善する可能性はあります。

認知症を改善する、予防するという直接の効果を期待するのではなく、あくまで、ご本人の歴史に敬意を抱き、持っている力を発揮していただく方法と考えます。

私の講演会＆ライブでは、懐かしいお話に絡めて、昭和の流行歌も歌います。

美空ひばり、橋幸夫、小林旭、石原裕次郎、ザ・タイガース、ザ・スパイダース、

ジャッキー吉川とブルーコメッツ、ザ・ピーナッツ・・・。

歌で盛り上げて、その後の話は涙あり、笑いありのぶっちぎり６０分。

講演会と歌の２本立ての手法は、北島三郎オンステージを参考にしました。

前半はお芝居で、後半は歌のライブの二本立てです。

講演は心理学と仏教をコラボさせた内容で、人生経験の深い皆さまにも納得していただける「生老病死」についてです。

広いホールでの対面講演会は久しぶりでした。

会場に広がる笑いと涙、そして頂ける拍手の音に、幸せをかみしめられた一日でした。

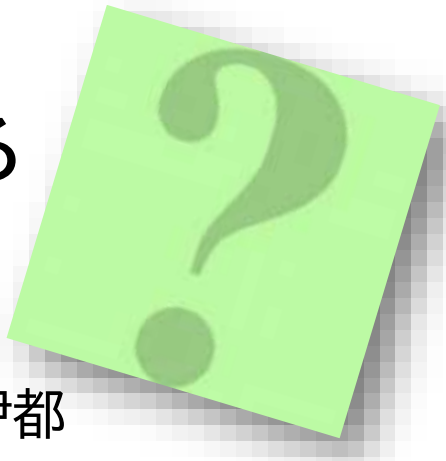


シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

立場が変わると何が見える



～その3　50歳を過ぎると　～



坂口　伊都

はじめに

　これまでいろいろな立場を経験して、見えてきたこと、こういうことなのかと実感してきたことを書いていこうと始めた連載ですが、職業や親になるという立場だけでなく、「私自身」も生きていく中で、知らぬ間に変わっていたのだなということに気づきました。今回は、そのことについて書いていきます。

　最初は、誰でも子どもとして生まれ、大人に育てられます。大人から教えられることが正しいと信じていましたし、親を始めとする大人に気に入られたいと思って行動していました。しかし、それは子どもにとっては簡単なことではなく、何かしたらすぐに叱られる、なかなか褒めてもらえない。また、何かしたら叱られるかもと思うと、足が立ちすくむなんてこともありました。今から思えば、何でそんなことを気にしていたのか。子どもの世界は、それだけ狭く、経験もなくて、よくわからずに過ごしていた日々という感じでした。
　そこからの大人への階段は、学年が一つずつ上がっていくことでした。小学校を卒業して中学に入学すると、授業の仕方も違い、部活動があり、小学校の世界とは一変していました。部活動の先輩は、絶対的な存在でした。制服のスカートの長さが長い、短いと注意され、靴下の三つ折りの高さでも言われていましたね。靴下の高さを気にしている私の姿を見て、母親があきれていたことを思い出します。私は、先輩に目をつけられないように必死だったのですけど。高校に入ると、誰と誰がつきあっているとか、バレンタインディのチョコをどうするか等の話が楽しかった。大人の言う事も聞かなくなっていって、早く大人になりたくて仕方がなかったのを覚えています。

　女の子は、花嫁道具として短期大学に行けばいいと言われ、東京の短大に進み、家を出ました。家を出られたのは嬉しかったですね。羽を伸ばせたような気持になりました。学生時代に終わりを告げ、化粧品会社に勤めました。そこで、お局様という言葉を知りました。今では信じられませんが、その当時は「寿退社」が暗黙のルール。結婚をしたら、専業主婦になるために会社

を辞めるということです。それが、女の幸せだと信じられていました。女子社員は、お茶くみ、コピー取り、職場を明るく照らすマスコット的存在という扱いでしたが、実際の仕事は、いろいろな仕事を覚え、電卓を見ずに打てるようになったり、話し方等を学びました。

振り返ると、女性の生き方が問われる過渡期で、短大を卒業する頃にはバブルが弾け、女の幸せとは何かと問いかけられ続けてられた時代でした。私は、働き続けるために社会人入試を受けて社会福祉を学ぶ道を選びました。

この時代は、上世代とも同世代とも摩擦が起きやすくなっていたと感じます。子どもを保育所に入れると言えば、「そんなに小さいのに可哀そう」と姑から言われました。もう夫の給料だけでは生活が成り立たない時代に入っていることを団塊の世代の姑は、実感できなかったのでしょう。

子育てに追われ、子どものことで心配し、悩み、自分よりも子どもを優先してきました。子どもが自分の手を離れてみると、感覚が狂います。寂しさ、物足りなさ、戸惑いと言ったところでしょうか。これまでの生きていくための地図をなくして、これらかどうしたらいいのか迷子になっている感じです。

ある方から、
「伊都ちゃん、人生100年だとしたら、50 歳なんてまだ折り返し地点だよ」
と言われ、衝撃が走りました。

100歳ってと思いますが、私の母は今年の誕生日で米寿の88歳で、足腰もしっかりしています。それ程驚くような話ではないのかもしれません。でも、えっ、今までと同じだけ生きるかもしれないって、これからの人生どれだけ長いの。

今まで歩んできた道は、子ども時代があって、親にもなって、成すべきことがあった50年でした。これからの50年は何をしていけばいいのだろう？

これからに半生には、子ども時代もなく、子どもを産む機能もないので、今までとは違うあゆみになるでしょう。江戸時代では、50代なら老人だったと言います。現代の50代が隠居生活と言うには、あまりにも残り時間が長い。まぁ、自分の寿命がわからないので、本当に折り返し地点なのか、余生が僅かなのかはわかりませんが。

では、現代の50代は、何と表現すればいいのでしょうか。

若くはない。老眼で細かい字が見えない、徹夜する元気はない、物欲が減った、眠りが浅くなって、白髪も増えた。でも、そこそこ動けて、中途半端に元気。60歳代も、70歳代も同じような感じなのでしょうか。老いていく身体とつきあいながら、後半戦の自分なりの生き方をみつけていく。こんなことを考える日がくるとは、若い頃は想像もしませんでした。これも立場が変わるということなのでしょう。どうぞ今回も、最後までおつきあいください。

更年期なのか

50 歳前後になると、閉経をしてホルモンバランスが崩れて、更年期障害が出てきますが、私は子宮摘出をしているので閉経していく過程がわかりません。ただ、子宮筋腫や生理不順があったので、更年期の症状も何かしら出てくるだろうなぁとは思っていました。

この春から児童養護施設職員として働いて眩暈が起きるようになりました。変則勤務に体力が追いつかなかったと考えていましたが、更年期障害も重なっていたことがわかりました。頭と身体と気持ちの状態が噛み合わないのです。理性的に物事を考えることはできるのですが、よく眠れなかったり、動悸がしたり、クラクラする感じが起き、気持ちの面では、何とも言えない焦燥感や自信喪失に襲われました。仕事を辞めたストレスで、ここまでダメージを受けるものなのかと思っていましたが、「それ、更年期もあるのではない？」と言われ、なるほど。そう言われると、今までの不思議な現象の説明がつきます。私の場合は、とにかく何か怖い。よくわからないけど、怖くて怖くて仕方がなくなる感じでした。

落ち着け私。家族は、それぞれに元気。犬も猫もいる。相談にのってくる人もいる。世の中の人は、皆やさしい。仕事を辞めたことも誰も責めない。責めているのは私自身。そう、私が私を追い詰めている。それは何故？

我思う故に我あり　自分と向き合う時間を与えられたようです

まずは体調の確認から。婦人科に行き、症状を話、し血液検査を受けました。初診は女医さんで、胸の動悸を静める漢方薬を処方され、とてもよく効いて楽になりました。

次回、検査結果を聞きに行くと院長がニコニコっと笑い、「更年期障害ですね」と一言。

まぁ、そりゃそうですよね、年齢的にも症状も更年期まっしぐら。医者ではない私でもわかります、はい。



「漢方薬はどうだった？」と院長に聞かれ、よく効いたと話すと、もう一つ大きな笑顔。それなら漢方を増やそうと、更年期の症状か睡眠の方か、好きな方を処方してくれるとなりました。

うーんと唸って、睡眠の方の漢方を服用することになりました。こちらの方は、臭くて不味い。昔、子どもの頃におばあちゃんに連れていかれた漢方薬のお店の匂いがする。子ども心に、何でこんな臭くて不味そうなものを好んで飲むのか不思議に思っていましたが、私もおばあちゃんと同じように服用する人になりました。こちらの漢方は、合わないような気がしています。まだ、始めたところなので、しばらく試してから続けるかどうか判断しようと思いますが、あまり変化を感じません。

更年期障害を体験して、頭と身体はイコールではないけど、気持ちというか感情は身体と密な関係にあると実感しました。このバランスが崩れるのは、しんどいですね。

モーニング・ページ



頭は冷静に物事を捉え、でも気持ちや身体が伴わない、そんな気持ちが悪い体験をしている時、2001年に出版されたジュリア・キャメロンの『ずっとやりたかったことを、やりなさい』にある、「モーニング・ページ」を知りました。

誰にでもアーティストの部分があり、それは心の中に住む子どもの部分であり、「できっこない」「何言っているの」と否定されてきたことを捨てようという内容です。

それをするために、モーニング・ページが紹介されています。本書には、こう書かれています。

私は現在、十年間これを続けている。

モーニング・ページとはなんだろう？ひと言でいうなら、三ページほどの手下記の文章であり、意識の流れをありのままにつづったものだ。

もっとくだけた言い方をするなら、それは「脳の排水」と呼んでもいいかもしれない。脳の掃除をすることが目的だからである。

この3ページの大きさは、A4 以上の紙。朝起きて、モーニング・ページに向かう。A4 用紙3枚を手書きで書くとなると、なかなかの量です。書くことがなければ、書くことがないと3ページ書いてもいい、思いついたことをひたすら書く。そして、そのノートは誰にも見せない。自分だけのツール。だから何を書いてもいい。とにかく吐き出して、理論脳を疲れさせ、アーティスト脳を呼び起こすというものです。

まだ更年期障害かもという発想に至っていない時、頭と身体と気持ちのバランスが悪くて、頭の方が空回りしているのかも知れないから、試してみてもいいかもと思ったのがきっかけで始めました。

手書きをするスピード、その文字を書く、目で見るということも大切なのだそうです。それも今の私にあっているような気がして、A4 ノートを買いに出かけました。A4 ノートは、大きい。見開きにすると机いっぱいになります。3ページ書くのに40分から1時間弱ぐらいかかります。

それだけ書くと脳が疲労する感じで、ボーとしてきます。これが大切らしいです。
　モーニング・ページを書かなった日は、何で書かなかったのかを考えます。私は、ノートを 1 冊書き終えてたら、気が抜けたのか 2 日ほど書かずに過ごしました。日が短くなって寒いのも関係しているように思います。寒いと布団の中にうずくまっていたくなります。3 週間は毎日書いていたのですが、ノートが 1 冊終わると、書く気が失せました。それからは、朝一で書くことを辞めました。洗濯物を干したり、朝のルーティンを済ませてから書くようにしました。暗闇で書くより、朝の明るさを感じながら書きたかったので。

　モーニング・ページを始めようとした頃、得体のしれない怖さに翻弄されていました。体調が悪くなると身体の弱いところに出やすいと言いますが、この怖さもそれに近いものがあるのかも知れません。私は、怖がりの子どもでした。その頃をよく思い出します。小学生の頃、プリントを失くして保健室に取りに行き、怖くて入れなかったことがありました。その時もたぶんそれ程怒られないと思いながら、でも怖くて足が動かなかった。その頃の私が、顔を覗かせているような気がしました。
　そんな自分にお久しぶり。あの時は、誰にも頼れなくて困っていたね。もう隠れなくてもいいよ、隣にいて。大人の私が一緒にいるから大丈夫と書いたら、ホッとできたように思います。本当に怖がりの私を忘れていました。今回のことと関係があるかどうかわかりませんが、子ども時代の私を思い出す機会になりました。

　モーニング・ページの他にアーティスト・デートというのもあります。週に1回2時間程、子ども時代の自分とデートする時間を作るというものです。本文には、次のように書かれています。

　あなた自身の創造的な心を育むために特別に確保される、週二時間ほどの時間のかたまりである。基本になるのはそのものずばり、デートだ。とはいっても、連れがいるわけではない。それは、内部のアーティスト、すなわち自分の内部にいる創造的な子どもとのデートなのだ。つまり、恋人も、友人も、伴侶も、子どもたちも無縁ということである。

　大切なのは、時間をかけるということだそうで、そこから洞察やインスピレーション、導きなどを受信するそうです。私は、こちらの方はできているかどうかわかりません。

　モーニング・ページをして、久しぶりに手書きで字を書いていることに新鮮さを感じます。何をするに PC が多く、手書きということが随分と減りました。手書きは、昔の家事のように手間がかかるもののようで、いつもは使わない部分を使っている感覚になります。後、日によって書きたいことが全く違ったり、書いていくペースも変わっています。興味がある方は、試してみてください。けっこう面白いことがあなたの中に起きると思います。

次の段階へ

いくつになっても、「そういうことか」と改めてわかることがあると実感しています。「わかる・理解する」には、グラデーションがあるようで、同じ出来事でも年齢やその時に置かれた立場で受ける印象がまるで違います。わかったつもりになっていることは多いのかも知れません。

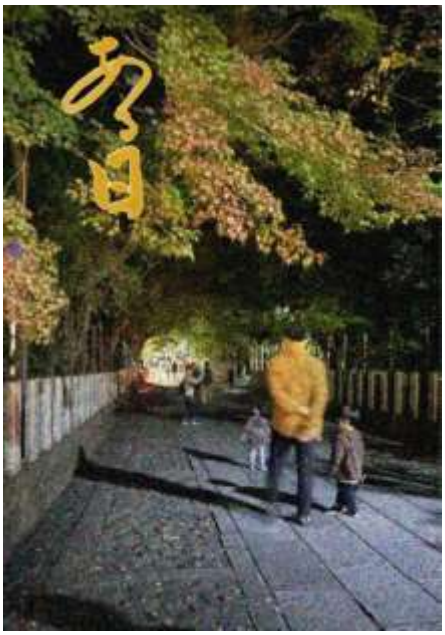
年齢を重ねれば、経験から生きること自体が上手くなっているのではないかと期待しますが、そんなに上手くはいかないものです。この前出かけて行った研究会でも、アラフィフ、アラ還問題が話題になっていたので、人生の折り返し地点を感じているのは、私だけでなく誰もが一度は考える道のようです。

文明や医療の進歩で長寿化し、生活を営むための苦労（家事や労働）も機械化され、時短や自動化、遠隔操作ができる時代です。薪を燃やして火を起こすことから始めないとならない時代は、生活そのものを営むために多くの時間が必要でしたが、今は鍋に材料を入れれば、機械で料理がおいしく出来上がります。作りたくなければ、外食もお惣菜も手に入れることもできます。追われるように過ごしている時は、便利になっていくことはありがたかったですが、子育てが一段落し、働き方も変わり、生活が一変する世代になると、時間とどう向き合っていくかの方が課題となります。畑を借りて野菜を作ったり、陶芸を始めたり、手間暇がかかることを生活の中に取り入れていく方もいます。便利さを追求する生活から離れる時期がやって来るイメージを持たずに過ごしてきました。そういう日々がいずれ訪れることを実感する機会を過ごしました。

70 代の友人は、最近、カメラとジャズピアノを始めました。

「この年齢になって、何でそんな新しいことをするのかと笑う人もいるけど、私にはこれが必要なの。自己満足でも、挑戦と達成感が得られるものがないとダメなの」

と話していました。暇だと言って過ごすことをしたくないのだそうです。その女性を見ていると、格好いいし、強いなぁと感じます。



生まれたから生きる
生き方は、どう時間を使っていくかなのかな
そこに正解があるわけではなく、
自分が納得できれるといいのだろうね

周辺からの記憶 37

東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 宮古

村本　邦子（立命館大学）

11 月 19・20 日、対人援助学会第 14 回大会は、「新潟水俣病と私たち」をテーマにオンライン開催した。水俣病については、水俣にご縁がありしばしば訪れる機会があることから、比較的長く関心を向けてきた。新潟水俣病については、佐藤真監督による「阿賀に生きる」「阿賀の記憶」を観たインパクトは大きく胸に刻まれていたものの、体系立てて勉強したことがなく、2 回にわたる研究会で事前勉強させてもらった。動画配信による現地フィールドワーク、斎藤恒さんのお話、また妊娠規制をめぐるシンポジウムなど、大変充実していた。公式に語られにくい貴重なエピソードがいくつも出てきて、それだけに書物で読むのとは違うリアリティが感じられるものだった。

最近、野口友康（2022）『犠牲のシステムとしての予防接種施策』（明石書店）を読んで、ワクチン被害の考え方を学んだところだが、薬害エイズ、水俣病、福島子ども甲状腺がんなど、その根底にあるものは相似形だ。どうしてこんなふうになってしまうのか。命を大切にするということと自然を大切にするということは同一線上にあって、経済優先とは相反するのだろう。國部克彦（2022）『ワクチンの境界―権力と倫理の力学』（アメージング出版）によれば、種痘の歴史研究から「百分の一の倫理」ということが言われるようになったそうだ。一人の命は百人の命と比較できないという意味である。12 年にわたって東北に学ばせてもらったことは、まさにそのことだった。今こそ、土地に根差した暮らしや土着性を取り戻すことが必要なのだと思う。



準備

宮古もオンラインである。今回も担当院生 3 名と企画委員会を立ち上げ、2 回の準備会を持った。オンライン・イベントの開催も少しずつ慣れてきて、新たなアイディアも出てきた。今回、全体像の紹介は企画委員によって準備された動画をオンデマンド方式で参加者に見てもらうことができるようにしたこと、バーチャル・フィールドワークとして、現地の様子やメッセージを動画で流したことである。工夫できることはいろいろある。災厄は創造力を引き出すものだ。

オンデマンド方式の紹介では、岩手県におけるプロジェクトの経過、初年度は遠野、二年目は大船渡で開催し、三年目に宮古に行きついたこと、また先輩たちの活動報告から現地の様子や変化、共催団体、協力団体のことや会場となった場について、プログラムやフィールドワークの紹介があり、とてもわかりやすく、見ていて懐かしかった。担当院生たちも、現地に行くことはできなかったが、先輩たちの報告を辿るなかでイメージが広がったことだろう。企画委員たちのまとめの言葉である。

10 年間プロジェクトを続けることの意味が記録から伝わってくる。「年輪のように毎年毎年の積み重ねによってプロジェクトが育つ。」「さまざまな『事実』を身体で『知る』ことが、現地に行くことの意義なのだろう。」「積み重ねることで得る信頼関係、安心感、そして、広がっていく輪を参加することによって感じることができた。その土地を知る。」東日本大震災を風化させてはならない。田老地区の強い防災への意識から学ぶことが多くあり、私たちがつなげていかなければならない。故郷の歌、物語、食文化、大切にしたいことが、岩手にたくさんある。調べていると、宮古（岩手）で実際に人と出会い、見聞きしている先生や先輩方がうらやましくなってきて、宮古への思いが募ってきた。

オンラインでも十分に現地への思いをつなぐことができるのだ。



11 月 7 日（土）10：30〜11：30
遠野の民話を味わおう

最初の企画は、大平悦子さん（遠野市出身、日本民話の会）による「遠野の民話を味わおう」だった。鵜野さんが聴き手となり、遠野に伝承されてきた昔話を遠野の言葉で語ってもらった。

全部で 5 つの語りを紹介してくださったが、楽しい民話から始まって、過去の飢饉を題材にした遠野物語第 53 話「郭公と時鳥」や第 99 話「大津波」など、この地域が幾度も自然災害に見舞われてきたことがわかる。民話には過去の事実が地続きで伝承されており、語り手である大平さんが、人々の東日本大震災の被災経験を聞くなか

で、話の解釈が変化していったというエピソードも興味深い。

バーチャルで語りの素晴らしさがどれほど伝わるのか懸念もあったが、大平さんの語りは、そんなことを忘れさせるような素晴らしいもので、参加者の皆さんは、「『きいておくれんせ』から始まる大平さんの語りは、遠野のことばが耳に心地よく、目の前にその情景が浮かんだ」「大平さんの暖かい方言で語られる民話をお聞きした。慣れ親しんだことのない方言のはずなのに、とても優しく耳に馴染み、懐かしい気持ちになった」とそのままに受け留めてくれたようだ。いつものように、パチパチと火が音を立て、煙がくすぶる囲炉裏の前でお話を聴くに勝るものはないが、バーチャルで聞く民話も案外と良いものだと思った。





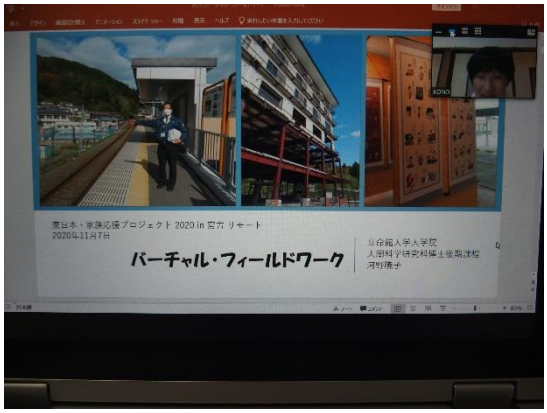
11 月 7 日（土）13 時-14 時半
バーチャル・フィールドワーク

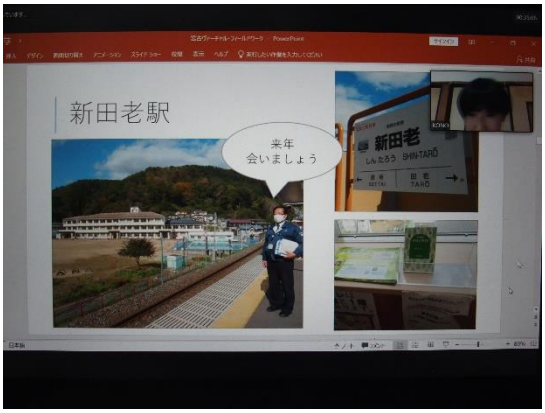
午後のプログラムは「バーチャル・フィールドワーク」と称し、河野暁子さんが現地で撮影した写真や動画を交えながら、宮古の町の様子を紹介してくれた。齊藤清志さん（田老総合事務所）、佐々木純子さん（田老学ぶ防災ツアー）、佐藤芙生子さん（宮古市市民交流センター）からのメッセージに、漫画展の様子を見て、まるで宮古に行ったような気分になった。現地の動画を共有することで、現地を知らない院生たちにもその場の雰囲気が伝わり、これまで行ったことのある者には、現地とのつながりを再確認する懐かしい時間となった。今後のプロジェクトの展開にも、いろいろヒントを与えてくれそうだ。

佐々木さんの「ツアーで語るのは悲しい話だけれど、伝えていきたい。ツアーで沢山の人と出会えたことが財産だ」という言葉に、また田老まで行かなければと思う。コロナ禍で、県内の子どもたちの訪問が増えたそうだ。

後半は、河野さんが研究テーマでもある「大船渡の祭りに見る震災からの復興過程」について話してくれた。

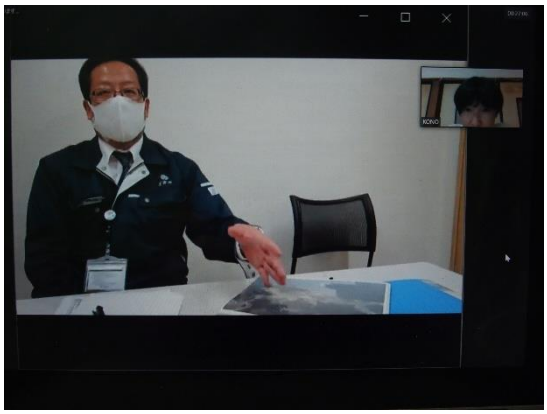
参加者からは、「実際に現地に行っている感覚に陥りました。インタビューの様子から現地の方の気持ちが伝わり、胸に迫るものがありました。」「現地に行っていないのに、本当に行ったかのような満足感でした。現地の方たちのメッセージを動画で撮影してくださったことによって、生の声が聴けて、その中から学ぶことがたくさんありました」などの声が寄せられた。リモートプログラムの可能性が、またぐんと広がった。

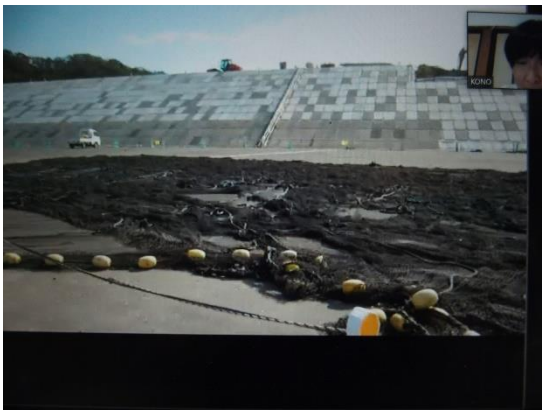

東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 宮古 リモート
2020年11月7日
バーチャル・フィールドワーク
立命館大学大学院
人間科学研究科博士後期課程
河野晴子

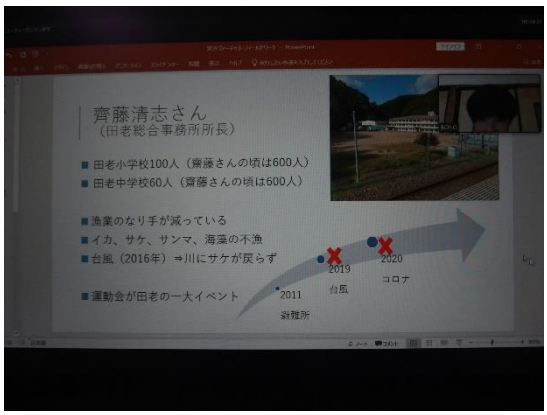

新田老駅
来年
会いましょう
新田老
しんたろう SHINTARO



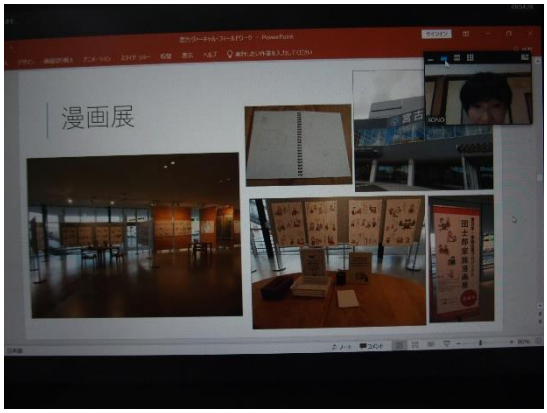







齊藤清志さん
（田老総合事務所所長）
■田老小学校100人（齋藤さんの頃は600人）
■田老中学校60人（齋藤さんの頃は600人）
■漁業のなり手が減っている
■イカ、サケ、サンマ、海藻の不漁
■台風（2016年）⇒川にサケが戻らず
■運動会が田老の一大イベント
2011
避難所
2019
台風
2020
コロナ







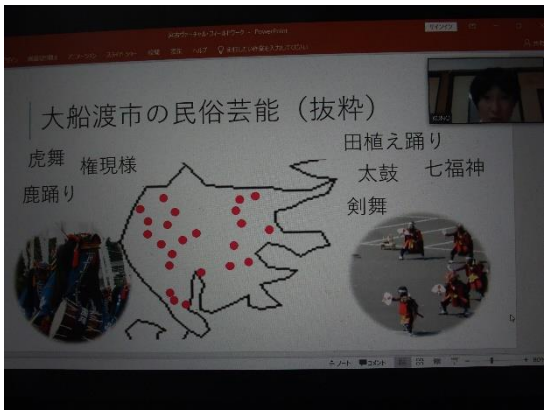


11 月 7 日（土）15 時-16 時
宮古の 9 年を振り返って

その後、「宮古の 9 年を振り返って」と題して、リモートで、鷺田敦子さん（社会福祉法人若竹会はあとふるセンターみやこ多機能事業所すきっぷサービス管理責任者）と佐々木伸子さん（宮古市地域福祉課）に、宮古の復興状況や現在の状況などについて話してもらった。

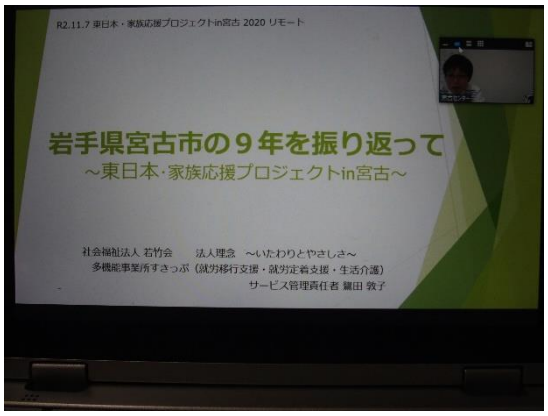
実際に宮古でプログラムを実施している時は、お互い運営に集中しているので、ゆっくりお話をお聞きする時間がなかなか取れなかったが、今回は「一市民として震災から十年を振り返って感じていること」や「支援者として経験してきたこと」をご自身の言葉で語ってくださった。これまでさまざまな葛藤を抱えながらも、その都度決断して前に進んでこられたことが伝わってきた。「離れているけど、震災のことを忘れないでいてくれる人がいることは心強い。だからこそ風化させないで、きちんと伝えていくのが地元に住んでいる者の責任である」と言う。

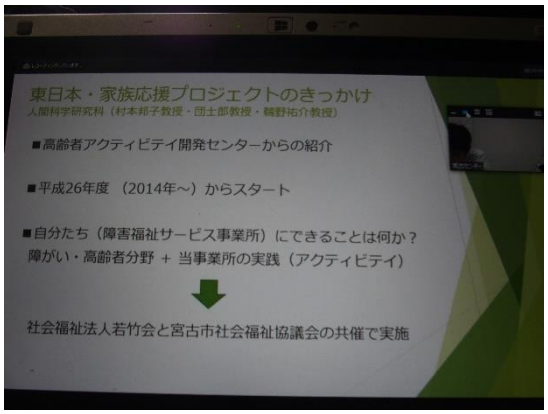
参加者からは、「支援者でありながらご自分も被災者であるという立場の方のお話を聞かせて頂けたことは、とても貴重な体





験となりました。自分自身も支援者として震災が起きたらどうすればいいのか考えさせられました」「現地の方の生の声はとても胸に響きます。震災当初からどのようにこれまでを生きてこられたのか、被災地の住民としても、また対人援助職に携わる者としても、様々な思いを抱えてこられたことが伝わってきました」など、それぞれに考えることは多かったようだ。







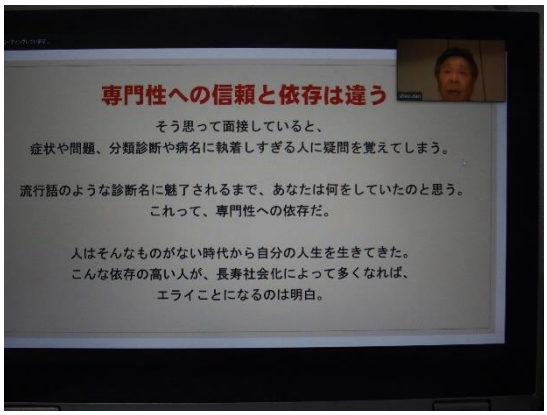


11 月 8 日（日）10 時半-12 時
団士郎　漫画トーク

11 月 8 日(日)午前は、団士郎さんの漫画トークだった。「アースカラー」と「ソロ泊」という二つの作品をもとに、ブレイクアウトルームで感想をシェアした後、団さんのトークが続く。ブレイクアウトルームを使ったバズセッションは結構評判がよく、普段出会わない遠方の人と一緒になるなど、偶発的な組み合わせが面白い。

現地の参加者から、「いつも楽しみにしています。主体的に生きることの大切さを、改めて感じることのできるお話でした」「団先生の話を聞いていると、いつも元気になります。自分自身の考え方を見直すいい機会になっています。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました」「今回参加させていただくのは 3 回目ですが、毎回聞いて良かったと思えるお話です。漫画自体もそうですが、その前後の団先生のお話はとても面白くて興味深く、自分の今後につながるお話ばかりだと感じます」と喜んでもらっていることが伝わり、こんな形でも継続できてよかったとあらためて思う。





11 月 8 日（日）13 時-13 時 40 分
宮古の歌と紙芝居ライブ

午後は、宮古市在住のミュージック・パフォーマー尾林星さんによる宮古の歌と紙芝居ライブだった。星さんは、ずっとプログラムに協力頂いていた NPO 法人「輝きの和」代表・須賀原チエ子さんの義理の息子にあたり、2016 年と 2017 年にもプロジェクトに参加してくれていた。星さんは、サプライズで、浄土ヶ浜からのライブを試みてくれようとしていたが、電波の状況が悪く、車で自宅に戻ってのオンラインとなった。浄土ヶ浜ライブが叶わなかったのは残念だったが、星さんの気持ちがありがたい。

紙芝居は民話を題材にした「しろこ地蔵」で、歌は、宮古の郷土菓子「すっとぎ」「ひゅうず」の作り方を歌ったものや、宮古をテーマにした「カラフル MIYAKO」など全 6 曲のオリジナルだった。2017 年に魚菜市場でプログラムをやった時に、「すっとぎ」の曲が市場に流れたのを聞き、お菓子屋さんが、「これがすっとぎだよ」とお菓子を持ってきてくださったことが懐かしい。「すっとぎラブストーリー」の歌詞はこんなふうである。

すっとぎすっとぎすっとぎのストーリー
青大豆を洗って　一昼夜水につけおき
沸かしたお湯に塩ひとつまみ
大豆を入れて強火

すっとぎすっとぎすっとぎのストーリー
アクとりながら 7 分　柔らかくなったら湯を切る
ボウルに水張り　大豆ボッチャン　素早く洗って冷ます
別のボウルを用意して　うるち粉　砂糖　塩を混ぜ混ぜ
冷ました大豆をすりつぶしてボウルの中身と混ぜて混ぜて
もう一回すりつぶしてコネコネ
生地を分けましょう 300g
直径 5cm ながさは 20cm
好みの厚さに切り分け
ほら完成　We have Suttogi

星さんは、2013 年、関東から宮古に移り住んできたそうである。そして、「カラフル MIYAKO」を書いた。

未来の種を　いっぱいまいて
芽吹いて咲いて　みのり分け合う

海風かおる　港に立てば
森の子供が　手をふる MIYAKO

何もないとこから　始めるのは恐いけど
じっとしてられない　今日は一度
何か動いてる　誰かが呼んでいる
そっとよりそうように　耳をすませて

必死にサケが　川を登って
命の限り　光を運ぶ
恋人たちも　動物たちも
夕凪の中　手をふる MIYAKO

遠い昔のこと　僕らのご先祖さまが
植えた花の匂いを　嗅ぎながら
どうか隠さないで　もえるような想いを
ちゃんと伝えたい　心尽くして

未来の種を　いっぱいまいて
芽吹いて咲いて　実りを祈る
日の出と共に　目を覚ましたら
手をふる太陽　パワフル MIYAKO









参加者からは、「星さんの歌に元気づけられました。歌詞からも宮古の情景が伝わってきました。ありがとうございました」「地元の人間でありながら、地元の良さを再確認できました」「とても素敵な企画でした。すっとぎの歌が頭から離れなくなっています。すっとぎを食べてみようと思います。星さんの歌を生でぜひお聞きしたいです。ありがとうございました」など、多くの声が寄せられた。





11 月 8 日（日）14 時-15 時
支援者交流会

その後、プロジェクトメンバーと若竹会の鷺田さんや宮城民話の会の加藤さんを囲む交流会を持ち、これまでのプロジェクトを振り返り、来年度の開催のあり方や、十年が終了したその後の取り組みについてのアイディアを出し合った。オンラインの可能性について積極的な意見が多く、同じくらい「やっぱりリアルで会いたい、現地に行きたい」という声があった。他の災害地域とつながる機会を持ったり、東北 4 県民話語り合いなどもできないかと、11 年目以降のアイデアがたくさん出た。

「土地の力」を知ること、「遠くのゆるやかなつながり」は大災害の時に効力を発揮する。そんな力となる継続の可能性を考えたいと思った。

コロナ禍でこのような形の開催となったが、現地へ赴かずとも、民話、語り、風景、歌などを通じて宮古を味わい、深く知り、繋がりを感じられる豊かなプロジェクトだった。十年の節目を迎えた後に、このつながりをどういう形で継続していくかという問いに、このコロナ禍がもたらしたオンラインというツールを駆使した 2020 プロジェクトがおおきなヒントを与えてくれた。



つづく

精神科医の思うこと㉗

こころに残る患者さんの言葉

松村　奈奈子

秋も深まって、京都は観光のお客さんでいっぱいです。やっぱ紅葉キレイです。

美しい紅葉をみると、京都に就職して間もない頃、大阪生まれで大学は関東で過ごしたので、京都の事を知らなかった私に、「京都の紅葉は東寺がおススメやで」と教えてくれた初老の患者さんの言葉が、思い出されます。研修医でバタバタしていた私に“ちょっと休息しといでや”という優しい思いもあったのかもしれません。そのあと東寺の紅葉を見に行って、ほんと癒されました。今年も東寺の紅葉はキレイです。

医師としてお薬や治療についてお話しするのは私の仕事ですが、患者さんからふと人生のアドバイスをもらう事があり、それは特に若い頃は多かった様に思います。

お話をする仕事なので、プライベートで人に会うより、患者さんとお話しする時間の方が長いです。なので、そんな出会いの中で、教えてもらった事はたくさんあり、今回はいくつかそんなお話を。

研修医の頃は、ほんといろんな患者さんに声をかけてもらいました。うつ病のおばちゃん達は口をそろえて「ちゃんとデートしてるか」「一度は結婚しときやー」と笑ってアドバイス。いやー、恋人いないのしっかりおばちゃん達にバレてました。

若い女性の患者さんが、素敵なお相手と結婚することになって治療が終了する時は、思わずこちらから「何かコツは？」と聞いてしまいました。「先生、たくさんの男性に会う事やで」「合コンは数をこなすと、いつか理想の男性とあえる」とありがたい助言いただきました。そういえば、この患者さん「たくさん合コンに行ってるなー」と思ってました。私も婚活時はこの言葉を信じて頑張って、今幸せに暮らしております。今は、コロナで合コンもなくなり婚活アプリがメインな時代になってしまいましたが、懐かしい思い出です。

高齢の夫婦で、ほんといい関係だなぁと感じる時は、「仲いいですね、コツはなんで

すか」といつも聞いてしまいます。すると、高齢女性はみんなニヤッと笑い、口をそろえて「男は手のひらで転がすのよ」と話します。世間でもよく聞く言葉です。現実に夫婦と一緒に診察で会話すると、夫婦の真の関係が垣間見えて、「手のひらで転がせる」とはどういう関係なのかがよくわかります。それは、男性が手のひらで転がる状態で維持するよう関わるのが、コツなんだなぁと思います。これ、なかなか難しいです。仲違いしている夫婦を診る事も多いので、この違いは「なるほどー」と思います。仲違いしている夫婦は、強引に相手を動かす感じが強いです。本当に仲のいい夫婦は、ちゃんとケンカもして上手に仲直りできるカップルです。「手のひらで転がせる」という本当の意味を、結婚してからじわじわ実感しています。日々思い出すありがたい助言です。

でも、一番忘れられないのは、研修医の頃に会った男性の言葉です。男性は私の担当患者さんではなくて、隣の病棟の神経内科の患者さんでした。いつも男性は車いすに座って、玄関やテラスに出て、独りでじっと風景を見て過ごされていました。なんだか気になって、声をかけると楽しそうに雑談をされるので、時々テラスで話をするようになりました。神経内科の担当医とは仲が良かったので、男性の病名が ALS（筋萎縮性側索硬化症）と聞いていました。筋肉が萎縮して、呼吸する筋肉が萎縮すると厳しい状態になる難病です。担当医に、男性と時々雑談をしていると伝えると「ありがとう、難しい病気だし、よかったらこれからも話を聞いてあげて」と話します。

その日は、夕陽のきれいな日でした。病棟に向かうテラスで男性から声をかけられました。「もうすぐ退院して、いったん家に帰るんや」と話します。「そうですか、お話しできなくてさみしくなります」と私は横のベンチに腰かけました。するといつもの明るい話をする男性とは違ってしんみりと男性は話を始めます。

「ずっとトラック運転手をしてたんや。60 歳で引退したら嫁と旅行に行こうと思って、頑張ってきたんやで」「仕事、ほんま辛かったこともあってな」「昔な、嫁が浮気しよったんやけど、でも将来一緒に旅行に行こうって事になって、許したんや」「ほんなら 60 歳になって、こんな病気になってしもて、旅行、行かれへん」「なんやったんかなって思う」と男性はぽつりぽつりと話します。男性の目にはうっすら涙がありました。しばらく、二人で夕陽を眺めた後、男性は「やりたいことは我慢したらあかん」「できる時にした方がええ」と最後に私の目をみて言いました。

この直後、この話を大学時代の旅行仲間だった内科の先輩にしました。「そうなんだよねーつい最近の事なんだけど・・・」「友人が・・・勤務中に目の前で上司が心筋梗塞で倒れて亡くなってね」「その後、すぐ仕事を辞めて夢だった海外語学留学に行っちゃったんだよねー」と話します。目の前で突然に人が亡くなるという体験で、悔いのない生き方とは何かを、考えたんじゃないかなぁと。「悔いのない生き方」って、なかなか難しい選択です。職場や家族との関係も大きく影響します。何を選択するかは、いろい

ろあると思います。

成績も優秀だった先輩は、その数年後、最前線の救急医療から緩やかな勤務の病院に転職しました。先輩は、再びゆっくり旅行にいける生活を大事にしたかったと話します。

私も、なにかあるたびに「やりたいことは我慢したらあかん」「できる時にした方がええ」の言葉を思い出します。元々、「石橋をたたいて渡る」ちょっと臆病なところもあった私ですが、「悔いのない生き方」とふと考えた時、一歩がすっと出るようになったと思います。いつも、あの時の男性の言葉に、後押しされている気がしています。

患者さんに限らず、私はお会いした人からは、お話をしている中で何か教えてもらっているんじゃないかと思います。もちろんこの仕事、たくさんの人と話す仕事なので、教えていただく事、多いです。人と言葉を交わすことで、相手の人からいろんな事を我々は学んでいるんだなぁと思います。

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

褒めてのばす（豚もおだてりゃ木に登る）

下の兄が２歳の時の話、名前は（芳道･ヨシミチ）、家族は「ヨッさん」と呼んでいた。
昭和18年（1943年）、時代は戦時中、父は終戦までの約２年間、徴兵され神戸の高射砲部隊の二等兵として苦渋の従軍生活をしたが、その直前の話。



※ 窓枠縦棒の隙間から瓦屋根の上に出て得意満面のヨっさん、脅かさないように近づく父

ヨっさんは好奇心旺盛な子どもで目を離すと絵の具や膠・ニカワ（日本画絵具のメディウム）の入った皿に手を突っ込んだり、その手を口に入れたり一瞬も目をはなせないイタズラ坊主。
初夏の季節、二階の画室の窓を開け放し仕事をする父の横でヨッさんがいつものようにゴソゴソ一人遊び。
父が汚れた筆のたばを洗いに階下に降り、ついでにトイレに寄って戻って来ると、アレレ？ヨッさんがいない。
仕事場の四畳半、隣室の三畳間、その向こうの物干し場、どこにもいない。
「どこに行った!?」、押し入れの布団のすき間にでも隠れて遊んでいるかと「ヨシミチやーい」とのぞき込んでも返事はない。
とその時、後ろから「オトータン」呼ぶ声がする。
ヒョイとふりかえると、窓のそと、屋根瓦の上に仁王立ちし、傾斜した瓦屋根を滑り落ちるのをたえるように両手で窓枠の縦棒を握りしめている息子の得意満面の笑顔とはちあわせした。
「アブナイ!」
喉まで出かかった叫び声を飲み込み、とっさの機転で父は満面の笑顔で「ホォーホォー すごいなぁ ヨッさんすごいなぁー」と、小さな頭が通り抜けられる窓枠縦棒の間隔を呪いながらも、ヨッさんが何かの拍子に縦棒を握った手を離さないことだけを祈りながらゆっくり近づいていった。

子どもはほめられるとぐんぐん元気になる。幼くても叱られてるのか、ほめられてるのかよく知っている。イタズラをした時、いきなり叱ると、子どもは叱られた恐怖心と驚きに思考停止のパニックを起こし、その結果叱った大人を後悔させる。
逆に大人が、その子のユニークな個性のなせるワザと、あえてマイナス面に目をつぶり褒めてやると、子どもは達成感や充実感を強く感じ前向きな気持ちに満たされ元気になる、褒めてのばす。
得意満面の笑顔のヨッさん！
「パッ!」電光石火、窓枠の縦棒をつかむ小さな両手をつかめたその瞬間、父は兵隊にとられる自分のことなど忘れて心の中で神さまに感謝の言葉をつぶやいたにちがいない。

やぶにらみ日記 （515）

東成区の昭和

（57）写生









やぶにらみ日記 （516）

東成区の昭和

（58）写生









やぶにらみ日記 （517）

東成区の昭和

（59）写生



やぶにらみ日記 （518）

東成区の昭和

（60）写生



やぶにらみ日記 （519）

東成区の昭和

（61）写生



やぶにらみ日記 （520）

東成区の昭和

（62）写生



やぶにらみ日記 （521）

東成区の昭和

（63）写生



やぶにらみ日記 （522）

東成区の昭和

（64）写生



やぶにらみ日記 （523）

東成区の昭和

（65）写生



やぶにらみ日記 （524）

東成区の昭和

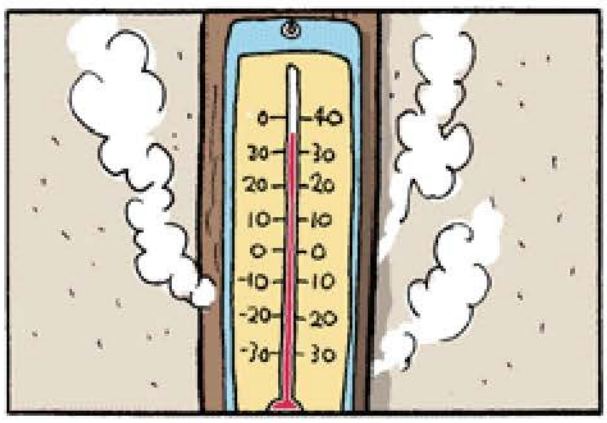
（66）写生



やぶにらみ日記 （525）

東成区の昭和

（67）写生









やぶにらみ日記 （526）

東成区の昭和

（68）写生









やぶにらみ日記 （527）

東成区の昭和

（69）写生



やぶにらみ日記 （528）

東成区の昭和

（70）写生



心理コーディネーターになるために Vol.9

山下桂永子

☆破壊されたブラインド



週4日行われる適応指導教室のスタッフ打ち合わせ。朝は数分の短い打ち合わせなので、事務所に近くて他の相談室よりも広いプレイルームで立ったまま行うのが常である。その日もいつものように今日の活動予定など聞きながら、なにげなく窓の方に目を向けた。

ん？何かおかしい。窓際のブラインドがいつものように外からは見えないように閉じられているのだが、何かいつもと違う。閉じられているのに外が見えている。「ああ？」思わず声が出る。数人の視線が私に集まる。「あ、すみませんなんでもないです」と打ち合わせを続けてもらうよう促し、打ち合わせが終わったと同時に「あのブラインドなんかあちこち壊れてません？前からでした？」と誰にともなく声をかけた。

「あれ？ほんとですね、プレイセラピーでボールぶつけたりしたのかな？」「トランポリンを立てかけたりしてるところも折れてますねえ」「換気するときにこの隙間から手を入れて窓開けてましたけどそれもダメだったかなあ」など数人の相談員でわらわらとブラインドのそばに集まってあれやこれやと確認。

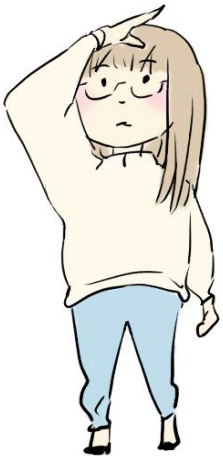
教育センターに引っ越してきて 10 年、プレイルームに設置されているブラインドはアルミ素材なので少し折れ目が出ている程度はこれまでもあったと思うが、それにしても先月ぐらいまでは、こんなにあちこちアルミ板が外の景色が見えるほど折れ曲がって下がっているなんてことはなかったはず。ブラインドの隙間から見えるのは、仕切りのフェンスと、隣の公園との間にうっそうと生えた木々。基本的には人もあまり通らないのでそこまで気にすることはないかもしれないが、なんだか薄暗い雰囲気なので、あまり気分が晴れる景色ではない。勝手に森の中の廃墟をイメージしてしまった。

「うーん。とりあえずどういう理由でこうなったのか、わかる人がいたら山下に教えてください。修理するにしても買いなおすにしても同じことが起きたら意味ないし、このまま放置も子どもが手を突っ込んでケガとかしたら危ないんで」と数人の相談員にお伝えして部屋を出る。

☆されどブラインド

最近は、私自身が保護者面談が多く、面談でプレイルームを使用することがなかったから気づくのが遅かった。あるいは普段使っている人ほど気づかないうちにひどくなっていったのもあるかもしれない。「これが割れ窓効果ってやつかあ。。。」とつぶやきながら自分の席に戻る。

「コロナで換気するから絶対必要って言ってお願いした検査室の網戸ですら、なんやかんやで半年以上かかったもんなあ。ブラインドなんて１年以上かかるんちゃうか。。。」修理にしたってお金がかかるようなものであれば勝手にやるわけにもいかないし、だからって放っておくわけにもいかない。このままでは、プレイルームを使う子どもと相談員の安全が心身ともに保たれない。これは心理士（師）が行う教育相談にとっては死活問題である。たかがブラインド、されどブラインドである。



☆大いなる壁

さて困った。もうそこからは面談や事務作業をしつつも、壊れたブラインドのことが頭の隅から離れない。数百円のおもちゃや教材程度の消耗品ならいざ知らず、おそらく数千円から数万円するような備品を買いなおすなんて、簡単なことではない。簡単じゃないどころか至難の業である。

心理指導員になって初めて知ったのだが、消耗品と備品の間には大いなる壁が立ちはだかる。消耗品ならば、それほどの手間（それでもいろいろ手間はある）はかからず、事務員さんや上司のお手数をそこまでかけずとも（そこまでじゃなくてもお手数はかける）買ってもらうことはできる。しかし備品となるとそうはいかない。備品は値段の高さはともかく、予算にもともと組まれていないものは、買うのも設置するのもものすごく手間とお手数をおかけするのである。

さらに時間もかかる。上司にかけあって、予算を市にあげてもらって議会通してもらって、業者を選定してもらって、買ってもらって、設置してもらって、その間の全ての手続きに聞いたこともないような名前の書類を膨大に積み上げてもらわなければならない。



そしてその膨大な書類と事務作業をしていただくために、ブラインドを買い替えるに値する論拠を示さないといけないのである。心理職や対人援助職相手なら、「セラピーの心理的な安全性の確保」とか言えば話は通じる（ことが多い）。しかしそれを心理職以外の人が聞いてすぐに納得してもらえる確率は低い。心理の専門用語は一切使わずに言葉を尽くして説明し、納得してもらわなければならない。

最近でこそ、一緒に働いて数年以上の指導主事やいつも助けて下さ

る事務員さん(Vol.8 参照)であれば、納得していただけることは多いが、それでも書類を作っていただくためには、かなり丁寧に必要性を説明していく必要がある。

☆壊れた原因と修理

そんなことをあれこれ考えながら頭を抱えていた数日後、ブラインドが壊れた原因は判明した。やはりプレイセラピーでドッジボールをしていたときに、ボール(柔らかいタイプではある)が勢いよくあたってブラインドのアルミに折れ目がついたとのことだった。申し訳なさそうに謝る相談員の方に「謝る必要はないですよ、物が壊れることは仕方ないことです。これからは気が付いたらその時に言ってくださいね。」と極力明るく返したのだが、よっぽど責任を感じておられたのだろう。次の日にその相談員の方は、私や他の相談員が知らない間に、時間をかけて折れ曲がったブラインドのアルミの板を、一枚一枚指で押さえて平らにして、ほぼ折り目が目立たなくなるまで元通りに修復してくださったのである。

☆心理指導員として気づいたこと

後日、相談員の打ち合わせでブラインドが壊れた原因について報告し、今後何か対策がないか、アイディアを募ることにした。すると別の相談員が、「僕は、ボール使うときはそれとなく自分の立ち位置をブラインドのない壁側にして、自分が投げるときはブラインドにあたらないようにはしていましたね」とおっしゃった。

そうだ。プレイルームでボール遊びをするのはよくあることだし、なぜ今まで 10 年以上壊れていなかったのかと言えば、それぞれの相談員がそれなりに工夫はしていたからだ。その相談員の工夫の積み重ねで教育センターの教育相談は成り立っている。そしてその工夫の積み重ねを言語化して共有していくことも心理指導員の勤めになるのだろう。

プレイセラピーで、相談員が子どもの遊びや表現に寄り添うことと、心理指導員として、ブラインドが壊れないように相談員の動きに制約を加えることが何か相反するような気がしていたけれどそうじゃない。プレイルームの備品が壊れないように工夫することは、セラピーの心理的な安全性を確保するためにも必要なことなのだなと改めて気づかされた出来事になった。

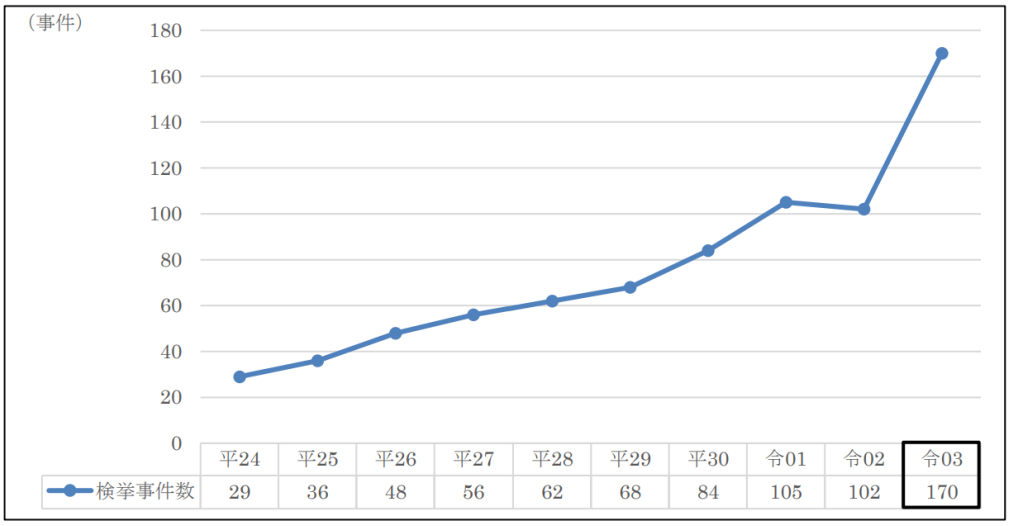




動物虐待

日本において、動物愛護に関する意識や関心は年々高くなっているような気がします。それを裏付けるように、５年を目安に見直し検討をされている動物の愛護および管理に関する法律は、見直し改正の度に愛護動物への遺棄虐待行為に対する罰則は厳しくなっています。それに伴い、警察が公表している動物虐待事犯（動物愛護管理法第 44 条違反に係る事犯）については、近年増加傾向にあったところ、昨年の令和３年は大幅に増加していました。虐待された被害動物は、猫が 95 件で最も多く次に犬で 60 件、他、馬やインコ、フェレットが対象だったそうです。

図表 18　過去 10 年間における動物虐待事犯の検挙事件数の推移



	平24	平25	平26	平27	平28	平29	平30	令01	令02	令03
検挙事件数	29	36	48	56	62	68	84	105	102	170

令和３年における生活経済事犯の検挙状況等について（警察庁生活安全局生活経済対策管理官　発行）P.20 図表 18
https://www.npa.go.jp/safetylife/seikeikan/R03_seikatsukeizaijihan.pdf（2022.12/1 アクセス）

検挙数が大幅に増えたと言っても年間 170 件程度ですので、これは氷山の一角がちょびっと出てきたにすぎない程度だと思います。動物虐待が増えているのではではなく、事件化されることが少しずつ増えてきたという状況です。その背景には、動物虐待事件に対してはまだまだ腰の重い警察をなんとか動かそうと努力してきた、現場で活動する方々の積み重ねがあると思います。ねこから目線。でも、こういった事件を事件として認知してもらうための努力をするように心がけています。対人援助学マガジンでも以前に動物遺棄事件のルポを書きました。今回は、ねこから目線。で関わったトラバサミを使用した動物虐待事件について書いてみようと思います。

トラバサミの被害にあったノラ猫さん執念の保護捕獲

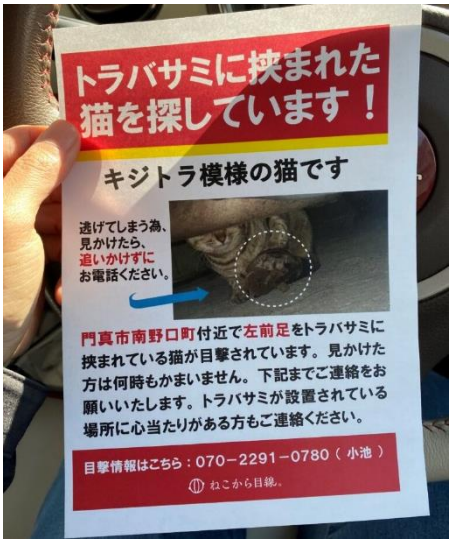
２０２１年１月 19 日にねこから目線。に衝撃的な内容のお問い合わせが来ました。「捕獲の相談なのですが、土曜日の朝に自宅敷地内にトラバサミが挟まった子が居ました。土曜日、翌日の日曜日と、捕獲を試みたのですが捕まえることができません。捕獲器を借りて設置してみたのですが、昨日は来なかったようです。いつどこに来るかも分からないのですが、こういった場合でも捕獲をお願いすることはできますでしょうか？」



一緒に送られてきた写真には、左前足をトラバサミに挟まれた猫が写っていました。基本的にトラバサミの使用は許可が無い限り違法です。現場は畑も無い住宅街です。故意に猫を狙って仕掛けられた可能性が高いと思いました。
どんなに痛いだろうか・・
すぐに電話をさせてお話しさせていただきましたが、費用のこともあるので、あと数日借りた捕獲器でチャレンジしてみて、ダメなら依頼したいとのことでした。この時点でトラバサミに挟まれてから少なくとも 4 日経っていますし、トラバサミをぶら下げた状態で通常タイプの捕獲器にうまく入るのか不安もあったので、「それなら費用は要りませんので、今晩お伺いしていいですか？」と提案させていただき、その日の 18:30 に現場にお伺いすることにしました。

ねこから目線。は完全有料のお手伝い屋さんです。「費用はいらないからすぐ行く」という決定をすることが時々あるのですが、そんなことを続けていてはすぐに潰れるかもしれません。ですが、犯罪に巻き込まれている猫を見て、行ける距離と時間があるのに見て見ぬふりをするくらいなら潰れた方がマシかなと思いました。現場に到着し、最後に猫が目撃された場所に大型のトラップを設置。あとはひたすら現れるのを待ちます。

張り込み開始から約1時間後・・。「ギギギ・・ギギギ・・」とサビた自転車をひいているような音とともに、トラバサミに挟まれた猫さんが現れました！が、タイミング悪く人通りと車通りが重なり、走りさっていってしまいました。



結局、ねこから目線。のスタッフ梅さんと2ヶ所に分かれ18:30～翌朝8:30まで徹夜で13時間張り込みましたが、猫さんが再び現れることはありませんでした・・。翌日、翌々日と、他のご依頼が無い時間に体力が続く限り張り込みを行い、昼間には目撃情報求むのチラシを周辺240件にポスティングしました。240枚分のチラシのカラー印刷はのらねこさんの手術室さんが協力してくださいました。なるべく時間を見つけては現場に行き、6日間でスタッフ小池と梅本2人合わせた張り込み時間は50時間に達しました。仕掛けっぱなしのカメラにもターゲットの猫さんは映っておらず、まだ生きていてくれるのか不安になってきました。それでも、生きていると信じて捜索し続けるしかありません。大型のトラップで張り込み捕獲をする場合、トラップを操作する目的と音を聞く目的で、隙間が必要なので、車の窓を開けた状態で身動きせずに、極寒の中待ち続ける過酷な仕事です。通常業務をこなしながらの中で、私も梅さんの体力的にもはかなりキツイ状況でしたが、気になって仕方がないので精神的には休むよりは動いた方がラクだということで隙間の時間があれば現場に足を運ぶようにしていました。

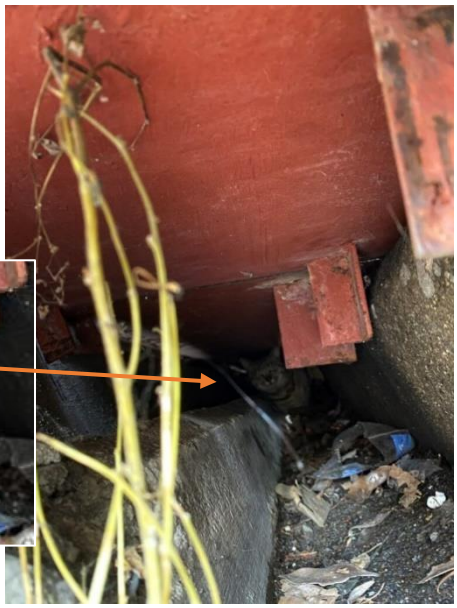
事態が動いたのは、雨が上がり急に暖かくなった7日目のお昼でした。

「トラバサミの子が居ました！」

と相談者さんから連絡が入りました。梅さんが急いで現場に向かいます。到着した頃には、猫さんはすでに逃げていってしまったとのことでした。まだ近くに居るはずだと周辺の側溝という側溝を片っ端から確認する梅さん。







そして目撃現場からすぐ近くの側溝の中で身を潜めている猫さんを執念で発見！！

梅さんナイスです！！！！側溝の場合、途中に水路に繋がる道がある場合が多いので、慌てて両端を封鎖してしまうとかえって逃げられてしまったり、危険な場所へ追い込んでしまう可能性があるので注意が必要です。私は免許の講習会の真っ最中でしたが、急な腹痛ということで、後日続きの講習を受けさせていただく許可を取り現場に向かいました。梅さんと２人なら捕獲できる確信があったので現場に向かいながら警察に連絡し、現場に来てもらうよう依頼しました。



現場に合流し、捕獲方法を考えます。溝から猫さんが飛びだした場合、開けた道路を突っ走っていく可能性よりも家と家の隙間に走り込む可能性が高そうだなと思いました。そこで側溝から出てすぐの赤い矢印の路地に捕獲器を４台敷き詰め、ここに飛び込んだら捕獲器の中に入るように設置しました。万が一道路側に飛び出してきた時に備え、梅さんは猫用の網を持って待機です。準備が整ったところで、反対側から徐々に動くよう誘導します。そして・・



ダッと飛び出した猫さんは一直線に捕獲器ゾーンの中へ！！無事保護完了です！！
トラバサミに挟まれてから少なくとも９日。手の状態はかなり悪くなっていました。捕獲後、すぐに警察も到着し、現場と猫さんを確認してもらいます。警察が猫さんの写真を撮影する時にはトラバサミに挟まれていた手先が千切れてしまっていました。無事保護できて本当に良かったですが、もっと早く保護してあげることができればと悔やまれます。



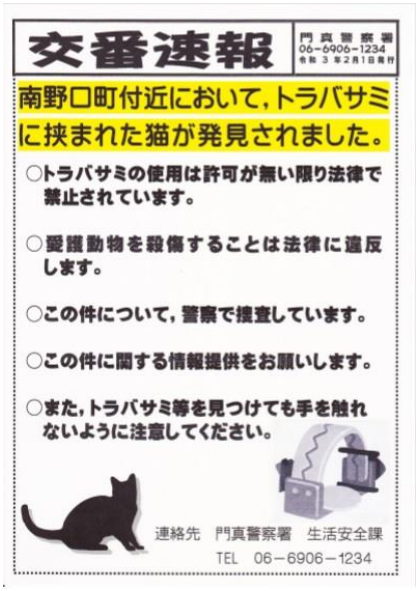
急いでのらねこさんの手術に搬入しました。状態としては脱水が酷く、かなり痩せていたため、当日は応急処置として傷口の洗浄と消毒、補液などをしてもらい入院になりました。血まみれの錆びたトラバサミは後日、証拠品として警察に提出しました。

入院から４日後、無事断脚手術も終わりました。術後はとても良好で、順調に回復していってくれました。相談者さんのお家に時々ご飯を食べに来ていた猫さんだったことも分かり、医療費は全額相談者さんがご負担くださいました。また、相談者さんがこまめに病院に面会に来てくださり、退院したら家族として迎える決断をしてくださいました！「カナメくん」という素敵な名前をつけてもらい、今ではすっかり飼い猫になっています。





カナメ君、元気になってくれてありがとう。カナメ君が保護されて良かったね、めでたし、めでたし。ではありません。愛護動物を殺傷することは、動物愛護法違反です。許可なく緩衝材の無いトラバサミを設置することは、鳥獣保護法違反です。初日に現場に駆けつけてくれたものの、その後連絡が無かった為、担当の警察署に連絡をし、資料と証拠品をお渡ししたい旨を伝えましたが、初めは捜査のしようがないのでトラバサミも受け取れないとの回答でした・・。遺棄事件の時にも、警察の腰の重さは経験済みですので、きちんと証拠品としての受け取りと、周辺への抑止も兼ねた目撃情報を求める看板等の設置をお願いしました。


交番速報

門真警察署
06-6906-1234
令和３年２月１日発行

南野口町付近において，トラバサミに挟まれた猫が発見されました。

○トラバサミの使用は許可が無い限り法律で禁止されています。

○愛護動物を殺傷することは法律に違反します。

○この件について，警察で捜査しています。

○この件に関する情報提供をお願いします。

○また，トラバサミ等を見つけても手を触れないように注意してください。

連絡先　門真警察署　生活安全課
TEL　06－6906－1234

それでもなかなか動いてくれる気配がありませんでしたが、この事件を捕獲に入った段階から取材してくださっていた朝日放送さんが捜査の進行状況を警察に聞いたりと、別角度からのある意味の圧をかけてくださったことにより、「調書を取らせてもらいたいので、署まで来てほしい」という旨の連絡が入りました。そして、カナメ君が入院していた動物病院にも警察の方が足を運び、トラバサミは証拠品として受け取り、以下のチラシを警

察が作成し、該当の地域へ回覧し、警察 HP に掲載してくださいました。

動物虐待が起きることよりも、動物虐待が事件として取り扱われないこと、社会の中で話題にならないことに大きな不安を感じます。動物虐待が事件にすらならないから、社会の中で気軽に繰り返されるのではないかと思います。時間も労力もかかりますが、小さな事件を事件として認識してもらう努力をこれからも積み重ねていきたいと思います。

今回の一件はキャストの番組内で特集として放送されました。その内容が YouTube に上がっているので、よかったらご覧ください。出てくる被害猫たちは現在元気に暮らしているので、辛い内容が苦手な方でも見ていただきやすいように編集されていると思います。



https://www.youtube.com/watch?v=dDUTD1XOaOg

今回の捕獲についてはタダ働きとさせてもらったのですが、この内容をブログに書いたところ、読んでくださった方々が「よく頑張った！」と Amazon ほしい物リストから沢山の物資を送ってくださいました。なので、結果的に全く損していないどころか会社としては広い意味で得をした気がします。

NPO 法人どうぶつ弁護団が発足



今回のトラバサミの件は、メディアの協力もあり警察が動いてくださいました。ただ、いつもそういうわけにはいきません。告発状を作成して警察に提出するという方法もあり

ますが、一般人からするとハードルが高く感じます。かといって、弁護士さんに依頼をするとなると、費用も高額になる・・そういった様々な要因から虐待を目撃した人が声を上げにくい現状がありました。そんな中、有志の弁護士さんを中心に「NPO 法人どうぶつ弁護団」が発足しました。弁護士や獣医師といって専門家と連携し、被害に遭った動物に代わって告発状を提出したりしてくださるそうです。しかも、その際に情報提供者の費用負担はゼロ。どうぶつ弁護団が告発人となり対応していく素晴らしい仕組みです。ねこから目線。では仕事がら虐待被害に遭った猫と出会う機会が多くあります。同じ猫に対し目や口に釣り針が刺さるなどの被害が 3 回見つかった案件について、現場のボランティアさんが何度交番に足を運んでも取り合ってもらえなかった為、どうぶつ弁護団に相談したところ、告発に向けて必要なヒアリング内容の指示、病院の診断書の作ってもらい方など的確に指示をもらい、ねこから目線。で現場のボランティアさんへのヒアリングや証拠の確保など情報をまとめたうえで再度どうぶつ弁護団に提出しました。そして、先日の 2022/12/8 に告発状を提出してくださいました。プロの仕事に感動しました（笑）どうぶつ弁護団は、猫や猫と関わる人たちにとって、希望のどうぶつ弁護団は弁護士と獣医師の専門家チームですが、そこにノラ猫の捕獲や調査のプロとしてねこから目線。も全力で協力していきたいと勝手に思っています。
※勝手に思っているだけです。公式の提携先ではありません。



　どうぶつ弁護団の理事長である細川先生は、私が高校生の頃（14 年くらい前？）から度々アドバイスをいただいたりしてきました。どうぶつ弁護団の今後に期待を込めてマガジンの最後に紹介させていただきました！

特定非営利活動法人どうぶつ弁護団
https://animal-dt.org/

おわり



小池英梨子
ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～　代表
NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表
ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com

先人の知恵から
38

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

「さ」行がもう終わるところまで来た。やっと三分の一くらいか？少しずつスピードアップを目指そうと思ってはいるが中々思うようには進まない。先に掲載したものと同じような内容にならないように、チェックをするのがだんだん大変になってきた。それでも最後まで何とか頑張ろう。

今回は「せ」のところから以下の９つ。

- **千鈞の弩はけい鼠の為に機を発たず**
- **善言は布帛よりも暖かし**
- **前事の忘れざるは後事の師なり**
- **船頭多くして船山へ登る**
- **先入主となる**
- **善の裏は悪**
- **善は急げ**
- **千里の行も足下より始まる**
- **善を責むるは朋友の道なり**

＜千鈞の弩はけい鼠の為に機を発たず＞

大志を抱いているものは、小さな事には心を動かさないというたとえ。非常に重く強い石弓は、小さなハツカネズミを射るためには使わないの意から。弩い＝石弓、けい鼠＝ハツカネズミ。　出典　三国志

三国志を好きな人は多い。徳に、父親たちに通じやすい。母親が神経質ということはままあるが、最近はお子さんの細かいところを気にする父親も増えている。大したことでもない、ちょっとした小さいことに雷を落としていたら、子どもは小さいことに気を取られて、いつもびくびくしてしまうだろう。ちょっとしたことをするにも、戸惑って、進めなくなり、もっと新しいこと、大きなことにチャレンジする気持ちが育たなくなってしまう。委縮した子に

なってしまうだろう。子どもに大きな心で伸び伸びと生きていってほしいと思うなら、いざという時のために、父親からの強い叱責は避けてほしいという意味合いでこの諺を伝えている。

＜善言(ぜんげん)は布帛(ふはく)よりも暖かし＞

良い言葉は、身に着ける衣類よりも暖かい。言葉には人の心をあたためる大きな力があることのたとえ。　　出典　荀子

言葉の力というのは大きい。人を傷つけることも、人を元気づけることも、人を癒すこともできる。目の前の人にどのような言葉を掛けたらよいか、自分の子どもにどのような声を掛けたらよいか、あまり考えすぎれば言えなくなったり、言うタイミングを逸してしまったりするだろう。

温かい言葉、優しい言葉は沢山ある。普段からそういう言葉を沢山意識して、頭の中に蓄積しておくと、必要な時にすっと出てくるだろう。褒められるのが苦手な人が増えてきたが、照れくささはあっても、相手が本心から褒めてくれていたら、そこまで嫌な気持ちにはならないだろう。褒め言葉も、嘘くさい言葉ではなく、さりげない言葉の方が良いのかもしれないが、いずれにしても、人に温かい言葉をかけられることは、人との関係性を良くするうえでも必要だろう。それは親子の間でも同じである。かわいい服や、素敵な文房具を買ってあげるよりも、優しい、暖かい言葉の方が、子どもの心をほっこりさせるものだ。そんな意味を伝えたくて、この諺を紹介している。

子どもに対し、「有難う」とか「助かったよ」とか、「大好きだよ」「かわいいね」「すごいね」「頑張ったね」「上手だね」「良くできたね」など、暖かい言葉をもっともっと使ってほしい。

＜前事(ぜんじ)の忘れざるは後事(こうじ)の師なり＞

前にあったことを忘れないで心の止めておけば、その経験は今後事に当たるときの良い戒めや手本になるということ。

失敗は誰にでもある。まして、子どもたちはいっぱい失敗するし、失敗したほうが良い。ただ、失敗してもそれを無かったことにしていては、また同じことを繰り返してしまう。大人でもそれは同じである。また、成功することも多々ある。

一度やったことが、失敗であれ、成功であれなぜ失敗したのか、どうしたからうまくいったのかと考えることで、後々の自分の行動を助けることになる。失敗したことや成功したことを忘れずに、後々の手本としたり戒めとしたりすることが、人間を成長させる。

母親の子育てというのは、失敗の連続だと思う。子どもたちの行動も失敗の連続だったりする。そのことで気落ちしている母や子に対し、「失敗は成功の基」と同様にこの諺を使うこともあるし、「成功したから良い」のではなく、なぜうまくいったのか、なぜ成功したのかを一緒に考えることで、これからの過ごし方のヒントやモデルになるのだという意味でこの諺を使うこともある。

生きている以上、いろいろなことに出会う。失敗も成功も、自分の人生の糧にでき

ますように！

＜船頭多くして船山へ登る＞

指図するものが多くて統一が取れず、物事がうまく運ばなかったり、見当違いの方に進んでしまうことのたとえ。一艘の船に船頭が何人もいると船が山に登っていくような、考えてもみなかったおかしなことになるの意から。

これは良く知られているので、説明するまでもないかもしれないが、子どもが少なくなった影響もあってか、一人の子どもに対し、父母、祖父母、親戚のおじさんおばさん、いとこ、塾の先生、学校の先生、そしてカウンセラーなど、いろいろな人が関わるようになった。その結果、いろいろな人がまちまちなことを言ってきて、子どもが混乱したり、母親が混乱したりということが起こる。そんな時にこの諺を出す。

そして、子どもにも母親にも、相談もほどほどにして、自分がどうしたいかをしっかり見つめなおして考え、主張するようにと伝えている。

英語では・・・

Many dressers put bride's dress out of order.(着付け係が大勢いると、花嫁の衣装が場違いのものになってしまう。)

＜先入主（せんにゅうしゅ）となる＞

固定観念がつくられてしまうと、中々破りにくいということ。先に聞いたり学んだりしたことが頭にこびりついて、他の考えを受け入れず、自由な思考ができにくくなること。先入が主となり、あとから入ったことは従となるの意から。この言葉から「先入観」「先入主」という語ができた。

出典　漢書（かんじょ）

相談支援の場にいると、先入観や固定観念が、支援策を考える上での邪魔になるということを度々経験する。「この人は〇〇だ」「この家は××だ」と良く知っている人に限って決め打ちをしてくる。その人のとらえ方が凝り固まっていることに、気づいていないのである。

他の人が関わってみたら、〇〇でも××でもないということは多い。凝り固まった考え方が、支援を難しくしているのである。いろいろな角度で見て、考えてみると、新たな発見があり、支援策も広がる。

これは親子の間でも起こりうる。自分の子どもを決めつける母親、自分の親を決めつける子、決めつけてしまうと関係がぎくしゃくし、親子の間に亀裂が入ったり大きな壁が出来たりする。

そんな時にこの諺を伝えながら、「本当にそうだろうか？」「なせ〇〇だと思うのか？」「どうして△△ではないのか？」と聞いてみる。すると親も子も、何かに気づく。そしてそれが親子関係や他人との関係の改善に役立つことが多い。「先入観」もよいが元の言葉であるこの「先入主」の方がなじみがないからこそ入りやすいように思う。

＜善の裏は悪＞

良いことのあったあとには悪いことが巡ってくる。また、善悪は全くの別物ではなく、善を裏返せば悪となり、悪を裏返せば善となるということ。

良い悪いは単純に判断するものではない。講話などで、良くリフレーミングの話をすることがあるが、良い面と悪い面は表裏一体である。性格も出来事も、良い面から見れば良いが、悪い面から見れば悪くなってしまう。良いことがあったと喜ぶのは良いが、必ず悪いこともあるのが世の中。良いことばかりは続きはしない。

例えば性格を考えた時に、決断が早くて、行動が早い人がいたとすると、良い人だが、反面その人は、おっちょこちょいだったり、短気だったりするのである。

褒められて調子に乗らないように、あるいは良いことがあって有頂天にならないようにというと、なんだか寂しいが、調子に乗りやすい子にはこんな言葉をかけることもある。

＜善は急げ＞

良いと思ったことはためらわずに実行に移せという教え。「善は急げ、悪は延べよ」と続けても言う。「思い立ったが吉日」「旨いものは宵に食え」も同義語。

物事にはタイミングというのがある。どうしようと迷っている間にタイミングを逸した経験のある人は少なくないだろう。特に、あれこれと悩んで、行動に中々移せない子どもや親に、この諺を伝えている。

今その人、その子がやりたいと思ったことが、良いと思われるなら、迷わず行動を起こすべきで、何もしなければ何も変わらない。行動あるのみである。ただしがむしゃらに動けばよいというわけでもないので、本人が良いと思っているか、望んでいる行動か、そしてその結果がそう悪いことにはならないだろうということをしっかり確認することは必要である。いたずらに煽ってはいけない。闇雲に行動を起こして失敗させてしまうのはなお悪いから、そこは要注意である。

英語では・・・

It is good to make hay while the sun shines.（太陽が照っているうちに干し草を作るのが良い）

＜千里の行も足下より始まる＞

どんな大きな事業も、手近なところから始まり、着実に努力を重ねていけば必ず成功するという教え。千里もの遠い旅も、足元の第一歩から始まるという意から。

出典　老子

子どもの頃「千里の道も一歩から」と教えられていたが、実はこちらが由来である。子育ての中では、毎日毎日、同じことを子どもに言い聞かせていると感じる時期がある。障害を持って生まれたお子さんの場合など、特に、日々の変化が中々起こらないので、親の努力が延々必要に感じてしまう。そんな時にこの諺か「千里の道も一歩から」のどちらかを伝えて、必ず成長するし、変化もするからと伝える。実際変化していても、日々見ているとその変化に気づかないだろうが、半年前、１年前など、長いスパンで見てもらうと、変化に気づくことも多い。根気のいる仕事だが、子育てとはそういうものでもある。

また、受験勉強中の子どもや、資格テストを控えた子どもなどにも同様に伝えている。丁寧に一つずつやっていこうと。時間がない時は仕方がないが、時間があるときは、一つ一つを丁寧にやることが大事である。最近面倒くさがり屋さんも増えているので、コツコツとやる事の大切さを伝えていきたいものだ。

＜善を責(せ)むるは朋友の道なり＞

互いに善を行うようにすすめ合うのは、友として当然なすべき道である。

出典　孟子

友達関係は、不登校の大きな原因になっている。少し前から表面的な付き合いだけで、もめ事が起きないように気を使っている子が多くなっている。いじめられたくないのもあるだろうし、目立ちたくないのもあるだろう。そして「私達って親友よねえ」などと言い合っている。

いじめの問題は大きな問題であるが、無くなるとも思えない。どんなに頑張って対応をしていっても、予防策を講じても、世の中からいじめをなくすのは難しいだろう。大人の世界にもあるし、そもそもいじめのない世界というモデルがないのだ。

いじめがなくなるためには、子どもたちが、悪いことをしている子に「やめろよ」と言えることが重要である。しかし自分に火の粉がかからないようにと黙ってみてみぬふりをするか、最悪一緒になっていじめをしてしまう。

友達は、自分を正しいほうに導いてくれる存在である。悪いほうに引っ張るのは友達ではない。

ちょっとした問題行動を起こした子どもとの面談で、子どもに良く友達のことを聴く。一人でも、その子のことを思って、「やめた方が良い」と言ってくれた子はいなかったかと。一人でもそういう子がいれば、子どもは間違いを犯さずに済むのである。友達とは、そういうものであってほしい。そんな願いからこの諺を挙げた。

出典説明

三国志・・六十五巻

中国第四番目の正史。西晋の陳寿の撰。「魏志」「蜀志」「呉志」からなり、魏・蜀・呉の三国時代の歴史を記述した史書。魏を正統としており、その点で後世非難されたが、歴史書としては、史実を客観的に扱い、三国のどの王朝にも偏らずに三国時代をまとめている。「魏志」の中にある「倭人伝」は、日本に関する最古の文献として知られる。魏志三十巻、蜀志十五巻、呉志二十巻。

荀子・・・全二十巻三十二編

中国、戦国時代の思想書。趙(ちょう)の思想家荀況(じゅんきょう)（荀子は尊称）の著。孟子の性善説に対して性悪説を唱え、人間の性は本来悪であるから、礼によってこれを改め、善に導いて、社会秩序を維持すべきだと主張した。

漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。『史記』に次いで二番目に成立した正史で、高祖から平帝までの前漢２３１年間の史実を記した歴史書。後漢の班固が父班彪の着手した修史を引き継いで完成し、班固の死後、妹の班昭が表十巻と「天文志」を補った。『史記』が上古から漢代までの通史であるのに対し、『漢書』は前漢一代だけの断代史であり、以降の正史の典型となった。

老子・・・

春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳、字は聃（一説には伯陽）。老子は尊称。周の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道徳経（老子）』二巻を著したという。

孟子・・・七編

中国、戦国時代中期の思想書。孟子の原稿を門人が編纂したもので、「大学」「論語」「中庸」とともに四書の一つ。性善説に基づく道徳論を説き、覇道（武力による政治）を否定して王道（仁徳による政治）を提唱している。

うたとかたりの対人援助学

第 24 回「『安珍清姫の唄』巡礼記」

鵜野　祐介

1.「安珍清姫の唄」とは

今年になり、コロナ禍が少し落ち着いた頃合いを見計らって、「安珍清姫の唄」に関連する場所を何ヵ所か訪れました。今回はこの唄との出会いから現在までの道のりを「巡礼記」として綴ってみたいと思います。

「安珍清姫の唄」は、和歌山県の道成寺を舞台とする悲恋物語を元にしており、参拝の途中、一夜の宿を求めた僧・安珍に清姫が懸想し、恋の炎を燃やし、裏切られたと知るや大蛇となって安珍を追い、最後には道成寺の鐘の中に逃げた安珍を焼き殺すという話です。この話は「道成寺物」として能楽、人形浄瑠璃、歌舞伎でもよく知られている他、手まり唄やお手玉唄、子守唄などのわらべうたとしても全国各地で歌い継がれてきました。少女たちは何故この唄に魅かれてきたのかを探るのが、この巡礼の目的です。

2. 出会い　―1988 年夏、鳥取県佐治村―

私がこの唄と出会ったのは 1988 年のことでした。鳥取県八頭郡佐治村（現在の鳥取市佐治）で行われた稲田浩二先生を団長とする専門家数名と京都女子大学の学生 20 数名による口承文芸民俗調査に参加した当時大学院生の私は、1922 年生まれの下田いわさんから次のような唄を聞きました。

もぉうしもぉうしと呼ぶ声に
出てみりゃ女がただひとり
もぉうしお舟の船頭さん
この川渡してちょうだいな　…

24 連まで続く長い唄を、いわさんはメモも見ないで最後まで歌い切ったのです。その後でおっしゃった「娘の頃に歌って以来、久しぶりです」との言葉が忘れられません。紙漉きをしながら年上の女性から教わった唄とのことでした。約 50 年間、彼女の身体の中で眠っていたこの唄は、何故こんなにもしっかりと彼女の脳裏に刻み込まれていたのでしょうか。

2. 再会　―2020 年８月、「安珍清姫ご和讃」―

その後この唄について深く考える機会はなかったのですが、2020 年８月、みやぎ民話の会顧問の小野和子さんから４枚組 DVD『福島県奥会津　五十嵐七重の語りを聞く』が届き、その中で、姑のキヨイさんが 10 歳ぐらいの頃に群馬県片品村（福島との県境）で友達と歌っていたという「安珍清姫ご和讃」を七重さんが歌われるのを観て、佐治村で聴いた唄の記憶が甦ったのです。32 年ぶりの再会でした。

国は奥州　白河在の　たずねござなき　根田村の
父は代々　山伏なるが　実は名高き　桃かず殿
…
中に安珍　こもりしを　七重に巻き絞め　炎を吹き
中で哀れな　安珍様よ　中に哀れな　安珍よ

物語の題材は明らかに「安珍清姫（道成寺）」ですが、歌詞もメロディも佐治村のものとは全く異なっています。まず、安珍の生まれが奥州白河と歌われていることに驚きました。それからまた、キヨイさんの場合も、七重さんがその歌声を耳にするまでの 70 年余り、この唄が彼女の体内で眠っていたという事実にも驚かされました。

興味深いことに、このDVDの中で七重さんは蛇が登場する昔話を4話も語っておられます。「蛇の目ん玉の昔」（蛇女房）、「口持だねおなごの話」（食わず女房）、「大蛇になった娘おりや」（蛇女）、「蛇とびっきと蜂の伊勢参り」です。このような七重さんの蛇の昔話に対する馴染み深さが、姑のキヨイさんの歌声を聞きとめる耳を育てたと言えるのかもしれません。

3．巡礼その1　―2022年3月、道成寺―

2022年3月上旬、和歌山県日高郡日高川町の道成寺を訪ねました。JR道成寺駅を下りて少し歩くと参道があり、両側に土産物店や休憩所・飲食店が立ち並ぶ道を進んで行くと、62段の石段が見えてきます。



道成寺の公式HPによると、この石段は能楽の「道成寺」、歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」、日本舞踊の「紀州道成寺」等にある「乱拍子」というシーンのもとになったことでも知られており、乱拍子とは、足で拍子をとりながら舞うことだそうです。清姫あるいは清姫の亡霊が、安珍を捜し求めながらこの石段を登るという意味がこめられていると言われ、つま先だけを左右に動かす所作もあり、安珍を探しているのだそうです。

石段を登り切り、仁王門をくぐり抜けると、本堂、宝仏殿、三重塔などが点在する境内が広がります。宝仏殿には、いずれも国宝の千手観音菩薩像、日光菩薩像、月光菩薩像三体の他、重要文化財11点、県指定文化財4点が収められています（同HPより）。

当然のことながら、ここに鐘はなく、「鐘巻之跡」と刻まれた石碑が立っていました。寺伝によれば、初代の鐘が928年の安珍と清姫の事件で焼失した後、1359年に二代目が作られましたが、1585年の豊臣秀吉による紀州攻めの時に持ち去られ、その2年後に後ほど紹介する妙満寺に奉納されたそうです。

宝仏殿の仏像を拝謁した後、ご住職による絵解き説法を聞きました。聞き手は私の他には中高年のご夫妻一組だけでしたが、ツボを心得たユーモラスな語り口は一聴の価値あるものでした。

帰りに、石段を下りたところにある土産物店で「雲水つりがねまんじゅう」を買いました。釣鐘状の薄皮の中に安珍に見立てた餡（黒餡または白餡）が入っており、「餡」と「安（珍）」が掛詞になっていると考えると、黒仏になった安珍を釣鐘ごと食べるという嗜好で、なかなかグロテスクな逸品です。



4．巡礼その2　―2022年6月、根来寺―

今年（2022年）6月上旬、和歌山県岩出市にある根来寺を訪れました。大阪・天王寺駅からJR紀州路快速に乗って50分、和泉砂川駅で下車し、岩出駅行の路線バスに乗って15分、岩出図書館停留所で下車してさらに徒歩で10分ほど行くと、右手に巨大な大門が見えてきます。そこから5分ほどなだらかな坂道を上っていくと、「新義真言宗総本山　根来寺」の石柱にたどり着きます。



根来寺は、1132年高野山に開かれた大伝法院を始まりとする新義真言宗の総本山で、開祖は覚鑁上人です。15～16世紀には全国から学問を志す僧侶

が集まる大寺院として繁栄しましたが、やがて天下統一を目指す豊臣秀吉と対立することになり、先ほどの道成寺と同じく、1585 年に秀吉軍が攻め入り、大塔・大師堂など二、三の堂塔を残して全山焼失しました。しかし江戸時代には徳川家の外護のもと、大門・伝法堂・不動堂など主要な伽藍が復興されました。

この日は、紫陽花と睡蓮が見頃を迎え、ウグイスをはじめ鳥たちの鳴き声がこだましていました。鐘楼門をくぐり抜け、光明殿や庭園などを拝観した後、本坊寺務所を出て、大塔へと向かう途中の、渓谷に架かった滝見橋を渡り終えると、上り道右手に「根来の子守唄」の歌碑があります。

歌碑に刻まれた文言は短いので、ここには岩出町が「第 12 回全国子守唄サミット＆フェスタ 99 in 岩出」（1999 年）の開催にあたって制作したＣＤの歌詞を掲載しておきます。

ねんね根来の　よう鳴る鐘はヨ
　一里聞こえて　二里ひびくヨ　バイバイ
ねんね根来の　かくばん山でヨ
　としょじ来いよの　鳩が鳴くヨ　バイバイ
ねんね根来へ　いきたいけれどヨ
　川がおとろし　紀ノ川がヨ　バイバイ
　（中略）
さんさ坂本　室家の娘ヨ
　嫁入りしたとて　住蛇池ヨ　バイバイ

今回の訪問の目的の一つは、この子守唄にも歌われた住蛇池を確認することでした。この池をめぐって、次のような伝説が残っているのです。

「根来山の麓、西坂本に室家忠家という豪家がありました。子どものいない家だったので小野小町のお墓に参り願をかけたところ、その甲斐あって小町そっくりの美しい桂姫をさずかることができました。桂姫が年頃になった頃、毎夜彼女の枕元へ美男が現れては朝になるとどこへ行くともなく消えていくのでした。

やがて、桂姫が和泉国尾崎の大原高広という北面の武士に嫁ぐ日がやってきました。豪勢な嫁入り行列が住持池にさしかかった時、池から突然大蛇が現れ、姫をさらって再び水中に没しました。娘を失った母は悲しみ、三日三晩火を焚いて祈祷しました。四日目の朝、池のそばに立ち、せめてもう一度でよいから娘の顔を見せてほしいと涙ながらに祈ったところ、水面に大蛇と桂姫の半身があらわれました。母は娘に抱きつこうとしましたが、その瞬間、そこには仲よく二匹の大蛇の泳ぐ姿がありました。

桂姫は小野小町の、大蛇は小町に思いを寄せて叶わなかった深草少将の生まれ変わりだと言われています」（『岩出町誌』および岩出市公式ＨＰより）。

「住持池」、別名「住蛇池」は、岩出図書館から 500 メートルほど西にある周囲約４キロの大きな池で、その東側には坂本神社が建っており、池の周囲の鬱蒼とした木立からは、今も何モノかの気配が感じられました。

道成寺の「安珍清姫」では清姫のみが蛇に変身するのに対して、この桂姫の話では男女ともに蛇身となっていて、小野小町にまつわる伝説となっているのが特徴です。それにしても、和歌山には蛇や竜にちなんだ地名や伝説のなんと多いことか。

それはこの地が豪雨・土砂崩れや旱魃といった、水がもたらす災害の頻発する地であることや、銅や鉄鉱石をはじめとする鉱石の豊富な地であることと関係があるとされています。蛇や竜は「水の神」「金属の神」として知られているからです。

５．巡礼その３　―2022 年９月、安珍堂―

９月上旬、福島県白河市の安珍堂を訪れました。ここは安珍の生誕地とされるのです。東北新幹線の新白河駅からローカル線で一駅のＪＲ白河駅で下車し、タクシーで約 10 分行くと、山あいに青々とした水田が広がる根田地区に着きます。道路沿いの右手の山すそに「娘道成寺　安珍之里」と白抜きで記された木製の看板が目に入り、入口の道を挟んだ向かいには、白河ライオンズクラブが 1982 年に建てたという「安珍生誕之地」の大きな石碑もありました。

残暑厳しい昼下がり、クマゼミの鳴き声を聞きながら、急な斜面の石段を 10 数メートル登って行くと、安珍堂がありました。あいにく引き戸がすべて閉まっていたので覗くことはできませんでしたが、この中に安珍像が収められているそうです。



案内板「安珍像」によれば、この安珍像は元々、和歌山の道成寺に所蔵されていましたが、1985 年、道成寺および地元有志の好意により、東北新幹線上野駅乗入れを記念し、安珍の生誕の地とされるこの場所に里帰りしたものだそうです。また、この地に伝わる安珍念仏踊りは、彼の冥福を祈るため根田の里人がはじめたものといわれ、歌舞伎などで知られる「娘道成寺」の物語を歌い込んだ念仏踊りとして知られ、毎年３月 27 日の安珍忌に供養として踊られています。

それでは、安珍の出身地が福島・白河と伝えられてきたのは何故でしょうか。今年の夏、仙台育英高校の優勝により、高校野球の優勝旗が史上初めて白河の関を越えたことが大きな話題となりましたが、青年僧安珍は今から一千年以上前に白河の関を越えて紀州熊野へ参詣したと伝えられているのです。

東北・福島と近畿・和歌山をつなぐ存在として有力視されている歴史的なキーパーソンは修験道の山伏です。熊野は修験道のメッカとして知られていますが、東北地方もまた出羽三山をはじめ修験道の盛んな地です。源義経の忠臣・武蔵坊弁慶は、一説によると和歌山県田辺市が生誕の地とされています。京都・鞍馬寺で修験僧の教えを受けた義経と五条大橋で出会った弁慶は山伏のいでたちをしており、終生その身を義経に捧げましたが、彼の終焉の地は奥州・衣川でした。

山伏には宗教者・修行者としての貌の他に、金銀や鉄鉱石などの鉱脈をよむ「山師」の貌もあったようです。紀州と奥州は共に古来、鉱物資源が豊富であり、山師たちや鉱石採掘に従事する人々のネットワークもできていたことがわかっています。こうした宗教的・経済的なつながりを背景として生まれた、福島と和歌山の若い男女の悲恋物語が、幾多の娘たちによって憧れとともに歌い継がれていったのです。

６．巡礼その４　―2022 年 11 月、妙満寺―

11 月下旬のよく晴れた午後、京都市左京区岩倉にある妙満寺を訪れました。紅葉が盛りを迎えており、観光客や七五三祝いの親子連れの姿も見られました。ここに、道成寺二代目釣鐘が奉納されているのです。「正平 14 年（1359）3 月 31 日、道成寺では安珍・清姫の伝説以来、永く失われていた鐘を再鋳し鐘供養を盛大に営みました。すると、その席に一人の白拍子が現われ、舞い終わると鐘は落下し、白拍子は蛇身に変わり日高川へと姿を消してしまいます。その後、近隣に災厄が続いたため、清姫のたたりと恐れられた鐘は山林に捨て去られました。

それから 200 年あまり経った天正年間、その話を聞いた「秀吉根来攻め(1585)」の大将・仙石権兵衛が鐘を掘り起こし京都に持ち帰り、妙満寺へと納められました。そして、時の貫首・日殷大僧正の法華経による供養によって怨念を解かれ、鳴音美しい霊鐘となったと伝えられます」（妙満寺公式 HP より）。

本堂の正面右手奥に釣鐘は置かれていました。思ったよりも小振りで、膝を抱えてようやく入れるぐらいのサイズです。初代も同じぐらいのサイズだったとすると、「こんな小さい釣鐘ならよもや人間は入れまい」と清姫に思い込ませるための策略だったのかもしれない、などと思いを巡らせました。



先ほども述べたように、「安珍清姫の唄」をはじめ蛇や竜に変身する女性にまつわる唄や物語は全国各地に残っています。今回紹介したような歴史的（宗教的・経済的）な背景を踏まえつつ、この物語や唄を伝承してきた人びと、特に女性たちの想いについて考えていきたいと思っています。これからもこの物語唄を巡る旅は続きそうです。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第24回

黒田長宏

2022年

＜8月3日＞

50回用の原稿を提出。毎度のことだが、今回こそパートナーを見つけなければ大変なことになる。孤独死しないための準備はもう始まってしまっているのだ。

＜8月4日＞

せっかく51歳の人から「いいね」がきて、私が了解すればマッチングだったのだが、どうにも実の子がいればという意識が働いてしまい、これが一番思いやりある行為だと思っているのだが、ブロックさせていただいた。有難いことなのに、ライフサイクルを崩すとうまく行かない。

＜9月4日＞

なにか書かなきゃと思ってパソコンを開くとちょうど一か月ぶりである。再婚実現のために、某マッチングアプリと、YouTube「婚難救助隊」の休日ごとのアップロード、ちょっと間接的だが、SNS での結婚難を助長するような記事への批判コメント、この3パターンを継続は力なりでやり続けている。勤務先も同じところ。その継続以外に変化はわからない。

勤務先も含めて、変化は危険である。私は歳をとり、若い頃より守りに入っている。結婚願望も守りのためなのかも知れないが、みすみす孤独死にはなりたくない。そうした抽象的な思いのまま、過ぎている。

上記のパターンの中で、変化が欲しい。

＜9月25日＞

締め切りまであと2か月か。某マッチングアプリと YouTube と SNS 発言の3点セットを継続している。しかし大きな変化はない。

＜9月30日＞

操作的、技術的なことだが、YouTube をインスタグラムに紹介した。

＜11月4日＞

今回は猛暑の時期から過ごしやすい、長袖でいられるような変化の3か月の時期の記録であったが、昨日、だいぶ

久しぶりに女性のほうからマッチングアプリの「いいね！」が届いたものの、某有名新興宗教信者であったり、精神的に少し病んでいるなど書いていて、もう少し考慮すれば良かったのに、私の性格からその有難い人のデータを隠してしまったところ、ブロックしたわけではないが、こちらから検索しても見つからなくなってしまった。なんとも55歳になろうがどうなろうが、私の悪いパターンが出たような気がした。相手からのいいね！など滅多にないことなのだ。

このマッチングアプリが一番経済的にも仕組みも良いと思って一つだけ続けていたマッチングアプリだが、更新しなければあと5日で終了となる。あと5日しかなくなってしまった。ラストスパートで多くのいいね！をしてみたが、ここで奇跡が起きるとは到底考えられない。マッチングアプリは自信を失いかねない。

ところが、新聞には、マッチングアプリが原因の一つとして梅毒が日本で増加していると書いてあるのだ。真面目に結婚相手を探していない悪い男女が足を引っ張っているとも思えるのだ。それはパパ活や援助交際などの売買春や、不倫などの略奪、不貞などをしている男女が、結婚数をも激減させてしまったのだと私は検討づけているのだ。性風俗の店や組織化やメディアの男女関係の見せ方などもそれに類するところだ。経済的な問題だけではないはずだ。マスメディアはそこを報道しない。そこらへんがマスメディアの信用できない点の一つではある。だからこそ、自ら YouTube で、結婚の難題について出力して行くのだと決意して続けているのだ。

YouTube の登録者は160人になった。数字が増えるのはうれしい。この数字は人の数なのだ。どこかで大きなブレイクを願いたいと思っている。調べていないが気付けば、特に参加のころにいろいろあったが、ここで連載させていただいてから3年なのか5年なのかずいぶん月日は経過するものだ。YouTube でブレイクして、私の発言力で結婚したい人が結婚できる社会にする力を持つという夢は持っていてもいいと思う。歌手やスポーツ選手だけのものではないはずだ。政治家や科学者や公務員や教育者や社長や理事だけのものではないのだ。それは何だ。夢か希望か。この世への期待だろうか。女性も科学技術がもっと進歩すれば高齢出産も安全になるかも知れないが、男性はもともと高齢化しても生命の種子の片割れは維持しているらしいのに、人間の仕組みは子孫の継続のためには男性には女性、女性には男性の協力が必要なのだ。パートナーシップというものなのだろう。それはシンプルなものであり、多様な物事ではない。有性生殖を人類は選んだのか選ばれていたのか、それは決して差別言葉ではないのに。哲学の分野では、人類が滅した後の世界の存在論をやっている人達がいるらしいのを、昨日検索していて知ったように思うが、私はこの世の存在の不思議さとともに、人類の継続は、信頼できる男女の間での教育を伴う子孫から子孫の繋がりで、可能性は、人間の可能性と言えばそれまでだが、残っているのだと思っている。昭和世代の限界なの

か。私の考えでは、どうしても、人間ありきで、世界があるという所まででいいやと思ってしまうのだが、子孫なしの孤独死であるなら、なんのために生まれたのかと思う。

身体の都合などで子供を産み育てられなかった人たちはそういう理由で仕方がないことだと思えるが、私などは子供ができる状態であったのにも関わらず、55歳で子供なしである。社会は結婚難少子化が続く。どうしてこうなったのだろうか。

〔PBLの風と土　第23回〕

協力的な関係にて学びと成長の旅仲間に

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、連載5年目には米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題しています。

1.「学習発表会、がんばれよ！」

秋は学会シーズンと呼ばれることがある。確かに、筆者が所属している学術団体のいくつかで秋に年次大会が開催されている。一方で、学会に馴染みがない方にとっては、学会発表の準備をすること、また年次大会の運営を担当する際には何をするのか、知るよしもないところかもしれない。以前、筆者が長きにわたりフィールドワークやアクション・リサーチで関わってきた新潟県小千谷市塩谷集落にて、大阪大学・関西学院大学・立命館大学そして現地の長岡技術科学大学の学生らが参加した稲刈りの合間に東京で開催された学会に出かけて再び合流する、という強行スケジュールで臨んだ際、山間の棚田を後にする際に「学習発表会、がんばれよ！」と送り出されたことがある。「学会って、業績づくりのために参加して、結局は飲み会でしょ？」などと半ば揶揄されたことは何度かあったが、「学習発表会」の略として受け止め、その帰りをお待ちいただいたことが、今なお新鮮な記憶として想い起こすことができる。

無論、学会は秋だけに行われるものではないが、諸外国での国際学会は秋に行われるものが比較的多いように思われる。秋入学という背景もあって、あるいは半期ごとのセメスター制ではなく3学期のトリメスターや4学期のクオーター制を導入しているために早い冬休みや秋休み（オータムブレイク）があるから、といった事情もありそうだ。ともあれ、筆者の所属している学会では、国際総合防災学会（IDRiM）や



図1：棚田で手刈りし東京での日本災害復興学会へ
（2015年9月26日、新潟県小千谷市、筆者撮影）

国際サービスラーニング・地域貢献学会（IARSLCE）も、例年、秋の開催である。本連載でも触れてきたとり、とりわけこの数年はIARSLCEに参加してきたが、2021年度はオンラインで開催されたものの、2022年度のIARSLCEの年次大会はあらかじめ休会とされていた。

前回の本連載で触れたとおり、2015年のIARSLCEへの参加は、筆者の実践面でも研究面でも、大きな転機となった。率直に言えば、それまで学会発表の応募を重ねてきたが、不採択となる経験がなったことによる思い上がりを糺す契機を得たのである。中でも前回の巻末注には筆者に届いた不採択理由の一部も紹介させていただいたように、自らの教育実践を事例に発表する際、日本国内では先行的な事例であるという小さな自負が大きな慢心となっていたことを自覚することとなった。そこで、筆者も共同研究者として連名にしていただいた発表が採択

の運びとなった同僚の河井亨先生と共に米国・ボストンでのIARSLCE2015に参加し、果たしてどれくらいの水準の議論がなされているのか、ということを肌身で味わってこよう、と発意した。

その結果が近年のIARSLCEをはじめとした国際学会での効果的な情報収集とそれらを経た発表経験、転じて本連載につながっていることは、読者の方であれば合点がいくだろう。無論、本連載の直接的な契機は筆者のデンマーク（オールボー大学）での学外研究、さらにはその道筋への助言をいただいたサトウタツヤ先生によるところであるが、2017年度当時において日本の教育機関に幅広く浸透しつつあったPBLの潮流について現地にて深めたことで、改めて民主主義と関連づけて展開されてきたサービス・ラーニングの意義を再確認することになったためである。前回の結語には「次回以降で」と含み置きしつつ、CMG（Civic-Minded Graduate)と呼ばれる、公共心にあふれた、地域に貢献する卒業生を輩出する上で、改めて「体験の言語化」の意義を再検討していく、と述べた。そこで今回は、数回にわたって紹介してきたSOFARという枠組みを、サービス・ラーニングという教育法の分析・評価そして設計概念としてどのように活かすことができるのか、学習の学びと成長という観点から、特に学術的な側面から整理してみたい。

2. 関係の有無ではなく状態への接近

本連載連載第21回で触れたとおり、大学と地域が連携して取り組むサービス・ラーニングでは、地域における多様な担い手と適切な関係性の構築が不可欠である。それゆえ、誰に協力を仰ぐか、といった関係構築ではなく、生々流転する地域社会の営みに応じて、適切な関係性の構築が不可欠となる。その上で、地域社会に根ざす課題に向き合い、活動する地域がよりよい状態になるように貢献すべく、大学と地域とのあいだでは、互いの都合のもとで巧妙に他者を利用する搾取的（exploitive）な関わりではなく対等な立場で交流的（transactional）な関わり合いが必要であり、互いの役割や責任を果たすことにより変容的（transformative）な関わり合いが重要となることを連載第19回・第20回で述べてきた。その際、大学と地域の関わり合いの現状を見つめ、将来を見据える上で、5つの担い手（学生、受入団体、教員、執行部・事務局、地域住民）に着目し、その関係性を検討する、というのがSOFARモデルである。

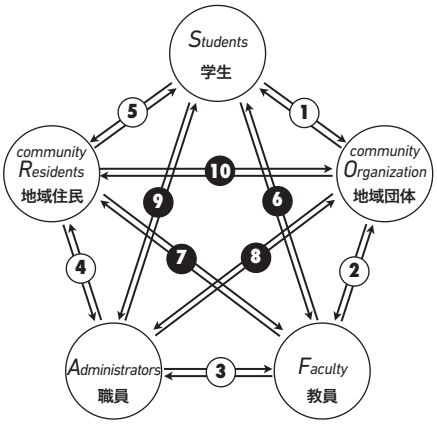


図2： SOFARモデル
（Bringle et al., 2009, p.5をもとに筆者作成）

SOFARモデルそのものはシンプルであるものの、心理学を専門とするインディアナ大学-パデュー大学インディアナポリス校（IUPUI）のロバート・ブリングル先生らのもとでで詳述（Bringle et al., 2009）されているとおり、その理論的背景は極めて奥深いものがある。それにより、大学と地域とのあいだでは変容的な関係性の発展が期待されることが示されている。それらの議拠は第19回の後半と第20回の前半で触れたところであるが、これまで触れていなかった点として、上掲の論文では、サービス・ラーニングでは単に人間関係の構築ではなく多様な担い手どうしでの協力関係の醸成が鍵となることを、SOFARモデルが既往研究に対する新たな特徴として以下の8点を列挙して説明していることを紹介しておこう。

(1)単一のダイアド（キャンパスとコミュニティ）から、少なくとも5つの構成要素にまたがる複数のダイアドへとパートナーシップを拡大したこと。
(2)ダイアドを他の分析単位（例：集団、近隣、部門、組織、機関）に拡大したこと。
(3)キャンパスを学生、教員、事務局に区別したこと。
(4)コミュニティを組織のスタッフと住民に区別したこと。

(5)パートナーシップ（協力関係）とリレーションシップ（人間関係）とを区別したこと。
(6)各ダイアドにおけるインタラクションの質を評価するための3つの属性として、親密性、公平性、誠実性が特定されたこと。
(7)人間関係の結果が搾取的か（少なくとも一人あたりに係る対価なども含め、そうした特性がないか）、交流的か（そうした特性が適度にあるか）、変容的か（相互作用の結果として各人が成長する程度にそうした特性があるか）いずれの度合いを評価する能力の向上を図る必要があること。
(8)人間関係の構築において同一の相互作用において各人の視点を考慮すること。
（Bringle et al., 2009, pp7-8、筆者訳）

それゆえ、その活用においても精緻に学術的な関心が重ねられている。もちろん、前回紹介したCMGに関する論文（Steinberg & Bringle, 2011）も、その1つである。また、前回に触れたとおりに第20回で紹介したTRESと呼ばれる変革的関係評価尺度の開発もまた、その1つである。逆説的になるが、SOFARもCMGもSOFARも相互に関連づけながら、実践の分析と共に、実践からの理論の精緻化が図られている。

そこで、前掲のSOFARモデルについての8点の特徴の紹介に続き、第20回では尺度の存在に触れるのみに留まった点を踏まえて、改めてTRESを用いた研究手法について整理してみたい。具体的にはパティー・クレイトン先生らによるSOFARモデルを踏まえたサービス・ラーニングの評価研究（Clayton et al., 2010）について解題する。サービス・ラーニングという教育法に対する研究であるが、本連載の名前が「PBLの風と土」であることを踏まえた上での取り上げていることを、ここに明記しておこう。すなわち、サービス・ラーニングの教育実践に関する評価研究であるが、それはプロジェクト型学習および地域社会の問題解決学習にも、また評価だけでなくプログラム開発や推進にも示唆を与えてくれるだろう。

3. 実践者のナラティブを支える枠組み

Claytonら（2010）の研究は、「SOFARのフレームワークに含まれるすべての構成員が使用できる単独の調査票を開発（developing a single instrument for use by all constituents represented in the SOFAR framework）」（p.11）するために、サービス・ラーニングにまつわる5つの担い手（S・O・F・A・R）のカテゴリーについて、まずは二者間の関係性について多面的に検討したものである。具体的には、まずは教員の視点から見た教員と地域組織の関係（SOFARではF-O）に焦点が当てられた。それにより、各種プログラムを直接的に担う教員とプログラム受講生の受け入れを担当する団体側とのあいだでの変容的な関係性の醸成を通じた学習者の学びと成長という変容と、複雑に絡んだ現代社会の問題が根ざす地域そのものの変容をもたらすための手がかりに迫る、という具合である。そして、論文では教員を対象として行われた調査の手順、結果、考察、結論が示されている。

調査には4大学から5名ずつ教員が参加し、(a)大学生または大学院生による質問票を用いた60～90分の対面インタビュー（n=15）、または(b)同じ質問票を回答者が個別に記入（n=5）するという2種類により行われ、データは匿名化の上で分析された[1]。具体的には、(1)回答者（F）が地域でのプログラムのパートナー（O）を2名（A・B）特定した上で、4つのセクションからなるアンケート（セクションIとIIはパートナーAとBの2回、セクションIIIとIVは1回）に回答、という手順としたという。セクションIでは、コミュニティのパートナーとの関係の歴史、根拠、特徴的な相互作用を、(a)頻度、(b)多様性、(c)現場の意思決定に対する教員の影響力の強さ、(d)教員の意思決定に対する現場の影響力の強さについて、予め示された設問に答えるものである[2]。セクションIIでは第20回・第21回で紹介した「自己内コミュニティ包含尺度(Inclusion of Community in the Self (ICS) scale)」により、教員と現場との関係の緊密さについて表した6段階のベン図を用いて、現状と理想像とを尋ねる質問が行われ、その上でTRESの9項目に対し、現状に最も近いものに「X」、理想像に最も近いものに「O」をつけるよう（ただし、現状・理想像が同一であっても何ら問題ではなく、同じ選択肢であってもよいことを説明した上で）回答が促された。

セクションI　パートナーシップの定義

教員と現場との協力関係についての歴史、根拠、特徴的な相互作用を、(a)頻度、(b)多様性、(c)現場の意思決定に対する教員の影響力の強さ、(d)教員の意思決定に対する現場の影響力の強さについて自己評価

セッション1の手順：パートナーシップの概要

1) このパートナーシップは**現在進行中**、**最近のもの**、あるいは**少し前のもの**？（1つに○を）
このパートナーシップはいつ始まったもの？
どれくらい継続しているもの？／どれくらい継続したもの？

2) 総じて、このパートナーシップの目的は何？
そのパートナーと最初に出会ったきっかけは？
あなたは何をする？／共に何をした？

3) あなたとこのパートナーは、現在(あるいは直近)のセメスター／パートナーシップの期間中、頻繁に(少なくとも月に2、3回) 交流し（てい）たと言える？**はい** または **いいえ**（1つに○を）
この12ヶ月の間に、このパートナーとの相互作用は**増えた**、**減った**、あるいは**変わらない**、どれがあてはまる？（1つに○を）

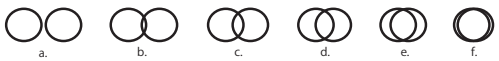
4) あなたとこのパートナーは、相互作用において**高い水準**もしくは**低い水準**で多様性がある／あった、どちらがあてはまる？別の言い方をすれば、
_____ **共に多彩な取り組みを展開**
あるいは
_____**ほぼ1〜2種類の活動を実施**（1つにチェック）
ぜひ、どのような相互作用なのかの具体例の提示を。
過去12ヶ月の間に、このパートナーとの相互作用の多様性は、**増加**、**減少**、あるいは**同じまま**、どれがあてはまる？（1つに○を）

5) あなたとこのパートナーとの関係において、相互依存の程度は高いもしくは低い、どれがあてはまる？言い換えれば、
_____ **多く** あるいは _____**僅か**（1つチェック）の地域パートナーの意思決定に貢献した。
（サービス・ラーニングでの協働それ自体だけでなく、その取り組みを越境した事例も含めて）
あなたの地域パートナーは_____**多く** あるいは_____**僅か**（1つチェック）のあなたの意思決定に貢献した。（サービス・ラーニングでの協働それ自体だけでなく、その取り組みを越境した事例も含めて）
ぜひ、具体例の提示を。

セクションII　現状と理想像の比較

「自己内コミュニティ包含尺度(Inclusion of Community in the Self (ICS) scale)」と「変革的関係評価尺度 Transformational Relationship Evaluation Scale (TRES)」でパートナーシップの現状と理想像を自己評価

親密性のベン図（Machek, Cannady, & Tangey, 2007より）



変革的関係評価尺度　Transformational Relationship Evaluation Scale (TRES)

パートナーシップの分析

あなたの視点から見てパートナーシップの**実際の**特徴を最もよく表している**選択肢に×印を**
（現在のパートナーシップであれば現在の状態、以前のパートナーシップであれば開講時の状態）

あなたの考えるパートナーシップの望ましいあり方を最もよく表している**選択肢に○印を**
（×を付けた選択肢と同じ場合もあれば、異なる場合もあることに注意）

1. サービス・ラーニング（SL）におけるパートナーシップでの成果
   a. _____ このパートナーシップでは、私たち双方に恩恵よりも負担が多くかかる。#
   b. _____ どちらかが恩恵を受けるが、もう一方に負担を強いている。#
   c. _____ このパートナーシップによって、どちらも大きな恩恵を受けないが、どちらも大きな負担を被らない。#
   d. _____ どちらかが他方よりも大きな恩恵を受けるが、どちらかが大きな負担を被ることはない。##
   e. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）このパートナーシップによって等しく恩恵を受ける。*
   f. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を受け、どちらかがパートナーシップを通して発展する。**
   g. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を受け、双方がパートナーシップによって発展する。
   h. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を受け、双方が成長し、関係そのものが発展する。
   i. _____ 私たちは（価値あるものを得るという意味で）等しく恩恵を得て、双方が成長し、関係そのものが発展し、お互いが属するシステム（例えば、組織など）がパートナーシップによって、より発展しやすくなる。

2. SLにおけるパートナーシップでの共通の目標：あなたとあなたの地域パートナーは、SLでの協働において、どの程度の共通の目標を持っている／いない、持っていた／いなかった、と捉えている？
   a. _____ 概ね私たちの目標は対立している #
   b. _____ 対立はしていないものの、概ね私たちの目標は筋が通っていない。*
   c. _____ 私たちの目標は、いくつかの点で1つにまとまっている。*
   d. _____ 私たちは共通の目標を持っている

3. 意思決定：SLの活動について決定する際、あなたとあなたの地域パートナーとのあいだでどの程度協働した？
   a. _____ このプロジェクトに関する決定は、他のパートナーを考慮することなく、単独で行われる。#
   b. _____ このプロジェクトに関する決定は、単独だが、他のパートナーをある程度考慮し行われる。##
   c. _____ このプロジェクトに関する決定は、単独で行われ、他のパートナーに相当の配慮がなされている*。
   d. _____ このプロジェクトに関する決定は、他のパートナーと協議して行われる。*
   e. _____ このプロジェクトに関する決定は、協働的に行われ、概ねどちらかの関心によって主導されている。**
   f. _____ このプロジェクトに関する決定は、協働的に行われ、概ね共有されたの目標への共通のコミットメントを反映した合意形成のプロセスに至る。

4. 資源：このSLでのパートナーシップにおいて
   a. _____ 私たちのうちの一方は、その活動に必要な資源のほとんど、あるいはすべてを提供し、もう一方はほとんど、あるいはまったく提供しない。#
   b. _____ 私たちのうち、一方が他方より多くの資源を提供し、もう一方はいくらか資源を提供している。*
   c. _____ 両者とも多大な資源を提供している。

5. 対立管理：このSLでのパートナーシップの活動に関して対立が生じる場合（あるいは生じた時）
   a. _____ 私たちの双方が、その対立に対処することを積極的に避けるだろう。##
   b. _____ 私たちのうち一方は対立に対処しようとし、もう一方はそれを避けるだろう。##
   c. _____ 私たち双方はその対立に対処するだろうが、それは私たちにとって不快なことだろう。*
   d. _____ 私たち双方は、問題を解決するという共通の期待を持って、対立に公然と対処するだろう。

6. 活動とアイデンティティ形成におけるこのパートナーシップの役割：このSLパートナーシップにおいて
   a. _____ 私たち双方とも、全体的に活動に支障をきたしてきた。#
   b. _____ 私たちのどちらかが、全般的に活動を支障をきたしてきた。#
   c. _____ 私たちのどちらかが活動の役に立ったが、もう一方の活動には何の影響も与えていない。##
   d. _____ 双方の仕事を助けた。*
   e. _____ 双方が活動を助け、どちらか一方の「自分らしさ」の定義に役立ったが、一方に留まった。*
   f. _____ 双方が活動を助け、双方にとっての「自分らしさ」の定義に役立った。
   g. _____ 双方が活動を助け、双方にとっての「自分らしさ」を定義に役立ち、私たちのうちの一方が活動を通じて重要な貢献をする能力を高めた。
   h. _____ 私たち双方が活動を助け、私たち双方に「自分らしさ」を定義するに役立ち、私たち双方が仕事を通じて重要な貢献をする能力を高めた。

7. 力関係：このSLパートナーシップにおいて
   a. _____ 一方がほぼ、すべての力を発揮し、もう一方はほぼ、まったく力を発揮しない。#
   b. _____ どちらかが多少なりとも力を発揮している。*
   c. _____ このパートナーシップでは平等に役割が共有されている。

8. このSLでのパートナーシップにおける重点事項
   a. _____ 私たちのあいだではお互いにとって重要なことは何もない。#
   b. _____ 私たちのこの関係から各々が得るものが重要である。##
   c. _____ 私たちのこの関係から双方が得るものが重要である。*
   d. _____ 私たち双方が何を得るか、そしてどちらかがどの程度成長するかが重要である。**
   e. _____ 私たち双方が何を得て、互いにどこまで成長できるかが重要である。
   f. _____ 私たち双方が得るもの、成長する度合い、そして互いの環境での成長を育むパートナーシップの力量が重要である。

9. 満足度とよりよい変化：パートナーシップの成果として
   a. _____ 双方とも不満があり、双方とも悪い方向に変化している。#
   b. _____ 双方とも不満があり、どちらかが悪い方に変化した。#
   c. _____ 双方とも不満だが、どちらも悪い方に変化していない。#
   d. _____ どちらか一方だけが不満で、どちらも悪い方に変化していない。##
   e. _____ 双方とも満足しており、どちらも良い方向にも悪い方向にも変化していない。*
   f. _____ 双方とも満足し、どちらかが良い方に変化した。**
   g. _____ 双方とも満足し、両者とも良い方向に変化している。
   h. _____ 双方が満足し、より良い方向に変化し、関係そのものもより良い方向に変化している。
   i. _____ 双方が満足し、より良い方向に変化し、関係そのものもより良い方向に変化し、周りの世界もより良い方向に変化している

注：TRESの生データは、選択肢aを1点、選択肢bを2点として、各項目の得点を合計し、回答選択肢の数で割って平均値を算出されたものである。
TRESの概念的データとして、上記の#は少なくとも一方にとって抑制的と示された項目には「1」のスコア、##は一方にとって有益だが双方とって有益ではない項目には「2」のスコア、*は双方にとって有益なので相互に交流的とる項目には「3」のスコア、**は双方にとって有益で一方にとって変容的な項目には「4」のスコア、上記の表の空欄=相互に変容的な項目には「5」のスコア、それぞれを与えて計算される。

セクションIとIIを2回実施
（パートナーA・Bに対して各々評価）

セクションIII　パートナーA・Bの回答の比較

セクションIとIIの自己評価に対し、AとBとのあいだで類似点と相違点、各評価の根拠、実践を通じて認識した関係性の構築能力、パートナーシップを展開する上での全体的な障壁などを比較検討

セクション3

1) 2つのパートナーシップの評価について、どこが似ていて、どこが違うかまとめましょう。
類似点
相違点

2) 大まかに言って、それぞれの評価の根拠は何でしょう？この2つの関係は、それぞれどのような要因で、そのような評価となったのでしょう？(例：あなた自身の過去の経験、相手の経験、授業や組織のデザイン、個性など。)
A:
B:

3) それぞれの関係において、パートナーシップの発展をもたらす能力をどう捉えていますか？別の言い方にすれば、あなたが○印の水準（それが×印の水準と異なる場合）に向かって進む能力を、あなたとこのパートナーは持っていますか？その移行が可能となるため、あなたはどんな資源を共有していますか？
A:
B:

4) それぞれの関係でパートナーシップの発展を阻むものは何と捉えていますか？別の言い方にすれば、連続的に示された水準において何が障壁で望ましいパートナーシップが低い状態となる可能性がありますか？
A:
B:

セクションIV　手順と尺度の振り返り

改良に向けたコメントの記述。後日、パートナーとの関係性についての気づきの共有をメールで依頼

セクション4

全体をふりかえって、あなたとこれら2つのコミュニティとの関係について、どの程度把握できたと思えていますか？

尺度への回答や投げかけられた質問に答える際に、理解できなかったことや悩んだことはありますか？

その他、何か付け加えておきたいことはありますか？

図3： TRESを用いた調査の手順（Claytonら, 2010をもとに作成、訳は筆者による）

前述のとおり、この研究では2人のパートナーに対する教員対象の調査とされたため、A・Bの各関係ごとにセクションIとIIを（つまり2回ずつ）終えた回答者は、セクションIIIで、一連の自由記述と選択式の設問からA・Bに対する尺度評価を比較し、類似点と相違点、各評価の根拠、各々の実践における関係性構築能力、また構築に際しての全体的な障壁について検討する。そしてセクションIVでは、調査の手順と尺度を改良のために回答のプロセスを振り返るよう回答者となった教員に尋ねられ終了とされた。なお、これら60分から1時間での4つのセクション数週間後、調査者から調査参加者に電子メールで連絡が取られ、研究参加を通じて自分自身や地域のパートナーとの関係について学んだことがないか振り返り、あれば共有してもらえるよう依頼がなされたという。

20名の調査結果を統計的に解析すべく、TRESでの9項目を5段階の採点方式に変換し、「人間関係の相互依存性理論（interdependency theory of relationships）」[3]に基づいて活動の頻度・多様性・相互依存性（向きの違いを含む）計4点から分析したところ、「より親密であると評価された人間関係は、より変容的である（relationships that were rated as being closer were also described as being more transformational）」と明らかになったという(Clayton et al., 2010, p.12）。また、自由記述の分析から、対面よりもメールや電話での連絡調整が多く、協力関係の醸成を阻む主な障壁は「時間がないこと（lack of time）」で、関係性構築への優先順位が高く、教員と現場とが個人的に結びつきがある場合や複数の目的（例えば教育と研究）を達成している場合に軽減されるものの解消されることはないという。加えて、研究参加を通じて、サービス・ラーニングに関する自分自身の思い込みに焦点を当てるのに役立ったとする研究者の声を紹介しており、「この研究に参加して、個々のコミュニティ・パートナーとの関係の親密さと、サービス・ラーニングのパートナーシップの長さ、質、深さには必ずしも相関がないことに気づかされた」と述べたことが挙げられている。

4. 民主的であるということの意義

Claytonら（2010）によるTRESの開発に取り組んだ研究では、経験を積んだ教員は地域参加を伴う教育プログラムにおいて、教員と現場の方々との関係は自らが認識しているよりも、もの教員が現状で認識しているよりも、より変容的なものとなっていることが明らかとなった。また、今回は詳述しなかったが、セクション2においてTRESでの設問に回答する前に行うベン図による教員と現場とのあいだの親密さの評価は、TERSの結果と高い相関（現状：r=.63, p<.01、理想像：r=.62, p<.01）が見られ（p.13）、親密さを測る上での「短時間で非言語的に簡便に使用可能（short, nonverbal, and user-friendly）」（p.15）なツールとして効果的であることも確認された。その上で、研究に参加した教員の中に、以下に挙げるような傾向が見られたことが記されている。

> 一部の教員は地域のパートナーとの関係において、自身の成長に焦点を当てることが困難で、代わりに学生の成長について多く触れていた。何人かの回答者は、自分自身と地域のパートナーとの関係の語りから、学生との関係の語りにすり替わっていた。そこでは、自分自身やコミュニティ・パートナーよりも、学生の視点、満足度、学習成果の方が重要だと頻繁に示していた。（p.14）

換言すれば、今回の調査では教員と現場との二者関係（F-O）に焦点を当てたものの、サービス・ラーニングを担当する教員でもパートナーシップの評価においては学生と現場（S-OまたはO-S）の関係に関心を向けているということになる。この点は2011年度から立命館大学でサービス・ラーニングのプログラムを担当してきた筆者からすると、やや意外な印象がある。なぜなら、この10数年にわたってプログラムのパートナーとなっていただいた皆さんと共に関係性の構築を図りながら、自らの学びと成長の契機を得てきたためである。無論、それは受講生のように「私」を主語にしたレポートの執筆によって、またレポートの執筆前に共に現

場に関わり合った「私たち」を主語にした口頭でのプレゼンテーションを通じて自覚をしてきたわけではない。ただし、こうした原稿執筆、また各種の学会発表、何よりよりよいプログラムの設計とそうしたプログラムの実施を通じて現場に波及効果がもたらされるように、という変容的な関係性の創出に取り組んできたという実感がある。サービス・ラーニングのプログラムの開発・推進にあたって、その担い手をSO-FARモデルによって5つに分けたとき、それら5者は固定的でかつ不変の役割を担うのではなく、むしろ相互作用を通じて常に最適な関係を探る、すなわち各種行為の相乗効果による豊かなコミュニケーションを図ることが欠かせないことを、肌身で感じてきたのである。

F-Oの二者関係に焦点を当てたTRESを通じた評価研究により、プログラムを担当する教員から、サービス・ラーニングにおけるパートナーシップにおいて、親密性が高ければ、変容的な関係性による地域の変容がもたらされ、より充実したプログラムが展開できることを明らかにしたのがClaytonら（2010）の研究である。その結論部分では、そうしたプログラムを民主的に設計し、運営し、評価することの重要性に言及されている。その理由は、SOFARモデルに基づいてF-Oの関係性に着目して変容的なパートナーシップについてTRESを用いて検討してきたものの、今後は「S-O、O-Fなどのダイアド、S-F-OやS-F-Rなどの学生・教員・コミュニティのトライアドで使用される予定」と、今後の展望が示されたことの反映でもある。何より実際のプログラムにおいては、自覚的・無自覚的にかかわらず、誰かがやってくれる、自分の役割でもなく責任は自分にはない、とパートナーシップからの遠心力を発揮するような人がいれば、最終的に成績評定を行うことができる教員の権限によって受講生と活動先をコントロールするかの如く、独善的にルールを生成、適用する場面が少なくとも筆者には容易に想像できる。

ちなみに、今回解題をしてきた論文では、まとめの部分において、このTRESの研究に参加したノースキャロライナ州立大学の学生グループが作ったという「shared developmental journey」という言葉が紹介されている。直訳すれば「共に歩む成長の旅」となるが、筆者に馴染みのある表現に言い換えれば「学びのコミュニティの協創」である。こうした言葉を紹介しつつ、無理に高みを目指して変容を目指すのではなく、身の丈にあった交流もまた大切になることを、Claytonら（2010）は示唆するのである。次回は既に取り組まれたTRES2の研究を解題しつつ、教員が牽引しすぎないSOFARでのパートナーシップのあり方に迫ってみよう。

（gucci@fc.ritsumei.ac.jp）

【引用文献】

Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20. Bringle, R. G., & Steinberg, K. S. 2010. Educating for informed community involvement. American Journal of Community Psychology, 46, 428-441.

Clayton, P. H. Bringle, R. G., Senor, B., Huq, J., Morrison, M. 2010. Differentiating and Assessing Relationships in Service-Learning and Civic Engagement: Exploitative, Transactional, or Transformational. Michigan Journal of Community Service Learning. Michigan Journal of Community Service Learning, 16, 5-22.

Steinberg, K., Hatcher, J. A., & Bringle, R. G. 2011. Civic-minded graduate: A north star. Michigan Journal of Community Service Learning, 18(1), 19-33.

【注】

[1] Claytonら（2010）の記述によれば、インディアナ大学パデュー大学インディアナポリス校、ノースカロライナ州立大学、ノースカロライナ大学チャペルヒル校、イーロン大学から「サービス・ラーニングの経験豊かな教授陣（experienced service-learning faculty）」（p.11）が参加した、とある。

[2] これらの質問は複数の先行研究から提示したものであり、Claytonら（2010）では3つの文献が挙げられているので、関心のある方には原典を参照いただきたい。

[3] 原典の一つには日本語でも『対人関係論』として1995年に訳出されているハロルド・ケリー（Harold H. Kelley）とジョン・ティボー（John W. Thibaut）によるものが挙げられている。あわせて、投資モデルで知られるキャリル・ラスバルト（Caryl E. Rusbult）の研究も挙げられている。



（又）こりの正体

JR 茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

また、こりの話に戻ります。

こりには縮みすぎたタイプと伸びすぎたタイプがあります。
今回は、筋肉が縮みすぎたタイプのこりについて補足します。

筋肉の中の筋原線維には、太い繊維と細い繊維があります。
細い繊維同士が吸着しあって縮みっぱなしになるのが、縮みすぎたタイプのこりの正体です。
細い繊維の重なりが大きくなるほど、伸ばしにくくなり、ガンコなこりとなります。
（細い繊維同士の吸着については４６号で説明しました。）

こりをますますガンコにさせるもの

実は、ガンコなこりをさらにガンコにさせるものが他にもあります。
それは過度な筋緊張です。

筋緊張とは

筋肉は、意識して脱力しても、わずかに収縮しています。
これを筋緊張と呼びます。
筋肉の収縮は、筋原繊維の太い繊維と細い繊維が引き合うことで起こります。
（筋肉の収縮については４８号で解説しています。）

筋緊張は、関節を安定させたり、姿勢を維持したりするのになくてはならないものです。

筋緊張は、少しは意識的に強めたり、弱めたりすることはできますが、とめることはできません。
呼吸をとめることができないのと同じです。
息を吸ったり、吐いたり、早くしたり、遅くしたり、深くしたり、浅くしたり、また、一時的に止めたりすることはできます。
でも、息を止め続けることはできません。
眠っていても呼吸が続くように、眠って脱力していても、筋緊張はわずかに続いています。

目覚めているときでも、適度な筋緊張があるおかげで、運動したり姿勢を保ったりすることができます。
筋緊張は、生きていくのに必須なものなのです。

過度な筋緊張がもたらす悪影響

ところが、必要以上に筋緊張が発生することも少なくありません。
よくあるのは、心の状態によって過度な筋緊張が発生するケースです。

慣れない環境にいたり、人から見られていたり、不得意な作業をしたりすると筋緊張は強くなります。
「失敗をするんじゃないか」
「無能だと思われるんじゃないか」
「バカにされるんじゃないか」

そういう不安が心によぎると、筋緊張は強まるのです。

「負けるんじゃないか」「間に合わないんじゃないか」
いやな予感がしてあせると、余計に筋緊張が強まります。

「こわい」「おそろしい」「逃げ出したい」
恐怖を覚える場面では、筋緊張は極まります。
筋緊張を制御できなくなり、体が震えたり、すくんだりします。

スポーツでも、勝ち負けや記録、賞金などがかかってくると筋緊張が強くなります。
「勝ちたい」「優勝したい」
「良い成績を出したい」「新記録を出したい」
「好かれたい」「良く思われたい」
「カッコいいところを見せたい」
「もうけたい」
そういう欲が心に浮かんでも、筋緊張は強まります。

オリンピックとかワールドカップとか、大舞台になればなるほど筋緊張は強まります。
人は応援してもらえると頑張れるものですが、反面、期待されすぎると筋緊張が半端ないものになります。

今年はヤクルトスワローズの村上崇隆選手がシーズン中ホームランを量産し、新記録を達成するのではないかと注目されました。
しかし、王貞治選手の記録に並んでからはなかなかホームランが打てなくなり、最終打席でやっと王選手の記録を超えることができました。
数々の新記録を打ち立てた村上選手でしたが、ホームランはウラジミール・バレンティン選手の６０本塁打には及びませんでした。
想像を絶するファンの期待が、村上選手を飲み込んでしまったのでしょう。

きっと最終打席のころには、新記録どころか、王選手の記録も越えられそうになくて、期待されることもずいぶん少なくなったでしょう。
本人も「打てへんわ」と半分あきらめたところ、気負いがなくなって、ホームランが打てたのではないでしょうか。

日本アマチュアゴルフ選手権で最多６回の優勝をなしとげた中部銀次郎氏は「欲も得も消えたとき　勝利が近づいてくる」と言っています。
優勝したいと意気込んでプレーするとミスショットを連発します。
優勝が無理とわかってあきらめがつくと、最終ホールでベストショットが出たりするのだそうです。

ある対談で中部氏が王貞治選手に、打席に入るときは何を考えているのかたずねました。
王選手はこう答えたそうです。
「いざ打席に入ると何も考えません。いざ構えてしまえば無の境地。
雑念があるとホームランどころかヒットも打てません。
無の境地に達する簡単な道はない。
ただひたすら技を磨き、精神を鍛練する。
努力とか精進とかいったものは、ホームランを打つために重ねるのではなく、無の境地に達するために辿る道」と。
（参考文献：『中部銀次郎のゴルフ　１　心の巻』ゴルフダイジェスト社　2008）

過度な筋緊張は全身に均一に起こるわけではありません。
偏って緊張が生じるため、姿勢や動作にゆがみが生じます。
野球の投球やバッテイング、ゴルフのショットなどが本番でうまくいかなくなるのは、まず、不均一な筋緊張でフォームが崩れるからです。
次に、筋緊張が強まれば強まるほど、筋肉は固くなり、同じ動作をするにも抵抗が加わり、スピードが落ちます。
余分な力を出さなければならなくなり、早く疲労します。
疲労すると、筋肉が弛緩するために必要な酸素と栄養が不足し、ますます筋肉が固くなります。

過度な筋緊張があると、本来持っている能力を１００％発揮することができなくなります。

さらに、うまくできなかったという結果になった場合、精神的な落ち込み、自己否定、マイナスイメージなどがもたらされます。
すると、ますます不安や恐怖が強くなって、筋緊張が高まるという悪循環に陥ります。
スランプとかイップスというのは、この悪循環から抜け出せなくなった状態です。

体の冷えと筋緊張

体が冷えたとき、脳は筋肉に収縮して発熱するように信号を出すので、筋緊張が強まります。
気温が下がったときだけでなく、心が緊張状態にあるときも体は冷えます。
心が緊張状態にあると、交感神経が活発になり、毛細血管が収縮して血流が少なくなり、体が冷えるのです。
冷え症の人は筋緊張が強くなりやすいと考えられます。

鳥肌が立つまたは寒いぼが出るのは、体毛を立てる筋肉（立毛筋）を収縮させることで、熱を生み出すためです。
立毛筋の収縮だけでは熱が不足している場合、脳は体の骨格筋を緊張させます。
それでも熱が不足している場合は、脳は筋緊張を強める信号をさらに出すので、体がこわばったり、震えたりします。

過度な筋緊張とこりの関係

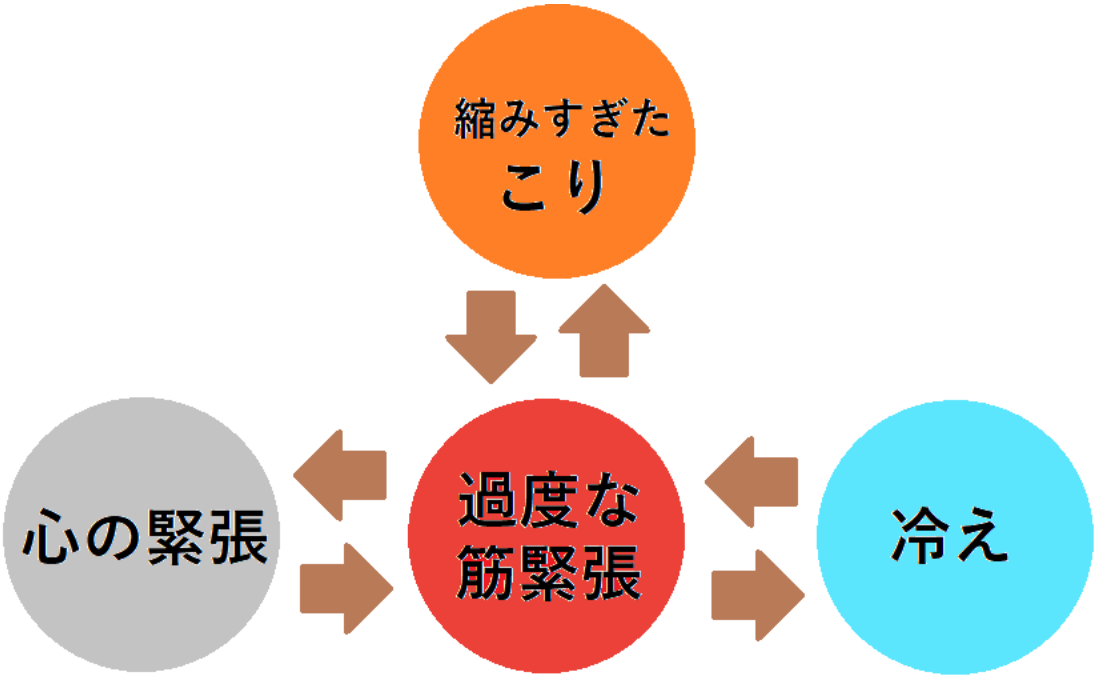
こりがない人でも、過度な筋緊張が続くと、体のあちらこちらにこりが現れます。
過度な筋緊張は、全身の筋肉に均等に生じるのではなく、不均一に生じるため、体がゆがんできます。
また、関節に弱いところ（支持性の低下した部分）があると、関節が弱いほうへねじれます。

すると、体のゆがみや関節のねじれで、筋肉に縮みすぎるところや伸びすぎるところができ、こりが生じてくるのです。

もともとこりが体のどこかにある場合、過度な筋緊張があると筋肉が伸びにくくなり、こりがとれにくくなります。筋緊張がひどくなると、ますますこりがひどくなることもあります。

筋肉が縮みすぎてこっているところでは、筋原線維の太い繊維と細い繊維の重なりが大きくなり、筋緊張も強くなります。
ですから、体にこっているところがたくさんある人ほど、過度な筋緊張が生じやすくなります。
さらには、心の緊張も強くなり、不安や恐怖を感じやすくなります。

縮みすぎたタイプのこりと過度な筋緊張、心の緊張、体の冷えは相補的な関係にあります。



反対に、心の緊張を少なくすると、過度な筋緊張も少なくなり、こりが減りやすくなります。

次回はそんな話を書いてみたいと思います。

ではまた。

追伸　執筆者@短信に「スペインは引き分けでもいいので、守りを固めて体力を温存し、点を取りに来た日本の裏を突いてくるのではないでしょうか」と書きましたが、予想ははずれ、パスを回して攻めてきました。
そして、前半を１点でしのいだ日本が後半逆転し、コスタリカがリードしたときには、３位に落ちてスペインが焦っているのがわかりました。顔も蒼ざめ、正確なパスができなくなっていましたね。
日本はクロアチアと引き分け、PK 戦で負けて、惜しくもベスト８進出はなりませんでした。
観ていて一番緊張したのはＰＫ戦。同一視した人の緊張場面でも、筋緊張は高まるものですね。

現代社会を『関係性』という観点から考える

㉒　「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

連載 14 では**『「開く」ことと「閉じる」こと』**について書かせていただきました。その後、連載 15 では**『つながりが支えるこころ』**と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となってしまい社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、**『「見える」ことと「見えない」こと』**という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、**「地域社会」との「関わり方」を考える**というタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。つまり、**「地域域社会」で生きるということ**、について考えてきたともいえます。また、現代社会においては、(望まない)「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。これに関しては連載 19 で**「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ**というタイトルで問題提起をさせていただきました。連載 19 回では**「自分は誰かとつながっている」という感覚**を持つために私が必要だと痛感している**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**について、連載 20 では、**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**というタイトルで、コロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について、連載 21 では、**Society から Home へ矮小化していく社会**について述べさせていただきました。

連載も 5 年を超え、コロナ禍のみならず連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も、自分の専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだこと、触発されたことをこの連載原稿に落とし込んでいきたいと考えています。

しかし、連載原稿としての一貫性は保持したい（現代社会における関係性に関する考察という観点を大切にする）とも考えておりますので、冒頭で、連載 14 以降、これまでの連載を振り返る短い紹介をしていることを御了解ください。

今回は**について**考えてみたいと思います。

1　「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について

コロナ禍以降、各種研修・学会がオンラインで開催されることもむしろ「新しい日常」と化しています(それでも今年に入りようやく対面に踏み切った研修･学会もありますが)。

会場研修に比較すると、参加者同士の関係づくりという点が難しいのですが、研修によっては小グループに分かれてのグループ討議などが実施される場合もあり、(パソコン捜査に)臆さず参加することで得られるものも多いと考えています。

先日、「地域包括支援事業」「重層的支援体制整備事業」等に関するオンライン研修に参加しました。重層的支援体制整備事業を導入された市区町村の先進事例の報告などもあって、大変参考になりました。

その時にこのの研修講師である主催団体代表から指摘されたことが、**「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」**があり、それがあってこそ、各種制度が成り立っている面があることを見落としてはならない、ということでした。

私はこれまで、精神障害者や刑余者などの「生きづらさ」を抱えた人を「まるごと」支援対象とする地域包括ケアシステムというものが、本当に地域で機能していくためには、特に共助の部分をどのように耕していけばいいのか、コミュニティソーシャルワークの視点から考えさせられることは多々ありました。しかし、今回の講師の視点は「みんな（経験上）なんとなく気付いているけど」「あまりに自明のものだからずばりと指摘しなかった」ものを明言されたと感じました。

2「家族助」～家族メンバーによる生計保持や扶養

「家族助」といえば、「家族メンバー相互による助け合い」がイメージされますが、法的にはもう少し複雑です。ここでよく耳にされるのが「扶養義務」でしょう。

扶養義務：自力で生活を維持することが困難な者を経済的に援助する義務。現民法では、直系血族、兄弟姉妹に互いに扶養する義務を課している。また、3 親等以内の親族間でも、家庭裁判所の審判により扶養義務を負うことがある。実際に誰がどのように扶養すの審判によって決定される。そして、「扶養義務」は、実際には「生計保持義務」と「生計扶養義務」がある、

生計保持義務：扶養義務者と同様の生活水準を被扶養者にも保証する義務。具体的な対象者は配偶者及び未成年の被扶養者。下記生計扶養義務に比べるとはるかに重い義務である。→「最後のパンの一切れを分け合うような関係」という喩えを聞いたことがあります。

生計扶養義務：生計保持義務と異なるのは、扶養義務者自身の生活は通常通り送ることができることを前提として、「余力があれば」被扶養者を扶養する義務。具体的には、未成年に対する両親以外のケース（兄弟姉妹）、成人済みの子に対する両親が負う義務などが該当する。

法律上の扶養義務者は専ら被扶養者との関係性によって決まりますが、医療福祉行政上の扶養義務はこれに加えて「生計同一性」が求められています。

3 「家族助」が期待されない場合

扶養義務という言葉から、生活保護制度の「扶養照会」を想起された方もおられると思います。生活保護制度は文字通り最後のセーフティネットであり、扶養義務が優先されるがゆえに、生活保護を申請した場合は家族等に扶養紹介がなされ自分の状況が知られることを忌避し、生活保護の手続を躊躇う人もいます。

しかし、家族に求められるのは「扶養義務」だけではありません。扶養する相手の年齢を問わず、「家族」には諸々な役割が求められることが通例です。例えば「病気・怪我によ

る入院」を想定してみましょう。

・入院や施設入所に際して身元保証人となることが求められる（退院後は身元を引き受ける、金銭なども支払う等）
・手術等の同意者となることを求められる。特に、手術の同意などは成年後見制度の後見人でもできない。
・病院などは完全看護であり、特にコロナ禍に入ってからは面会も制限されている。しかし、家族に対して病院や施設からの細々とした要望は多い（必要とされるものや本人の希望するものの差し入れ、インフルエンザワクチン接種の同意、そして退院先の確保。退院先の確保が一番の難関であり、地域の社会資源やマンパワーが少ない場合、家族がかなり動かなければならない）。

4　実は介護保険なども「家族助」を前提とした上で制度設計がなされているということ

介護保険は本来「介護の社会化」を謳ったものではありますが、様々な諸手続その他に家族が動かねばならない場面が多々あります。例えば、ケア会議への参加もその一例です。日程などはまずケア会議主催者の日程に合わせることが少なくなく、仕事をやりくりして参加しなければならない場面も多くあります。

本人からの情報が入手しづらいケースも多く、家族が唯一の情報源といった状況も少なくありません。家族集積性があるといわれる病気の罹患歴、親族・家族との関係性などは、家族としても支援者の方々に把握していただく必要があると考えていますので、私は常に、ケア会議用に当該家族の生活歴・病歴を整理したものとジェノグラムを用意し、情報を「見える化」したうえで、関係者間での情報共有が容易になされるようにしています。ただ、こうした方法をとることが、場合によってはケア会議メンバーの中でなんとなく「引かれる」場面も体験してきました。当方にそうした意図はなくとも、知識や情報量によって「家族」がケア会議の優先権を握ろうという誤解を招いているのかと感じたこともあります。

また「御利用者様第一」を貫かれ、それに沿わない家族について、非協力的であると断じられることもまた辛いものです。例えば、あくまでも精神疾患が悪化しており、色々なリスクがあるにも関わらず、受診については「御利用者様が嫌がっておられる」「私たちは利用者様の味方だから」と言われることで、事態が悪化することもあります。「自己決定」ということは確かに重要ですが、それができなくなっている場合は、専門家としての自負を持って介入することも必要だと感じています。

5　家族や親族どのインフォーマルなネットワークが「そもそもない」「薄い」「切れている」「お互い自分のことで精一杯」な人はどうなってしまうのか

コロナ禍においては、「ネットカフェ難民」など、家に帰れない若者や若年女性の実態が注目されることもありました。家族間の暴力や経済的な搾取などそれぞれの事情があって家を出ている彼らにとって、「実家に帰ってやり直せばいい」という感想やアドバイスは、ネットの書き込みだと「匿名であることで他人を叩く無責任さ」で済まされるかもしれませんが、専門職がもし「家族に頼りなさい」と安易にアドバイスを行うとすれば、家族歴の精査が足りないことを指摘されてもいたしかたないでしょう。

ここまで述べてきたのように、日本の社会では「家族助」が様々な制度の前提となっていて、「家族なら助け合うのがあたりまえ」という考え方が強いために、この「家族助」が期待できない人については、ちょっとした行き詰まりがたちまち生活困窮につながってしまいます。年越し派遣村の村長を務め、様々な社会活動を展開されてきた湯浅　誠氏の言

葉を借りれば、「『溜め』がない」状態です。

そして実際に家族に頼れないという人が増えているにも関わらず、「自助」だけではなく「家族助」的なものが存在することを、「地域包括ケアシステム」の概念図の中にすら明記されないのは、「家族が助け合うのは当たり前」という既成概念が強くあって、それでも薄々はそれが全ての家庭に期待できることではない現状にあることをわかっていながらも、明らかにするとそれが露呈してしまうということを恐れているのか、とまで深読みをしてしまいます。

先の連載では、「ステイホーム」の呼びかけを例に挙げて、コロナ禍の中で、「自分だけ」「自分の家族だけ」が大事という気持ちが強くなると、目の前に支援を必要としている人がいても目に入らなくなってしまう（可能性がある）ということを述べました。

そこでも述べましたが、現在急増している特殊詐欺は、ある意味「自分の家族」を質にとられるような犯罪（お金を出さなければ家族が困るという心理に付け込まれるもの）であるともいえます。この連載の中でも何度か述べたように、「社会」という概念が矮小化しているがゆえに、自分にとって社会の全てであると認識せざるを得なくなっている「家族」（その状態の有無は問わずとも）に危機が迫っていると感じると、人は冷静な判断ができなくなってしまう所以ではないでしょうか。

6　ソーシャル・ファミリーという考え方

その一方で、「コレクティグハウジング」のように、血縁のない世帯が、リビングやキッチンなどを共有しながら生活するという形態も少しずつ見られるようになっています。ただ、実際に「一緒に住む」ことはまず引越しを伴いますし、なかなかハードルは高いでしょう。しかし、機会があれば連絡をとりあったり、気遣いをしあうような関係性の（再）構築が試みられている地域もあります。

ある地域においてはその端緒は「子ども食堂」でした。「子どもの貧困なんてないんじゃないの」という声もあるなかで開設された子ども食堂は、ただ食事の提供だけではなく、そこで安心して宿題をしたり遊んだりできる子どもの居場所として貴重な存在となっていきました。そこで過ごした子が OB として後輩の勉強を手伝うこともあります。

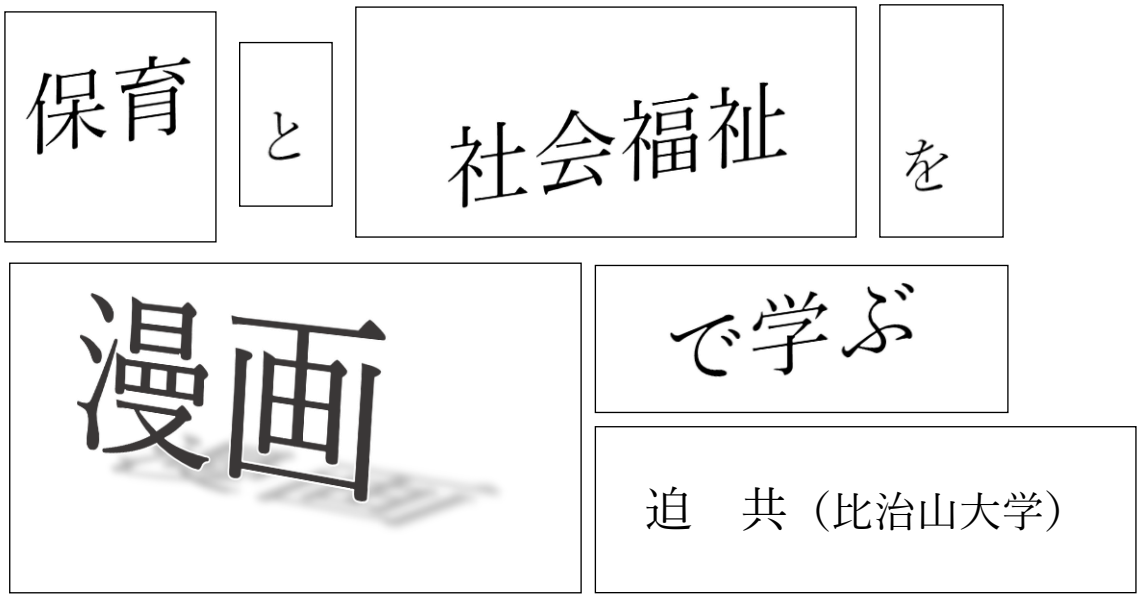
そして現在、そこを拠点にして「子育て支援」「多世代交流」など様々な試みが行われています。物価高の現状、子ども食堂の運営が苦しいという報道もなされていますが、実際に子どもと接するスタッフだけではなく、子ども食堂の運営を背後で多くの人が支えています。「子ども食堂」をオープンすることで「地域の困りごと」が可視化された結果、志のある人々が次々と手をあげてくださったのです。結果的に、「子どもを見守る（監視するのではない）地域社会」「孤立しがちな高齢者が参加しやすい場もそこに作ってしまい、多世代交流の場とする」といった活動が展開されています。

「生理の貧困」が報じられた時には、企業から多くの生理用品に提供がありました。それはそれで企業の社会貢献活動として尊いことだと思います。その一方で、年金が出ると、「地域の子どもたちのために」と、できる範囲でお菓子を買って訪ねてくださる高齢者の方もいらっしゃると聞きます。こうした「われらの地域の子ども」意識は、現代社会では、何らかの仕掛けがないとできないものなのかもしれません。

実は私自身も、この試みのごく初期に主催者とお出会いしたことがあり、以後支援の端に加えていただいています。日々の買い物をするショッピングセンターで発行されるポイント、オンラインショッピングでのポイントをちまちまと貯めておき、一定額になれば主

催者の方に声をかけて、その時々に必要なものをお届けするようにしています。パントリーを行う際に添えるちょっとしたお菓子のリクエスト等があることもありますが、食器用洗剤のニーズが実は高いということを聴いたときは、これも見えずらいニースだと感じたことがあります。

「お互いがお互いを気に掛け合う」関係性こそがまず望まれているのではないでしょうか。



⑱ 『「神様」のいる家で育ちました ～宗教２世な私たち～』

菊池真理子さんの『「神様」のいる家で育ちました ～宗教 2 世な私たち～』（文芸春秋、2022）はタイトルにある通り、親が宗教を熱心に信仰する家庭で育った人たち=「宗教２世」の生きづらさを描いた作品です。

親は世の中にあまたある宗教の中から、自身で信仰する宗教を選ぶことができます。しかし熱心な信仰をもつ親のもとに生まれた子どもには、宗教選択の自由以前に、当たり前のものとしてある「親の宗教」が全ての前提となります。子どもにものごころがついて「信仰の自由がある」と気づくまでには多くの時間がかかります。そのため、親が信じる宗教の教義は、子どもの心の奥底に染みわたり、子どもの人生を縛ることがあります。

乳幼児期の子どもにとって親は愛着形成の対象です。子どもは、親との濃密な二者関係を経て、第三者である親以外の人たちとの関わり方を身につけていきます。ものごころがつかない間は、子どもにとって親は生き方のルールブックのような存在です。親は子どもの健康や幸福を願い、子どもにも同じ信仰をもつよう勧めます。子どもは当たり前にある環境に適応し、親が信じる宗教以外の存在を考える機会を十分に持たないまま、自然と親にならって同じ信仰をもつことになりがちです。親に愛されたい思いも、親の信仰に追随する動機になります。

親が信じる宗教の価値観が、世の中の一般的な価値観と大きな違いをもつ場合でも、子どもは当初、親の信じる宗教の価値観に従うことでしょう。しかし成長につれて、宗教と世の中の価値観との間で、葛藤に苦しむことになる場合が少なくありません。

「宗教２世」は思春期や反抗期、学校の教師やクラスメイトとのやりとり、就職や結婚など

の機会に、自分の親や家族が他の人たちのそれと違うことに気づかされることが多いようです。もちろん多様な価値観があっていいのです。しかし、世間一般の価値観を悪いもののように扱う宗教の場合、世間一般に評価されているものに惹かれる気持ちをどう扱っていいか分からず、極端な自己否定をするなど、生き方をこじらせてしまうことも起こりやすくなります。

菊池さんの作品では、様々な信仰を持つ家庭で育った 2 世が登場します。林間学校に参加することはよくても「キャンプファイヤーはダメ」だったり、「神を賛美する歌」以外を歌ってはいけなかったり、恋愛感情を持つことはもちろん、「他人から好かれることまで禁止」される子どもが登場します。

宗教内でしか通用しない価値観の下で日々を過ごして、自分の意思と関係なく宗教に入れられて。みんなの方がずっと幸せそうに見える。学校にも社会にもなんだかうまくとけこめない…話したら変な目で見られそう。
脱会したら親は二度と愛してくれないかも。親から逃げても組織は追ってくるかも。そして自分の中にも「もしかして天罰が下るかも」という思いが…。（「はじめに」より）

他者に悪感情を向けることや、批判すること等、伝統的な宗教にも禁止事項はあります。慎み深い、良い言動を心がけることは一般的な価値観にも合致しますが、強い信仰心の結果、あまりにも理想と本心が乖離してしまうと、バランスが崩れてしまいます。人を救うはずの信仰が、家族を壊してしまうことがあります。
カルト宗教の場合は、大人であっても冷静な判断ができない状態に追い込まれて入信させられていたり、マインドコントロールや高額献金を強いられる問題があるなど、別種の対応が必要です。しかし一般的な宗教の場合にも、「宗教 2 世」の問題は起こり得ます。教義が一般的なものであっても、親の信仰の仕方が極端なものであれば、子どもが世間との間で感じる葛藤は大きくなるでしょう。
人はなぜ、宗教に過度にのめり込むのでしょうか。夫婦関係や親子関係など、実際の自分の身近な家庭環境が思わしくない場合、宗教に救いを求めたくなるものです。目の前にある家庭や周囲の人間関係から一時的に目をそらし、別種の理想のもとに自分の価値を確かめることができるのかもしれません。

真理子の母親はある宗教団体に入っていた。宗教団体が発行する新聞に購読ノルマがあったのか、母親は信者仲間から頼み込まれる。「どうしても新聞啓蒙しなきゃいけないの」「ご主人、お友達たくさんいるんでしょ」…。手を合わせてお願いされた母親は「ちょっと待ってね」と席を立つ。
部屋の外で電話をかける母親。「ええ、新聞をまた。なんとか 1 カ月だけでも…」。

部屋に戻った母親は「4 件とれました」と伝える。「すごいわぁ、私たちが 1 日歩き回ってもとれないのに」。信者仲間から褒められた母親はしばらく談笑していたが、仲間が帰った後、泣きながら怒り出す。「私がどんな思いで頭さげてると思ってるのよ！」
母親は少しずつ不安定になっていく。真理子たち姉妹のケンカに怒って、家から追い出すことが多くなる。心身をすり減らしながらも、毎日毎日、雨の日も、宗教新聞を配布する。選挙の運動員としても働きながら、信仰を続けた末、真理子が 14 歳のときに母親は自死してしまう。（「第 7 話」より）

強い信仰心を持つ親にとって、自分と同じ信仰を持つ子どもを見ることは大きな喜びになります。しかし、それは子どものありのままの姿ではないかもしれません。「子どものありのままか、もしくは信仰か」。この二者択一を、親が子どもから求められた場合、熱心な信仰をもつ親であるほど、信仰の方を選んでしまうケースが多いように思われます。親はその上で、自分が正しいと信じる信仰に、子どもを従わせようとします。結果的に子どものありのままの心は否定され、抑圧されてしまうのではないでしょうか。
家庭や宗教のコミュニティにいる自分と、学校や一般社会にいる自分の間で引き裂かれ、どこにアイデンティティをもてばいいのか分からなくなってしまった「宗教 2 世」の中には、鬱や吃音などに苦しむ人もいます。親は信仰で子どもの苦しみをなんとか解決しようとしますが、子は親の信仰の強さによって、一層苦しむことになるかもしれません。

母親が熱心な信者の仁奈は、母が運転する車で、月に 2 度は本部に連れられていった。「何が宗教の教えで、どれが母の考えで、どこからが私？　だんだんわからなくなっていく――」。「信じ切っていないのに私は連れられてここにいる。いるだけでなぜか何かを削られていく」。もう行きたくないと伝えた仁奈に、父親はダメだよ、という。「信じてなくてもいいからお母さんにつきあってあげなさい」。仁奈は涙を流して気づいた。「ああ、削られてるの、ひとりの人間としての私の権利だ。みんなが当然持っている、何を信じて何を信じないか決める権利を、私だけ持ったことがない。それがこんなにつらいんだ」。（「第 6 話」より）

アトピーで苦しむ洋介。「薬は毒」という教義から、家族はステロイドの使用を認めない。「アトピーの人は前世で人を焼き殺している」と教えられ、洋介は道場に毎日通うこともあった。思考放棄して教義を都合よく使う親の姿に違和感を募らせた洋介は、社会人になって数年後、やっと「宗教やめるよ」と母親に告げることができた。母親はがっかりして力を失い、そっぽを向く。「そういう顔させたくなくて、子どもの僕は頑張ってきたんだ。ただあなたを喜ばせたかった。あなたを笑顔にする方法は宗教しかなかった」。（「第 2 話」より）

「宗教 2 世」の問題は「毒親」や「共依存」の問題に近い構造をもっているように思われま

す。親が自分の信仰をもつことは自由です。また自分の子どもが、自分と同じ信仰を持っている姿を見ることができれば、大きな満足感を得られるものでしょう。しかし、それは子どもに依存することになっていないでしょうか。子どもがある程度の年齢まで、親に依存するのは当たり前のことです。しかし親が、自分の幸せのために子どもを利用しているとすれば、それはやがて、気づかれにくい虐待に姿を変えるかもしれません。

紹介作品：

菊池真理子（2022）『「神様」のいる家で育ちました ～宗教2世な私たち～』文芸春秋

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

参考サイト：

@DIME　【私たちの選択肢】宗教にのめり込む母、アルコールに溺れる父、漫画家・菊池真理子が経験した「宗教2世」問題　https://dime.jp/genre/1251273/

@DIME　【私たちの選択肢】自動的に信仰させられていた「宗教2世」はいわば被害者です　https://dime.jp/genre/1254120/

週刊エコノミストonline　連載中止になった菊池真理子氏のコミックを単行本化＝永江朗　https://weekly-economist.mainichi.jp/articles/20220927/se1/00m/020/015000c

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法 20～

＜体調管理＞

杉江　太朗

～お腹の異変～

私自身が若手であるかどうかは、読者の判断にお任せするとして、この業界では、経験年数の少ない職員の割合が多いと指摘されて久しい。経験年数３年未満の職員が半数を占めるという職場も多数あるのではないかと思う。とある自治体では、100 人単位で専門職の募集をかけていると聞いたこともある。私自身の所属する職場でも、経験年数を積み上げる前に退職してしまったり、休職してしまったりする職員がいる。

そんな中、経験年数をそれなりに経た職員と、「どうやってこの業界で生き残ってきたのか」という話をしているときに、私も１年目のときは体調を崩して大変だったという話をしたところ、大いに驚かれてしまった。その職員には私が無双にでも見えていたのだろうか。それとも体調不良を感じない鈍感にでも見えていたのだろうか。とにかく、「杉江さんでもそんなことがあったなんて」と言われてしまった。さらにその職員は、私にそのようなことがあったことを若手にもっと話すべきだとも言った。そのことにどんな意図があったのかはわからないが、私自身が、どのようにしてその状況を乗り切ったのかは、もしかしたら同じ状況にいるかもしれない、誰かの役に立つかもしれない。それ以上に、私自身がその頃をどのように振り返り、整理していくのか、その行為に興味があったので、過去の記録と共に書いていきたいと思った。

～当時のお腹事情～

私は、学生の頃に SNS（mixi）を初めて、いつからか並行してブログも書いていた。ブログは基本的に匿名で書いており、今でもとある検索ワードで検索すると一番にヒットしたりする。その中には、匿名であることを利用して、ネガティブなことも扱うようにしていたと覚えているので、ちょうどこの業界に入って１年目の頃のブログを読み返してみた。そこにはこんな歴史が残されていた。

【1 年目の９月】

最近、腹の具合が悪いです。この２週間、　毎日トイレで　～（中略）～　出てくるのは、スープカレー、良くてもチョコ

ソース

【1 年目の 10 月】
人の様々な感情に触れるのでしんどいと感じるようになりました。

【1 年目の 11 月】
（前職は辞めたくて仕方がなかったという話に続けて）今の仕事は、ものすごい精神的に病むのにまだ辞めたいとは思っていない。

【1 年目の 12 月】
（1 年を振り返って）4 月～12 月は、目まぐるしく時間が過ぎました。途中しんどくて体調を崩しました。不調の原因が精神的なものだと気付いて、自分も病むのかと気付きました。人生がシャバシャバだったと気付いたのはこの頃…。

～お腹の具合とかけまして～

表現が下品であることや、中身が陳腐であることは、私もその頃は若かったからということにして、いざ、振り返ってみると、9 月頃から体調不良を感じていたようである。確かに、この時期は、お腹の「緩い（痛いではなく緩い）」日が続いており、水でも固形でも何かを口にするたびにトイレに駆け込む状態だったので、面接や会議があるときには、食べ物だけなく水分も取らないように気にしていたと思う。出張中でもコンビニエンスストアのトイレに何回も助けられていた。

それ以前より、お腹は緩い方だったので、連日の頻回トイレ騒動にも何も感じてはいなかったが、あまりにもその状況が続き、お腹の緩いある日、職場のトイレ内でふと「もしかしたらストレスが原因かもしれない！」と頭の上に電球が光るような気付きを得て、以下のなぞ解きに繋がった。

お腹の具合とかけまして、自分の人生と解きます。その心は・・・

「どちらもシャバシャバでしょう」

とにかく下品であることは、許しを請うとして、当時の私は、おそらくストレスに気付いておらず、それどころか、自分のことを「ストレスを感じない性格」だと思い込んでいた節があった。しかし、長く続くお腹の緩さの原因が心因性のものかも知れないと繋がったときに、自分にもそんな一面があるのかと新しい自分を発見した気持ちになった。こんな私でもストレスを感じていたのだ、そうかこれがストレスを感じることなのか、なんか面白い、この感覚を大切にしよう・・・なんてことを考えていた。

～お腹の行く末～

とは言っても、原因が心因性であるかどうかは別として、お腹が不良であるこ

とは変わらなかったので、とにかくその体調をなんとかしなければいけないと思ったわけだが、仕事の量を減らせるわけでもなく、誰かにそのことを相談するという意識もなかった。さて、どうしたものかと思っていたタイミングで、採用者全体の（専門職だけではなく一般職を含む）研修があり参加をしなければいけなかった。誰でも聞いているだけで眠たくなる授業を受けたという経験はしたことがあるとは思う。数日間であったと思うが、気が付くと研修の９割を目が閉じた状態で過ごしていたように思う。すると不思議なことに、その研修後、お腹の調子が少しだけマシになったのである。

～こころとお腹～

少しの間、仕事から離れて寝て過ごしたことに効果があったのかはわからないが、研修前に体の不良がストレスに起因しているかもしれないと思い、研修中に、身体を物理的に休め、研修後にお腹が若干の回復を見せる。そのプロセスは、私自身に、心（ストレス）と体（お腹）は繋がっているのだと体感させることとなった。

専門家の方が聞けば何を今更と思うかもしれないが、少なくともその頃の私は、おそらく、疲れと言うものに気付いておらず、疲れが身体を蝕むという発想さえなかった。しかし、その発想を得たことで、そのまま自分自身が何も変わらない状態であれば、その先も「シャバシャバ」のままであり、少しでも「シャバシャバ」の状態を改善しようと思えば、今までとやり方を変える必要があると考えるようになった。

自身は、ストレスを受けてお腹を壊す存在なのだ、今後もストレスはあるだろうが、何とかして耐久性を高め、対抗策を練らなければいけない、そんなことを考えた。まずは理論武装だけでもと思い、積極的に書籍を購入し、その頃を境にして、毎週末のように研修を受けに行くようになった。受ける研修もとにかく千差万別で、見境なく受けていたことを記憶している。研修だけではつまらないので、行った先では、美味しいものを食べ酒を飲み、行った先が遠方であれば、宿を取り、その先にいる友人に声をかけて共に美味しいものを食べ、酒を飲む、そして観光をして帰るという遊びも取り入れた。

飲みに行くことが目的だったのか、研修を受けに行くことが目的だったのか、今となれば何とでも言えるが、とにかく、良く飲んで、良く学んだ。

また翌年には、通年で行われていた「自己覚知」をテーマとするワークショップに参加することにした。毎週決まった曜日に会場に行き、決まったメンバーで研修を受ける。自己覚知をテーマにしていることもあり、自身の感情を言語化するワークもあり、さらに毎週行くことで、自身の体調を毎週のように比較することができ、少しの変化に気付くようになり、自

身の状態を言語化する訓練となった。

～お腹を守るために～

私は、お腹の改善のために正露丸や腹巻を勧めたいわけではない。誰しもが、ストレスを感じ、何かしらの不調に繋がる可能性がある。私の場合は、それがお腹に現れたが、それ以外の方は、別の症状が出るかもしれない。

生活の変化や、新型コロナウイルスの影響を受けて、毎週のように研修に行くという日常は変化してしまったが、今でも自分自身が「シャバシャバ」であり、少しでも固形に近づけるために、日々アップデートする意識を持ち続けている。

まずは、自身のお腹の変化に気付くことが大切ではあるが、不規則な生活の中ではその変化に気付くことが難しいため、不連続の生活の中にも連続性を担保することが必要である。私にとってその担保は、まずは週末の研修や、通年のワークショップであったが、そのワークショップが終わってからも、毎週発刊される雑誌、毎月届く冊子、定期的に届くハチミツ、毎年決まった時期に開催される研修、対人援助学マガジン、さらには季節の食材、季節の行事、朝の連続テレビ小説などを筆頭に、今でも連続性を担保するために様々なイベントを生活の中に散りばめ、継続できるものを意識的に取り入れている。

そのことがお腹を守っているかはわからないが、少なくとも何を食べても「シャバシャバ」だった生活からは脱却し、今もこの仕事を続けることが出来ている。人生もお腹も「シャバシャバ」であるという気付きが、この私をこの業界で生き残らせていると言っても過言ではない。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑥～

再会・10 代の私たち

♪♪♪

松岡園子

先日、中学時代にいちばん仲良くしてもらっていた A ちゃん（対人援助学マガジン 34 号『それぞれの電話～13 歳～』、35 号『奏でる～13 歳～』、36 号『お弁当～14 歳～』、37 号『揺れる～14 歳～』、38 号『夏の空色～15 歳～』、39 号『スクランブルエッグ～15 歳～』に出てきた「林さん」）から十数年ぶりに連絡がありました。

私が中学時代(大変だった時)に、A ちゃんのお父さんお母さん、お姉ちゃんにもとてもよくしてもらいました。高校生になるとそれぞれの場所で勉強や仕事をし始め、20 代前半ごろから、なんとなく連絡を取らずそのまま時間が過ぎてしまっていたのですが、「どうしているのかなと思って」と、私に電話をくれたのです。

会わずに十数年も経つと、お互いに周囲の状況が変化しすぎており、そこからまた連絡を取ってみようという気持ちにも戸惑いや緊張感が混ざり、気になったとしても行動に移すことが難しくなることもあると思います。

電話で A ちゃんは、十数年前に私にあることをしてしまい、傷つけてしまったのではないかと、とても悔やんでいる様子でした。それから十数年間、ずっとそのことを気に病んでいたようで、「あの時はごめんね」と言いたかったとのことでした。私にすると、そんなことは全く気にしていなかったのに、反対に A ちゃんに気を遣わせてしまっていたことを、申し訳なく思いました。そんな気持ちを抱えながら、自分から連絡をしづらい心境だったはずなのに、メモに残っていた私の電話番号を見つけて電話をかけたのだと言っていました。きっと勇気が必要だったはずです。

A ちゃんのお父さんが、中学時代の私をよく覚えてくれていて、時々「そのちゃん、どうしてるかなぁ？」と言っていたので気になって……とも話していました。私は中学時代に一緒に居てくれたことをとても感謝しているし、ここ数年で市町村の研修会などで自分の体験を話す機会が増え、そこで、当時 A ちゃん家族が私にしてくれて嬉しかったことをいつも話しているよ、と伝えました。

話すのが十数年ぶりでも、すぐに中学時代の私たちに戻って、他愛もない話で盛り上がり、笑い合っていました。お互いの状況は変化しており、A ちゃんのお父さんは病気で入院し、お母さんもこのところ元気がないとのこと。A ちゃんもこの十年ほど、仕事や親の看病などでバタバタしていたそうです。

中学時代のことをお互いに振り返ると、A ちゃんから見た私はとても大変そうだったとのこと。

「おばちゃん、大変やったもんなぁ」

「いつも、中学校の帰りに、私の家に寄って、お菓子を食べて帰ってたなぁ」

「うちの父さんが、一緒に淡路に連れて行ってくれたりした〜」

「ジャニーズのコンサートに 2 人で行ったなぁ。よく親はいかせてくれたと思わん？　中学生 2 人で」

A ちゃんの口から懐かしい話がどんどん出てきます。私が中学生当時、母は統合失調症の症状が再発・悪化し、私がどこへ行くということにも関心を持つことができなかった時期です。中学生の 2 人が神戸から大阪までコンサートに出かけることを、自分の両親がよく許してくれたと思うと、当時の両親ぐらいの年代になった A ちゃんが話すのを聞いて、それもそうだなと思いました。でも、私はそのお陰で、母のこともありながら、楽しい時間を過ごすことができたのです。

また、私が金銭トラブルになってしまった B ちゃん(対人援助学マガジン 35 号『奏でる〜13 歳〜』に出てきた「奈央ちゃん」)のことも思い出して、

「あの時は B ちゃんが本当に怖かったから、逆らえなかったけど、今思うと何が怖かったんやろうね？　何も怖くないやん」

と笑います。私もそう思いました。要求を断ったからといって、無視されたり嫌われたとしても、なんてことないのに、当時の私たちには一大事に感じられたのでした。

A ちゃんとの再会で、私は当時の自分と今の自分では、何が違うのかと考えてみました。10 代の頃は、自分のいる場所だけが世界の全てだと思い込んでしまうことが多かったような気がします。その時にいくら大人の人に「違う世界もある」と言われても、経験を伴っていないため実感しにくいと思います。それを埋めていくのが、経験、体験をしながら、自分の世界を広げていくことなのではないでしょうか。それは実体験だけでなく、人から聞いたり、本を読んで得た知識も含まれると思います。

たとえば中学当時の私が、母と私だけの世界が全てだと思い込んでいたとしたら、それはとても苦しい体験になったと思います。でも、私と母との世界を広げてくれるような人や体験があちこちにあったから、私は母のことだけにとらわれず、自分のことを考えたり、楽しみを見つけ出すことができたのではないかと考えました。

私は、学校の帰りに A ちゃんの家に寄らせてもらうことや、遠出に一緒に連れて行ってもらうことができたのは、幸せだったと思っています。大変だといわれる状況にひとりで立

ち向かわなければならなかったとしたら、とても辛かったのではないでしょうか。

A ちゃんも、A ちゃんのご両親も、統合失調症の症状に苦しむ母と一緒に暮らしていた私を、助けたとは思っていません。私も母をケアしたり、助けたとは思っていないのと同じではないかと思います。

「ただその時を一緒に過ごし、一緒にいた」というのが、私たちの感覚に近いと思います。

A ちゃんの電話から 10 日ほどして、A ちゃんのお父さんが亡くなりました。おじちゃんが「A ちゃんを頼むで！」と願いながら、私たちをまた引き合わせてくれたような気がしています。

第１９回　「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

―― 誰がドナーになるのか ――

一宮茂子

はじめに

1997 年の臓器移植法成立施行にともない、脳死体からの臓器提供・移植が可能となりましたが、日本には厳密な法律のしばりがあり、提供が少ない時期が続きました。2010 年に臓器移植法が改正され、ドナーカードがない場合でも遺族の了解があれば提供できるようになりました。また、15 才未満でも家族の了解があれば提供できるようになりました。海外では生体移植よりも脳死移植が多いのが通常ですが、日本では真逆で脳死移植が少ない状態が続いています。

たとえば 2019 年には脳死移植が年間 97 例と最多を記録しましたが、減少傾向にあり 2020 年以降は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による影響で減少しています。2019 年の米国では総数 8896 事例の肝移植のうち脳死移植は 94%であり生体移植は 6%です。一方、日本では総数 395 事例の肝移植のうち脳死移植は 22%であり生体移植は 78%と脳死ドナーの少なさが際立っています［猪俣 2021］。

日本では今後も生体肝移植が続くと予測されています。本稿ではこれまでと同様に生体肝移植ドナーの事例を紹介しながら、この治療を選択した経緯と、どのようにドナー候補者が決まっていったのか、同時にそのときの家族員の心情や移植にまつわる人たちとの関係性について紹介します。

1.　事例紹介

父親であり夫である昭雄さん（仮名：40 歳代）は妻（40 歳代）と子ども 3 人（20 代～10 代後半）の 5 人家族で、東北地方に居住していました。家族の血液型は全員が O 型でした。長男は生後まもなくして体に黄疸が見られるようになり便が白くなりました。生後 3 ヶ月で胆道閉鎖症と診断され地元（東北地方）の T 大学病院で治療を受けました。その治療は、胆道閉鎖症の手術（葛西手術）、胆汁の外漏手術やその閉鎖手術、腸閉塞の手術、腹膜炎の手術など 8 回の手術と感染症の併発による治療などで入院治療は長期間におよび 3 歳半になって退院しました。中学 2 年生のとき脾臓が大きくなっていたため摘出術を受けました。これまで「余命半年」と告知されたことが何回かあり、家族は「絶望の淵にいた」ことを何度か経験しています。長男の体調はいぜんとして回復しない状態が続いていました。

長男が 24 歳のころ病状はさらに悪化して肝性脳症や多臓器不全といった重篤な状態と

なりましたが、ICU で集中治療を受けた結果、奇跡的に回復しました。この時点で長男は治療の限界に達したことから移植治療を勧められたのです。家族は、移植治療をどこで受ければよいのかT 大学病院の医師に尋ねたところ、医師はどこでもいいと説明されましたが、具体的にはこれまで治療してきたT 大学病院がいいのではないかと答えたそうです。しかしT 大学病院ではこれまで 3 例の生体肝移植がおこなわれていましたが全員が亡くなりました。このT 大学病院での移植に、家族は不安に感じて決断できなかったようです。

あるとき入院中に知り合った女の子の顔色が土色だったのを見て母親は肝臓が悪い子だと思ったそうです。その後、その子に再会したとき顔色か真っ白（健康体の顔色という意味）だったのを見て驚いています。その子の母親によると近畿地方のY 大学病院で移植を受けたとのこと。さらに詳しく聞くと「T 大学病院では……99%ダメだろうと言われて、1%にかけてY 大学病院へ行った」とのこと。この話を聞いた母親はやはりY 大学病院で移植したいと、そこでの巡り合わせで生体肝移植を決断したのです。こうして移植経験者の成功事例は患者・家族に大きな希望をもたらしました。

２．　移植治療を受けるまでの長男の病歴

胆道閉鎖症とは胆汁の通り道である胆管が閉塞して胆汁を肝臓から腸へ流せないため肝臓の中に胆汁が溜まり、黄疸（皮膚や目の白目の部分が黄色くなる状態）が現れます。長男は生後まもなく葛西手術半外婁を受けています。葛西手術とは肝臓と腸管を直接つなぎ、胆汁を腸にながれるようにする手術ですが、そのとき胆汁の半分は体内へ、残りの半分は体外へ流れるようにする半外婁手術を受けています。

そして生後 7 ヶ月でその半外婁の閉鎖術を受けました。しかし 1 歳になると胆汁の流れが悪くなったため再手術を受けました。さらにその 10 日後には腸閉塞のため開腹術を受けました。そして 1 ヶ月後には胆汁の流れを体外へ流す全外婁術を受けたのです。2 歳で全外婁の閉鎖術を受けたのですが、その後、腹膜炎になり再度開腹手術を受けてなんとか一命を取り留めました。しかし、物が食べられるようになると、口から入った食べ物が傷口からでてくる状態になったため、結局傷口を全部開いて再度縫合したことで完治したのが 3 歳半のときでした。こうして長男は 3 歳半までに合計 9 回の手術を受けたのです。

長男が 13 歳のとき脾臓が大きくなって門脈圧があがってきたため脾臓摘出術を受けました。その後の長男は 26 歳で生体肝移植術を受けることになるのですが、それまで体調は相変わらずすぐれなかったのです。

３．　病気に負けない長男の信念

その後、移植を受けるまでの長男の体調は完全に健康を取り戻したわけではありませんが、それでも小中学校はほとんど普通学校で過ごしました。体育以外の勉強はなんとかついていけたそうです。高校は長男自らが希望して普通の全日制を選びました。長男は病気

には負けたくない想いがあったと推察されます。しかし入学後まもなくして容体が悪化したため長期入院となりました。出席時間が足りず、次年度に取り直した科目もあったそうです。結局、1 年生の冬に退学しました。

数ヶ月後、長男は通信制高校があることを知りました。主にレポート提出で単位が取得できることと、何年かかっても必要な単位さえ取れると卒業できるという情報をえました。そして 17 歳の時に通信制の高校に入学しました。月に 2 回ほどの授業にも体調が悪くて出席できなかったこともあるそうです。そのため退学しようかと思うときもあったようですが、病気に負けたくないという強い信念が長男を支えていたようです。そして入学から 7 年を要して卒業することができました。卒業後は電子系の専門学校に入学しました。将来は情報処理の会社で働きたいとの夢を持っています。

4．誰がドナーになるのか

長男の命を救うために移植を受けるとしても脳死移植はいつ受けられるのかわからず、時期も不明であり、何よりも長男の命が脳死移植まで持つのか否かわかりません。当時の成人肝移植は、ドナーの肝臓は 3 分の 2 を摘出する大きな手術でした。術後合併症で亡くなるリスクもあります。日本では 2003 年に生体肝移植のドナーの死亡例が 1 事例ありました［日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会，2004］。ドナー手術は、ドナーには何のメリットもないリスクの高い手術です。そのため家族以外の誰かにドナーを依頼することはできないと思います。全くの他人がドナーになった過去の事例では、内縁関係の妻と夫が各 1 名、女友達 1 名、ドミノ移植[注1]の男性 29 名、女性 29 名の合計 58 名（0.6%）であり[注2]［日本肝移植学会 2021］、事例数は少ないといえます。

4-1.　ドナー候補者からドナー決定へ

誰がドナーを引き受けるのか、このドナー決定の要因はドナーの意味づけに影響をおよぼす移植前のもっとも重要な要因のひとつです。先行研究では、たとえ複数のドナー候補者がいたとしても、同じような位置づけで並列的に並んでいるわけではなく、移植までの時間的制約があるなかで三つの要素でドナーが決まることがわかりました。それは「医学的条件」「家族規範」「ジェンダー規範」でした。もっとも優先するのは「医学的条件」であり、それは、年齢、体格、血液型、健康状態などです。この条件にあわない候補者は除外される一方で、条件があえば強制的にドナー決定となる場合もあります［一宮 2014］。

この事例では母親と父親と次男の 3 人がドナーの意思表示をしました。医学的にみると家族全員が O 型の血液型だったため血液型一致移植となりますが、母親は脂肪肝があるためドナー候補者から除外されました。残る次男と父親は医学的な検査値はほとんど同じだ

(注1) ドミノ移植とは、ある特殊な病気の患者が移植を受けたとき、患者の摘出した臓器が他の人に移植できる場合がある。このようにつぎつぎと臓器が移植できることをドミノ移植という。

(注2) この割合は日本肝移植学会［2020］のデータをもとに筆者が計算したものである。

ったのですが、父親として「子どもをドナーにして殺しては生きていけない」というジェンダー規範から自らドナーを引き受ける意思表示をしたのです。この語りは父親として家族を守る責任も感じていることから家族規範も包括していました。この事例では医学的条件、ジェンダー規範、家族規範の 3 つが重なって父親がドナーになったのです。

５．　インフォームド・コンセント

この事例では移植後 10 年以上経過した時点で筆者がドナーである昭雄さんにインタビューをしました。その結果、移植前に 3 回おこなわれるインフォームド・コンセント（IC と略）は記憶に残っていないとのことでした。それでも鮮明に覚えていることが 1 つありました。それは「移植外科医から現段階（1990 年代後半）ではドナーが死亡した例はない」ということでした。この実績はドナーにとっては心強い情報であったに違いありません。

しかし一方で昭雄さんは次のようにも語っています。「手術だから当然危険性が伴って、今までは（死亡者が）ゼロであった…けど…自分が…100%助かるとも思ってなかった…完全に自分が手術場から生還できるというふうに私は考えなかった」と語っています。

筆者は臨床現場で 20 年近くにわたり移植医療にかかわってきました。ドナーになるということはドナー手術という犠牲と負担を一人で引き受けることから、勇気がいる決断を迫られます。一方、この事例では、それ以上に父親として長男を助けたい思いが強かったためドナーを引き受けたのだと思われます。これは父親としてのジェンダー規範といえます。

筆者は臨床現場で多くのインフォームド・コンセントに同席しましたが、患者・家族からの質問は少なかったと記憶しています。一般人にとって移植治療は複雑で難解で情報量が多量です。移植外科医師の説明を理解できた人はどれくらいいたのでしょうか。移植外科医師から「何か質問はありませんか」と聞かれても「何を聞いていいのか…わからなかった」と答えた患者・家族が少なからずいたのは事実です。

結局は IC を理解しようが、しまいが、移植治療以外に助かる選択肢はないのだから、移植外科医師にお願いするしかないと考えている患者・家族が多いと思われました。

以上今回の事例は、移植前のインフォームド・コンセントまでについて紹介しました。
その後のことについては次回に紹介いたします。

文献

一宮茂子，2014,「生体肝移植ドナーの意味付与――肯定感と否定感を分かつもの」立命館大学大学院先端総合学術研究科2013年度博士論文.

猪股裕紀洋，2021,「日本における臓器移植の現況」,
（https://ebm.jp/topics/organ_transplant.html#wrap，2022.11.17確認）

日本肝移植学会，2021,「肝移植症例登録報告」『移植』56(3): 217-233.
日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会，2004，「生体肝移植ドナーが肝不全に陥った事例の検証と再発予防への提言」『移植』38(1): 47-55.

フリースクールでの SW 実践を考える⑤

高名　祐美

【フリースクールのソーシャルワーカーとして】

フリースクール（以下 FS）は不登校の子どもが集まる「もうひとつの学校」と言われており、学校に行けない・行かない子どもにとって“居場所”の一つとされている（石井光太 2019）。私がソーシャルワーカー（以下 SW）として、小さな FS に関わることになって 1 年半になる。その間、FS 利用者は 8 名、相談はあったが利用にまでつながらなかった事例は 4 名だった。どんな要因が不登校につながっているのだろうか。また FS を利用できた子どもにとって、私が勤務する場所はどんな意味をもったのだろうか。これまでの日々を振り返り、現状を分析することで SW である自分の役割を考えたいと思った。

そこで 1 年間の活動をまとめ、10 月に開催された『第 33 回北信越医療ソーシャルワーク研究会』に実践報告として発表した。7 分間という限られた発表時間。多くのことは伝えられず、まだまだだと思ったがひとまず現状の分析と自分自身の課題を整理するよい機会となった。

共にまとめる作業、発表までのプロセスに取り組み、適切なアドバイスをくれた MSW の上田氏に感謝したい。

【不登校の理由】

夏休み、FS も夏休みとなる。夏休みがあけると、利用を継続していた 2 名の子どもが登校を再開した。どんな要因が登校につながったのか、そこは明確にはなっていない。学校との連携が十分にできていないため、登校後の子どもの様子を知る事ができず、FS での活動の振り返りができないことは課題の一つだと感じている。もう少し子どもと一緒に過ごしたかったなと思った。そして「学校に行くよ」という言葉を子どもから聴きたかったなと思った。しかし、学校に行くことを自分で決めることができたのであれば、それが一番なのだと理解した。

二人が学校で過ごしている姿を想像していると、新聞では『不登校　最多 24 万 4940 人　コロナ学校活動制限　影響か』と見出しの記事が掲載されていた。2022 年度は 2021 年度より２４．９％増えて、過去最高となった。（文部科学省の問題行動・不登校調査にて）。学校が判断した小中学生の不登校理由は「無気力、不安」が最多の４９．７％、「生活リズムの乱れ」が１１．７％、「いじめを除く友人関係」が９．７％と続いたと記事に書かれて

いた。

私が FS で関わった子どもたちの不登校理由は、小学生では「学校が面白くない」「担任の先生が嫌い・怖い」「コロナ休校からの生活の乱れ」「ゲーム依存による生活の乱れ」「決められた時間割通りに過ごすのがいや」、中学生では「部活動での人間関係」「友人関係」であった。文科省の分析「無気力・不安」とはどんな状態を示しているのだろうか。私の関わった小学生は、学校の対応に対しての不満や、発達障害や疾患を持つことによる集団への不適応が不登校の要因になっていたように思う。

【はなちゃんとの関わり】

はなちゃんは小学校１年生。入学して 10 日過ぎたころから学校に行けなくなった。きっかけは、新型コロナウィルス感染者の濃厚接触者となったことだ。仲の良い友達が感染してしまい、はなちゃんは 3 日間学校を休むように指示された。待機期間が終わって登校再開したが、はなちゃんは学校に入ることを拒むようになった。母親が付き添って登校したが、玄関から入れなくなった。担任の先生が顔をみせると大声を出して暴れる。教室には行かずに、校長室で過ごす日もあったが、暴れることがだんだんひどくなり、先生たちもあきらめてしまった。そしてとうとう学校には行かなくなってしまった。

母親から聞いたはなちゃんが学校に行きたくない理由は、担任の先生の声や態度、表情だった。「声が大きい」「言葉遣いが乱暴」「怒るときの顔つきが怖い」と感じていたはなちゃん。後に学校から聞いた理由とは異なっていた。

はなちゃんが FS につながったのは、学校のスクールカウンセンラーからの紹介だった。2 週間に一度母親がカウンセリングを受ける中で、学校以外の居場所として紹介されたのが FS だった。はなちゃんのお母さんはさっそく見学にこられ、利用する運びとなった。そして私は、はなちゃんと出会った。

初めての利用日。はなちゃんはお母さんと一緒にやってきた。「ワンちゃんに会いたい」。それが私の勤務する FS にくることになったはなちゃんの動機だった。FS ではトイプードルを 4 匹飼っている。4 匹のうち 2 匹はとてもひとなつっこく、併設している高齢者のディサービス利用者、学童の子どもたちにも人気である。時に一緒に遊んだり、散歩に出かけたりしている。はなちゃんはその犬に会いたくてやってきた。

「はなちゃん、こんにちは」と出迎えた私の顔をみると、眼をまん丸にして固まっていた。コミュニケーションは未熟で、問いかけには首を縦か横にふって答える。言葉があまり出てこない。「場面緘黙」という情報があり、会話には注意を払った。はなちゃんが答えやすいように、クローズド・クエスチョンで問いかける。問いかけすると、まずお母さんの顔を一度みる。そして首をふる。なかなか言葉はでてこなかった。まずはお母さんと一緒に時間を過ごし、関係づくり。好きなこと、楽しめること、学習につながりそうなことなど考えながら取り組んだ。

「犬と遊びたい」「折り紙で犬を折りたい」「絵の具で絵を描きたい」「カービィの人形で

一緒に遊びたい」。みんなお母さんからの言葉だった。はなちゃんの声をどうやったら聴くことができるのだろうかと考えながら過ごしていた。

「うん」「カービィ好き」「バイバイ」など少しずつ言葉がでてくるようになり、学習にも取り組めるようになった。そしてお母さんは、はなちゃんから見えない位置で過ごすことができるようになった。

次の目標を「FS を独りで過ごすことができる」とし、単独登校を促したところ、玄関からはなちゃんは動かなくなり FS に来れなくなった。焦ってはいけないと反省し、お母さんとの登校を再開した。近くの足湯温泉に出かけ、お母さんとはなちゃん、並んで足湯を楽しんだ。お母さんとの面接も実施し、はなちゃんのことを理解できるようつとめた。学校からも、担任の先生と学校長が「FS のでの様子を教えて欲しい」とやってこられた。スクールカウンセラーの方との面談も実現し、学校と FS の連携を深め、はなちゃんに適切な関わりができるよう取り組んだ。

学習にも集中してしっかり取り組み、そのあとにははなちゃんがやりたいことをする。そんな時間の過ごし方が定着し、はなちゃんは私の目をみて話してくれるようになっていった。そして夏休みがやってきた。

夏休みが明けて、FS１日目。管理者から「はなちゃん、２学期から学校に行くことになりました。最初は保健室登校しながら通級指導教室も利用するそうです。」と聞かされた。そうか、学校に行ったのか、よかったなと思いつつ、はなちゃんと会えなくなった寂しさが私の中にはあった。

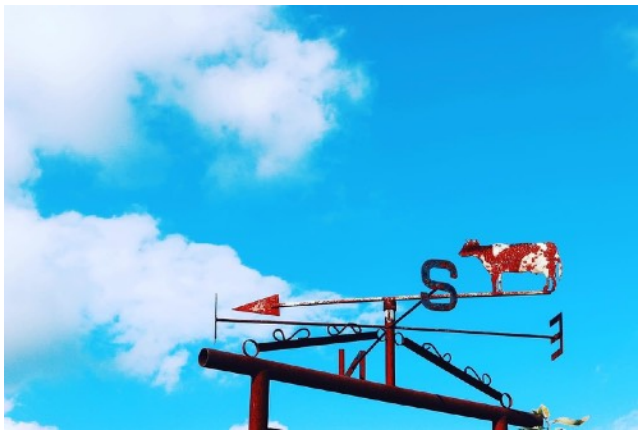
そんなある日。図書館に行った私は、偶然はなちゃんの姿を見つけた。

SW：はなちゃん！？
はな：たかなさん。（私の名前を呼んでくれた、まっすぐに私の顔をみて。隣りにいたお父さんの方へは目を向けなかった）
SW：はなちゃん、久しぶりだね。
はな：（うなずく）
SW：（そばにいたのがお父さんだとわかったので）今日はお父さんといっしょなんだね。
はな：うん。
SW：そうか。あーちゃん（お母さんのことをこう呼んでいた）は？
はな：あーちゃんは、今、おうちにいるよ。（しっかりこたえてくれた）
SW：そうなんだ。お父さんと図書館。いいね。
はな：うん。
SW：本を貸りにきたのかな？
はな：うん。
SW：おもしろい本、あるといいね。じゃあ、高名さんはおうちに帰るね。

はな：うん。バイバイ。
SW：バイバイ。（振った手で私の手にタッチしてくれた）

たったこれだけの会話だったけれど、ものすごく心があたたかくなった。はなちゃん！しっかり私の顔を見て、私の名前を呼んで、そして言葉を発してくれた。場面緘黙じゃないよ。大丈夫だね、はなちゃん。

はなちゃんが自分の人生を振り返るとき、小学校１年生のときに“高名さん”という人に出会って、共に過ごす時間があったことを覚えていてくれたらと心から思った。



原田牧場 Note

page 11

11月で結婚生活まる16年が終わり、17年目がスタートしました。キリがいい年でもないですが、夫婦のことを語ろうと思います。夫婦の話となるとちょっと変わったことやびっくりするようなことがあっても、それぞれだよね、で済まされる気がします。二人が良ければいい、他人が立ち入れない世界というか。なので、関心が湧かない話題になってしまうかも。そう思いながらですが、書きます。

今思っても農家の長男というのは、本当に特殊です。小さい頃から親戚やご近所さんに後継ぎとして見られチヤホヤされて育っています。（親戚が集まって手土産の菓子折をどうぞと夫へ手渡したら、彼は一人で食べ始めました。そういう時は、黙って食べんと皆さんもどうぞってすすめるねんで！）親は、後を継いで欲しいという希望はあっても、直接ヤイヤイうるさく言ってへそを曲げられたら困るので遠巻きに見守るスタイル。言いたい文句も親の方が我慢しています。（その不満を私に言ってきて通訳させようとしないでください！）仕事以外のことはやらせないでご機嫌をとって育てたのかな？と思うことが度々あります。（家のことは全くやりません。用意された朝食を食べないとも言わずに仕事に没頭していることがあります。朝食を勝手に用意してるのはそっちや、という感じ！）後継ぎとしての重圧や、誰からも本音でぶつかってこられない寂しさみたいなものも意識することなく育ったかもしれません。（社会経験が少ないのである意味天然）

そこへやって来たのが、なんでも物申す大阪人の私ですから、家庭は大変な騒ぎです。みんなが教えてこなかったあれやこれやを子供に教えるように噛み砕いて説明する毎日。仕事の方は、私が教えてもらう側ですが、力のない女性に合わせて工夫するでもなく、俺はこれがやりやすいねん！スタイル（一緒に仕事していく気ぃあるんかな？私がやる気無くしたら、己が損、わかってる？）夜の仕事が終わって、同じ時間に家に帰るも、私はまだ家事があります。お風呂も烏の行水で済ませ、急いでご飯の支度をしている、その時！！一緒に観ようって借りてきた映画のDVD、ご飯ができるまでの暇つぶしに、先に見始めたやないか…（ど、どういうこと？　思いやりはどこやった！）　夫は時々、「何もしていないのに（私に）怒られた」と言っていました。家の仕事で育ち、両親が寛容だったため、マイペースや言葉足らずで問題が起きることを初めて知ったようです。私が辛かったのと同じだけ、彼も暗中模索だったと思います。私からの意見を途方に暮れたような顔をして聞いていました。私も小さいことでギャアギャア言いたくないのです、察してくださいよ！と心底思っていましたが、コミュニケーション経験がないから無理なんだ、とわかりました。育った環境が違う＝言語が違う異国人。そう頭の中を切り替え、お互いに相手の言葉を聴き取れるくらいにはなろう！と考えました。

例えば、大阪と北海道では「寒い」の感覚も違います。そのすり合わせにパーセントを使います。「今日は寒い度、何%？」それぞれの答えで相手の体感を測れます。力仕事に慣れている夫と、そうでない私とでは、疲れの度合いも違います。「やれやれ無事に仕事終わったね、お疲れ度、何%？」相手の答えにより、ねぎらいが自然発生したりします。仕事に関して意見交換していた時も、玄人の夫と新人の私では理解度が異なります。同じようにウンウンと聞いていても「今の意見、納得度、何%？」で確認しておけば、わかってくれてると思ったのに！全然わかってないやん！みたいなことが少ないです。細かいことは言わない、でも何割くらい伝わったかな？を感覚として知っておく。このパーセント方式は全感覚に使えます。

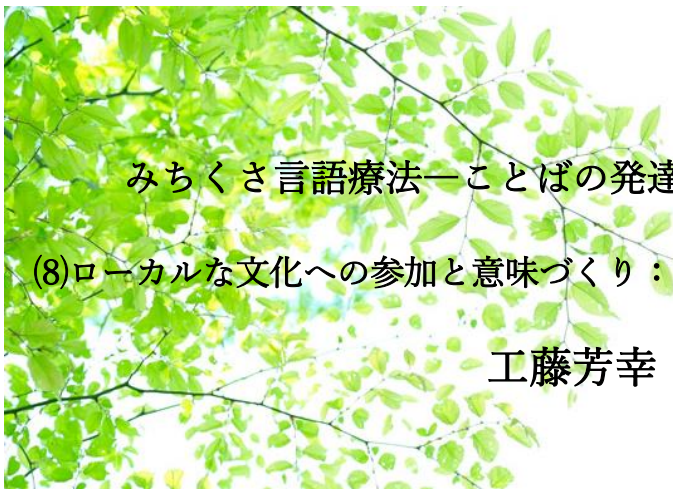
夫は夫で、1日の予定を連絡してくれるようになりました。私がどの情報を欲しいかまでは察せないので、全部言っておけば足りないことはないだろう、と思ったようです。相変わらず家のことはあまりやりませんが、相当な仕事量をこなしていると知ってからは気にならなくなりました。就寝前に布団を温める乾燥機のスイッチは入れてくれます。寒くなってきた北海道、1日の終わりのホカホカ布団は至福なので、スイッチを入れるだけで最高のパフォーマンスです。片方が喜ぶことではなくて、両方が喜ぶことの作業を夫にやってもらうのが良いです。自分が動いて得た喜びを夫本人も実感できるから。相手の言わんとすることを前より聴き取れるようになり、今ではケンカが減った私たちですが、結論、相手の言葉は話せなくていいと思っています。普通はこうだろう！という決めつけや押しつけは不要。異国人のように全然違う発想や行動に驚きながらも否定はせず、そんな風に考えるんだ！大したもんだなあ！と　面白がっていくのが夫婦の醍醐味。まだまだ新発見を続けます。

夫のコミュニケーション経験値が増えてきたので、牧場スタッフさんの育成にも進歩が見られるようになりました。この話の続きは、またいつか。

筆者　原田　希

1973年　大阪府吹田市生まれ
2006年　酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ
2017年　北海道農業士に認定
北海道指導農業士の夫ともに新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当





みちくさ言語療法―ことばの発達と障害の臨床より―

⑻ローカルな文化への参加と意味づくり：語用論的アプローチ（前半）

工藤芳幸

「支援技法」のこと

ことばやコミュニケーションの発達の援助にもいくつかの方法論、技法と呼ばれるものがある。本稿は「みちくさ」と題しているので、お分かりであると思うが、系統立てた「言語（聴覚）療法」を解説してきた訳ではなく、幾つかのエピソードを通してことばの発達と障害、あるいはその援助について考えていこうという意図で書いている。これまでも特に支援技法について詳しく書いてはこなかった。しかし、エピソードとして書いてきた障害がある子どもとの関わりの背景には、これまで身に着けてきた様々な方法論も当然ながら介在している。何の方向性も持たずに関わっているわけでない。今回からは、ことばやコミュニケーションをめぐる支援技法の中でも、自分の中でベースになっている方法について書いてみたいと思う。その１つが「語用論的アプローチ」と呼ばれる方法で、自然な場面での相互交渉を軸とした支援技法である。

全てのきっかけのチラシ

大学生の頃、東京 23 区の下町にある障害児学童保育施設で指導員のアルバイトをしていた。現在では放課後等デイサービスということになるが、当時は制度化されておらず、都の助成金を受けていた施設である。小学生から高校生までの「障害」がある子どもたちが通っている場所だった。大学１年生の頃に夜間課程の社会福祉専門学校事務のアルバイトをしていて、たまたまこの施設のアルバイト募集のチラシを見つけて申し込んだら、すぐに採用になった。おそらく人手が足りず、関心を持った人なら誰でも、ということだったのかも知れないが、何はともあれここで働くことになった。このチラシを見つけた、あるいはたまたまアルバイトしていた専門学校にアルバイト募集のチラシを送ってくれてなければ、障害児者福祉や医療の世界に入ることはなかったかも知れない。

当時は障害がある人の支援について学ぶ学部・学科にいた訳ではなかったので（教育学科所属だったが、教員養成系ではなかったので）、知識は皆無に等しいにも関わらず、福祉の世界に「飛び込んだ」ことになる。支援とはこういうもの、という先入観は少なかったが、スキルもなかった。利用者数が増えてきて新たに編成された中高生のグループに配属され、担当する子も決められた。担当とは言っても一体何をしたものか、明確な道筋はない。

多分、その頃のスタッフは皆が手探りで

やっていたので、私のような素人でもどうにか入れてもらえる余地があったのだろうと思う。当時は障害がある子どもの「放課後保障」が盛り上がってきた時期で、まだ制度設計はできていなかったが親の会などが中心となってレスパイトケアや学校以外の場づくりに注目が集まっていた。この分野の専門職がたくさんいた訳ではなく、スタッフも学びながら作り上げていたと思う。余談だが、今は第2波、第3波という状況で、放課後等デイが制度化され、そしてそれが拡大している。そこで働くスタッフも多様であり、知識やスキルの量や質の幅も広い。しかし、比較的簡単にさまざまな研修機会にアクセスできる状況にはなっている。その点ではずっと、援助技術の習得は容易な状況なのかもしれないが、新参者に多くのことができない事実は変わらないだろう。

関わり方がわからず技法を求める

さて、配属された中高生グループには自閉症（現在の言い方では自閉スペクトラム症）のある子が非常に多く、ダウン症や重い知的障害がある子どもたちも通ってきていた。私が担当についたのは自閉症の子だった。ある程度、ことばは話すものの、会話ということにはならない。中学生なので体も大きく、動きも大きい。そしてたびたびパニックを起こすことがあった（そのような環境設定をしてしまっていたのだと思う）。私はその後を追うばかりでなす術がなく、パニックが起こってもそれを上手く収めることができない。毎回の活動終了後の反省会でも、帰り道でも反省ばかりだった。日々の関わりの中で見えてきていることも勿論あったが、無手勝流だけでは心許なかった。関わっている子たちの発達的な状況を捉え、認知やことばやコミュニケーションの発達や、活動への参加を促す方法、私が学べる技法はないものだろうか？と考え、いくつかの成書を眺めていた。

私がいた中高生のグループは低層の古いマンションの2部屋をぶち抜いたスペースを利用して活動していて、ごくごく普通の住居のような環境だった（一部は改造して構造化しているところもあったが）。いつも数人の子どもたちがいて、ゆっくりと過ごす時間があったり、皆を誘っておやつを作ったり、それぞれ好きな音楽を聴いたり、近くの公園まで行って遊んだりという場だった。療育というよりも「放課後の暮らしの場」という雰囲気だった。学校でも家庭でもない第3の場。制度化された空間から少し緩く、だけどちょっと緊張感があるような場所。そういうことを目指していたのもあって、あまり特殊な教材や環境設定を使うのではなく（例えば、発達検査など）、より日常的に使いやすい、できるだけ自然な状態で子どもの様子を観察することによる発達の見立てや、それに基づく関わり方の方法論を求めていた。自分が関心を持っていた教育思想や方法論の影響、また時代的な背景もあってか、枠にはめて教え込むタイプの方法ではないものを求めていたかも知れない。

私が頼ったのは発達心理学の科目担当教員だった荻野美佐子先生（元・上智大学総合人間科学部教授）である（のちに大学院や仕事に就いてからのSVなどで長くお世話になった）。思い切って研究室の扉を叩き、こうした一連の悩みについて相談したところ「INREAL（インリアル）アプロー

チ」というものがある、そしてそれは埼玉にも研究会がある、という情報を得ることができた。ちょうど荻野先生の手元にあった「研究会のお知らせ」のハガキもいただいて、早速その研究会主催の講演会にまずは参加してみることにした。その研究会が後に入会することになった「大宮インリアル研究会」である。そこで現在は国際医療福祉大学教授である畦上恭彦先生（当時は埼玉県で ST として仕事をされていた）に出会い、インリアルについて少しずつ学び始めることになった。

「語用論的アプローチ」とは

インリアルは言語学あるいは言語哲学の中でも特に「語用論」に依拠し、さらに発達心理学における初期母子相互作用研究の理論を基に開発された方法である（と私は理解している）。「語用論（pragmatics）」とは、語の「意味」や語のつながり方のルールである「統語」とは異なり、ことばの社会的な文脈における「使用」を扱う分野である。「語用論的アプローチ」とは、広い意味では、社会的な相互作用を通じた言語・コミュニケーションの学習を促す立場で、狭い意味では語用障害（代表的なのは自閉症スペクトラムの言語使用の独特さ）に対する支援の方法として捉えられている。そして、語用論的アプローチとして国内でよく知られている方法が、インリアル（INREAL：Inter Reactive Learning）アプローチである。1974 年に米国コロラド大学で開発された方法で、大人と子どもが相互に反応し合うことで学習とコミュニケーションを促進しようとする支援技法である。自由な遊びや会話の場面を通じて、子どもがコミュニケーションの主導権を持つこと、子どもの言語やコミュニケーション能力を引き出すこと、規範のテストにとらわれず、実際のコミュニケーションの場面からの子どもの能力の評価をし、子どもから遊びやコミュニケーションを開始できる力を育てることが原則である。インリアルでは支援の目標を狭い意味での音声言語に限定せず、「子どもと通じ合えることを第１の目標」として、音声言語以外の方法も含めたコミュニケーションセラピーであることを重視している。

方法の詳細は成書に譲るので、末尾の参考文献をご参照いただきたいが、ここでも少しだけインリアルについて解説しておく。

SOUL（ソウル）

インリアルには「大人の基本姿勢」としての「SOUL」が示されている。これは以下の 4 つの頭文字を取ったものである（竹田・里見，1994）。

・Silence（静かに見守ること）：子どもがその場に溶け込むための余裕をつくってあげることが必要。そのために大人は考えや意図を押し付けるのではなく、子どもの様子を静かにあたたかく見守る。
・Observation（よく観察すること）：静かに見守りながら、子どもが何をどのようにするのか観察する。
・Understanding（理解すること）：観察により得られた情報とそれまでに得た子どもの情報を照らし合わせ、洞察して理解していく。

・Listening（傾聴すること）：子どもに対してよい聴き手であることは、単に耳から聞くだけではなく、子どもの表す様々なサインを全身で感じとっていく、心から聴くことが必要。

こうして書いてまとめてあると、これだけのことか、と思われてしまうかもしれない。しかし、これの基本姿勢を守ることはそんなに簡単なことではないと私は考えている。例えば、Silence はどこまで沈黙するべきなのか。どこでセラピストはアクションを起こすべきなのか、その見極めをすることは容易ではないだろう。ここでいうSilence は何もしないことではなく、志向性を持った沈黙である。コミュニケーションにおいて、何を語るのか、どう反応するかと同じくらい沈黙の意味は大きなものがある。Observation は子どもの発達をみる基本であって、全てでもある。「見てわかる」のであれば、発達検査も言語検査も不要かもしれないが、残念ながらそこまでの観察力はない。ただ、いくつかの手がかりや、観察の枠組みを持っておくことで見えることもある。一方でその枠組みそのものが特定の発達観や教育観、子ども観や援助観によってでき上がっている訳なので、そのことを知っておくことが求められる。尺度を知るだけではなく、尺度が置かれる文脈や状況、社会・文化的な背景、ドミナントなストーリーに自覚的であることが必要ということだ。

臨床現場での子どもとのやりとりや親との面接がどうもしっくりこないと思った時、この「SOUL」の観点から自分の関わり方を見直してみると、何かが過剰で、何かが不足していることがしばしばある。SOUL はまさに「基本姿勢」と言える。

語用論的アプローチに必要なこと

語用論的アプローチや語用障害の研究者である大井学先生によると、語用論の学習を援助する上で欠かせない要素はその子ども（あるいは大人）が「所属するコミュニティ（家庭、仲間、教室、職場、地域、メディアなど）で繰り広げられるコミュニケーションの局所局所において作用しているローカルな語用論について幅広く知る、実際のコミュニケーション体験を多様かつきめ細かに組織すること」であり、「支援はあくまで会話の場面や参加者の違いに応じて個別的でありかつ柔軟なものでなければならない」とされている（大井，2006）。私たちはローカルな「文化」の中に参加する、あるいは迎え入れる過程を意識できているだろうか。ローカルな文化にはそこに参加している当人たちも意識しない暗黙の規範が存在している。そのまま暗黙の規範に合わせるというだけではなく、適宜規範を可視化し、それを適当にずらして改変する柔軟さが必要になるのではないだろうか。語用論は人と人のあいだの言語学なのだから、個体能力論的なモデルだけ語ることはできないのである（続く）。

＜参考文献＞

・竹田契一・里見恵子（1994）『インリアルアプローチ』日本文化科学社.
・大井学（2006）「高機能広汎性発達障害にともなう語用障害：特徴，背景，支援」コミュニケーション障害学 23, pp87-104.

かけだ詩⑪

そだちと臨床研究会

川畑（かわばた）　隆（たかし）

語感

ダイバーシティは
ダイバーの街
インフルエンサーは
インフルエンザに罹った人
レジェンドは
ウィスキーとクルマの名前
サブスクは
「寂しく」の方言
アカハラは
赤唐辛子のヒリヒリ攻め
エビデンスは
エビの自己紹介「エビデヤンス」
サステナビリティは
「さすってな」と頼める能力
ロックダウンは
酔っ払いが言ったつもりのノックダウン

心理テスト

心理テストってどんなん
やってみるかといわれて
ウンとうなずいたら
木を一本描いてって
描いたらめっちゃむずかしい
何がむずかしいって
人を描くのとぜんぜん違って
木なんてそんなもん
詳しく描いたことないもん
どうなってんのかようわかれへん
こんなんで何がわかんの
って尋ねたら
あんたとまったく同じ木
描く人がおると思うかって
似た木はあると思うけど
まったく同じ木を描く人
まあおらんやろ
そしたら他やない
あんたらしさが出てるんちゃうか
っていうんやけど
そういわれりゃそうかもな
たかが心理テスト
されど心理テストやって
いうてはったで

表すものと表されるもの

赤くて丸くて　手にのせたら少し重くて
口にしたら硬くてお汁が出て甘酸っぱくて…
それを表すのが「リンゴ」というコトバ
赤くて丸くて…は表されるもの

もっとも
赤くて丸くて…も
五感をとおして実感される表される実体
を表すコトバ

「リンゴ」というコトバがあれば
リンゴがないところでも
リンゴのことを話すことができる
表されるものから表すものが飛び立ち
コトバはできあがる

でも
「リンゴ」によって表されるのは
赤くて丸くて…を自明の入口としているとしても
けっして同じではない
リンゴの背景にある
それぞれにとっての裾野の広がり　想い出

そこに広がった風景が
たとえ似たようなものであっても
ある人はそれを
「ミカン」というコトバをとおして
表すかもしれない

表すものを聴いただけでは聴いたことにならない
表すものをとおして
表されるものの奥を聴くことができれば
その人のことをよりよく聴いたことになる
のかもしれない

表すものと表されるもの…能記（形）と所記（意味）として、スイスの言語学者ソシュールが唱えた。

臆病者

ふりむかないんじゃなくて
ふりむけない
だって　ふりむいたりしたら
君がまたいないかもしれない

一緒に降りた駅の改札口から

君がいなくなった
呆気に取られて探したけれど
どこに行ってしまったんだろう

混乱のままに君が戻ってくるのを待った
あり得ないことが起きる気配は
ぼんやりとでも感じていたかもしれない
そのまま戻ってこないことが怖かった

君が姿をあらわしたのは数時間後
寄ってくる君に背を向け
一直線に突き進んで電車に乗った
したことの激しさで争った

怒っていた
怒っているのを示す以外になかった
でも後を追ってくる君を確かめたかった
ただ足音が無数であることにも救われた

駅を降りて下宿に向かった
背後の可能性はほとんどしぼんでいた
それでも部屋のドアを内側から見つめた
それからはふりむきっぱなしだった

夜に君が電話をくれた
一言答えて受話器を激しく置いた
一度の拒絶では足りなかった
臆病者はまだ臆病だった

贖罪

父は名君ではなかった
そのせいで母の命を救えなかった
母を失った息子は暴君になり
父は奴隷になった

無理難題を強いられてありがたかった
殴ってくれてよかった
父は息子の前にひれ伏し
息子は父を引きずりまわした

でも自分に尽くしているのは
母ではなく父だった
息子は母の不在を突きつけられた
父にはどうしようもなかった

でも時間は悲しみを薄めていった
父は母の代役を退いた
母がいなくても平和な国が
父と息子で再建された

ダメな父親だと嘆いていた父
あんなに忠実な奴隷を
あんなに立派な父親を
私はそれまで見たことがなかった

向き合う

*「エンディングカット」
納棺前のヘアカットの営み
ほかに逃れる道を儀式が閉ざし
家族の濃密な時と空間があらわれる
生きてきた道と
生きていく道が開かれ
涙の中に笑いも生まれた

「向き合う」とはこういうことか

**「私たち家族が二十年をかけて学んだのは、『試練の中でこそ魂が磨かれ、人の幸せを願う深みのある優しさと、倒れても立ち上がろうとする真の強さが育まれる』ということです。家族の絆もさらに強くなりました。それらは決してお金で買うことができない宝物であり、彩花が命をかけて教えてくれたことに他なりません。これからも、体験し学んだことを丁寧に社会にお返ししていくことが、私たちの役目だと思っております。」

これほど「向き合う」ということが
ズシンと響いたことは
これまでになかった

ことばなんか添えられない

＊ＮＨＫ総合テレビで二〇二二年三月一九日に放映された、芦田愛菜・広末涼子・佐藤隆太出演の「土曜ドラマ」。母（広末）の死を主軸に「向き合う」ことがテーマになっていました。

＊＊神戸市で起きた連続児童殺傷事件で亡くなった山下彩花さんの母・京子さんが、五年前に亡くなる前に綴った手記の言葉だそうです。父・賢治さんが、事件から二十五年たった思いを綴った手記（朝日新聞二〇二二年三月二三日朝刊に掲載）に、「今も私の胸に深く刻まれております。」として引用されています。なお、ここに引用するにあたって記事中の括弧と数字の表記を変更しています。

呪文

そうかもしれないけど
そうじゃないかもしれない
そうじゃないかもしれないけど
そうかもしれない

気持ちがあやふやで自信がないときなどは
そうだとか
そうじゃないとか
言い切るのがよいときもある

でも事実の記憶はその人なりで

論説はその人がそう言いたいだけかもしれない
まことしやかに思わされて梯子をはずされても
また疑い過ぎて大切なことを手に入れ損ねても
押した人も後ろから押されたのかもしれないし
腹立たしい嘘もやさしい思いやりだったりして
ゾウは大きいけれどクジラよりは小さくて
絶対そうだといってもそうじゃないかもしれない
だから呪文のように
そうかもしれないけど
そうじゃないかもしれない
そうじゃないかもしれないけど
そうかもしれない

認識の勝利

「あなたの意見に同意はしないが、
あなたのその意見を云う権利は
命をかけて守る」
この言葉がくれた枠組みに助けられた
同意できない相手の意見を否定したい自分に
目指せる道が示された
自らは同性との恋愛を想像できないのに
性の多様性を訴える資格はないと
悩む若者に
「私は同性との恋愛感情はないが
多様な性の権利は
命をかけて守る」
と何の矛盾もなく言えるのではと提案した
根強い感情に対して認識が勝利した

破壊

あなたを幸福にしますという正義
でもその正義の蓋を開けてみれば欺瞞と搾取
破壊してはいけないという正義
それさえ守られれば他は大目にみられるかのような正義
正義が正義ではなく不幸の元だと知り尽くせば
あらゆる正義を破壊するしかないか

⑪了　二〇二二年九月一日

応援、母ちゃん！

－子育てしながら働く母親たち－

11

たまむら　ふみ

玉村　文

はじめに

－毎日のルーティン－

育休後、時短勤務で職場復帰し半年以上が経ちました。朝は 5 時台には起きて、朝ごはんの準備をして、洗濯機をまわします。子ども達が起きてきたら朝ごはんを食べさせ、洗面し着替え、体温計で計測、保育園の連絡帳を書き、保育園に持っていくカバンに荷物を詰め込んで、子どもを保育園に送ります。保育園から一旦自宅に戻り、晩ごはん用に炊飯器をセット、洗濯物を干したあと、駅に向かいます。最寄り駅から電車で通勤し 16 時過ぎまで仕事です。そこからはいったん自宅に帰り洗濯物を取り込んで、簡単に晩ごはんを用意し、保育園に子ども達を迎えに行きます。子ども達が帰ると、早速晩ごはん。晩ごはんを食べさせながら、保育園からの大量の洗い物の処理や、取り込んだ洗濯物を片付けます。一緒に晩ごはんを食べるときもありますが、子ども達のごはんの時間か寝ている時間は、家事がはかどる時間でもあります。ワンオペのときは、その後にお風呂を入れて寝かしつけ、そのあと食器を片付け洗濯機をまわします。洗い物が多いので、洗濯は 1 日 2 回、朝と夜にしています。その後、子ども達がすり寄ってくる布団でさっさと就寝。また次の日に備えます。

こんな毎日を過ごしていると、毎日があっという間に終わっていく感覚があります。夫が在宅ワークだと、保育園の送りに行けたり、お風呂を入れてくれたり、晩御飯の後片付けや洗濯を引き受けてくれるので、子ども達を寝かしつけたあとお菓子を食べながら TV を見る時間が作れたりします。と

はいえ、自分の趣味や習い事の再開は、もう少し先のことになるかもしれないなと思っています。でも、そんなに時間がなくても幸せな日々でもあると感じています。



1．　付き添い入院、再び

仕事をするなかで、子どもの病気は困難をもたらすことがあります。特に、コロナ禍では、検査で陽性にならなくても待機時間があり、隔離しなければならない状況に陥ることも、子育て世帯では大きな問題だと聞いています。コロナに感染するかもしれないと恐ろしく感じるのは、なにも症状だけではなく、むしろその症状以上に、社会生活に支障を及ぼすことだと個人的には感じています。

幸いなことに今のところは家族みなコロナには感染せず過ごせています。とはいえ、ずっと病気をしていないかというとそんなことはなく、毎月 1 日以上は保育園を休んでいます。特に 9 月頭に 1 歳の娘が夏風邪をこじらせ肺炎になってしまい、2 泊 3 日の入院を経験しました。入院するまでも一週間熱が出て、保育園はお休みで自宅療養していました。ですので、完全に回復するまで 2 週間ほどかかりました。その間仕事を休んでいたかというとそうではなく、半休を取ってわたしと夫で交代したり、わたしの母に預けたり、毎日をやりくりしていました。

しかし入院となると、付き添いすることになるので、完全に仕事はおやすみ（特別休をもらいました）。入院前の検査で RCR

検査をし陰性でしたが、コロナの偽陰性の可能性もあるため、個室で 2 日間隔離されることになりました。もちろん病棟には付き添い入院する保護者しか入れず、差し入れや荷物などは看護師さんを介して渡してもらわねばならないという状況でした。

いったん入院になると自由に出入りすることはできないと覚悟をし、入院する前に自宅に帰って準備をしました。あまり時間はありませんでしたが、付き添い入院中しばらく入浴はできないため、お風呂に入りました。そして、2 日 3 日分の着替えなどお泊まりセット、子どもが食べ慣れているベビーフードやふりかけ、海苔、ミルクと哺乳瓶、おもちゃなども必要なのでカバンに詰め込みました。持っていかずに不便に感じ、あとから差し入れてもらったものとしては、割り箸、子ども用の前開きのパジャマ（ロンパース）でした。点滴の管がついている腕を通すために、前開きのパジャマでないと着替えさせることが難しかったためです。

2． 子連れ出勤

子どもが病気のときに職場に連れていくわけではありません。

症状が落ち着いても様子を見るために保育園をお休みさせないといけない期間や、登園許可をもらうまでの間、少しでも仕事を休みたくない・休みにくい状況の場合、職場につれてきて過ごすことがあります。わたしは、9 月頭に 1 歳の妹が発熱でしばらく保育園を休んでいたときに、3 歳の兄が登園しぶりがありました。妹と一緒に保育園に行くのならそんなことはなかったのに、妹だけおやすみで自分だけ登園するということが受け入れられなかったのだと思います。登園しぶりは次第にエスカレートし、泣き叫び、親から離れない状態になってきました。そこで思い切って病気ではなかったのですが､1 日保育園をお休みさせ、職場に連れて行くことにしました。自宅では娘を安静にさせつつ、夫は在宅ワークをしていました。

子ども連れで職場に行くと、予想外にウェルカム。邪魔にせず受け入れてもらえました。「わたしも昔、父親の職場に連れて行かれたことがある」という声や、同僚から「子連れ勤務、常習犯です」という反応もあり、制度化されているわけではないのですが、柔軟に対応していることがわかりました。職場環境や上司の考え、組織風土に影響されることかもしれませんが、一つの選択肢としてあると思えたことで、少し肩の力が抜けた気持ちになれました。さて、連れて行った 3 歳の息子は、お絵描きさせてもらい、持参したお弁当を食べ、お昼寝をしながら帰宅しました。帰ったあとは「しごとしたなぁ」と、自分も仕事をしたと満足げでした。「また仕事をしに行きたい」と言うほどで、子連れ出勤が「最後の選択肢」になり得ることがわかりました。そして、そう言うということは、働いているわたしをポジティブな眼差しで見ていたことが分かります。最後の選択肢でありながら、働く姿を見せる意味を感じました。

子連れ出勤をしたという出来事を、別組織で子育てをしながら働いている方に話したところ､「そんな状況なら在宅ワークに切

り替えてもらえたら良かったのに」という反応がありました。別の同僚も、「子連れで職場に行っても仕事はできない」と子連れ勤務には否定的なリアクション。そのような反応を受けて、子どもを職場に連れて行ってまで仕事をしなければならないのは時代遅れで、在宅ワークに切り替えるような働き方が市民権を得たのだなと感じました。ハイブリットな働き方はこれから当たり前になってくるのでしょうし、働き方を選べることは子育て世帯にとって重要性が高いでしょう。一方で、子どもに働いている姿をどのように見てもらえるかは大事なテーマだとも思います。家とは違った仕事の顔で、他者のために動いている母親を見せられる、子連れ出勤は一つの有効な実践だったと思います。

3． まとめ

子育てしながら働く母親というと、とても大変で不安を伴うものというエモーションを引き起こす現代だと思います。また、子育てしながら働けるように調整したり、転職したりという制度やテクニカルな情報が溢れています。一方で、少しずつではありますが、パパの育休経験がその後の仕事に有益だという経験が発信されたり、子育てスキルが仕事に応用できるなど職場で共有することができるようになってきました。わたしはそのどちらの側面にも当事者として共感できます。どちらかに偏って主張する方がわかりやすく意見が通りやすいように思います。政治家のように。しかしながら、いまのわたしにとって自分に正直でいられる、子育てと仕事の両立は良いことも大変なことも両面あると認めながら発信することを大事にしたいと思います。

HITOKOMART 特別編

ペン1本でプーチンと闘う漫画家たち

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

ロシアがウクライナに侵攻したのは今年の２月24日だった。
世界の多くの国がその暴挙に憤りウクライナへの支援を続けてきた。
世界中の風刺漫画家の団体FECOの日本支部（FECO JAPAN)は私がまとめ役を引き受けているのだが、国内のメンバーから抗議の漫画展を提案されたことがきっかけで、海外の漫画家たちにも声をかけて抗議の風刺漫画展を開こうという事になった。
各国の漫画家たちに連絡を入れると瞬く間に作品が送られてきた。
それは最終的に日本の漫画家たちを含めて13カ国から170点近くが集まり、その中からセレクトしたものを４月の京都国際マンガミュージアムを皮切りに・大阪・鳥取・埼玉へと６カ月近くに渡り各地での巡回展示を実施し、新聞やテレビでの報道のお力もあって多くの方々に想いを伝えることができたのだった。
そして、９月にはこの展覧会でつながりができたウクライナの漫画家たちに新たに声をかけ、今も現地で戦禍にあっても抗議の漫画を描き続けている人たちの生の声を届けるための展覧会を開く事にした。
これには長年お付き合いのあった京都のギャラリー・余花庵が、それに応えて会場を無償で提供してくださった。
それは『ウクライナからの手紙』というタイトルで、ウクライナの 6人の漫画家たちの作品60点を展示し、多くの人たちに彼らの切実な想いを伝える事ができたのだった。
そんなわけで今回は連載中の私の『HITOKOMART』の作品はお休みにしてその展覧会の作品から一部をご紹介する事にした。
それぞれの漫画家の紹介とともに私のプチ解説も付け加えているのでご覧いただきたい。



この展覧会は広いギャラリー・図書館・公民館・など、展示作品の管理が確かな会場があれば作品の貸し出しを無料でさせて頂きます。
（但し作品の郵送や実際の展示に関わる費用はご負担をお願いします）
展示物はA-3サイズの風刺漫画が60点、作者の紹介パネル・企画内容パネル・ポスターを含めて計70点ほどあります。
展示をご検討頂ける施設、会場の担当者の方は一度当方までメールでご連絡をお願いします。

hukurokouji1972117@yahoo.co.jp （篠原ユキオ）


OLEG GUTSOL


Kazanevsky Vladimir


Alexander DUBOVSKYI

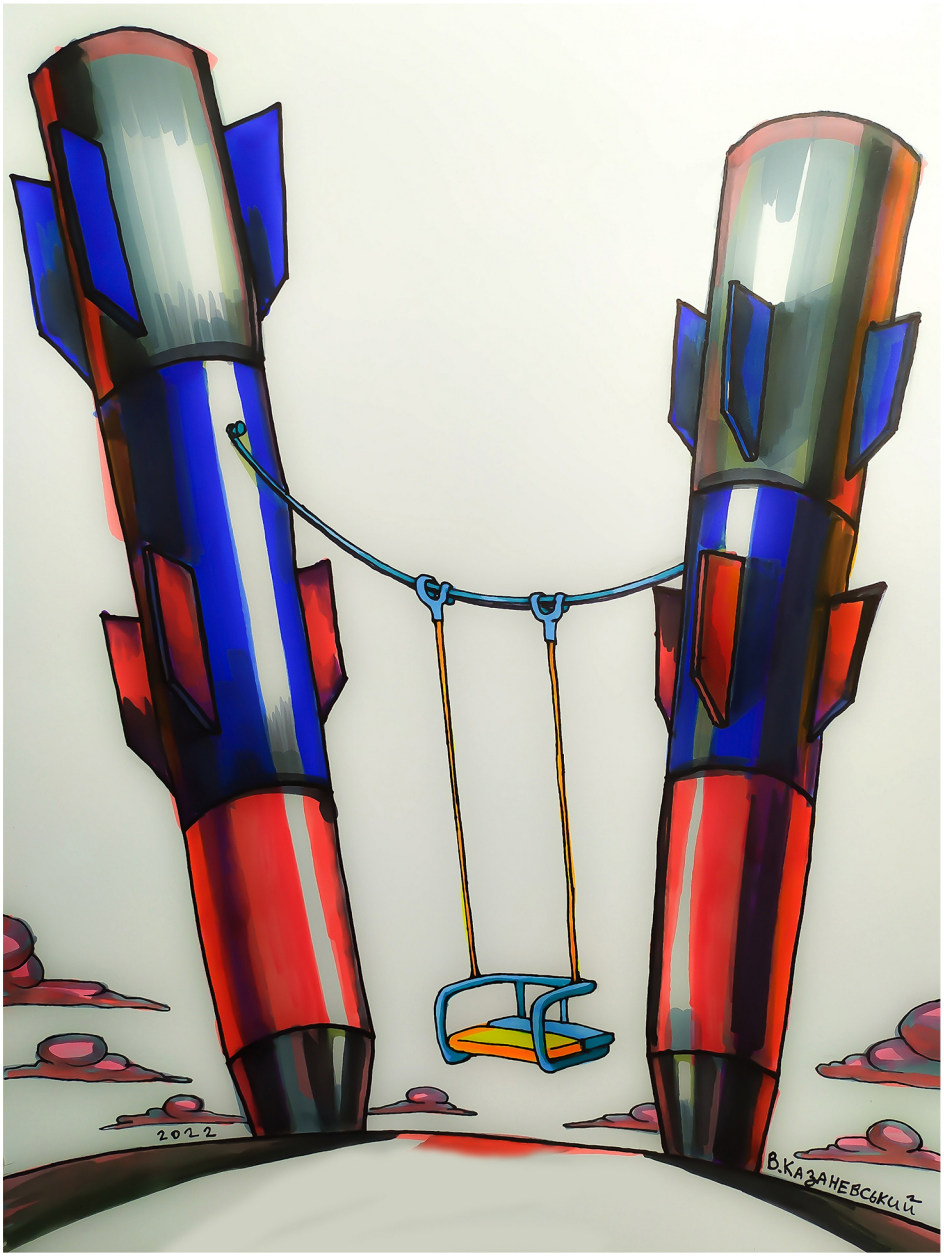

Oleksiy Kustovsky


Viktor Holub

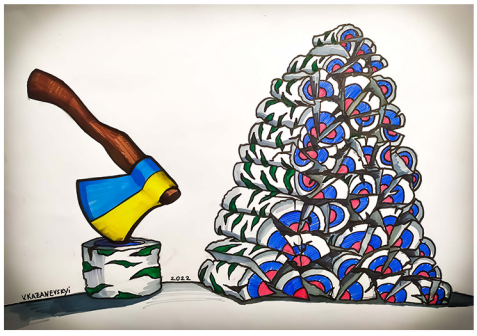

Viacheslav Kazanevsky



平和の象徴とも言えるブランコだが、それを支えているのはロシアの国旗の色をした巨大なミサイルである。
プーチンがこの侵攻の正当性を唱えるウクライナの解放や平和というお題目が、自身の軍事力やウソによって作られているのだということを伝えている。









Viacheslav Kazanevsky

ビアチェスラフ・カザネフスキー

1983年キエフ市生まれ。
2007年 国立美術・建築アカデミーで芸術家・画家・モニュメンタリストの資格を取得
2008～2009年、キエフ国立工科デザイン大学で絵画と素描の教員
2008-2010年、風刺と政治の雑誌「Paraska.info」の芸術編集者
2020- ウクライナの芸術家の国民連合のメンバーとなる
2021年 I-UA.TV チャンネルの 9 つのエピソードでMCを担当
2021年 現代美術アカデミーで似顔絵、似顔絵、漫画の教師。
世界各国での国際似顔絵コンテスト、展示会、フェスティバルに参加している







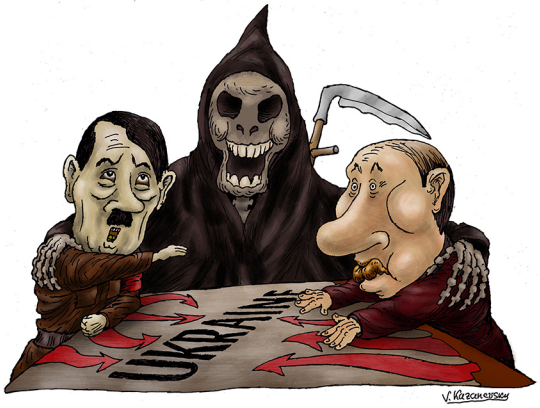
ロシア兵が軍靴の底にへばりついた人型のようなものを、ナイフで削り落としている。
これはウクライナやロシアの地図で使われている国境の表記だそうだ。
それを知ると、この作品が描くモノの恐ろしさが伝わってくる。
ためらいなく踏み潰した国境線の残骸を削り落とす兵士の、無表情な顔にプーチンの本質を見る気がする。





Kazanevsky Vladimir

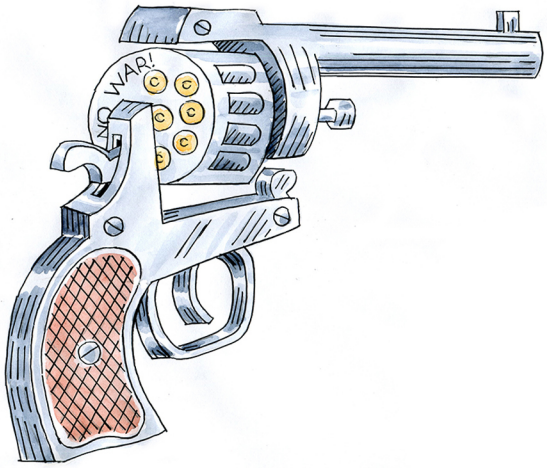
ウラジミール・カザネフスキー

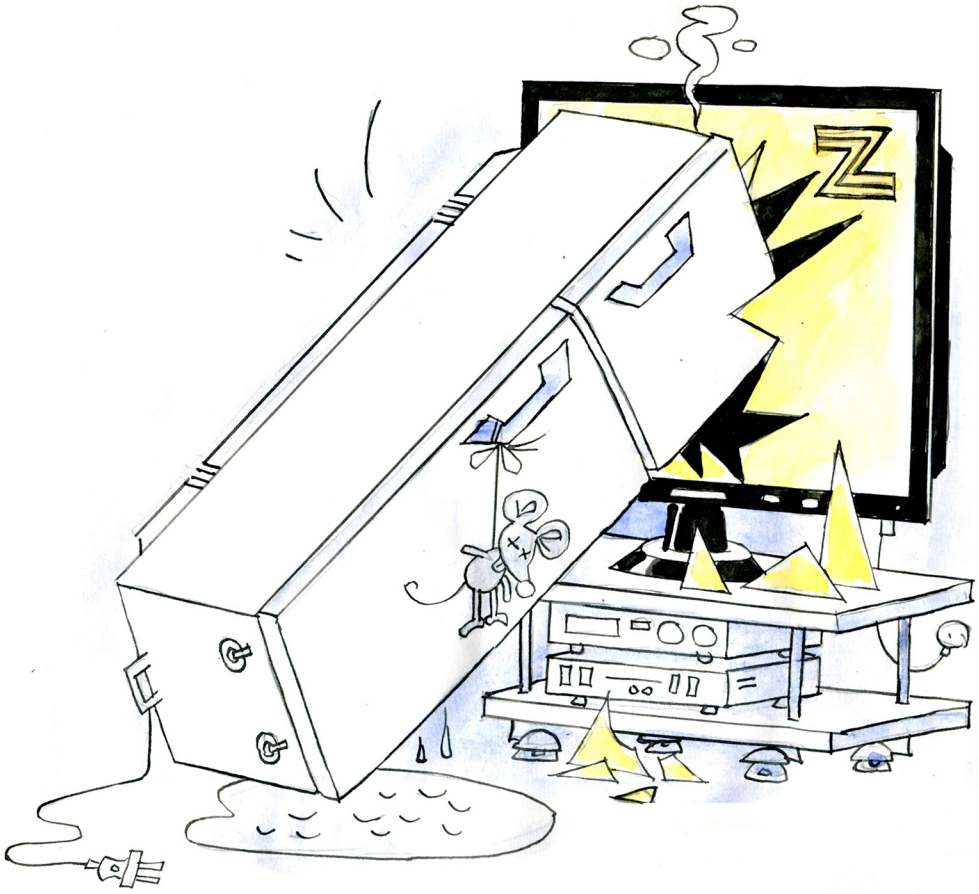


1950年 ウクライナのレベディン生まれ。
1973年 ハリコフ州立大学「宇宙放射線物理学」部門を卒業
1984年 キエフ ジャーナリズム スキル研究所「プレス アーティスト」部門を卒業。

作品は、世界中の多くの新聞や雑誌に掲載されている。
新聞ではWashington Post」、「読売新聞」、「Le Monde」、「Ouest-France」
そしてウクライナでは「Kiev Post」に作品が掲載された。
雑誌では「CourrierInternational」、「Sine Mensuel、」「Nebelspalter」、「Witty World」、「Welcome to Ukraine」、「Eulenspiegel」、「Berlingske」など多数に上る。





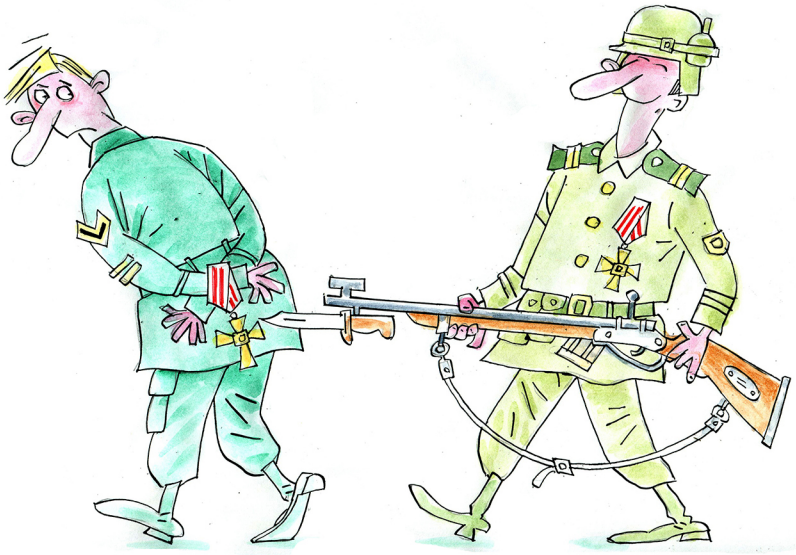


ロシアでは昔から良く使われている言い回しに『テレビvs冷蔵庫』というのがあるそうだ。
テレビはプロパガンダを指し、冷蔵庫は現実の生活を表している。
この事を知るとこの漫画の表現するロシアの人たちのリアルな感情が伺うことができる。
冷蔵庫の中が空になった時、ロシアの一般市民たちもプーチンの嘘に気がつくのである。

OLEG GUTSOL

オレグ・ガットソル

1964年 ウクライナ生まれ。
1983年 Kirovograd 機械製造専門学校を卒業
1994年 キエフ国立大学 (ジャーナリズム学部) を卒業。
1987年 漫画家としてデビュー。
以後、Perets(ウクライナ)ボジーク、ピクニック、シャポクリアク、15 ストク、カランブル、オーディンドマ (ベラルーシ)クロコディル、チャイアン (ロシア) など多くの新聞や雑誌にも掲載される。
1989年～ウクライナのジャーナリストの全国連合のメンバーとなり、2004 年に、ウクライナのカトゥーニスト協会に参加。
1998 年以来、400 以上の国際漫画コンテストや展示会に参加し多くの を受けている。
ブラックユーモアなどのCARTOONの作品集が多数ある。
現在は子供新聞「Shapoklyak」(ベラルーシ)のアーティストとして働いている。





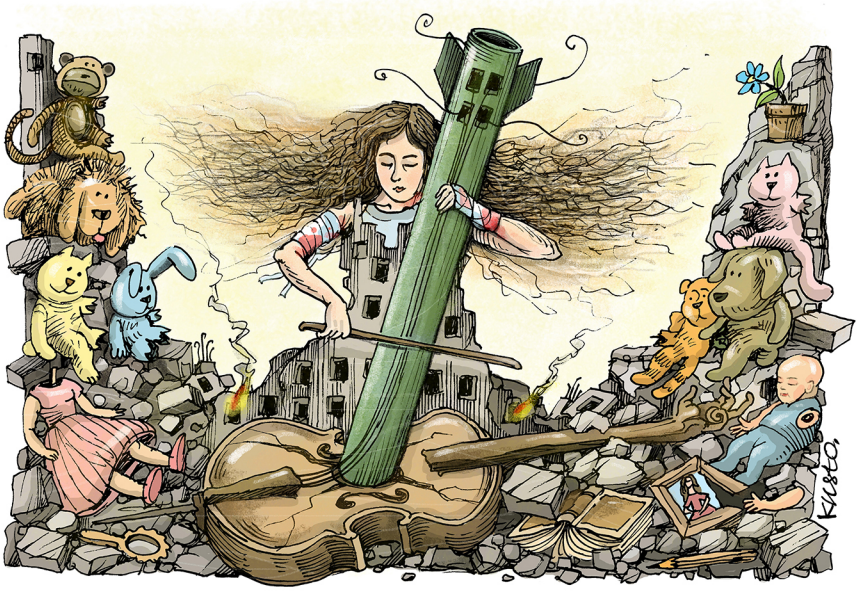
Oleksiy Kustovsky

私の名前はオレクシー・クストフスキーです。
私はウクライナの漫画家です。ロシア軍がウクライナに侵攻して以来、
私はこの恐ろしい戦争について毎日 1 枚の風刺画を描き続けています。

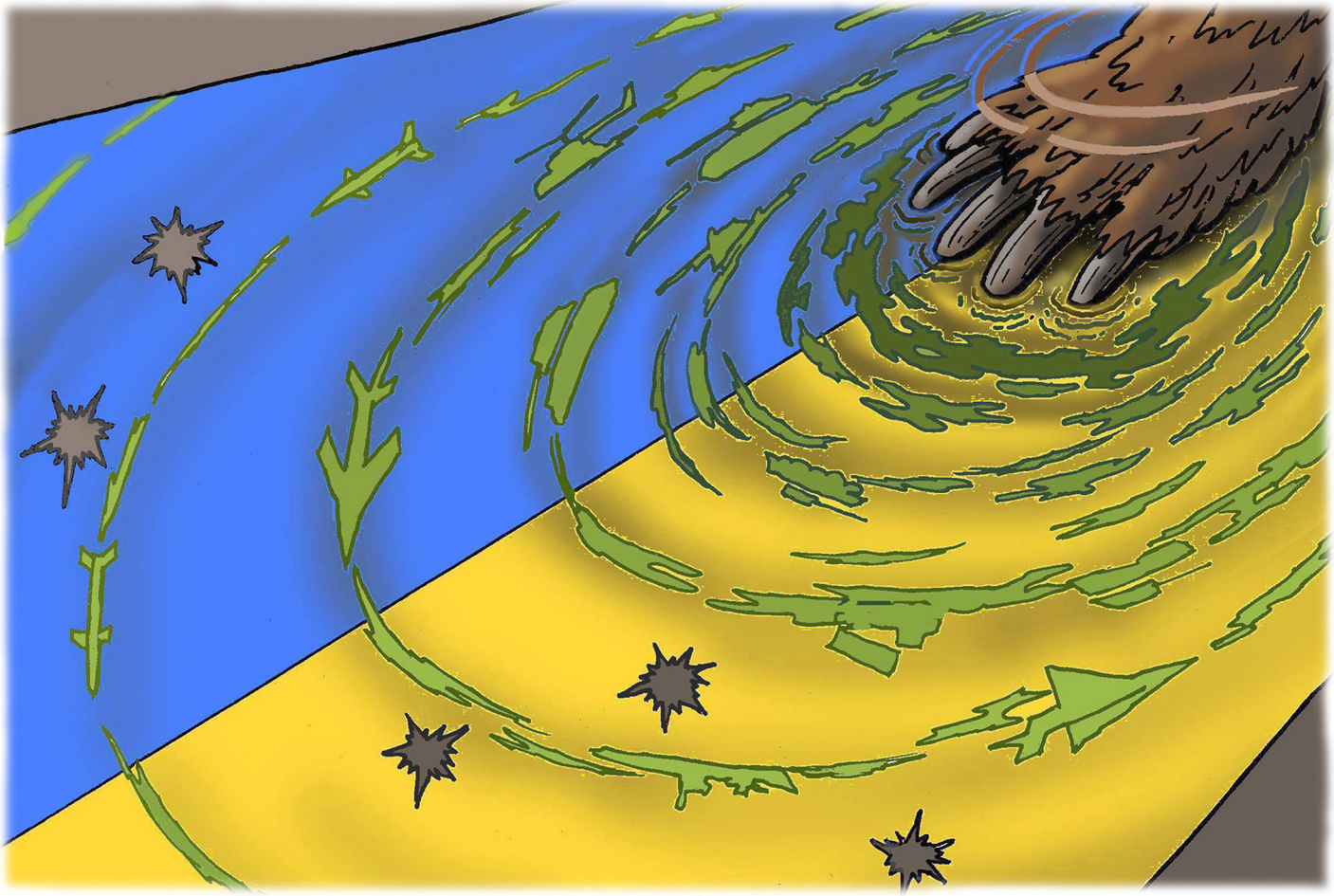
ウクライナを象徴するひまわり畑がミサイルによって焼かれている。
中央のひまわりの姿はわが子を抱き抱える母親の姿を連想させる。

ウクライナの大砲から打ち出される砲弾はウクライナの国旗の色をした虹を描いている。
空を飛ぶ2羽のコウノトリは来るべき平和の地を目指しているようだ





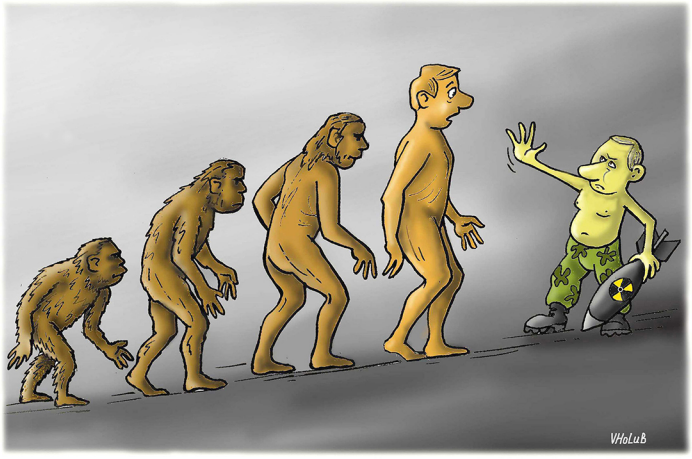




多くの一コマ漫画に登場する熊はロシアを象徴するキャラクターである。ウクライナの国旗の色の水面に踏み出した熊の足元に浮かぶ波紋は戦車やミサイルや爆撃機の形をしている。







Viktor Holub

ヴィクトル・ホルブ

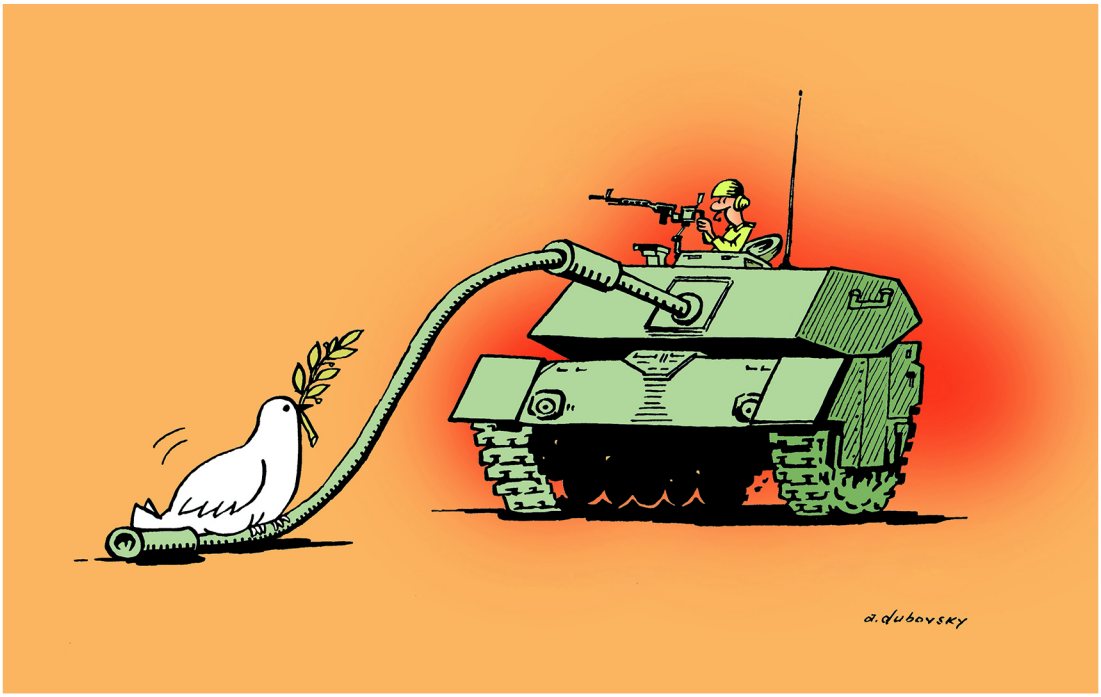
ウクライナは、その歴史の中で非常に困難な時期を迎えています。
ロシアによる卑劣で理由のない侵略の結果、多くの民間人が死亡し、インフラが破壊され、都市や村全体も破壊されました。
この困難な時期には、全世界の人々の支援が非常に重要です。
私たちは、日本政府と日本国民の連帯と大きな支援に心から感謝しています。一緒に勝ちましょう!





何ヶ月もの戦闘の結果、膨大な数のロシアの旧式戦車がウクライナ軍によって破壊され、あるいは捕獲され使い物にならなくなっている映像を見る事ができる。ウクライナの人たちの平和を取り戻そうという強い想いがこのハトの姿に凝縮されているように見える。





Alexander DUBOVSKYI

アレクサンダー・デュボフスキー

ウクライナは平和な国です。私たちは青い空の下でパンを育てました。そこで漫画家たちは平和な漫画を描きました。しかし、この戦争ですべてが変わってしまいました。
私たちは迅速な勝利を信じています。
平和な空、そしてすべての親戚や友人たちが生きていて、健康でありますように!



フランスのソーシャルワーク第 6 回

フランスの在宅支援を中心とした子育て政策

安發明子

フランスは合計特殊出生率が 1.88(2018 年)と EU 加盟国の中で最も高く、先進国における「少子化対策の成功例」とみなされている(労働政策研究 2020)。子育て支援は、1950 年代以来特に在宅支援を優先して取り組んできた。在宅支援制度は国家資格を有する専門職が担っているが、その実践について検討することは日本の子育て支援政策にとって有効であると考えられる。例えば、日本の厚生労働省は 2024 年から訪問型支援サービス事業を市町村が担うことを発表しており、子育て支援に在宅支援を組み込み、子どもの虐待や不適切な養育も予防することが政策の方向性となりつつある。具体的には、2020 年代に子ども家庭総合支援拠点の設置促進などが着手されている。一方、フランスでは子育てを専門とする窓口を設置する「プル型」のサービスではなく、子どもが通う機関に専門職を配置して子育て支援が行き届くようにする「プッシュ型」の構造にしている。ところがフランスにおいては、実践のレベルでは充実したサービスが提供されている一方、研究に関しては家庭内での支援実践についての研究蓄積が十分でないことが国の報告書で指摘されている(ONED 2013)。本研究ではフランスにおける子育て支援政策のうち、特に在宅支援サービスについて明らかにすることを試みる。

フランスの子育て支援政策は「親をすることは誰にとっても大変なことである」という前提の上で、予防的に在宅支援を利用し子育て経験が親にとっても子どもにとっても前向きなものとなるよう目指されている。また、心配があり要支援家庭であると判断された家庭についても危険がない限りは在宅支援をおこなう。この論文においては、①問題がなくても利用できる在宅支援を誰がどのように担っているのかの検討、②心配があるときに具体的にどのような手続きを経るのか、そして、③要支援家庭への在宅支援の 3 点を扱う。最後に資料として、在宅支援を受けている子どもに渡す冊子で子どもにこのサービスがどのように説明されているか紹介する。

1 調査の方法と目的 228

2. 問題がなくても利用できる在宅支援(予防) 229

1) 法的根拠と専門職の国家資格 229
2) 歴史的背景と役割 231

3. 「心配」な連絡のあった家庭への支援の提案と調査 232

1) 「心配な情報」に基づく支援の提案と調査の方法 233
2) 要支援の場合：在宅教育支援と保護の状況 235

4 . 要支援家庭への在宅教育支援(予防) 236

1) 支援開始の契機 237
A 契機は学校であることが多く、子どもの学習の遅れなど心配な状況が記述される237
B 学習に困難のある子どもがいる家庭が多く、特別なニーズに対応できるコーディネーターの役割が期待されている.....239
C 背景として両親間の葛藤が多く見られた.....239
2) 支援開始から終了まで – 「それぞれの行動する力を引き出す」 241
3) 多角的に家族を支える 243
4) エデュケーターと社会家庭専門員の役割 – 物理的にも家庭を支える 245
5) 在宅教育支援の終了 250
6) 在宅教育支援まとめ 250

5. 理念的背景 - 「親をすることへの支援」 252

6. まとめと日本の福祉の発展のために 255

資料. 在宅教育支援の子ども向け説明冊子 257

1 調査の方法と目的

調査はパリ市で 5 つ在宅教育支援機関がある中で、一年で総計 1 万 1000 人と一番多くの子どもの委託を受けている、1923 年に最初に在宅教育支援を始めた機関を対象とした。

方法は実践の目的や考え方の理解を深めるため専門職の行動を観察する組織行動のエスノグラフィー調査をおこなった。2021 年 6 月に 1 ヶ月間、観察実習の許可を得て調査を実施した。37 家族について家族の同意を得た上で、専門職との面談や家庭訪問に同席し、専門職会議に参加、専門職へのインタビュー調査をおこなった。さらに専門職の記録や報告書等の資料調査とも照らし合わせ、それぞれの家庭について時間軸と空間軸においての経過分析と複数の視点を総合的に検討した。さらに、2021 年 12 月から 1 月にかけて、2022 年 10 月に同じ家族の変遷について経過調査を実施した。

この研究においては、家族ごとに得た情報を書き出し、37 家族を比較分析することを目的とするが、この論文においては、始まりの契機と背景、終了の理由、そして特に 2 つの家族について支援の実際の内容を明らかにすることを目指す。

他に、家族手当基金や心配な情報統括部署など関連機関に同時期にヒアリング調査を実施している。

なお、この調査はパリ市で実施しており、他県では制度の運用面で違いがあることがある。

倫理的配慮

フランスにおいては研究所の倫理審査に依頼することが可能であるが、特定の受け入れ機関がある場合はその機関に調査計画書を提出し、代表者とその内容について精査し、承認が得られたら、受け入れ機関が用意する「観察調査契約書」に調印するというのが一般的な流れである。この研究も都度契約の締結という方法を経て調査を実施している。

契約後の調査先においての実際の配慮としては、受け入れチーム長に書面で同意を求め、次に調査対象の職員にも同じ書面を提出する。調査対象となる家族に対する直接の聞き取りはないが、調査目的で面談や会議に同席すること、家族に関する資料を閲覧し研究に使用すること、研究概要と倫理的配慮、知り得た情報の用途について説明し同意を求めている。都度同席したり話を聞く度に同意を確認しており、同意撤回についても説明をしている。

記録からは個人情報に関わる情報や在住地域や出身国について除外し、執筆時には固有名詞を変更するなど個人が特定されない配慮をしている。

2. 問題がなくても利用できる在宅支援(予防)

1) 法的根拠と専門職の国家資格

フランスには 2 段階の在宅支援がある。問題がなくても利用できる「在宅支援」と心配がある家庭を対象とした「在宅教育支援」である。

在宅支援について社会福祉家族法は以下のように定めている(CASF L222-3 条)。
①社会家庭専門員(TISF Technicien de l' Intervention Sociale et Familiale)による支援。
②家庭経済ソーシャルワーカー(CESF Conseiller en Economie Sociale et Familiale)による家計管理支援
③エデュケーター(éducateur spécialisé)による教育支援(Actions éducatives)
④経済的支援

3 種類の国家資格を持つ専門職が家庭を支える。

社会家庭専門員は、問題がなくても利用できる在宅支援で特に登場し、ソーシャルワーカーの一職種であり「家庭支援、家事支援、ソーシャルワーク」を担う。民間機関に所属し、福祉事務所や児童相談所のソーシャルワーカーがプレスクリプト(処方)する形

で、医者が薬を出したのちもその後の経過をフォローするのと同じように、プレスクリプターと並行し連携しながら支援をおこなう。

家庭経済ソーシャルワーカーは、福祉事務所や在宅教育支援機関、市営住宅ソーシャルワーカー室や、専門の民間機関に所属している。プレスクリプターと並行して家族を支援したり、児童保護目的の子ども専門裁判官による「家族予算管理支援措置(MJAGBF Mesure d'Aide à la Gestion du Budget Familial)」命令に基づき支援をおこなうこともある。

エデュケーターは、児童保護、障害、社会的精神的困難を抱えた成人の自立支援を学んでいる。心配のある家庭について児童保護の「予防」目的で家庭の同意のもと、もしくは子ども専門裁判官の命令で「在宅教育支援」をおこなう。在宅教育支援はエデュケーターと社会家庭専門員が同時に家庭に入ることが多く、家庭経済ソーシャルワーカーも参加することもある。

子ども専門裁判官は、裁判官資格を得た上で少年院や児童保護施設などでの研修を含む 2 年間の専門養成課程を経ており、未成年の保護と非行を扱う。子ども専門裁判所に所属する。パリ市と近郊では子どもとまずは一対一で 15 分程度話した上で家族や担当ワーカーも含めた裁判をおこない、命令をした場合は半年か一年後に再度裁判をおこないその後に関する決定をおこなう。子どもは裁判のやり直しを求めたり、手紙を書いて希望を伝えることもでき、子どもの意見表明権を保証し、子どもの権利が実現されていることを保障する役割も担う。次の裁判までの期間も在宅教育支援など委託機関は裁判官と電話で日常的にやりとりをし、子どもの状況に心配なことがあったときは裁判官に相談しながら支援内容を適宜軌道修正する。

パリ市児童保護調査機関 OPPE によると、2012 年に生まれた子どもの 3-5%が 5 歳までに継続的支援を受け、そのうち最初に受ける支援の半数は社会家庭専門員によるものであった。その後、在宅教育支援が続くことも多く、親の同意による在宅支援利用者の約 3 分の 1 は、同意による支援では不足があると判断され、その後に司法決定による在宅教育支援を受けている(OPPE 2021)。未成年人口の 1%が在宅教育支援を受けている。保護されている子どもは 1%であるが、短期措置が基本であり、帰宅時に心配がなくなり安全が確保されるまで在宅教育支援を受けることが多い(DREES 2020)。

問題がなくても利用できる在宅支援のプレスクリプターは主に 3 か所であり、以下である。(Bonamy 2007 より安發翻訳)

社会家庭専門員　財源と目的

健康保険の家族手当基金(1947年～)
誰でも希望者は利用できる
妊娠中、産前産後、双子、三つ子
離別後、片親家庭、家族の死別後

健康保険の傷病部門(1947～)
子どもか親の障害や病気

児童相談所、保健所(1974～)　教育的支援
学習の遅れ、不登校、子どもの攻撃性、子どもの生活リズムや栄養に配慮が必要なとき、衛生面、親の失業、
借金、家のメンテ不足
施設や里親宅からの一時帰宅中

2) 歴史的背景と役割

在宅支援は 1865 年に修道会が家庭内におけるサービスを開始したことが始まりとされ、当時は「母親を教育することでより良い家庭をつくること」を目的としていた。以前から修道会は病人の世話をしに家庭内に入っていたが、それだけでなく家事を一緒にすることで家族と会話することができ、信頼関係を築けるという経験知があった。そこで「日常生活のタスクを教育活動をするためのツールとする」ために、1 人の支援者が「看護師、ソーシャルワーカー、家庭支援」の 3 つの役割が担えるよう養成された。この団体は現在に至るまで活動を継続している。

「家庭の母親アシスタント」の名称が生まれるのは 1920 年、第一次世界大戦の出生政策の中であり、「社会階級に関係なく、相手の同意の上で、母たちと一緒に家事育児をする」というこの役割は全国に広がりをみせたが、有給の職業となるのは 1940 年代に入ってからであった。1942 年 Gounot 法により同業の全てのアソシエーションが全国組織 UNAF に加盟し職業として整備され、養成機関におけるプロとしての養成がおこなわれるようになった。

1947 年に健康保険の家族部門である CAF を財源とする公的費用で賄われるサービスとなる。1949 年に健康省が公的機関での資格試験に集約し民間での資格を廃止、1970 年にソーシャルワーカーの一職種と認定、それに伴い他の福祉職教育職との連携が求められるようになり、児童相談所もプレスクリプターに加わった。家庭支援から「教育とソーシャルワークを専門とする職種」と規定されるようになる。それまで母親が病気だったり、産前産後に利用されやすかったのが、社会的困難、つまり夫婦間の葛藤や借金、依存症の支援も対象に含まれるようになった。1975 年の児童福祉法において、心配がある子どもの家庭を支えるだけでなく、困難がなくても利用できると定め、社会的教育的専門職と位置付ける。1999 年、家庭支援の実践の発展に伴い社会家庭専門員(TISF)という国家資格が誕生する(décret du 9 septembre 1999)。(Bonamy 2007)

困難がなくても利用できることが重要な点である。社会家庭専門員は 2 年間の養成課程で 950 時間理論を学び 1155 時間研修を経たのち国家資格を受験している。国で定めている養成課程の履修科目の中には「悪い扱いを防ぎ、良い扱いができるよう家庭を支援する方法」などの項目がある。

家族を担当する CAF、健康保健、児童相談所または保健所の専門職が TISF 専門機関にプレスクリプト(処方)する形でサービスが開始される。専門職はその後も TISF と連携して家族を支援し、調整や仲介役も果たす。在宅支援が国家資格を持ったソーシャルワーカーによって担われ、プレスクリプトした機関と連携して継続的に支援することが注目すべき点である。家事育児補助ではなく、子育て実践を複合的に支えようとしている。

子育て支援に関する政策の財源であり大きな役割を担っているのは健康保険の家族

部門である家族手当基金(CAF)である。女性の社会進出が進んだ 1960 年代より家族手当のような財政面の支援に限ることなく、子育て支援サービスに力を入れるようになった。社会家庭専門員(TISF)の派遣を一時間数百円で受けられるようにするのもその一つであり、TISF の国家負担は 11 億 5700 万円(80Meuro 2022 年 11 月末のレート)である(IGAS 2018)。他に保育料が両親の収入の 1 割で利用できること、給食費や学童保育代も CAF が計算し家族に請求しており、収入の少ない家族には家族旅行代なども出す。地域の無料習い事や、親のための相談窓口などの費用も CAF が財源である。さらに各地それぞれの CAF が自主的な企画による福祉の実現を求められており、インターネット上にソーシャルワーカーを配置し、市民が相談したり、ソーシャルワーカーが心配な子ども若者にネット上で声をかけられる仕組みも一つの地域の CAF による試験的な取り組みが国に認められ全国に広がったものである。

CAF の担当者は「保健省は政策決定者、CAF は実施リーダーであり会計係である」と言う。生活保護や障害や年金や手当など全国共通の社会保障は CAF の窓口に集約されているため、漏れがない仕組みである。福祉事務所のソーシャルワーカーなどはソフトウェア上で家族が必要な手当を全て受けることができているか確認することができる。窓口が一箇所なので複数箇所を訪問し申請や収入申告をする必要がない。

CAF はソーシャルワークもおこなっている。CAF は両親の収入の状態、離別や死亡もデータ上で確認できるため、家族に変化があったら CAF からアクションをおこなう。子どもがいるカップルが離別した場合は両親と子どもに会いに行き暴力がなかったか、必要な支援があるかサービスを受けているかをチェックする。子どもには親を 2 人持つ権利があると考えられているため、CAF が間に立ち養育費の請求や立て替え、面会場所や立ち会いの心理士も確保しており、面会実現のための手続きもおこなっている。手当があるだけではなく、対個人そして対社会のソーシャルワークがセットで存在することは重要な点である。

3. 「心配」な連絡のあった家庭への支援の提案と調査

産科、保健所、保育機関、学校、福祉事務所など家族に関わる機関や全ての市民が「心配」だと感じたら連絡義務があり、連絡しない場合罰則がある。その「心配」の基準は市民法 375 条に定められており「子どもの健康、安全、精神面が危険やリスクにさらされていたり、子どもの教育的・身体的・情緒的・知的・社会的発達状況が危険やリスクにさらされている場合」である。よって、児童保護に関する子ども専門裁判官の命令も「市民法 375 条に即し」と必ず書かれている。

福祉は「皆に共通の権利」と呼ばれ、ソーシャルワーカーの役割は「福祉があるだけでなく、市民一人一人のもとで実現されているか確認する」こととされている(社会福祉家族法 CASF D.142-1-1)。市民法 375 条においては、そもそも権利が福祉の前提となっているのである。

1) 「心配な情報」に基づく支援の提案と調査の方法

心配な情報(IP)が県の心配な情報統括部署(CRIP)に入ったら、調査担当 2 名が指名され(パリ市の場合、福祉事務所の地区ソーシャルワーカーと学校ソーシャルワーカーが担うことが多い)、国で定めた基準に従い「支援の提案と調査」をおこなう。3 ヶ月以内に報告書を CRIP に戻さなければならない。手続きの具体的な方法は(安發 2020)を参照されたいが、「心配」かどうかの判断はフランス高等保健機構（HAS）によって全国統一的な判断基準が詳細に定められており[1]、県や担当者による判断の差が出ないように工夫されている。調査の際も支援の提案が 3 ヶ月間に集中して行われ、CRIP へのヒアリングによると例えばパリ市では 2020 年に心配な情報統括部署が対応した子ども 4,942 人のうち 23.4%が、調査と支援を開始してから 3 か月以内に状況が改善し支援が終了している（調査の結果、そもそも心配な状況でなかった場合も含む）。

CRIP に戻される報告書においては、専門職が児童保護の評価をするときに抑えるべき骨子を守ることになっている。以下、CRIP へのヒアリングをもとに記述する。(2022 年 1 月実施)

心配な情報に関する調査担当による心配な情報統括部署(CRIP)への報告書
- 家族の民法上の状況(名字、名前等)、両親が離別している場合は子どもの監護分担について家庭裁判官(JAF, Juge aux Affaires Familiales)の判断が存在するかについて。
- 心配な情報(IP)の理由について。

子どもの生活環境、社会的経済的・文化的状況：
経済状況、家族の歴史、子どもの生活の現在の状況、いつ誰と生活しているか、住居と子どものための空間の状況、家族をとりまく状況と近隣や親族の支えの有無。概略。

健康と子どもの成長：
健康、身体的成長と子どもの健康フォローの状況(受診が必要な場合におこなっているか)、心理的社会的成長の状況、包括的にみて継続的な成長ができているかということ。

親をすることと、親機能の実践：
両親の個人的状況、両親のパートナーとしての状況(進行中の手続きがあるか)、両親が子どものニーズを把握し応えることができるか、兄弟の関係性、家庭環境とそれぞれの子どもが誰に愛着関係を築いているか、親の子どもへの教育的な関わりと親子関係。

外部からのサポートに親がどれくらい参加することができるか：
調査判断の際に、心配な情報の内容と現状についての理解とその意味するものについて家族と対話し、今後の方針を構築することができる、解決方法を探し外部のサポートを受け参加することができる。

状況の特徴と目的の決定：

[1] フランス高等保健機構 HAS のリンク
https://www.has-sante.fr/jcms/p_3120418/fr/evaluation-globale-de-la-situation-des-enfants-en-danger-ou-risque-de-danger-cadre-national-de-reference

危険と保護の必要性の特定、子どもによる希望、親の希望。(子どもの成長に影響があるか？子どもへの影響、子どものニーズに親が対応することができるか？)
結論と予防的支援の提案もしくは保護措置の提案：
子どもが表現する希望、親の希望、専門職による評価、今後サポートをする場合は目的の特定、または措置の提案。

2007 年の法律で虐待という言葉をなくし「心配」に置き換えたことで、早期に予防的に家庭に「支援」という形で入れることを重視している。2007 年の法律の背景には 2005 年に起きた未成年の性被害事件があった。性被害にあった子どもの苦しみをなぜ早期に周囲の専門職が見抜くことができなかったか。セーヌ・サン・ドニ県の児童保護部門責任者と子ども専門裁判所長官が呼び掛け人となり、全国の児童保護を担う人たち 100 名超で検討会を自主開催、予防を基本とする法律への大転換を促した。子どもたちの小さなサインに気づける専門職の養成が目指された。

その結果、現在心配な情報統括部署が発表している心配な情報の理由を見ると身体的暴力は非常に低く、そもそもそこまで関係性が悪化する前に家庭に入り支援することを実現しようとしていることがわかる。

心配な情報の理由[3]

	2020	2020
心理的暴力	1630	33,94%
パートナー間暴力	666	11,71%
性暴力	347	10,13%
教育の欠如	479	8,37%
行動面のトラブル	257	6,55%
重いネグレクト	335	6,25%
危険にさらす行為(家出等)	224	5,61%
健康	209	5,03%
別れた両親による子どもの生活の場をめぐる紛争	174	3,67%
不安定な生活	136	2,73%
学業困難	70	1,76%
身体的暴力	34	0,91%
子どもの状況を確認できない	42	1,09%
他	140	2,91%
Total	4733	100%

[3] Source : Rapport d'activité 2018 CRIP 75

(図：CRIP により提供、安發翻訳)

例えば「子ども SOS」とインターネット検索すると、筆者はパリに住んでいることもありトップにパリ市のホームページが出て基準は以下のように紹介されている。「虐待」に比べ、症状が並んでいるため証拠が必要なく、自身の観察による判断で良いことが特徴である。不登校や家出も対象になる。子どもに関わる全ての職業についている人が児童保護に関する継続的な研修を受ける義務があり(教育法 L542-1)、情報がアップデートできるようになっている。

パリ市ホームページ：以下の事項が複合的に存在する場合は特に、「心配な情報伝達が必要な状況」である。
- 身体的痕跡(打ち身、やけど、骨折、リストカット跡)
- 健康問題：何度も病気になる、疲れ、顔色の悪さ
- 学習困難(欠席が多い、やる気のなさ、学習の遅れ)

- 特定の状況を避けたりスポーツに参加しなかったりする
- 身体的知的成長の中断
- 肥満、やせ
- 不完全な衛生状態
- 暴力もしくは攻撃性
- 言葉少ない、反応が少ない、内気
- 誰にでも愛情を求めようとする
- 度重なる脱走、家出
- 理由のない不安感、自信のなさ
- リスク行動(家出、中毒性のある物質の接種)
- 食の問題(食欲不振、拒食、大食、嘔吐)
- 夜尿、おもらし
- 家庭での度重なる事故や怪我
- 年齢にそぐわない性的な言動

2) 要支援の場合：在宅教育支援と保護の状況

司法判断を仰ぐことができる条件は社会福祉家族法(CASF L226-4)が根拠になっており「いかなる社会的支援も十分機能しなかった、家族の拒否や協力が得られず社会的支援ができなかった、心配が残るのに状況について調査しきれない場合」であり、裁判官は全ての社会的支援を試したか確認しなければならない。その上で裁判をおこない、市民法 375-2 条で「常に可能な場合は未成年はそれまでにいた環境に居続けなければならない」とされているので、危険がなく、子どもが望む限りは在宅での教育支援を優先することになる。

要支援と判断されても、危険がない限りは在宅教育支援機関による支援をおこなう。社会的養護の子どもは日本が 0.2%であるのに対しフランスは未成年人口の 2%だが、うち半数が在宅教育支援を受けており親子分離されていない。在宅教育支援を受けている子どもの 7 割は子ども専門裁判官の決定による支援である。司法が子どもの福祉を守るために利用されており、子育て支援は強制的な形でも実行されている。司法決定の場合、判決文で支援内容を指示し、半年後一年後に裁判をやり直すため定期的な状況確認がされている。在宅教育支援の 75%は 3 年以内に終了しており、早期に集中的に支援し、悪化させないことを目的としている。特に離別や親の病気や逮捕など家庭内に変化があった時期に家族全員を支え生活を軌道に乗せるには有効であると言われている。

子ども専門裁判官が在宅教育支援を決定した場合は、直接民間機関をパリ市の場合 5 箇所ある中から指名する。保護の場合は、児童相談所が子どもの受け入れ先を探す。民間の受け入れ先の方が多いが、民間機関は全てパリ市の民間機関統括部門(BEPA Le bureau des établissements parisiens associatifs)が認定、統括している。民間への措置費

委託費は子ども一人ごとに計算され、県の児童保護予算から支払われる。システム上で空き状況を見ることができ、相談にも応じる。BEPA への 2022 年 2 月の調査によると、在宅・保護を含め受け入れ可能人数は民間 8600 人、公的機関 1000 人であり、民間のうち 4800 人が在宅、3800 人が保護である。2020 年 12 月 31 日時点で心配はあるが危険はないと判断された「予防措置」である在宅教育支援を受けているのは 4789 人、うち裁判官命令によるものが 2707 人、親の同意によるものが 1874 人、裁判官命令による 3 ヶ月から半年の司法的調査(民間機関が実施)が 188 人、在宅支援の一つである日中入所措置が 673 人であった。一方、危険があると判断された「保護措置」の入所状況は未成年単身移民用施設が 1400 人、施設 657 人、自立支援アパート 534 人、里親 663 人、障害対応受け入れ機関 77 人、田舎の小規模受け入れ家庭 42 人、親子受け入れ施設とアパート 422 人、緊急受け入れ機関 62 人であった。保護であっても自宅措置(PEAD Placement Educatif à Domicile)という形で自宅に専門職が毎日通う形のものを増やすことが近年の流れである。

司法判断による家族予算管理支援 MJAGBF (Mesure judiciaire d'aide à la gestion du budget familial) (市民法 375-9-1)は他の児童保護命令を受けていない家庭にも単独で実施されることがあり、専門機関に子ども手当など子どもに関する手当が入金され、それらが給食費など子どもにかかる費用に適切に使用されることを目的とし、家庭経済ソーシャルワーカーが家族を包括的に支える。2019 年に全国で 1 万 5332 家庭が対象となっており、パリ市では毎年 200 家庭 500 人の子どもが対象となっている。(DREES 2020)

パリ市児童保護調査機関 OPPE によると、保護されている子どもと若者(21 歳未満)の 67%が男子(3205 人)、女子 33%(1604 人)であり、男子が多い理由は未成年単身移民は男性が大多数であるためである。

18-21 歳未満は 1522 人、14 歳未満は 53%(1758 人)、3 歳未満は 6%(196 人)と少ない。保護されている期間は 710 人が 6 ヶ月以上保護されているが、258 人は 10 日から半年未満、780 人は 10 日未満であり、短期保護が多いことがわかる。990 人は未成年単身移民であり年齢上限まで保護される。(OPPE 2021)

４．要支援家庭への在宅教育支援(予防)

在宅教育支援は、調査の結果「心配」と判断されたものの危険がない場合や家族が希望するときに専門職が家庭に通う形で県の児童保護予算で実施されている。

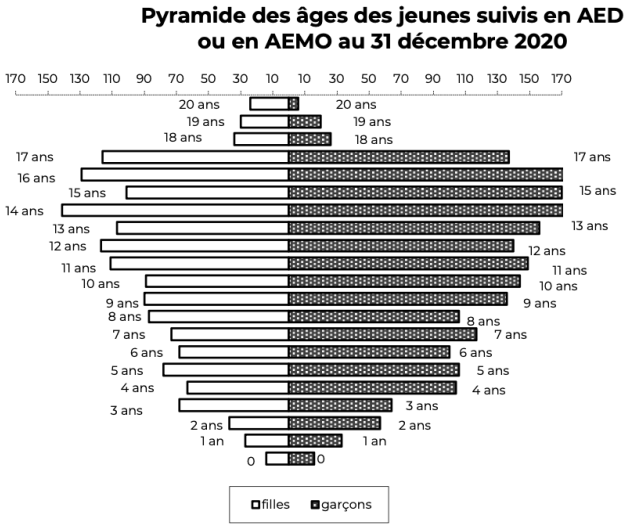
はじまりは、初の子ども専門裁判官である Henri Rollet が 1928 年に困難に直面している子どもを家庭内において支えるための支援と調査を目的とするアソシエーションを立ち上げたことが起源である。その後 1958 年に司法決定による在宅教育支援、1986 年に親の同意による在宅教育支援が開始される。

在宅教育支援は専門の民間機関(アソシエーション)に所属するエデュケーター資格

を持った人を中心とした多職種チームで行う。調査先には他にチーム内にソーシャルワーカー、社会家庭専門員、学習エデュケーター、幼児エデュケーター、心理士 2 人、小児精神科医、異文化出身の家庭を支える異文化メディエーターがいた。

司法命令の場合はその判決文に書かれた目的をもとに、司法命令ではない場合は家族と定めた目的をもとに半年か一年単位で個人計画書を親子とともに策定し、実施する。期限が来ると再度裁判があり、状況を確認し今後の方針を決める。親の合意による支援の場合も「心配な情報による調査を受け、継続的な支援が必要と判断されて在宅教育支援を勧められた」という状況は要支援であると専門職に判断されており、拒否した場合、裁判による強制力のある介入が想定できるため、選択の余地なく契約にサインをしていることはあり、実際に親が希望している場合よりも強制力のある状況で開始することが多いのではないかと言われている。

全国児童保護調査機関による調査によると、在宅教育支援を受けている子ども若者は全国的に男子の方が多く 56%であり(ONPE 2020)、DREES によると半数は 11-17 歳、30%が 6-10 歳である(DREES 2020)。パリ市児童保護調査機関によると 2020 年 12 月 31 日時点で在宅教育支援を受けいているのは男子が 57%(2148 人)で女子より多い。在宅教育支援を受け始めるのは 6 歳以降がほとんどである。パリ市で児童保護の対象となっている 2000 年に生まれた子ども 3810 人への調査では在宅教育支援を受けている子どもの 72%は一度も保護されたことがなく、25%は 3 年以内の保護経験があった。6 ヶ月以上保護されている子どもの 55%が保護される前に在宅教育支援を経験している。在宅教育支援の約 75%は 3 年以内で終了している(保護される子どももいる)。(OPPE 2022)



(図：在宅教育支援を受けている子どもの年齢。右が男子、左が女子 DREES 2020)

1) 支援開始の契機

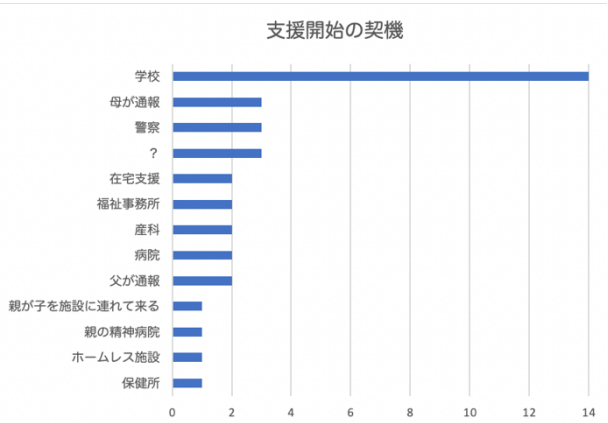
ここからは具体的な先行研究や公的資料の中にデータを見つけることができなかったため、筆者の 37 家庭への調査をもとに分析する。

A 契機は学校であることが多く、子どもの学習の遅れなど心配な状況が記述される

筆者の 37 家庭への調査の結果を家族ごとに書き出し、その主な契機として記録されていた内容を分類した。契機についての記録は裁判所で閲覧できる記録をもとにしている。「心配」な情報を連絡した学校などの機関の記録をもとに、「心配な情報の調査」を

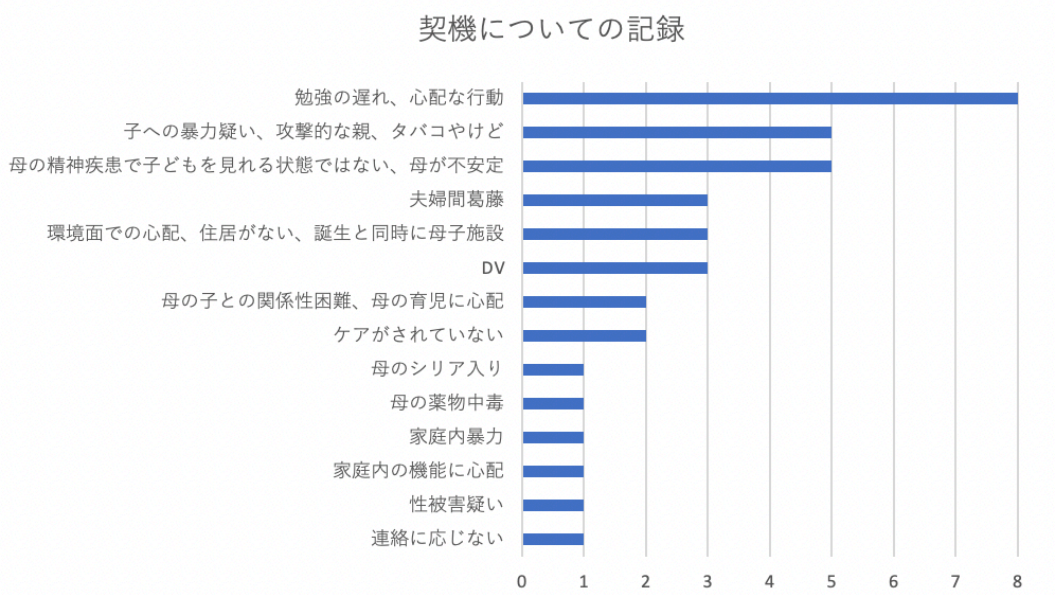
担当した福祉事務所のソーシャルワーカーが記録し、心配な情報統括部署がその報告書を裁判所に送ったものが主であった。調査対象の 37 家族は 2021 年 6 月の 1 ヶ月間に筆者が偶然家庭訪問や家族面談、ケース会議に立ち会った家族である。パリ市の北東部の比較的移民の多い地域に住む家庭が多い。子どもは合計 79 人おり、平均 1 家庭 2.1 人であった。

契機は学校であることが多かった。在宅教育支援の前に施設や里親を経験している場合、年上の兄弟が既に在宅教育支援を受けており下の子どものちに加わった家庭など、そもそも家族に支援が開始した契機や時期がわからないものもあった。母や父が通報している場合は、夫婦間の暴力や DV、親の子どもへの暴力についての訴えが契機である。



(図：調査をもとに安發作成)

契機については学習の遅れなど「心配な症状」としての記録が多い。家族そのものの状況ではなく、市民法 375 条にどのように該当すると思われるかが記述されている。「虐待」「育児能力に問題」などカテゴリー化された表現ではなく、それぞれの専門職が心配と感じる詳細な記述である。



(図：調査をもとに安發作成)

子どもの心理に関する表現が多く、心配な根拠として記録されていた。

例)

「調子の悪さを落ち着きのなさとして表現している」

「学習に思うように取り組めないことに大きな苦しみを感じている」

「火が消えたような」「自分の存在を消している」

「感情に溢れている」

「自己破壊的な行動をとる」

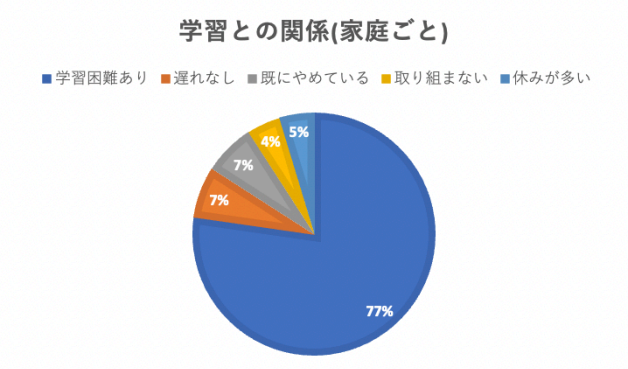
「言葉が封じられている」

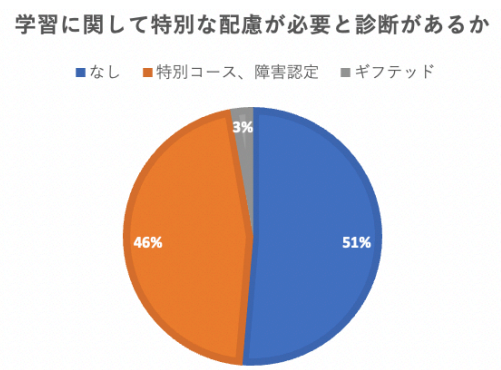
「失敗してはならないプレッシャーでテストを白紙で提出する」

エデュケーターはこの傾向について、「症状のある子どもが家庭を開く機会をつくる」と表現していた。

B 学習に困難のある子どもがいる家庭が多く、特別なニーズに対応できるコーディネーターの役割が期待されている

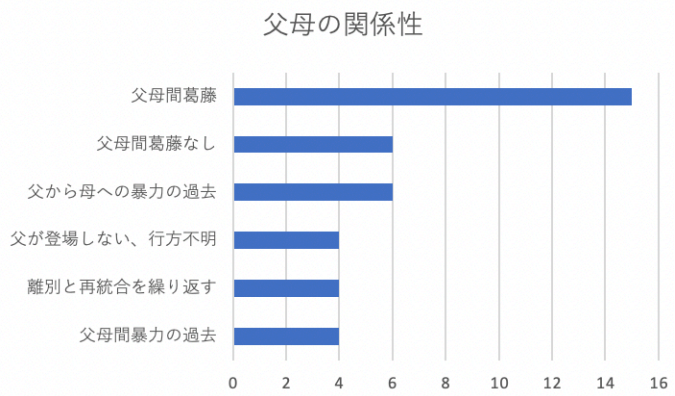
全ての家庭に 3 才以上の就学年齢の子どもがいた。学習に困難がある子どもがいる家庭が多く、特別コースや障害認定を受けている子どものいる家庭も多い。そのようななか、在宅教育支援のエデュケーターは特別なニーズに親が十分対応できていない場合のケアコーディネートの役割も期待されていた。

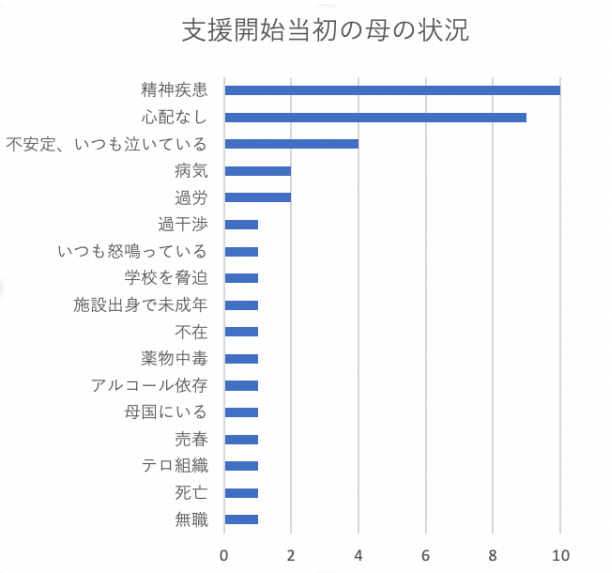


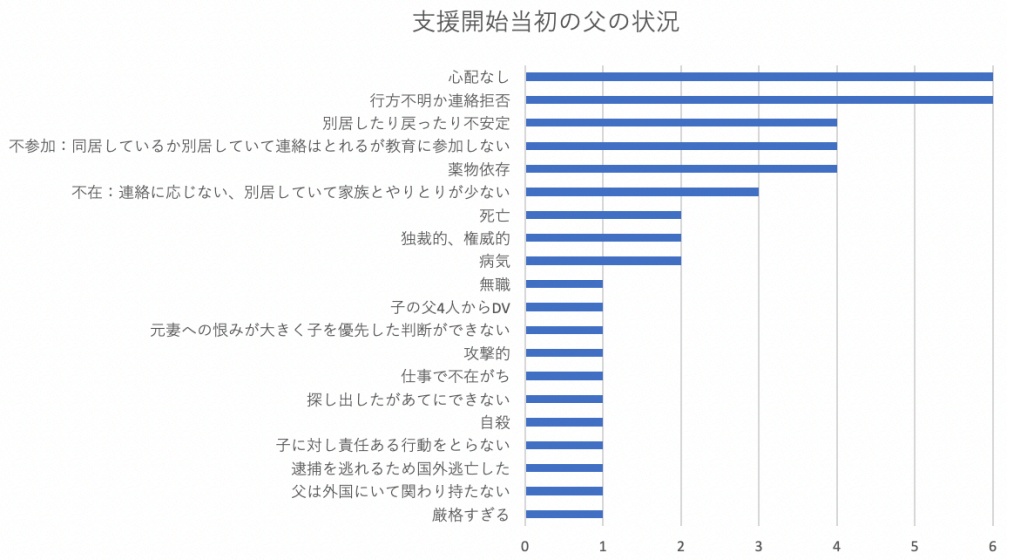


C 背景として両親間の葛藤が多く見られた

背景として、両親間の葛藤が多くみられ、支援開始後に離婚したり、戻ってきたり、不安定なことも多い。両親間の状況もソーシャルワークの対象としていた。片親家庭の割合を計算しようと試みたが、共同親権であり両親間を行き来していること、親戚宅も住む場所の一つになっていたり、兄弟によって住む形態が違うなど計算することが困難であった。







(図：調査をもとに安發作成)

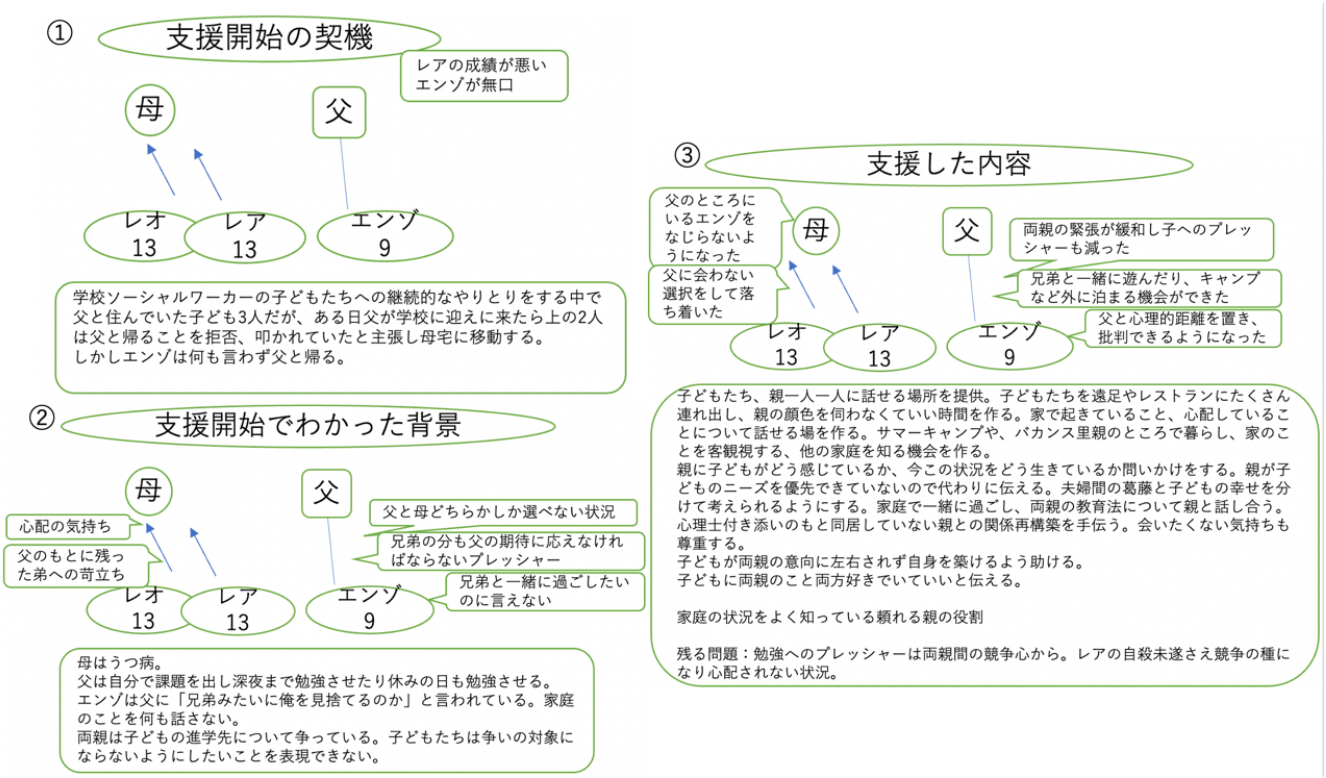
父は行方不明や連絡を拒否している場合、別居したり戻ったり子どもとの関わりのスタンスもよく変わる場合、同居しているのに家庭訪問時もテレビゲームをして話し合い

に応じない、子どもの医療の送り迎えなどに参加しないなど「不参加」である場合、別居していてやりとりが少ない「不在」である場合が多く見られた。DV や虐待を理由に逮捕されたことを恨み家族とは内緒で関わりがあるのに児童保護関係機関には一切関わろうとしないこともあった。親としてできることを引き出すことも在宅教育支援の目的であるが、そもそも関係性を築くことが困難なケースも多くみられた。支援開始まで母親に育児を任せていて不参加だったケースでは、母親が対応できなくなってもすぐに里親に預けてしまう、仕事の忙しさを理由に連絡に応じないなど親役割の支援がなかなか進まない場合も見られた。アフリカをはじめとした家父長制文化出身の家庭が多く教育は女性の役割という認識があること、暴力が明るみに出たら逮捕される可能性があること、在宅支援機関や学校のソーシャルワーカーは 9 割 5 分女性であることなど、父の参加が低い要因として考えられる。

2) 支援開始から終了まで – 「それぞれの行動する力を引き出す」

具体的にどのような形で支援がおこなわれ、家族がどのように変化したか、支援開始から終了まで一年半の調査の中で多くの動きがあった 1 つの家庭を例にとる。名前は仮名である。裁判所保管の資料、在宅教育支援担当エデュケーターの日々の記録、エデュケーターが裁判官に書いた報告書、エデュケーターへのヒアリングをもとにしている。

3 人兄弟が父と暮らしたいという手紙を家庭裁判所に出したことで子ども三人が父のもとで暮らしていた。学校から 2 人の子どもについて、長女が学習に遅れがある、そして次男が無口であると「心配な情報」の連絡があった。その後 3 ヶ月間の調査の間に学校のソーシャルワーカーと調査を担当した福祉事務所のソーシャルワーカーが密に子どもに関わる中で、ある日上の二人が父宅に帰ることを拒否、家庭裁判所への手紙は父に書かされたものであると主張し、父から暴力を受けてきたと訴えた。しかし下の弟のみ何も言わず父宅に帰った。



(図：調査をもとに安發作成)

在宅教育支援が開始し、母はうつ状況、父は残った弟にプレッシャーをかけていることがわかる。父は弟に毎日遅くまで、そして土日も勉強させ、母のところにいる兄弟よりも父の教育が成功していることを証明しようとしていた。そして弟は隔週で母のところで過ごすが、母から父のもとにいることをなじられる。弟は在宅教育支援の面接の際もエデュケーターの質問に父の顔を見るばかりで答えることができなかった。母のところに移った姉と兄についても父は転校の手続きを妨害するなどした。弟は学校に父が迎えに来ても兄に無理やり学校に連れ戻されたり、兄姉と一緒にいたい気持ちと父を一人にするわけにいかない気持ちの間で引き裂かれる経験をした。エデュケーターは子どもたち一人ずつ個別に会って話す機会を作り、状況についてのそれぞれの考えを整理した。

在宅教育支援エデュケーターの働きかけにより、母も父も子どもにプレッシャーをかけることを減らす努力をした。弟も父について批判的なことも言えるようになり、折り合いをつけながら両親の争いに距離をおき、自分のやりたいことについての話もできるようになった。兄姉が母の近くの学校に転校し、弟が父の近くの学校に残り子どもたちの学校についての争いに決着がつき、さらに兄姉は父に会うことを拒否するので母のみの監護、弟は 2 週に一度母のもとで兄弟と過ごすというリズムが落ち着いた時点で、心配がなくなったのではないかと家族と話し合い、裁判官に報告して裁判をやり直し支援を終了した。子どもたち自身が大人に話せるようになったこと、親も子どもがサマーキ

ャンプなど親元を離れて過ごすことを認めるようになった点が心配がなくなったと判断する基準となった。ただ、姉が自殺未遂したときでさえ父は娘の安全を心配するのではなく「母の環境のせいで自殺未遂したから自分が引き取るべきだ」と嬉々として即裁判官に訴えるなど、子どもを中心に考えるのではなく、夫婦間の競争心が色濃く残っていることに変化はなかった。

第三者として家庭に入り、家族それぞれの話を聞き、親には子ども自身のニーズをそれぞれ代わりに伝えて考える機会をつくり、子どもには「両親どちらかを選ばなければならないわけではなく、両方を好きでいていい」と伝え、両親の意向に左右されず自身を築けるよう意思決定を支えた。サマーキャンプやバカンス里親を利用し両親間の争いのないところで過ごす機会を積極的につくった。エデュケーターは「自身のために行動できる力(pouvoir d'agir)」という言葉を使うが、自身の想いを自覚し、言語化し、希望が何か認識し、表現し、行動に移すことの一連の流れを指す。結果、長女と長男が暴力のある父のもとを離れる行動をとり、次男が父に兄弟に会えるよう希望を伝えたり、親との心理的距離をおいて自身について考えるという変化が起きた。実際には子どもが希望さえすれば全寮制の学校や施設や里親の利用もできるが、提案しても希望する子どもは多くない。ただ、年間 16 週間あるバカンスについてはキャンプの利用など一定期間家庭を離れることを選択する子どもは多い。

エデュケーターは言う「子どもは外に頼ることができる大人ができたとき、初めて自分の家族と距離を置くことができる。家庭内に不安があるときに子どもの自尊心は十分形成されない。自尊心が十分形成されていないと、自分の感覚が正しいか自信を持つことができない。その結果、外の世界がおかしく、自分の知っている家庭が普通であると感じ、外の大人を信じないことがある」その中でエデュケーターは支援関係を築く技術者(technicien de la relation d'aide)となる。エデュケーターが特に注意するのは子どもの感情(émotion)であるという。子どもが自分がないがしろにされたと感じたり、ばかにされていると、恥ずかしい気持ちがあり安心して感情を誰かに伝えることができない。周りの大人がせかしたり、状況の変化が早くても子どもは話すことはできず、話す準備ができたと自分で思えたときに初めて話すことができる。大人はいつでも聞くことができる状況であることを見せ、注意深く子どもの様子を見ていることを示す。そのために心配があっても大人のその気持ちをもとに催促することなく子どもの言葉を聞いていた。「自分で抱えなくてもいいんだよ、表現していいよ(tu ne gardes pas pour toi, tu exprimes)」という伝え方をしている。家庭の外に一人「家庭内の子どもの権利を保障する役割の専門職」を置く方法をとっているということができる。

3) 多角的に家族を支える

次に複数の機関の専門職が多角的な視点から家族を支えたケースを紹介する。支援開始から現在までの期間がそこまで長くないことから記録を追うことが可能であり、関わ

る機関が多かったことからこの家庭を選んだ。

調査開始時点 2021 年 6 月、終了 2022 年 10 月。家族との面談や遊びの観察調査、担当者へのヒアリング調査、裁判所保管の資料と在宅教育支援機関のエデュケーターが作成した資料をもとにしている。

ジャスミンは 5 歳(図の中では J)、母親は 29 歳で海外出身のフランス生まれ、父親は 34 歳で海外出身のフランス生まれであるが、記録を追う限り誰も会ったことがない。

母親の背景としては、出身家庭において男性兄弟に決定権があった。子ども時代は叩かれ、閉じ込められていた。男ではなく女に生まれたためであるという。両親は弟にしか関心がなかった。21 歳のとき高齢男性と強制結婚させられるものの、夫と実家族からの暴力で脱走、警察に保護される。ジャスミンの父との間の子どもを家族の反対により 2 度中絶。のちジャスミンを家族に内緒で出産した。出産直後ジャスミンの父からの暴力が始まり、母親は暴力がある実家と暴力がある子の父の間を行き来した。

妊娠中に産科のソーシャルワーカーが望まない妊娠であることを「心配」として児童相談所と連携を始めており、誕生時に住居の提供という形で支援を開始した。その後、住宅ソーシャルワーカーが暴力に気付き母子の転居支援、その後も母が父に住居を知らせるため複数回転居している。そのような中ジャスミンが 1 歳のときに心配な連絡があり、母の同意による在宅教育支援 AED が開始したが、実際には訪問時に不在であるなど支援を実施することができなかった。裁判官命令により、司法的調査を専門とする機関のエデュケーターが半年間集中的な支援の提案をしたのち司法命令による在宅教育支援を提案し、司法命令による在宅教育支援 AEMO が開始している。

年齢	背景	契機と目的	中心となる専門職	支援内容
妊娠中	パートナーとの関係を家族に認められていない	望まない妊娠で家族に隠している →リスク管理	病院ソーシャルワーカー	児童相談所に協力要請
誕生時	父親は地下に住んでいた	住環境の確保	地区SW	住居提供、生活保護開始
0歳	住宅SWがDVを発見	DV→安全確保	住宅SW→地区SW	他の住居に母子を移動→母親が居場所を父親に知らせてしまい複数回転居
1歳	DV	心配な情報→3ヶ月間の調査と支援提供 安全確保、家庭内の物理的環境の整備	地区ソーシャルワーカー	DVの度に転居支援、片付け、母子施設受け入れと脱走、パリを離れることは拒否、子ども用ベッドの購入
1歳	母親が涙ながらに実家での暴力の話をするが、Jの教育について十分方法を話し合えない	在宅教育支援実施 Jへの刺激の必要性(理解力の低さ、遊びたい意欲に応える必要性)	在宅教育支援エデュケーター	訪問の度に留守で支援不可
2歳	在宅教育支援が実施不可能だったため	裁判で6ヶ月の司法的調査を決定 健康把握、保育、心理ケア、家事育児の日常的な支援、職業訓練	司法的調査専門エデュケーター	調査と支援の提案(3ヶ月間) 小児看護師の定期的な訪問、保育園入園手続き、心理ケア、転居先の確保、社会家庭専門員の派遣、心理医療センター開始、母親医療介助者コースに登録

(図：記録をもとに安發作成)

フランスにおいては妊娠初期面談が義務づけられ、健康面だけではなく心理面社会面でも問題がないか確認し必要に応じて支援をすることになっている。産科には必ず専属のソーシャルワーカーと心理士が配置されることになっており、このケースも病院のソーシャルワーカーがニーズを把握して妊娠中から支援を開始している。その後も数々の

試みが失敗しているが、必ず中心となるソーシャルワーカーが次の手立てを用意していることがわかる。調査が 1 歳と 2 歳のときにおこなわれているが、それも「支援の提案と調査」であるため、非常に多くの提案がその時期にされていることがわかる。

次の表は在宅教育支援の判決文からの引用である。

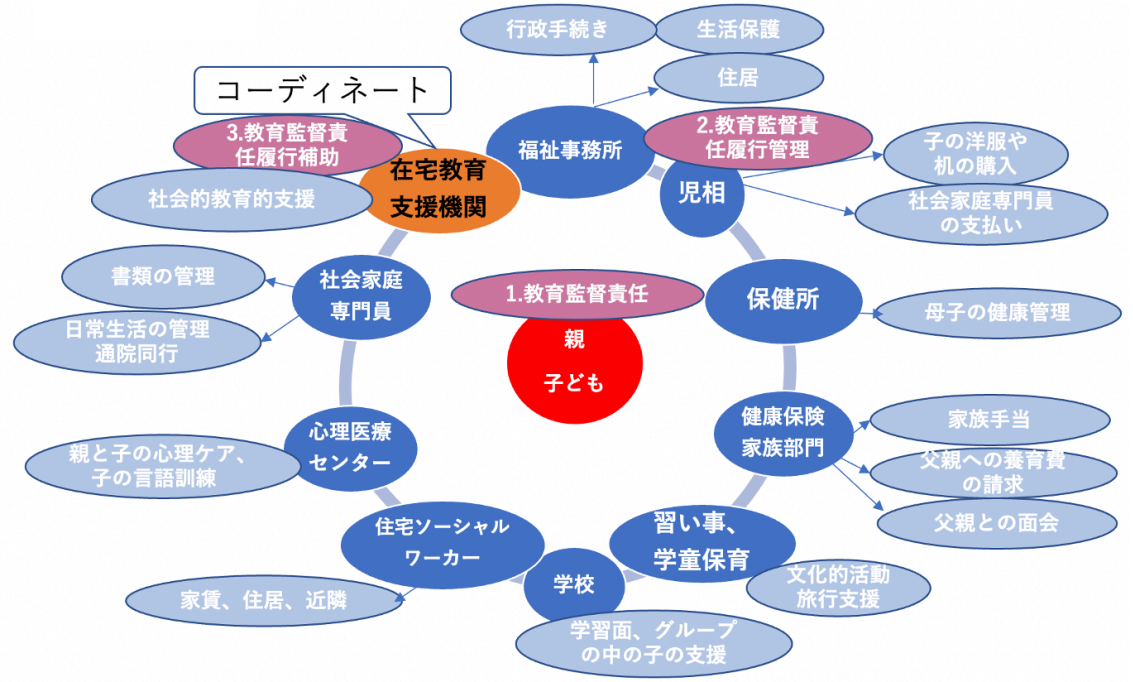
年齢	契機	判決文に記載された背景	判決文に記載された支援目的
3歳	裁判にて**在宅教育支援**決定	母親は支援が全て実現しないように動く。Jを別の個人として捉えることができていない。 言葉が遅い理由が耳が聴こえないことであるにも関わらず母親が手術の手続きを進めなかった。	1. 母子の関係性において第三者となる 2. 親をすることへの支援をおこなう 3. 父親とのやりとりを開始する 4. Jの通学が確実におこなわれるよう支える 5. 耳の手術を受けさせる
4歳	**在宅教育支援更新**	母親の健康が繊細でJに影響を及ぼしている。 母親は様々な機関に頻繁に支援を求める。 住居が確保されたものの手入れがされていない。 母親は何をするにつけても常に支えが必要。 母親は孤立し、内面に閉じがちなので、自己の世界に止まることの改善。 子どもを前に母親は心理的不在である。 母親は心理ケアに定期的に通うことができていない。鬱状態でも入院を受け入れない。 Jは母親の精神的な状況に敏感で、Jの気分を左右している。 母親に余裕がない影響でJ自身の精神的愛情的欲求は優先されていない。 Jは誰にでも親しみ、誰からのどんな提案も喜んで参加する。普段刺激を十分に受けていない。 Jは依然言葉に遅れがある。言語訓練士に通うことが実現できていない。 Jは父親について何度も尋ねるが母親は答えていない。 家庭の状況は繊細であり、母親がJに愛着があっても、母親は親としての役割を果たすにあたってサポートを受ける必要がある。母親の繊細な状況はJの成長と自身を築くことに直接的な影響を及ぼしている。	1. 週一回の在宅教育支援措置によって、 親子の心理医療センターへの継続的な受診と、 Jが外に開かれること(学童保育、学外での習い事への参加)を保障する。 2. Jの医療的なケアを保障する(言語訓練士、歯科、耳鼻科)

(図：記録をもとに安發作成)

在宅教育支援が始まると、専門職が家庭内に定期的に入るため、家庭をよく知るようになる中で課題の指摘が増えていることが伺える。裁判判決文においても心配な状況について詳細に表現されている。子どもの権利を保障するため裁判官が医療についても具体的な命令を出している。

4) エデュケーターと社会家庭専門員の役割 – 物理的にも家庭を支える

家庭には中心となるソーシャルワーカーがつき支援をコーディネートする。0 歳のときは福祉事務所のソーシャルワーカーSSP がコーディネートを担っていた。福祉事務所のソーシャルワーカーは転居の手続きと各種収入面の手続き(生活保護 RSA、乳幼児手当 PAJE、家庭支援手当 ASF)を担い、連携機関として若者向け職安 Mission locale、保健所、児童相談と協業していた。2 歳のときは司法的調査(MJIE)のエデュケーターがコーディネーターとなっている。連携先は福祉事務所ソーシャルワーカー(生活保護、家族手当 CAF、乳幼児手当 PAJE)、保健所、社会家庭専門員、3 歳で義務教育が始まるので学校のソーシャルワーカー、母と子どもそれぞれの心理ケアや言語治療をおこなう心理医療センター、職安があった。2021 年 6 月、ジャスミン 5 歳時のケアコーディネート内容は図の通りであった。



(図：調査をもとに安發作成)

さらに、これらの連携機関をジャスミンのある一週間について書き出した例が以下である。

月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
学校	学校	学校	学校	学校
心理医療センター 社会家庭専門員 3H	放課後クラス	社会家庭専門員 3H	心理医療センター エデュケーター	放課後クラス

(図：調査をもとに安發作成)

関係機関は以下のような役割分担となっていた。

毎週関わる機関：

在宅教育支援 AEMO：エデュケーターと幼児エデュケーターが合計週 1-2 回 2 時間の面会、CMP のお迎え(母が CMP に行く間)

社会家庭専門員 TISF：週 3 回 3 時間、買い物、食事作りおき、母子でできるアクティビティ、母の通院付き添い

心理医療センターCMP：母に心理カウンセリング週 1 回、ジャスミンに心理カウンセリング週 1 回と言語習得クラス週 1 回

放課後クラス：勉強補助、グループ内での行動の支援

継続支援しているが、必要に応じて関わる機関：

福祉事務所ソーシャルワーカーSPP：行政手続き。ソフトウェア上で手当の受給状況など確認している。
保健所 PMI 妊産婦幼児保護センター：母子の健康管理
公営住宅ソーシャルワーカー:母の具合が悪いとき救急車を呼びジャスミンを助ける。

さらに、社会家庭専門員の家庭内での役割をより詳細に見る。週 3 回、毎回 3 時間、学校のお迎えから食事作りまで、学校のない水曜午後のアクティビティ。日常生活の運営において親としての役割を実践することを支えることを目的とする。母親が 1 人で日常生活をオーガナイズするのが難しいので支えとなっていた。プレスクリプターである在宅教育支援エデュケーターによる支援開始当初の依頼文の要約である。

依頼項目	状況
行政手続きとさまざまなアポの同行	外に開くことが困難。約束を果たすことが難しい。行政手続きのサポートが必要。
母子間の距離	母子の間に距離をおくことが難しい。Jは学校で昼食を食べることも、放課後クラスに行くこともできていない。
備品管理	引越しをし、ベッド、冷蔵庫、電子レンジ、ガス代などの費用を負担し揃えた。しかし、家の中を整えることが難しく、家具も、ベッドリネンも、皿もないまま暮らしている。
Jの身だしなみの管理	身動きできないくらい洋服が小さかったり、下着が2枚しかなかったりする
食事と衛生管理、食事の作り置き	Jはサンドイッチを買って食べるだけの食生活で、歯と体重に問題がある。
Jの睡眠管理	睡眠リズムも十分にないので習慣づけが必要。

(図：調査をもとに安發作成)

2021 年 6 月調査時には週 3 回のサポートがないと栄養のある食事がとれない、親子で本を読んだり公園に遊びに行くなどの習慣もなく、子どもが母にフラストレーションをぶつけ母が泣く、母が子どもが離れていると心配なので学校で給食を食べさせたり学童保育に入れることを拒否する、母が調子が悪いと子どもに風邪薬を飲ませて子どもが病気であると主張し学校に行かせないなど心配な状況であった。社会家庭専門員は食事の作り置きだけでなく簡単に調理して食べられる方法を教えたり、クレープ作りなど親子でできるアクティビティを提案していた。子どもが描いた絵を母に見せ、母が反応しないので子どもが泣いて母の髪の毛を引き抜き、母が泣くようなシーンでは子どもに母への伝え方を教え、母が調子がいいときに見せられるように絵をとっておくファイルを作ってあげたりした。母が子どもに話しかけをほとんどしないので、一緒にいる間中話しかけをする、子どもの発音や言葉遣いを直すことも丁寧におこない、公園や図書館など地域の資源も利用し慣れるようにした。届いた書類も全てチェックし滞りがないか確認し、適宜一緒に行政機関に連絡をした。

一方、プレスクリプターである在宅教育支援のエデュケーターはエデュケーターが週 1 回、同じ機関のチームの一員である幼児エデュケーターが週 1 回ジャスミンと 1-2 時間一緒に過ごしていた。母が心理医療センターに行っている間にジャスミンを事務所に連れて帰り、一緒に遊びながら話を聞き、正しくない言葉の使い回しを直したり、安心できる大人としての役割を担っていた。ジャスミンが「お母さんが 1 人で出かけて道に

迷って狼に会ったらどうしよう」と言うので、狼は都会にはいないと話したり、実際道に迷って母親が長時間どこにいるかわからなかったことがあるのは事実だったので、学校にいると「今お母さんが道に迷っていたらどうしよう」と心配だという話を丁寧に聞き安心させた。また、日常生活においての考えや理解の整理を手伝っていた。ジャスミンは 2 週間のバカンスの間学童保育に行きたかったが母はとても心配で行かせる判断をすることができなかったので、ジャスミンはとてもがっかりしていた。そのことについて気持ちの整理ができたか聞き、「お母さんが安心なように一緒にいる」と言うジャスミンに対し「ジャスミンも大きくなって学童保育でいい時間を過ごせるとお母さんが思えるようにすぐになるから、このバカンスは私たちとお出かけしましょうね」と言っていた。ジャスミンは常に 4 つのプレイモービルを持っていて、1 つは自分、1 つは母、1 つはエデュケーターで 1 つは幼児エデュケーターだった。自分を取り巻く大人に家族のように 2 人の在宅教育支援機関の専門職が含まれていた。

2021 年 6 月にエデュケーターは「親に病気や障害がある場合など、子の成人まで支援が必要なケースもある」と話していたが、2022 年 1 月調査時には社会家庭専門員による支援は終了していた。理由としては、親子ともに自信がついて自分たちで自立してできるようになったことであると担当エデュケーターは言う。一家は広い公営住宅に移れることになり転居したところ、地元の公立小学校がたまたま少人数制の学校で 1 クラス 9 人学級でジャスミンはのびのびめきめきと成長をみせ自信が芽生えた。その結果母はジャスミンの様子に安心し、ジャスミンがかねてから希望していた給食や学童保育にも行かせるようになり、ジャスミンも母に気兼ねなく外での活動を満喫し成長できるようになった。2021 年 6 月時点では、ジャスミンは母を心配しすぎていて身動きがとれなくなっており、サマーキャンプに行きたかったのに行けなかったり、母が外出すると道に迷うことがあるため心配し、狼やヘビに食べられるなど想像と現実が混乱している状況があったが、成長しそのような話もなくなった。言葉の習得が追いついていないので筆者には当時ジャスミンが話していることを理解するのは難しかったが、問題なく話せるようになっていた。母との関係性においても、支援開始当初はジャスミンティーは母を「クソ」と呼び、つばを吐きかけたり、髪の毛を引き抜いたりしていて、母はなされるがまま泣いていたそうだが、フラストレーションを感じ怒ることはあっても、母に対し軽蔑的な態度はとらなくなっていた。2021 年 6 月に学校を出たジャスミンに「今日はどんな日だった？」と聞くと「今日はママ調子がいいよ」と返事をするのが印象に残ったが、2022 年 1 月時点ではジャスミンは成長し母想いではあっても母の心配が軽減し友達の話や学校での出来事を話すなど子どもとしての暮らしを満喫できるようになっていた。2021 年 6 月時点でジャスミンの歯はあまりに痛んでいてわずかしかなく、根元しかない歯もあったが、歯の治療が済んでいた。食生活の心配もなくなったそうである。ジャスミンの状態についてエデュケーターは「離陸した」と裁判官に報告している。

母の調子も改善し、社会家庭専門員と身につけた生活習慣を自ら実行できるようになった。サポートがないと母が親役割を能動的におこなわない(食事を用意する、子に関心を持つ、子どもと話す、電球をとりかえる、通院させる)といったエピソードはなくなり、原因不明の理由で突然倒れ救急車で運ばれ入院するようなことも起きなくなっていた。

そこで 6 月には在宅教育支援も終了し、ジャスミンは放課後に宿題を見たりアクティビティをする「日中入所(SAJE)」に移行することになった。家庭内に入る必要はもうないが、継続的に日々家庭とやりとりしながら成長を見守り、週末もアクティビティを提案できるためである。お別れにエデュケーターはジャスミンと母を遊園地に連れて行き、笑顔で「さようなら」を言い合った。

日中入所(SAJE)(2022 年 2 月に調査実施)

パリ市は近年特に力を入れているが、在宅支援の一つであり、月曜から金曜まで毎日子どもが学校帰りに通う。学校に行くことができない子どもが日中に個別支援を受けることもある。週末は SAJE のスタッフが家族と一日でかけたりする。児童保護予算の委託費で運営され、司法命令で利用することもある。

パリ 19 区の SAJE には子ども 35 人に対し専門職が 17 人いる。

専門職チームは以下のような構成である。

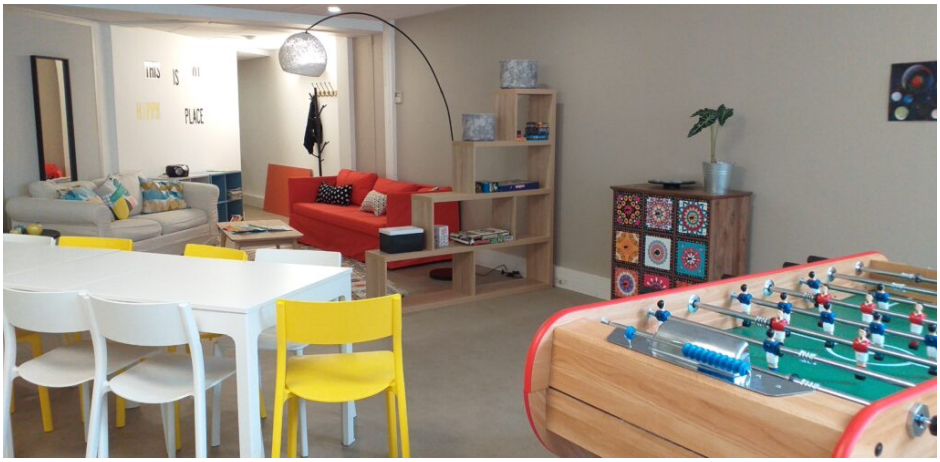
エデュケーター:親のサポートも担当

心理士:ストレスコントロール、自尊心、不安、感情を言葉にして伝えられる練習

スクールエデュケーター:勉強の遅れを取り戻す、学校で過ごしやすいように授業中の態度や授業中に立ち歩かないこと、他の生徒との討論の場への参加など練習する。

スポーツエデュケーター:食べ物の習慣、安全管理、リスクについての学び、スポーツ習慣を支援

他ソーシャルワーカー、アートセラピスト、エスノサイコロジスト(ethnopsychologist)



(写真:パリ市 SAJE ホームページより)

司法も利用しながら、福祉とケアのコーディネートだけでなく日常生活の物理的支え、そしてコミュニケーション教育も複数機関の専門職の多角的な視点から届けられていた。親自身が支援を求めたり手続きをしなくても、中心となるソーシャルワーカーがオーガナイズし届けている。伴走するケースワークという形をとっている。在宅教育支援という形で家庭内にソーシャルワーカーが入ることによってニーズが表面化し、一時多くの心配な要素が指摘され支援の内容も増える時期が観察された。しかし、多くの試みが失敗に終わっても、状況に合わせたものを探してきている。その時々の状況に合った「ちょうどいいバランスの模索」という表現がされていた。結果的に 3 年間で社会家庭専門員と在宅教育支援という家庭内の支援は必要がなくなり終了、学習や刺激といった子ども自身の成長を支える支援へと移行した。

5) 在宅教育支援の終了

2021 年 6 月に調査した 37 家族のうち 18 家族が 2022 年 10 月時点で支援を終了していた。危険な状態になり施設措置などになったケースは終了家庭の中にはおらず、心配な要素がなくなって終了というケースが最多であった。以下はその表である。終了の理由は子どもが成長し心配がなくなったというものが多い。軸となる支援機関が変更したものもある。子どもは 2 人をのぞき前向きな変化が記録されているが、親については前向きな変化が見られない家族も 7 件ある。

心配であった状況	支援期間	終了の理由	親の変化	子の変化	
学校での問題行動、両親間葛藤	1年2ヶ月	本人の意思で家庭を出て親戚宅へ	-	o	
施設から父宅措置、母との面会を拒否	2年	子の成長により心配がなくなった	-	o	
父が一人で育てられず度々里親に頼る	5年	里親支援機関のフォローに変更	-	o	変更
知的障害と性的問題行動	3年	自立支援型の寮に移動	o	-	変更
学習の遅れ、父の死亡	1年半	子が成長し心配がなくなったため	-	o	
施設から母宅に戻るものの友人宅を転々とする	9ヶ月	17歳の子が連絡に応じず支援ができないため	-	-	不可
両親間葛藤、父が学校に攻撃的	1年半	他県転居のため	-	o	変更
母による父方祖父性虐待訴え	2年	心配がなくなったため	o	o	
勉強の遅れ、母の精神疾患	3年	日中措置機関で継続支援するため	o	o	変更
両親間葛藤、引き裂かれる子どもたち	4年	子が成長し心配がなくなったため	o	o	
父の死	2年半	子が成長し心配がなくなったため	o	o	
措置された姉宅での成長を保障	4年	子が成人後の支援の継続を望まないため	-	o	成人
他県にいる子に父が定期的に会えることを保障	1年	父との関係維持が確保されたため	o	o	
兄弟ともに障害があり関係機関のコーディネート	4年	家族が自立したため	o	o	
施設から祖母宅に措置変更、成長を保障	3年	家族が自立したため	o	o	
里親から祖母宅に措置変更、学校での問題	3年	子のニーズが尊重されるようになったため	o	o	
両親間の葛藤	2年	障害日中入所先に頼れる人ができ終了	o	o	変更
教育虐待と父の逮捕	6ヶ月	子が成長し心配がなくなったため	o	o	

(図：調査により安發作成)

6) 在宅教育支援まとめ

家庭に入る「心配」という基準は市民法で規定され、可能な限り家族の構成員それぞれと話し合いながらそれぞれの望む生活に沿う支援の提案が試みられる。しかし、支援が有効ではなく心配が残る場合は子どもの権利を守るために司法が利用される。暴力が

あり逃げるために新しい住居に移る手続きをしてもまた相手に場所を知らせて暴力が起きたり、支援の多くは幾度もの軌道修正を必要としている。福祉サービスの 2/3 を民間機関が実施していることもあり、さまざまなサービスが無数に存在するので、複数試してその時々のニーズに合うものを見つけようとしている。

専門職たちは医師のように日々情報を更新し、科学的根拠に基づいて実務をすることが求められている。一方で、家庭に求める内容は一般よりも水準が高くなり、家庭にとっては福祉開始時に心配とされた要件が、福祉開始後に増えて当初の目的が達成されても他に目的が追加されるという事態が起きる。そのような中で、ケア開始時点で支援計画書に 6 項目書かれているのが、一年後の見直しのときに 10 項目に増えるようなことがあった。「たった 1 つのきっかけでこんなことになってしまった」と反発を覚える親がいるのも事実である。学校で虫歯の治療がされていないことが指摘され、在宅教育支援で通院同行するようになり、結果的に食生活改善と歯磨き習慣を一緒にするために週 3 回の社会家庭専門員が派遣されるようになり、家で宿題をする環境でないことがわかり学校帰りに日中入所で学習支援を受けるようになり、週末に家族で何も計画せず動画を見ていることがわかり毎週末日中入所の活動に参加するようになる、といった形で親が希望するよりも多くケアや専門職が家庭内に入ることがある。

在宅教育支援の契機としては子どもの教育や成長面の心配が主な入り口であり、警察や病院がきっかけである場合も、調査の結果子どもの様子に心配な点がある場合、その点が心配の根拠として重きが置かれ記述されていた。

支援の方法としては、第三者としてエデュケーターが入りそれぞれのニーズを理解し言語化し、叶えることを手伝うことが実践の中心的な関わりを成す。兄弟が両親の争いの中でより良い距離を模索する、ジャスミンが外に出て成長したい気持ちを母の状況も鑑み調整しながら支える、母の心配な気持ちに寄り添い娘の成長のため心配を手放すことを支えるといった実践である。「行動する力を支える(pouvoir d'agir)」という表現がされていた。エデュケーターたちは親に家庭の中で親として何ができるかについての問いかけをしていた。三兄弟の両親については、両親間の争いと、子どもたちの苦しみや葛藤について分けて理解できるよう促した。子どもに勉強を押し付ける親に対し、子どもの頭に勉強が入らないとしたら、それは精神的に余裕がないから、争いが家庭内にあるときは心理面愛情面の安全が確保されないので学習にエネルギーを投資することが難しくなること、余裕ができるために何ができるか、をということを話していた。争いから子どもを引き離し、子どもに子どもとして育つことができる安全な場所を確保し、再び生徒として生きられるようにする(rendre la place de l'enfant pour redevenir élève)という説明のしかたがされていた。子どもの置かれた状況がより良いものとなり、生きるのが楽になること。その子どもの状況についての想像を親と一緒にできるようにしていた。子どもとも一緒に、今起きていることを言葉にし、状況を変えるためにできることを考える。子ども自身が武器を身につける(apprendre à l'enfant à s'armer par lui-

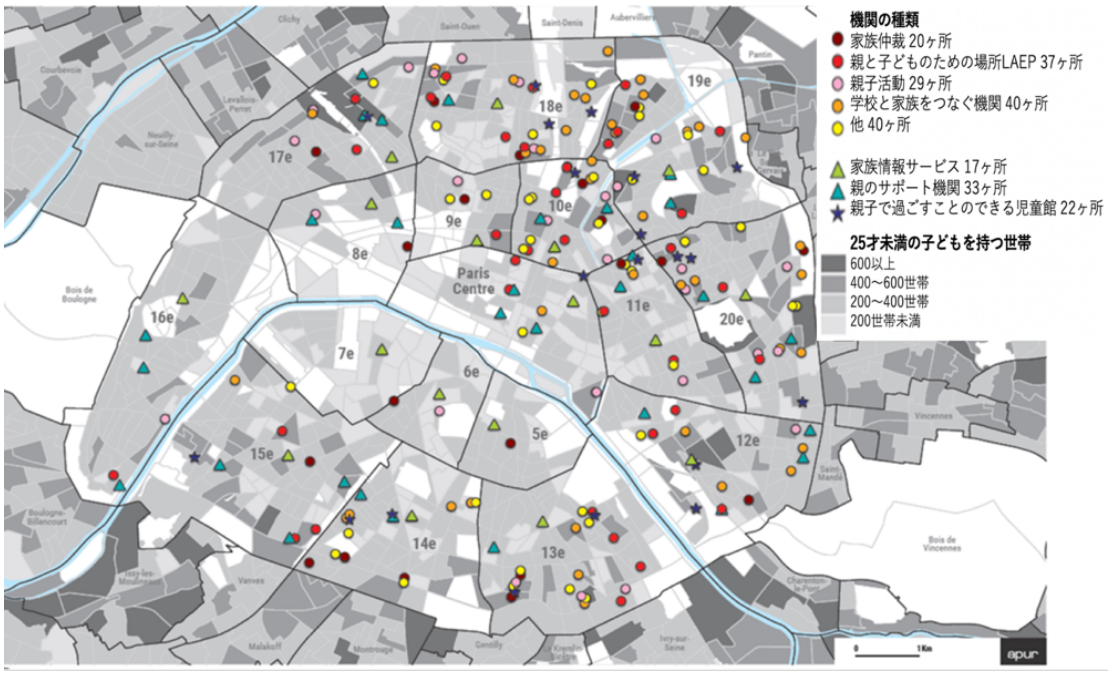
même)という表現がされていた。

エデュケーターがよく使う言葉として Bienveillance というものがある。親をはじめ子どもをとりまく全ての大人に求められている姿勢である。それは自分にとっての良いものを押し付けるのではなく、相手が自身にとって良いと思うものを得られることを願う気持ちである。そして、日本語で「子どもの最善の利益」と訳されているものはフランス語では L'intérêt supérieur de l'enfant と言うのだが、Behloul と Brauckmann は以下のように説明している。「子どもの関心が最上位というのは、誰もが、子どもの話を聞き、子どもの話を理解し、子どもが自身にとって何が一番関心があるか表現できなかった理由を理解しなければならない、という意味である」(Behloul, Brauckmann 2017)。なので、大人が子どもにとっての最善の利益を想像し決めるのではなく、あくまでも、子どもが考え自身にとって関心が何であるか表現できることを価値としている。

5. 理念的背景 - 「親をすることへの支援」

理念的背景として「親をすることへの支援(soutien à la parentalité)」という概念がある。保健省は「親をすることへの支援デスク」を置き、『親をすることへの支援国家戦略』を出している。その書類の中には「子どもをケアするために親を支えるのは国の役割である」と書いてあり、さらに「親を支えることで子どもの不登校、精神的な問題、行動障害、注意力不足、暴力、リスクを伴う性行動を防げることが実証されている」とある。そのサブタイトルは「親を描いてみて」である。戦略執筆担当者へのヒアリング調査(2022 年 2 月実施)によると「親はそれぞれが描くもの、『星の王子様』の羊の絵ように、人によって望む姿はそれぞれであるため、一緒に描いていこうというメッセージ」なのだそうだ。保健省の社会問題観察機関 IGAS の『親をすることへの支援についての政策評価報告書』によると、親をすることへの支援は、親権者が子どもの最善の関心のために複数の機能、権利と義務(精神面、物理面、司法面、教育面、文化面)を実践することを支えることを指す。その支援は家族と子どもが暮らす社会的教育的環境の中でおこなわれることも重視されている。報告書によると「親をすることの支援を受けた親は、受けていない親より子どもの学校での状況が改善し欠席日数が減り、学業も改善するので、落第の割合が減り国の教育費のコスト削減につながる。子どもの親離れと自立がうまくいきやすく、親との関係が良好になる。よって、親も社会からの孤立を防ぐことができる。子どもの将来の社会的経済的環境が良好である」としている(IGAS 2013)。

以下の図はパリ市の「親をすることへの支援を担う機関とサービス」についての図である。これらの多くは健康保険の家族部門である家族手当基金 CAF が財源である。



(図: OPPE 2021 p.9 をもとに安發翻訳)

地図上で見ると、親をすることの支援機関は北東に集中していることがわかる。その地域は片親家庭、人数の多い家庭、公営住宅に住んでいる家庭、外国出身が多いといった特性がある。それらの家庭にとってアクセスのいい場所に数多くの親をすることの支援機関が存在することがわかる。それは、ニーズのあるところで民間機関が活動を開始し、それに後付けで公的財源がつくというボトムアップの構図を示している。一方で、西の地域はニーズがないわけではないのに利用できる機関が非常に少ない。

「親をすることへの支援」専門機関には学習サポート機関(CLAS)、親の話を聞き、支え、サポートするネットワーク(REAAP)、子どもを遊ばせながら親が心理士や小児精神科医に相談できる場所(LAEP)、家族仲裁(mediation familiale)や別に住む親と再会する場所(Espaces de rencontres)などがある。いずれも問題がなくても利用できるものであり、民間機関が家族手当基金の財源で実施している。公的機関の実施するサービスに並行して必要に応じ利用できるものである。公的機関である学校や福祉事務所や保健所が家庭を支える柱となりサービスをコーディネートし、専門性のある民間機関がサービスを提供するという関係性である。

今回の調査対象である在宅教育支援はより支援のニーズが高い家庭についてコーディィネーターであるエデュケーターが実際に出入りし定期的に家族とやり取りする中でより臨機応変なコーディィネートをおこなう。例えば、週末の過ごし方や 6 週間ごとにくる 2 週間のバカンス、夏の 2 ヶ月のバカンスも、家族それぞれが気持ちよく過ごせるように活動内容をオーガナイズする。権利が保障されるように全ての子どもにバカンスの計画があるか確認しなければならない。地域の民間機関の中には家族全員キャンプに連れて行ってくれるところなどがあり活用される。また、在宅教育支援は本人が希望すれ

ば 21 歳まで利用できるが基本的には 18 歳未満が対象である。けれど実際には、23 歳の兄に犯罪傾向があり親はその兄に手を焼いていて下の兄弟にその影響が及んでいるといった事態もままある。そういったときにも、在宅教育支援エデュケーターは地域の親をすることへの支援機関や犯罪傾向のある若者を支援する機関と手を組みながら家庭を支える。

専門職がよく口にするのは、「子育ては世界で一番難しい仕事」「完璧な親はいないし誰だって間違えることもある」という言葉である。「子どもをよりよくケアできるよう親をケアする」「複数で子どもを育てる」という考え方が専門職の間で共有されている。

社会学者ヴァンサン・ドゥ＝ゴージュラック(Vincent de Gaulejac)[2]はソーシャルワークの意味を「子どもが家に帰ったら昨日よりも気持ちよく家族との時間を過ごせること」「子どもが親の世代よりも社会の中で生きやすく、認められていると感じて生きられるようにすること」「個人がそれぞれの歴史の中で自分らしい開花を実現するのを支えること」だと言う。子どもにとって、親が支えられ、より自分らしく生き、ソーシャルワークによる家族環境の改善を感じて育つ。ソーシャルワークによる良い経験をして子どもが育つと、子どもが将来親になったときも、より支援を受けながら望む子育てを実現することが円滑になるといった意味合いもある。在宅支援に関わるソーシャルワーカーは「目の前の問題はすぐには解決しないかもしれない。けれど、子どもが親になったとき、親がしたいことを実現している姿を見て育ったことが大事になってくる、次の世代の子育ても常に念頭におく」と話していた。

フランスの子育て支援の特徴は「自らが望む親に近づけるサポート」「親自身の課題意識の高い方から取り組む」「家事育児も含め一緒にする」といったアプローチであり、「親教育」「親役割の習得」よりも包括的な支援を目指している。専門職が子どもの権利を守る役割を担い、その方法としては家族福祉法に定められているように「ソーシャルワークの実践はプロフェッショナルとサポートを受ける人との関係の中で築かれる」ということが特徴である(CASF D.142-1-1)。

親をすることへの支援を受けることで、親がより良い子育て経験をすることができる、子どもが親の子育てについて良い思い出を持って大人になれる、ということが大事であるとされている。子育てと支援についての価値が先々にまでいい影響となることを目指している。当初心配であったことに必ずしもこだわらずに家族のニーズに応えるのはそのためである。エデュケーターは「親の抱える悩みを 1 つ 1 つ一緒に解決していくことで、親がしたいと望んでいた子育てができるようにする」と説明する。きっかけは子どもの福祉であっても、実際には経済的な問題、夫婦関係、祖父母との葛藤、健康問題、家の修繕など本人の気がかりなことの解決を手伝うところから着手する。そして親自身

[2] Vincent de Gaulejac, « Accompagner sans s'épuiser », Val-de-Marne, 2022 年 4 月 15 日.

が子どもに与えられるものを引き出し、親としてできることを最大限実現できるようにする。

6. まとめと日本の福祉の発展のために

問題がなくても利用できる在宅支援は国家資格の社会家庭専門員が家庭内に毎週決められた時間通い「家庭支援、家事支援、ソーシャルワーク」を実施し、プレスクリプターである福祉事務所のソーシャルワーカーなどと継続的に連携しながら家庭を支えていた。子どもの 3-5%が 5 歳までに利用していた。子どもについては「心配」が基準となっており、全ての人に連絡義務があり、県の専門部署が支援の提案と調査を実施していた。要支援と判断されても、子どもが希望し危険がない限りは在宅での支援を優先し、国家資格のエデュケーターが専門機関から家庭に通い、ケアのコーディネートを担っていた。

フランスの子育て福祉の特徴は以下のようなものであろう。第一に、法律で細かく規定し、国の指針でさらに具体的に「どのような根拠で、どのような価値・理念を土台と定め、何を目的として、誰が実践するのか」と定めている。「親の意向」と「子どもの福祉を受ける権利」との間の調整に必要な価値や理念の土台となっている。第二に、司法が福祉と子どもの権利を守るために利用されている。第三に、専門職を妊婦と子どもが関わる機関に配置し、ケアと福祉と教育が行き届くことを保障する役割を担わせている。全員を対象にすることによって予防を可能にしている。アプローチとしては、親については「親をすることは簡単なことではない」という前提のうえで専門職に支えてもらいながら育てることが普通であるという制度にしており、子どもについては「心配」を基準として親に支援を提案できるようにしている。第四に、ソーシャルワーカーにとっても手続きや判断を必要とせず利用できるサービスが重層的に存在し、ソーシャルワーカーはかかりつけ医のように、相手の訴える全ての症状を複合的に判断し必要に応じて専門機関と協業しながら支援体制を構築するコーディネートの役割を果たす。家族全員を同時に支え、包括的な支援をおこなう。第五に、ソーシャルワーカーはさまざまなサービスを「プレスクリプトする」。処方、つまり、医師が薬を出したのち経過観察し適宜状況に合わ調整していくように、その効果まで確認しながらその過程を共に経験する。第六に、親の子育て経験を前向きなものにするというアプローチは次の世代の子育ても念頭においたものであり、再生産としての家族機能の強化が図られている。

日本においても、家事育児支援を一部公的負担で利用できる制度が拡充されつつあるが、例えば心配のない家族も利用できる在宅支援サービスの場合、家族が自分で業者を選び、派遣された人とうまくいかずサービスの利用を停止しても、公的機関にその情報は共有されないこと、家庭内に入った人がソーシャルワークをおこなわないという点が相違点である。日本の現場ワーカーへのヒアリングの結果、日本の在宅支援はメニューが豊富でフランスと同じようなサービスが存在するにもかかわらず、以下のような課題

が指摘された。

- ニーズに対するキャパシティの少なさ。
- 専門職がニーズを把握しても、会議にかけ、必要性の根拠を提示し、承認されないとサービス利用に至らない。深刻な問題がない限り優先度が低いと判断される。担当の交渉力、工夫に左右される。
- 事業者側も人手不足やケースの内容を理由に断ることがある。すぐに手一杯で新規受付を中止することがある。

結果、サービス利用のハードルが高く、予防的に使うことができない。申請主義であることで、ニーズを自覚していない人、主張する力が弱い人、子どもがこぼれる可能性がある。結果として、子どものケアと福祉を受ける権利を保障する制度としては弱点がある。

子どもは自分の権利を自分で守ることはできないので、誰がそれを保障するのか明確に役割分担し、福祉があることにとどまらず行き届いていることを確実にすることが日本の福祉の発展につながるのではないだろうか。

続きの研究として、実際に家庭内でどのような専門職の実践があるのか明らかにしていきたい。

安發明子
Akikoawa.paris@gmail.com

引用文献

Behloul Salim, Brauckmann Beatrice, 2017, L'intérêt de l'enfant, L'Harmattan.
Bonamy Bernadette, 2007, Technicien de l'intervention sociale et familiale, Eres.
DREES, 2020, L' aide et l' action sociales en France -Perte d'autonomie, handicap, protection de l'enfance et insertion Edition 2020。
IGAS, 2013, Evaluation de la politique de soutien à la parentalité.
IGAS, 2018, Evaluation de la politique de prévention en protection de l'enfance.
ONED, 2013, L'action educative en milieu ouvert.
OPPE, 2021, Schéma Parisien de prévention et de protection de l'enfance 2021-2025.
ONPE, 2020, Les chiffres clés en protection de l'enfance.
健康保健省, 2018, Stratégie nationale de soutien à la parentalité.
安發明子, 2020,「ソーシャルワーカーはかかりつけ医」, 対人援助学マガジン、第 42 号
労働政策研究・研修機構, 2020,「国別労働トピック フランス移民と出生率の高さの関係について」

資料. 在宅教育支援の子ども向け説明冊子

在宅教育支援は子どもにどのように説明されるのだろうか。こちらは支援が開始する際に 2 歳以降の子どもに読んで聞かせる、大きい子どもとも一緒に読み、渡す冊子である。子どもにとって話せる第三者としてエデュケーターがいることを伝えている。

冊子を作成した機関に許可を得て日本語訳、掲載している。複製や配布は認められていない。





なぜきみが私たちに会うことになったか伝えるために
この冊子をおとぎ話風に作りました



Texte écrit par les professionnels du SAEMO Paris :
Paloma Courbis, Nathalie Dhorne, Catherine Laborie,
Corinne Picheran, Benoît Schmitz.
Réalisation dans le cadre du CACQ
(Comité d'Amélioration Continue de la Qualité)
Illustrations & mise en page Marc Lizano
©Association Olga Spitzer - AEMO 2020

2

子どものときは、いろんなことを疑問に思うよね



3

この世界はあまりに大きくて、あまりにひろくて..
まずは、宇宙がある。
宇宙の中にとてつもなく大きいギャラクシーがあって、その中に地球があって、大陸があって、国があって、町があって村があるね。



そして、この町や村の中に家族がいるね。

4



どんな男性も、女性も、みんな家族の一員。
どの家族が似ているようで、みんなそれぞれ違う。

１つの家族は１つの世界みたい、家族の歴史があって、メンバーそれぞれの歴史があって、家族の言葉と文化とルールがある。
でも家族は他の人たちなしで生きることはできない。
他の人たちって誰？



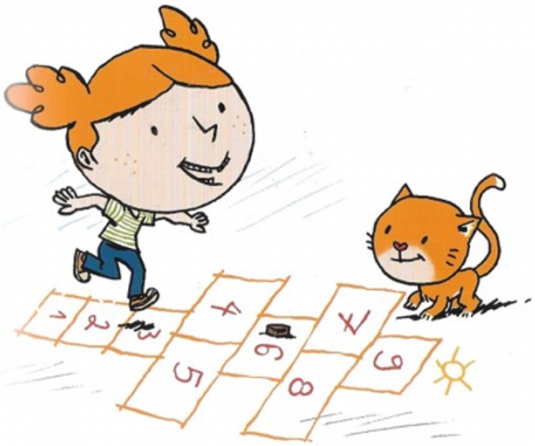


それは、他の家族。他の歴史があって、他の言葉や文化やルールを持つ家族。
いろんな家族があって社会を作っている。

気持ちよく生きるために、家族はこの社会の中で、食べて、ケアを受けて、学んで、笑って、歌って、成長して、広い世界を知る必要がある。
家族の中と外を行き来することができるおかげで、他の人たちと交流したり、想像したり、発明したり、比べたり、笑ったり、泣いたり、踊ったり、走ったり、教えてもらったりできる。
特に、たくさん遊ぶことができるよね。



それはとっても楽しいこと。
こういうことが全部うまくいくときは、愛がたくさんあって、みんなで守っているルールがあるとき。

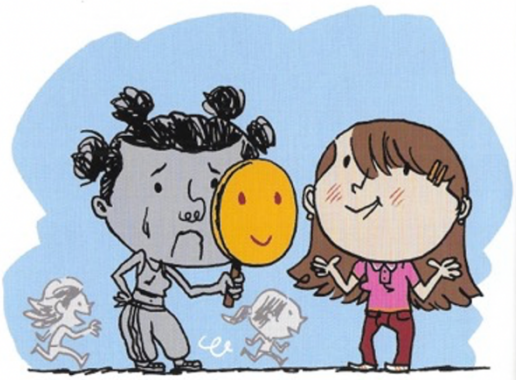


子どものときはそういうこと全部知っているよね。


6x7=42
7x7=49
うまくいく日は、なんでも思い通りで、気持ちいいね。家を出て学校に行って、活動をしたりして、おうちに帰る。
10
何もかもうまくいってる。
11


でもうまくいかない日もあるよね。
何か悩みがあったり、迷っていたり、こんがらがっていたり。
12
13

全然ダメな日もあるよね。
自分が笑っているのにほんとは泣きたい気持ちだったり。
黙っているのにほんとは叫びたい気持ちだったり。
うまくいっているように振る舞えなかったり。
自分だけみんなと違うように思えたり。
そして一人ぼっちに感じたりする。



そういうときは家と学校、おうちと外の行き来に
落とし穴があるように感じたり、
遠く難しいものに感じる。

14

そういうとき、泣いたり、わかってもらえないように
感じたり、全部忘れたり、怒ったり、
誰かとケンカしたりする。
そういうときは波のようにやってきて、また波のよう
に消える。

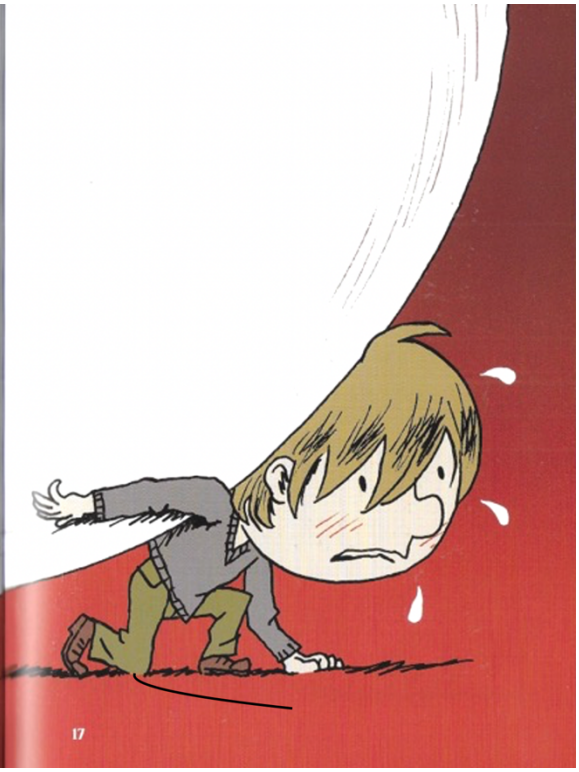


そういうとき学校は特に難しくなるよね。
こんなことが頭の中につまっているのにどうやったら
集中なんてできるんだろう。

15

背中に抱えきれないくらい重いものをかついでいるような
気持ち。
あまりに大きな荷物があるせいで、笑えないし、踊ったり
走ったり、勉強したり、遊ぶことさえできないね。
こんなの全然楽しくない。

16



17

この荷物は、大きければ大きいほど怖い気持ちになるもの。
怖いから荷物は開けたくない。
考えないようにしていて、荷物の中身が何だったかさえ
わからなくなる。
この荷物開けたらどうなる？
きっと今より大変なことになるんじゃない..



18



子どものとき、怖い気持ちだと、こんなに大きい荷物を
開けるのは難しく感じるもの。
そして荷物が大きくなるにつれ、自分が小さくて、一人
ぼっちに感じる。

19

こんなにも大きくて重い荷物を一人で背負うのは
子どもには大変すぎる。
だけどおうちのひとも、きみのことが大好きだっ
たとしても、手伝うことができないときもあるよ。



だから助けてもらう必要がある、何人もいたら
もっと強いからね。
でも助けてもらうのも簡単じゃないよね。



荷物の中にはすごく心が痛くなるもの、悲しいもの、
心配なこと、怖いことが入っていることがあって、
中にはおうちの大人にとって怖いことも入っている
こともあるよね。

21


怖いことについて全部話すのは簡単なことじゃない
大人を辛い気持ちにさせるようなこともあったりする
22
けれど変えていかなければならないこともある
変えることは簡単なことじゃないんだ
変えることは怖いことだから、荷物が重くても、
何日もガマンすることもある
荷物を開けようとすることは、これまで知らなかった人、
エデュケーターに会うこと。
家族の外の人に話すこと信頼することは簡単じゃないね、
エデュケーターはきみを助けるためにいて、専門家だった
としても。
全部時間がかかることだよ。
24
25

ときには痛い気持ちになることも話さないといけない。
どこかに追いやって忘れたと思っていたような、
荷物の底にあったようなことも。
楽しい話、きみが幸せな気持ちになったことについても
話すよ。悲しいときは楽しい話を忘れていたりするからね。
言葉が不思議なのは、言葉ですごく辛い気持ちにも、
すごくいい気持ちにもなることだね。



26

そして同じことについてもいろんな言い方があるし、
いろんな理解のし方がある。
遊ぶこと、歩くこと、絵を描くこと、踊ること、出かける
ことや新しい体験をすることも何かを言う方法だよ。



だからエデュケーターは、きみと、家族と、きみの大事な人
と一緒に、どうやって大きな荷物を開けるのがいいか探すよ。
いろんなものが出てくるね、荷物を開けていくときにはたく
さん一緒に話して、たくさん一緒に過ごすことが大事だよ。





そうしたら、荷物が軽くなる方法が見つかるかもしれない。

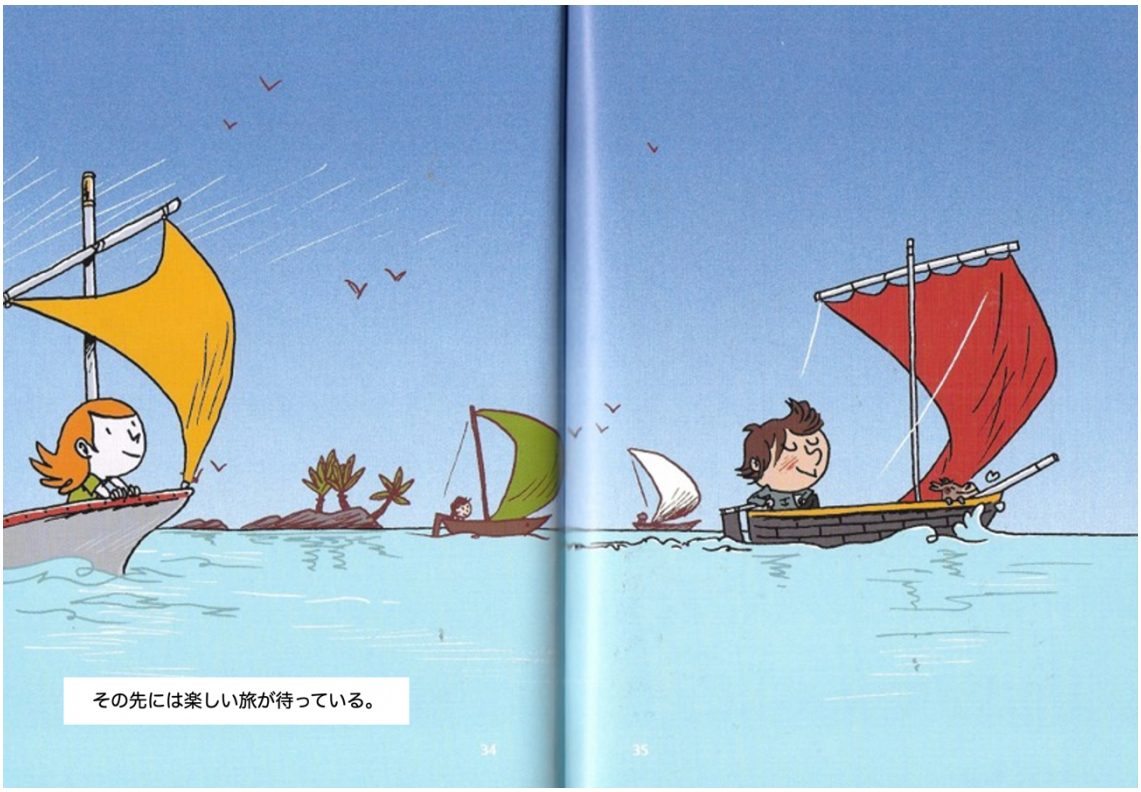
29

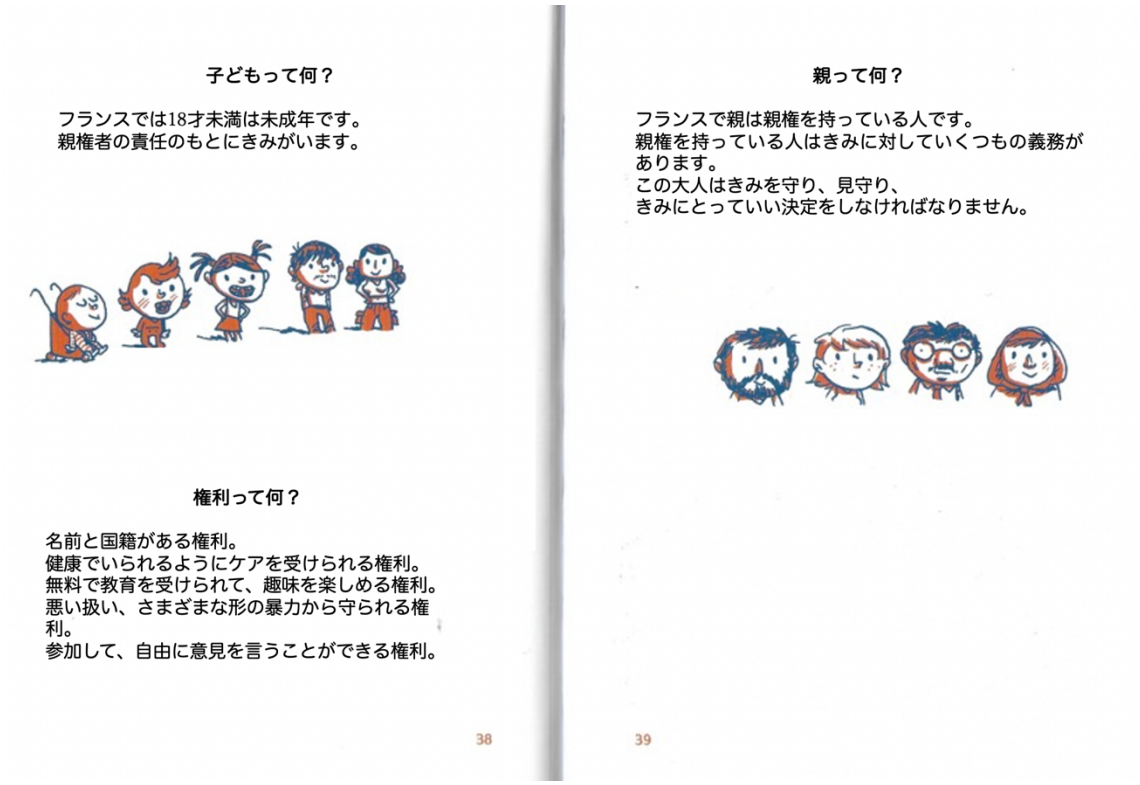

30

たくさん言葉を見つけて、たくさん一緒に過ごしたり
いろんな出会いをして、いろんな人と分かち合って、
荷物が軽くなる方法を一緒に考えて見つけ出した。
歩くのはもっと楽ちんになるよ。
31


生きていると落とし穴があることもあるけれど、
笑ったり、泣いたり、歌ったり、
たくさん成長して広い世界を知ることができる。
32


きみは荷物の中に何があるか知って、
これから持って歩く荷物に美しいもの、夢、いろんな物語をつめて出かける。
怖がらないで大丈夫。
助けてもらいながら開けてみることができるよ。
みんな荷物を持っていて、それは自分の一部。
誰とも違う自分だけの荷物。


その先には楽しい旅が待っている。
34
35


子どもって何？
フランスでは18才未満は未成年です。
親権者の責任のもとにきみがいます。
権利って何？
名前と国籍がある権利。
健康でいられるようにケアを受けられる権利。
無料で教育を受けられて、趣味を楽しめる権利。
悪い扱い、さまざまな形の暴力から守られる権利。
参加して、自由に意見を言うことができる権利。
38
親って何？
フランスで親は親権を持っている人です。
親権を持っている人はきみに対していくつもの義務があります。
この大人はきみを守り、見守り、
きみにとっていい決定をしなければなりません。
39

うまくいかないときはどうする？

親も子どもも権利と義務がお互いに対してあります。
時によっては、家族には難しいことがあって、
助けたいのにお互いを助けることができないことがあります。



うまくいかないときは、外からわかるものです。
だから、きみの近くにいる大人や、親や、先生やお医者さんが何がうまくいっていないか理解しようとします。

本当にうまくいかないときは、きみの近くにいる大人はきみを守り、助けるための解決法を探す責任があります。
子ども専門裁判官がいるのはそのためです。

子ども専門裁判官って何？

社会の中で生きていくには、それぞれが法律というルールを守る必要があります。裁判官はこの法律が守られるために判断をします。



子どもを守るための法律があります。
法律が守られていないとき、子どもが危険な状況にあると判断され、子ども専門裁判官が子どもを守るための決定をします。

子ども専門裁判官はきみを一人で呼んだり、家族も一緒に呼んだりするね、これを裁判と言います。裁判官はみんなの話を聞いてから決めます。判決というものです。
決められたことに賛成でなかったとしても、皆がこの判決を守る義務があります。

在宅教育支援って何？

子ども専門裁判官が在宅教育支援の命令をすることがあります。
子どもの専門家が子どもと親と話をして、お互いのことをよく知り、家族が困っていることについて話し合うためです。
在宅教育支援機関か、きみのおうちで話すこともあるし、
一緒に何か活動することもあります。
きみがよりよく成長できるための解決法を一緒に探します。

きみにとって一番いいことが何か考えるために、おうちのひとにも相談しながら、きみのことを知っている他の専門家や大人にも会いに行きます。



多くの場合、在宅教育支援は一年間続きます。一年の終わりにエデュケーターは子ども専門裁判官にきみと家族にとってどんなことが起きたか報告書を書きます。報告書の最後には、きみにとって何が一番いいと思うかという提案を書きます。
在宅教育支援が続くこともあるし、終わることも、他の計画を考えることもあります。次の裁判のときにまた皆で集まります。裁判官はきみの意見を聞きます。裁判官はみんなの意見を聞いたあとに一番的確と思われる決定をします。



新潟水俣病を学び、考えたこと



退院支援研究会　本間　毅

【はじめに】

熊本ではじめて水俣病が公表された 1956（昭和 31）年の翌年に私は生まれた。そして私が小学校へ入学した 1964（昭和 39）年の 6 月 16 日、東京オリンピックと国体に沸き立つ新潟を M7.5 の新潟地震が襲った。翌 1965（昭和 40）年 6 月 12 日、新潟水俣病の発生が公式に発表[3]され、「阿賀野川下流域で水俣病 7 名発生、1 名死亡（実際は 2 名死亡）」という見出しが全国版の新聞に載った。本来、無関係な新潟地震と水俣病はひとつの物語となり、「地震で新潟港の埠頭倉庫が壊れ、流出した農薬で汚染された比重の重い海水は楔のように阿賀野川を遡上して新潟水俣病を引き起こした」という横浜国大北川教授の珍説[4]が生まれ、通産省もこれを支持した。

私の子供時代、新潟市では日本一の大河「信濃川」でさえ、流れに浮かぶ黄色い泡沫は異臭を放ちながら久しくとどまっていた。「米どころ・酒どころ」新潟は、明治以降の本格的な排水機場建設と土地改良工事以前は広大な湿地帯[5]だった。また、国内屈指の産出量を誇った石油と天然ガスを利用するため、住宅地や繁華街へ食い込むように大小の化学工場が点在していた。とりわけ文教地区の関屋～白山浦間にあった「硫酸工場」は、路線バスの乗客が息をこらえるほどの悪臭[6]を放っていた。暖房と風呂焚きには薪や化石燃料が多用され、長岡のような豪雪地帯では、スパイク・タイヤとチェーンによりアスファルトは黒い粉雪のように舞い上がり、雪解けになると道路に轍[7]ができた。新潟水俣病が公表された 1965（昭和 40）年～「第 3 水俣病」が問沙汰され[8]高度成長が終焉した 1973（昭和 48）年頃の新潟の環境汚染は、私のような子供から見ても明白であった。

私の実家は、JR 新潟駅や新潟港に程近い「沼垂（ぬったり）」にあった。沼垂は日本書紀にも「渟足柵（ぬたりのき）」と記された地域で、船縁に似た片持ち梁で屋根を支えて雪を避ける「せがい造り」の町屋が軒を並べる繁華街[9]であった。沼垂はその後、新潟でも最初期にシャッター通りに、現在は月極駐車場通りになった。近くを流れる「栗ノ木川」は、雨が降ると信濃川の逆流が起こる、新潟駅の南東エリアの水はけを良くするため明治時代に掘られた人工の川で、輸入建築資材の置き場でもあった。当然、汚濁水である。実家にいた私の従兄弟達が、若くして脳卒中や癌で他界したのは、飲用にしたり魚を食べたりしてはいないが、上水道と井戸を併用していたことを考えると当時の栗の木川と関連があるような気がする。行政には町おこしより住民検診に力

を入れて欲しい。

一方、新潟水俣病の舞台になった阿賀野川は、会津・只見からの大量の雪解け水や梅雨明けの大雨が作り出す[10]、「三寸流れれば水きよし」と称される清流であった。小学生の頃、阿賀野川上流域で行われた林間教室に参加した私は、教師に「このあたりの川はキレイだからそのまま飲用になる。本間君も飲んでごらん」と言われ喉を潤した憶えがある。この清流に、想像をはるかに超える量の有害物質（メチル水銀）を除去せず、これでもかと長期間にわたり流し続けた結果、新潟水俣病は発生した。そして熊本と新潟の水俣病は、産業革命以降に発生した、「地球規模の環境破壊」という氷山の一角にすぎず、この氷山の上で我々はこれからも生活を続けてゆく運命にある。

【高度成長】

この章は、宇沢弘文氏と同じケインズ経済学者である吉川洋氏の名著、『高度成長日本を変えた六〇〇〇日』[11]から多くを引用した。吉川洋氏には御礼を申し上げます。

敗戦の翌年にあたる 1946（昭和 21）年、我が国の GNP 国民総生産は、戦前のピーク 1938(昭和 13)年の 2 分の 1 まで低下した。原材料、働く人と場所、道具や機材が圧倒的に不足し、何かを生産しようにもできなかった時代である。「二度と戦争を起こしてはならない、起きたとしても何とか自力更生を続ける力を蓄えなければ」という危機感と復興意欲は国民に深く浸透した。しかし新憲法の交付、農地改革、財閥と家制度解体などは、将来にわたる食量自給率の向上とは別の方向に国を向かわせた。終戦前後の物の絶対的欠乏と、激しいインフレに続く近隣国の戦争は、特需を生むだけでなく戦争を放棄した日本の極東地域での軍事的な役割を変え、重工業への需要を大幅に増やした。どん底からの復興需要が落ち着けば、余程のイノベーションが行われない限り経済の成長率は低下するだろう、という予測に基づき、1956（昭和 31）年の『経済白書』は、「もはや戦後ではない」と謳った。だが地方から都市への働き盛り人口の移動は止まらず、現金収入があるサラリーマンは増加の一途を辿った。豊かに見えるアメリカ的生活への憧憬もあり、女性はモンペをスカートにはきかえ、人々は合成樹脂製品や蛍光灯等の身近な小物から生活を刷新した。実家に一台あればすむ耐久消費財、とりわけ「三種の神器（洗濯機・冷蔵庫・テレビ)」は世帯数だけ購入され、「３C（カー・クーラー・カラーテレビ)」への需要は増加し、原材料の生産とインフラの整備は急ピッチで進んだ。「経済のことは池田にお任せ下さい」と言った池田勇人通産大臣は、「所得倍増計画」や「月給 2 倍論」を唱え、閣議で「水俣病の原因を一企業に求めるのは早計である」と渡邉厚生大臣を叱責した。国民の生命や健康より重化学工業の発展を重視した高度経済成長整策は、1950 年代半ばから 1970 年代初頭までの「六〇〇〇日」間、我が国に平均 10%の経済成長をもたらし続けた。そしてこの期間に、日本人の平均寿命は男性 12 歳、女性で 14 歳延伸したが、同時に公害による健康被害も増加した。最も基本的な医学的対策である疫学調査[12]を怠りながら時を過ごした経験は、黙っていれば福島第一原発事故の処理水の海洋放出計画などに受け継がれかね

ない。水俣病の経験から、有害物質の海洋や河川への放出は、生態系の作用によっては希釈より蓄積や濃縮を引き起こしかねないと我々は学んだはずである。現実描写を怠り、利益追求を推し進めた「高度経済成長政策」と、それを錦旗のように振りかざした企業の姿勢には問題がある。そして国や企業が加害の責任を認めようとしなかったのは、これまでの裁判や行政不服審査請求の記録を見れば明らかである。さらに「水俣病被害者や支援者の苦悩と努力を知らなかった」と言いながら、経済の成長によってもたらされた恩恵の思い出にひたり、自らの無謬性を確信し問題を看過してしまった私を含む多くの国民にも責任がある。

高度成長が終焉し、バブル経済が崩壊して 30 年以上経過したコロナ禍の今も、見え隠れする「新しい古典派経済学の考え方」に対し、宇沢弘文・吉川洋両氏が鳴らした警鐘は、誰に向けられているのか。我々は真剣に問い直さなければならない。

【人を助けること】

第 14 回大会の準備段階で、私は多くの団体と個人に宛て、「まずは地元新潟の阿賀野川流域で何があったのか、新潟水俣病について一緒に学びませんか」と案内した。それに対し、「今も被害者がいるのは分るが、新潟水俣病問題は既に解決済みなのでは」という意見も少なからず聞いた。それでも、意思表示をして下さる方は有り難い。

当事者の周囲にいる人が多くなるほど、率先して具体的な援助をする人の比率が減る「傍観者効果」[13] という社会心理学用語がある。他者への援助の緊急性を判断するのは難しく、援助に回る側の人数が増えれば責任は分散し、援助の動機が誤解に基づいてはいないか、失敗に終わった時の評価はどうなるなどの懸念も生じる。最近の事件を念頭に置いて自問自答してみる。私と一人の男性が同じ電車の車輌に乗り合わせた時、その人が何かの発作を起こして苦しみ始めたとする。医師である私は、発作を起こしている人を何が何でも助けようとするとは必ずしも言えない。私自身が泥酔していたり、相手が右手に木刀、左手に刃物を持っていたりしたらむしろ関わりを避ける。医師や看護師が複数人乗り合わせていても、各人の方針は私と大差はないかも知れないし、ローカル線と山手線の車輌でも違いは無いだろう。援助が求められている場面で、個人が実際に行動へ移す確率を仮に「対人援助指数」と定義すると、私のそれは 30%くらいかなと考える。

新潟水俣病公表の前年に起きた新潟地震の際、私の実家に近い「勤労者医療協会沼垂診療所」所長の齋藤医師は、研修医や医学生を引き連れて 1 ヶ月近く救援活動にあたった。それがきっかけになり、齋藤医師は阿賀野川下流域（新潟市北部や豊栄町）にこれまで見たことがない病状の患者がいることに気付いた。公式発表以降、常勤医師 1 名（齋藤）、看護師 5 名の沼垂診療所は「患者相談窓口」のようになった。齋藤医師は、新潟大学神経内科の椿忠雄教授に非常勤医の派遣を依頼し、水俣病の勉強会を主催、「民主団体水俣病対策会議（民水対）」の議長に推挙された。さらに多忙な臨床に加え、新潟水俣病第一次訴訟の舵取りをし、熊本の医師や患者たちと交流を深め、上越の関川流域まで検診の足を伸ばした [14]。齋

藤医師の「対人援助指数」は90%を優に超えていることは間違いない。齋藤医師は、彼のもとを訪れ、小児水俣病の調査を依頼したローチェスター大学のマイヤーズ教授は言うに及ばず、アメリカ国立衛生研究所NIH の疫学部長カーランド博士の「世界に宛てた勧告」を自らへの箴言と捉えて行動を起こし、我々の第14回大会の企画にも快く援助の手を差し伸べてくれた。前号の「新潟水俣病概論Ⅱ（症候と認定基準の変遷）」[15] で紹介した、胎児性水俣病の世界的権威である原田正純医師は、熊本大学を退官後に熊本学園大学で「水俣学」の創設に尽力し、2012年6月に逝去した。熊本学園大学社会福祉学部の花田昌宣氏は、その著書の中で「水俣病を医学（だけ）の課題にするのは適切ではない。水俣学は、医学研究が水俣病研究史の中心にあったということに留まらず、水俣病の診断や行政認定において、医学の果たしてきた役割への批判で有り、医師が患者の意思決定を担うという現実への反省にある」[16] と述べている。私は、原田医師の「対人援助指数」もまた100%に近かったと確信する。何故ならば、原田医師は援助者としての「葛藤」をも包み隠さず述べている[17] からである。知識は一種の「ひもじさ」である[18]。脳という身体の欲求には必ずそれを支える情動があると私は考える。

【削り取られた「教訓」】

『新潟県立環境と人間のふれあい館－新潟水俣病資料館－』の展示には、齋藤医師と支援者により水俣病被害者が裁判で勝訴をかちとった記録が一部欠落している。また、同資料館で無料配布されている県発行の『新潟水俣病のあらまし』の参考文献欄[19] には齋藤医師の名前は記載されていない。劇症型以外の多くの新潟水俣病患者は、認定されても未認定患者やその他の人たちと区別し難い。差別や偏見、「にせ患者」問題が生まれた理由のひとつである。県立資料館や学校教育の場で新潟水俣病を学ぼうとする人たちに、阿賀野川で使われていた漁具や裁判を報じる不都合の無い（新潟弁で、みばがよい）新聞記事を見せるだけでは不十分である。現実の被害の多様性や複雑性、そしてその身体性と、患者や家族たちが被った派生的な人生への被害[20] を抜きにした「教訓」などあり得ない。当事者の中には、語り部となった人たちがいる一方で、「もうその問題には触れず、そっとしておいて欲しい」と言う人も少なくない。だがそれでも、「教訓」をより現実味のあるものにするには、水俣病が発生した地域に暮らしてきた人たちの文化や習慣を、齋藤医師や原田医師と同じように深く理解し、穢されてはならないものとして尊重する姿勢が求められる。

これが私の結論である。

【参考文献】

1. ユージン・スミス＆アイリーン・美緒子・スミス；『MINAMATA』. クレヴィス. P7, 2021.
2. 夏目漱石；『草枕』. 新潮文庫. PP36-37, 2012.
3. 齋藤恒；『新潟のメチル水銀中毒症』. 文芸社, PP26-27, 2018.

4. 宇井純・藤林泰他編;『宇井純セレクション①』. 新泉社. PP361-363, 2014.
5. 新潟県 HP; 「訪ねてみよう山の下閘門排水機場」. 新潟地域振興局地域整備部, 2022.
6. 新潟市 HP;「新潟市の歴史　現代」. 新潟市文書館, 2022.
7. 与板町広報編集委員会;『広報よいた』. 与板町, 11 月号, PP2-5, 1991.
8. 関礼子;『新潟水俣病をめぐる制度・表象・地域』. 東信堂. PP71-75, PP257-272, 2003.
9. みなとぴあ;『新潟市・沼垂町合併 100 周年記念』. 新潟市歴史博物館, 2022.
10. 阿賀野川の流域紹介;「きらり四季彩 阿賀野川 阿賀野川のプロフィール」. 阿賀野川河川事務所. 2022.
11. 吉川洋;『高度成長　日本を変えた六〇〇〇日』. 中公文庫. 2012.
12. 齋藤恒;「新潟・阿賀野川流域メチル水銀中毒症例の地域調査」. 水俣学研究, 10 号. pp17-18, 2020.
13. 大山泰宏;『人格心理学』. 財団法人放送大学教育振興会 1582, PP78-83, 2009.
14. 齋藤恒;『新潟のメチル水銀中毒症』. 文芸社, PP72-79, PP102-122, P171, 2018.
15. 本間毅;「新潟水俣病概論Ⅱ（症候と認定基準の変遷）」. 対人援助学マガジン. 第 50 号, PP278-279, 2022.
16. 花田昌宣;『いま何が問われているか 水俣病の歴史と現在』. くんぷる, PP230-231, 2017.
17. 原田正純;『水俣病』. 岩波新書, PP247-249, 2021.
18. 島崎藤村;『破戒』. 新潮文庫, P10, 2022.
19. 新潟県;「未来へ語りついで～新潟水俣病が教えてくれたもの～」. 令和 3 年度改訂
20. 飯島伸子・舩橋晴俊編著;『新潟水俣病問題＊加害と被害の社会学＊』. 東信堂, PP3-46, 2006.

川下の風景⑧
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【暮らしの履歴書】

44 歳ではアラフォーと自嘲し、45 歳になると、いよいよアラフィフと言うようになった。首尾よく行っても人生残り半分もないわけだ。そう思うと、時折、これまでの暮らしを振り返る機会も多くなった。上の子は、この冬で 18 歳になる。進学、就職、いずれにしても家族から巣立つ準備をしている。縁あって 9 年間教えている専門学校の生徒たちも、20 代の若者が多い。そうなると、自分の 18 や 20 代の頃を思い出す。地方の芸大映像学科を出ても希望の就職が見つからない。焦りよりも、自分のやりたいことにこだわる。10 年、20 年の将来よりも、目先の居場所を探している。友人の繋がりもあり、東京の小さなプロダクションに拾ってもらった。すぐにでも出てきなさい、と言われ、住む場所も決まらないまま、鞄ひとつで東京の街へ。御徒町の古びたウィークリーマンションに暮らしながら、仕事の合間を縫って部屋探し。慣れないパソコン作業や、国会図書館に通い詰めての資料集め。夜通し高速道路を走って東北撮影行脚など。忙しく充実した日々も、僅か 3 年余りで終了し、あえなく都落ち。その後、家族を持ち、全く畑違いの福祉の道へ。乳飲み子を抱えての非常勤就労。通信教育で福祉資格の取得へ。児童相談所での実習でこれからの自分に必要な価値観を学び、福祉職として初めて正社員となった介護老人保健施設で介護ビジネスの運営と手法を得る。気が付けば、親が大枚をはたいて入学させてくれた芸大の道とは全く異なる道を歩み、結果的には福祉の職の方がはるかに長くなって 45 歳となった。思い返せば、顔から火が出るエピソードも多いが、それもこれも、全て自分の物語になっている。

近年、私が歳を重ねてきたので、クライエント家族との年齢も近くなった。脳卒中、癌、難病、様々な事由で介護が必要な状態となるクライエントは、私の親と同じ、70 代半ばから 80 代。初めて介護認定の申請を行い、介護認定調査員がクライエントに対峙するとき、私と同じ歳くらいの息子たちは、親の生活史を知らないことが多い。いつ結婚して、どんな生活をして、趣味は何があって、どんな友人や知人が多くて、食べ物は何が好きで、どんなテレビや本、映画を観るのか。かくゆう私も親の生活史をほとんど知らない。出身地、職業、若い頃の趣味、私が家族の元を巣立ったのは 18 歳だが、それ以降の両親の暮らしはほとんど知らない。親に「暮らしの履歴書」を残しておいてもらいたい、と節に思うし、それは自分にも当てはまる。この歳になると、決して病気とは無縁ではない。私の両親はどんな物語を残すのか、私はどんな物語を子どもたちに残そうと思うのか、本来は言葉で聞き伝えなければならないが、それも改まっての対話は気恥ずかしいものだ。

【クライエントの物語】

滋賀の田舎に育った。平成の大合併でその町の名は無くなったが、特に未練もない。家出同然のように 10 代で実家を飛び出し、陸上自衛隊に入隊した。厳しく、苦しい訓練、息が詰まる集団生活に嫌気が差して、僅か 4 年で辞めた。その後、九州に流れ、ヤクザの真似事をした。真似事が次第に板に付き、それを生業として大阪に渡った。相手が 3 人ぐらいの喧嘩なら負けたこともない。たくさんのチンピラを従えて、

難波の繁華街を大手を振って歩いた。
結婚は生涯で 3 人とした。一人目は自衛隊を辞めた後に出会って結婚したが、ヒモのような生活が嫌ですぐに別れた。二人目の妻はフィリピン人で、大阪の飲み屋で出会った。娘が二人生まれた。妻に似て、美人だった上の娘は東京でモデルになり、私に似て血の気が多い下の娘は大阪でプロレスラーになった。妻とは別れたが、今でも娘は心配して金を送ってくれる。結局、三人目の妻とも長く続かなかったが、この歳になっても女に困ったことがない。病院に入院してても、看護師が言い寄ってくるから、断るのが大変だ。
小指を落とすのが嫌で、200 万を積んで組を抜けた。今でも京都の祇園界隈を歩いていると、遠くから「兄貴！」と声を掛けられて困る。ヤクザを辞めて、背中の入れ墨は消したが、右腕の龍はそのまま残した。これも思い出のひとつだから。今は、こんな古びたアパートで一人暮らしをしている。周囲には、相変わらずヤクザの友人が多いし、いろいろ世話も焼いてくれる。そうそう、競馬の騎手をやってた時代もあった。駆け出しの頃の武豊と走ったよ。あいつは容赦ないし、ちょっとは負けろよって言ったけど、よく飲みに連れていった。楽しかったよ、いろいろあったけどね。

【私の物語】
最初は数奇な人生もあるもんだなぁ、と面白く聞いていた。病院着の右腕や胸元からチラリとのぞく入れ墨。その緊張とは裏腹に、本人は至って饒舌に物語を語る。小柄で、柔和な笑顔だが、入れ墨が語るように、どこかで鋭い眼光が覗くだろうかと気にしている。おおよそ娘の下りまでは、そんなもんだろうと思っていたが、競馬の騎手あたりになると胡散臭くなる。口八丁というが、俄かに信じがたくなる。他人の生活歴に信憑性をそこまで求める必要もないが、何せ末期癌で独居である。一応、家族歴は知っておかないと、困った事態になる。関係機関を突くと、ある程度の記録が出てくるが、娘の話ぐらいから嘘が混じっているようだ。いずれにしても家族とは絶縁状態。生活保護受給中だから、娘から金銭支援をもらったらあかんだろう、と苦笑する。
何で嘘をつくのか、と問い詰めたところで意味もない。騙されたと言えばそうだが、別に私に不利益は無いし、周囲がそれで被害を受けているものでは無い。ひと昔前なら、本人はそんな嘘で女性を騙し、友人を脅していたのかも知れないが、私が知る目の前の老人はそうやって自慢げに人生の物語を語っている。
こうやって生きてきたんだろう。社会的に誉められた仕事ではないし、定職に付かず、割にその日暮らしで生活を行い、パチンコや競馬、競艇に狂って生きてきた。四畳半の古いアパートで、煙草を吸いながら、それでも楽しかった、と語る人生は、やはり本人の虚勢なのかも知れない。でも、少なからず私だって、そんな誉められた人生を歩んできたわけじゃない。虚勢の張った物語も、一つや二つでは収まらない。人が語る暮らしの物語は、そんな謙虚さと、見栄と、欲張りな嘘に満ちている。

2022.11.22　米津達也



miho Hatanaka,

我が子の小学校の PTA に初めて携わったのは、なり手の少ない広報委員会であった。「どうせやるなら楽しいことを」と、PTA 新聞に描いたこともない 4 コマ漫画を載せてみたら子どもたちの人気者に。味を占め、時を経ても文責のある配布物に描いて出す。今回は、今年の“子どもたちへのメッセージ”と、三点の漫画を。

【第８話　伝えたい想い；今年のスクールカウンセラーだより から】

11 月のある日のこと。午前中にスクールカウンセリングの担当校で小学校６年生の子どもたちにメンタルヘルスの授業を、午後に 15 年来通っている小学校で５年生の性教育の授業を行った。午前中は心理臨床家として、午後は助産師として。1 日のうちでもそのような日があり、一週間になると日替わりでいろいろな役割を担う。いずれの場でも自分の“伝えたい想い”は実はそれほど違いがなく、「つまり同じことが言いたいんだ」というふうに思うのは不思議なことでもない。長年、性教育をしているなかで、産まれる、とか、生きるとか、幸せとは何なのかとか、死ぬとはどういうことなのかとか、そういったことを私は長い間、ずっと考えてきて、体のことだけではなくもっと心のことを知りたいと思い、臨床心理学を修めたのだ。少しだけ、“肩書き”という表札が違うだけ。本体の私は同じであり、子どもたちに向けて伝えたいことはやはり同じこと。“あなたがしあわせでありますように”。

その想いを込めて、今年発行したスクールカウンセラーだよりから４号を、以下に。

■　中学校　４月号　こころのおはなし　あなたの“おまもり”は何ですか？



海外の絵本や映画にも登場するくまのぬいぐるみ。その癒し効果を研究した心理学者もいるそうですよ。そのためでしょうか、日本でも小児科の病院に入院している子どもたちにプレゼントをする人もいて、子どもたちはみんな大喜びで抱っこをするようです。

くまのぬいぐるみだけではありません。幼い子どもが毛布や肌触りのよいタオルを離さずに持っているのに気づいたことはありませんか？　スヌーピーの登場人物、ライナスも毛布を片時も手放しませんね。

さて、あなたにとっての“おまもり”は何でしょうか？
小さな石ころ？ きれいなビー玉？　誰かからもらった手紙…？

本当は子どもだけではなく、大人でも、こういった心理的に安心できる“おまもり”があるといいかもしれません。モノではなく、コトでもいいかも。 みなさんにも自分のことを大切に守るためのアイテムがあればいいなぁと思います。

■　中学校　７月号　こころのおはなし　“こころ”を育てるものは何？



先日、校内を歩いていると、2年生が授業で豆苗を育てている場面に出会いました。みんな自分の豆苗を持って、水をやったり友だちと比べてみたりとにぎやかなこと。 同じ日に、同じように種を蒔いて育てても、少しずつ違う様子に、“my 豆苗”に様々な想いを持ったのではないでしょうか。こんなにも違うのは、置かれた場所の違い？陽の光が足りなかったかな？ 水をやりすぎ・少なすぎ…？「もっとまっすぐに」「もっと青々と」となかなか思うようにはいかないことも。

さて、もしもこれが“こころの種”だとしたらどうでしょうか？
“こころ”にとって光や水となるものは何？

人のこころも、いきいきとしている時もあれば、ふにゃりと凹んでしまうこともあります。でもそれは、むしろ自然なこと。ただ凹んだ時にあなたはどのような工夫でやり過ごすことができるでしょうか？
友だちと話す、逆に、少し距離を置く、ぐっすりと眠る、好きなアイドルの動画を観る etc. こういった自分に合った対処方法をいくつかもっておくと助けになりますね。そして体調を整えること（栄養・休息・運動）は回復力を発揮するための土台となります。

本来、人は“自分を生き”ようと、すくすくと伸びていこうとする性質を備えていると言われています。 時には人の力も借りながら、まっすぐばかりではなくてもいい、少し曲がったりひょろひょろとしたり、味のあるあなたオリジナルの“こころ”を育んでいけるといいですね。

■　小学校　７月号　こころのおはなし　あなたは自分のどんなところがすき？

一学期には5年生の全員面接を行いました。2つのクラスの一人一人と、学校のことや体のこと、心のことなどたくさん話をしました。その中で「あなたが自分のことをいいなぁ・すきだなぁと思うのはどんなところですか？」ということもたずねました。いっぱいある人や、とっておきの話をしてくれる人もいて、楽しい話をたくさん聞かせてもらいました。でも中には、思いつかない人や「ない」という人もいました。その時には、「よーくさがしてみようか」といっしょに考えて、よくよく話をしてみると、だれもが「あっ!」と思いつくのです。ある人は、「ほんのちいさなことでもいいですか?」と言って、とてもすてきな話をしてくれました。(ちっともちいさなことではありませんでしたよ♡)

さて、あなたが自分のことをいいなぁ・すきだなぁと思うのはどんなところですか？　今までさがしたことがなかった人も、たからものをみつけるようにわくわくしながらさがしてみてください。みつける力があることも、あなたのたからものになりますよ。

5年生のみなさんは、どうもありがとうございました(^^)/　　(＊漫画は中学校７月号に同じ)

■　中学校　９月号　こころのおはなし　カウンセリングって何？



ある日、小学生の人から「スクールカウンセラーってどんなことをするのですか？」、「カウンセリングって何ですか？」と尋ねられました。みなさんだったらどのように答えますか？　もしかしたらみなさんのなかにも「何だろう？」と思っている人はいるかもしれませんね。

実は私は、心理学の勉強をする前は、カウンセリングは『心を治してくれるもの』だと思っていました。今は、『その人が本来持っている“自分らしさを活かしてよりよく生きようとする力”を、どうやったらうまく発揮できるかをいっしょに考え、支えること』ではないかなと思っています。悩みのある時や生きづらさを抱えている人は、なかなかその力を充分に発揮することが難しくなります。「なんとなくもやもやする」といったものも含め、「なんかしんどいな」と感じることは大なり小なり誰にでもありますが、そんな時に、悩みそのものではなく「悩んでいてしんどいんだ」ということを人に話すことで少し楽になれることもあります。

人に“話し”て、悩みに距離を置いて“離す”ことで、しんどさがちょっと自分から“放れる”。またそういったプロセスが、その人の“生きやすくなる智恵”となる。カウンセリングはそんな場であればいいなぁと思います。

長い休みの後は、学校に行くということ自体がとてもエネルギーが要ること。「嫌だなぁ」、「しんどいなぁ」と感じたとしてもおかしなことではありません。そのような時、もしよろしければ気を楽に、カウンセラーに「ちょっと話してみようかな」と思ってもらえたらうれしいです。あなたの「どんなふうになったら少しは楽になれるか？」を、いっしょに探すお手伝いができればと思います。

福祉教育への挑戦(8)

「この授業が一番好き」という言葉に救われて

髙井裕二

新型コロナウイルスの感染拡大が問題となって、かなりの年数が経ちました。所属先の大学でもリモート授業や学生同士の接触を極力制限した演習など、体験的な学習機会を提供できないままソーシャルワークの現場実習に送り出すようなこともありました。「なるべく向かい合わせにならずにグループ討議や演習をする」という非常に難しいお題にも向き合ってきました(遠隔授業で演習をするような機会は本当に難しかったです)。

非常勤先の高等専修学校で考えてみますと、今年の 3 年生は入学してからずっとマスクをしてクラスメイトと接し、学校行事についても中止を含めて様々な制限を受けて過ごしてきました。本来であれば経験できたであろうことができないまま、卒業させてしまうことに申し訳なさを感じるとともに、残された期間で体験できることはないかと頭を抱える日々です。この文章を書いていますのは 11 月末で、2 学期も後半に差し掛かっています。中には、進学や就職先なども決まり、卒業後の生活を考え始めている生徒も出てきています。

私は昨年から引き続き「生活支援技術」という科目を担当し、ケアに求められるアセスメント力に加えて、具体的な支援技術についても伝えることが求められます。去年は移動・移乗などを教えるために車椅子や歩行器を使用した内容を扱いましたが、生徒同士で演習する時間は短く、デモンストレーションとして教員と生徒の一対一での対応を見てもらい、支援に必要となるポイントなどを文章にしてもらうようにしました。今年は単元的に睡眠や終末期ケアといった内容でしたので、プロジェクターを使ってパワーポイントのスライドを移したり、終末期を迎えた高齢者のドキュメンタリー動画などを視聴してもらったりしながら、教科書の内容を深めるような組み立てにしています。

前にも書きましたが、今年は 3 コマ連続で授業を持たせてもらっているため、1 時間目の授業の導入には時間を割くことができ、前回授業の振り返りシートに書かれた感想や質問へのフィードバックなどを行っています。フィードバックを続けていくことで、自分の感想や質問を取り上げてもらいたいという意欲を刺激することができているのか、沢山書いてくれるようになってきました。その中で、嬉しかった内容があります。それは「この授業は、介護だけでなく福祉を学んでるって感じで面白い」、「先生が生徒の質問を見て、分からないことは授業までに調べてきてくれるので、嬉しい。この授業が一番好き」というものです。もちろん教材研究をしながら、教科書の内容にも準拠して教えていますが、「生活支援技術はこれで、良いのか」という不安を常に抱えていたので、この感想をもらった際に「体験的な学びを十分にできている自信がなかった」と正直に伝えました。すると、ある生徒から「そういうのは、入職してから研修でも学べるって聞いてるで。先生から聞く利用者を観察する際のポイントや関わり方とかエピソードは先生からしか聞かれへんと思うから、この授業楽しい」との言葉をもらいました。自分の「生活支援技術」の教授力はまだまだ課題があるものの、生徒たちに伝わっているものがあると実感できたことで、このまま非常勤にて様々な授業展開に挑戦し続けようと思えました。

ちなみに、「また新型コロナウイルスの感染者増えてきたね」と授業開始時に話すと「いや先生、かかる時はかかるから。考え過ぎたら負けやで。楽にいこう」と励まされました。この時代を生きている若者、頼もしいです。

タイトル名「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第 9 回：第 2 章–その 2–

なぜ，もう一度，企画ワークショップなのか？

—第 2 弾へのつながり—

著　：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

ネクストワークショップ

2020 年の対人援助学会年次大会において，企画ワークショップ「対人援助実践をリブートするこの一冊」を実施させていただきました。その時の内容および詳細については，対人援助学マガジン 46 号～48 号における「対人援助実践をリブートするこの一冊」を，御覧いただければと思います。

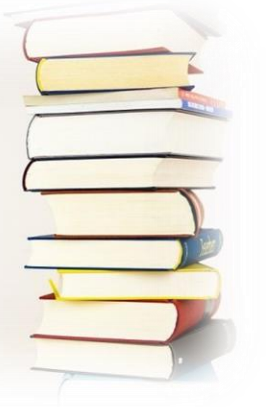
第 3 回：第 1 章その 3（46 号）
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/52.pdf
第 4 回：第 1 章その 4（47 号）
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol47/57.pdf
第 5 回：第 1 章その 5（48 号）
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol48/56.pdf

そして 2021 年の年次大会におきまして，これの続編となる「対人援助実践をリブートするさらなる一冊」を企画・実施いたしました（開催期間は 2022 年 1 月 29 日土曜日から，翌日，30 日の日曜日まで）。

2021 年大会の企画ワークショップに際しては，従来の渡辺修宏，小幡知史先生，二階堂哲先生の 3 者に加えて，神山勉先生（横浜国立大学）と長谷川（錦織）福子先生（障害児通所支援事業所樹の子クラブ）の両先生にも加わっていただきました。

両先生とも，私達がこれまでに積み重ねてきた対人援助実践，対人援助研究の節目節目で邂逅してきた，尊敬する仲間です。今般の企画ワークショップで，両先生からも良書を紹介していただこうと，お声がけをさせてもらったのでした。

なぜ再び，企画ワークショップなのか？



ところで，おそらく読者の中には，「2020 年に一度やっている企画ワークショップを，なぜもう 1 回繰り返すのか？」と，疑問に持たられる方もいるかも知れません。そもそも，この企画に参加してくださった先生方も，そのようなしこりをお感じになったかもしれません。

そこで本稿は，再企画の必要性，その疑問（？）について（勝手に）お答えしたいと思います。

端的に述べますと，その理由とは，「1 回だけでは到底，紹介しきれないほどの良書があったから」ということになります。

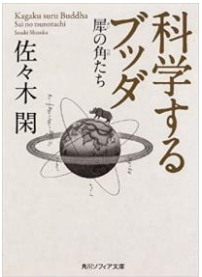
というのも，そもそも私，渡辺は，2020 年の対人援助学会年次大会における企画ワークショップ「対人援助実践をリブートするこの一冊」において，以下の 2 冊，「真理の探究」と「科学するブッダ」を紹介したこととなっておりますが，実は・・・もっと文献を取り上げていたのです。ええ，延べ 12 冊です。

これはその日，参加してくださった方しかわからないことなのです。

プレゼンターの小幡先生から，「渡辺さん，タイトルの『この一冊』を思いっきり無視ですか？…ふつー，一冊じゃないんですか？」と，的確かつ至極ごもっともなツッコミをいただき，汗を書いたことを，今朝の出来事のように，よく，覚えております（笑）



佐々木閑，大栗博司（2016），
「真理の探究 仏教と宇宙物理学の対話」幻冬舎



佐々木閑（2013），
「科学するブッダ 犀の角たち」，
KADOKAWA

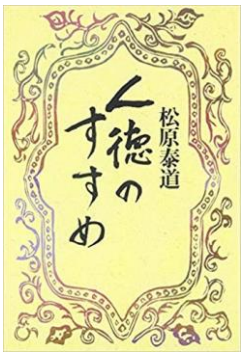
私がその日，紹介させてもらった他の文献は，ダニエル・ピンク著・勝間和代訳の「When 完璧なタイミングを科学する」，大竹文雄・平井啓著の「医療現場の行動経済学 すれ違う医者と患者」，松原泰道著の「人徳のすすめ」，小池喜明著の「葉隠　武士と奉公」，藤原正彦著の「国家の品格」，藤井聡著の「プラグマティズムの作法　閉塞感を打ち破る思考の習慣」，長谷部誠著の「心を整える　勝利をたぐりよせるための 56 の習慣」で

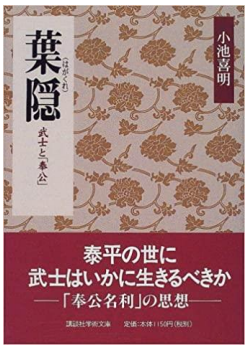
した。

それぞれについて，ほんの一言ずつですが，ご紹介させていただきました。いずれも私の心の琴線に触れる名著であったので，お読みいただければきっと多くの方々が，「なるほど，納得」，「なるほど，満足」と，お感じになられるかと思っております。



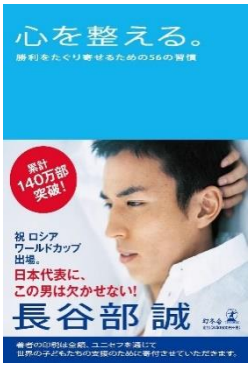












1. ダニエル・ピンク，勝間和代訳（2018）	「When 完璧なタイミングを科学する」，講談社
2. 大竹文雄・平井啓（2018）	「医療現場の行動経済学　すれ違う医者と患者」，東洋経済新報社
3. 松原泰道（1996）	「人徳のすすめ」，佼成出版社
4. 小池喜明（1999）	「葉隠　武士と奉公」，講談社
5. 藤原正彦（2005）	「国家の品格」，新潮社
6. 藤井聡（2012）	「プラグマティズムの作法　閉塞感を打ち破る思考の習慣」，技術評論社
7. 長谷部誠（2014）	「心を整える　勝利をたぐりよせるための 56 の習慣」，幻冬舎

*紹介順に表記しております。

さて，それぞれの良書が，なにをどう教えてくれたのか？
少なくても渡辺はそこから何を学んだのか？
そして渡辺はどのようにリブートできたのか，というお話もできるのですが…。実は，

文献の紹介はここで終わったわけではありませんでした。

私，渡辺は，最初の 2 冊に加えて上の 7 冊を紹介した後，あまつさえ，「コミック」にまで文献の概念を拡大させ，以下の漫画の説明にまで，手を出したのでした。

そう，それは，井上雄彦の「バカボンド」，小山宙哉の「宇宙兄弟」，そして，万乗大智の「機動戦士ガンダム　アグレッサー」でした。

嗚呼…，今頃，「渡辺さんは結局，何がしたかったんですか？何を言いたかったんですか？」と，どこかで誰かがエアつっこみをされていますね。

そのツッコミに答えるべく，合計 12 冊の文献（漫画含む）の魅力については，いずれまたどこかで懇切丁寧に，そして手取り足取りお伝えさせていただくことにとして…，すくなくて今は，「1 回こっきりのワークショップでは，とても語りきれなかったから」という実態が，おわかりいただけたかと思います。

そう，だからこそ，企画ワークショップ第 2 弾，「対人援助実践をリブートするさらなる一冊」が生まれたのです。

プレゼンターを 3 人から 5 人に拡大し，またまた良書を，そしてそこから得られるリブートの源を，ぜひ皆様にお伝えしようとしたのです。

そんなわけで，第 2 弾では，誰がどのような文献を手にとって，どのように語ったのかについて，以降，記していいきたいと思います。

－つづく－

第 10 回：第 2 章–その 3–

今，この本

著　：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

ワークショップ前夜

「またかよ…」

2022 年 1 月 29 日に予定されたワークショップ「対人援助実践をリブートするさらなる一冊」の実施前に行われた zoom ミーティングにおいて，私の脳内で強烈に浮かびあがった言葉が上記のものでした。

2021 年に実施された「対人援助実践をリブートするこの一冊」においても結局，紹介された書籍は「この一冊」どころか複数冊ありました。この確信犯的掟破りが 2022 年にも繰り返されたのです。しかし私もさすがに学習しており，あらかじめ紹介する本を何冊か用意していたため難を逃れることができました。

ということで，私がこのワークショップで挙げさせていただいた本は，①「療育とはなにか」と，②「自閉症の世界-多様性に満ちた内面の真実-」の２つでした。

①　「療育とはなにか」　高松鶴吉・1990 年発刊



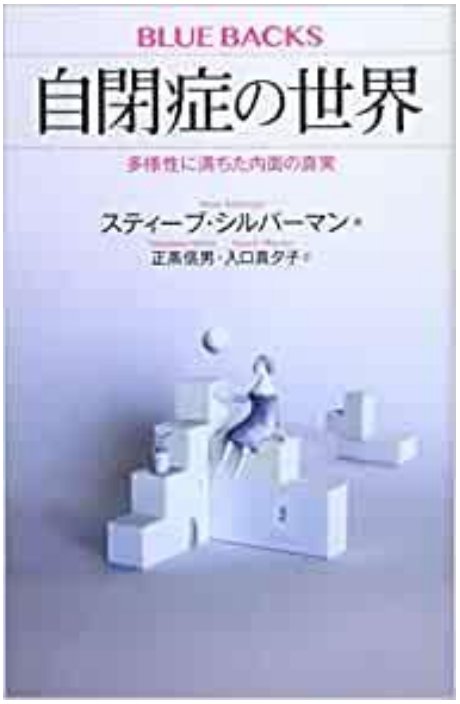
ワークショップで最初に挙げさせていただいたのが，本書です。この本に出会ったきっかけですが，前提としてまず私は，児童発達支援管理責任者として障害児支援の現場に携わっています。障害児支援の現場で常に聞く言葉として，「療育」というものがあります。「治療的教育」の略称が「療育」ですが，実は法律的には定義されていません（しかし，法律内に「療育」という言葉は用いられているという…）。

そのために，現場にいる感覚だと，それぞれの対人援助職者が使う「療育」には，その内容やニュアンスにかなりの多様性がみられます。しかし実際の支援に従事し，さらに様々な対人援助職者と連携する（しなければならない）現場の人間としては，正しい療育の定義よりも，「療育に従事する対人援助職者にある多様

性の源流としての療育とは？」について知りたいという思いがありました。その中で出会ったのが，本書です。

本書では療育に関して，「療育とは情念であり思想であり科学システムである」と述べられています。この記述はシンプルながらも，私にとっては腑に落ちるものでした。療育に携わる多様な対人援助職者の中には，ある人は強い情熱（情念）が先んじ，またある人は障害者福祉に対する理想（思想）を胸に，また別の人はエビデンス（科学システム）を重んじ…。上述した対人援助職者の多様性は，情念と思想と科学システム，まさに三位一体とも言えるそれらのバランスや重点によって多様性が生まれているという示唆が得られたのが，私の対人援助観のリブートにつながりました。

② 「自閉症の世界-多様性に満ちた内面の真実-」
スティーブ・シルバーマン著・2017 年発刊



ワークショップにおいて，２番目に挙げさせていただいたのがこちらです。実は最初，この本を紹介しようとは思っていませんでした。しかし，上述の「療育とはなにか」を読み込んでいくうちに，「こちら側（支援者側）にとっての療育という視点に偏ってないだろうか？あちら側（当事者）にとっての支援とは？」」という疑問が頭をもたげ，以前読んだ本書の内容を想起して読み直した次第です。

本書は，自閉症をめぐる様々な誤解と偏見，脳多様性（ニューロダイバーシティ）への理解へといたる歴史的背景が語られています。しかし私が後頭部をガツンと叩かれたような衝撃を受けたのは，本書の中盤以降で述べられているジム・シンクレアの「我々を憐れむな」というスピーチです。彼はスピーチにおいて，自閉症を有する子どもを持つ親や，その支援者に対して，次のような言葉を述べています。

すなわち，「ぼくたちの存在を嘆くみなさんの声は，ぼくたちにはそう聞こえます。回復を祈るみなさんの声は，ぼくたちにはそう聞こえます。みなさんのぼくたちに対する心からの希望と夢について聞かされると，ぼくたちはこう思うのです。ある日ぼくたちの存在が消えてなくなり，代わりにやってきた，ぼくたちの顔をした他人をあなたたちは愛する，それがみなさんの最大の望みなんだと。」。

“障害を治療する”という療育，そもそものこの出発であり前提でもあるこの視点にこそ，特権的でパターナリスティックな要素が内在している可能性を気付かせてもらったという点で，本書は私の対人援助観をリブートしてくれました。

対人援助観の止揚（アウフヘーベン）

本番のワークショップでは述べませんでしたが，上記２冊が私の対人援助観をリブートしてくれたと述べたものの，実は今の私はリブートしきれていない状態でもあります。パソコンで例えると，パソコンの再起動を選択したものの，まだパソコンの画面がついていないような状態です（分かりにくいメタファーで申し訳ありません）。

なぜなら，上記２冊が示唆する内容が，対人援助観という次元からすると真逆のベクトルにあるためです。すなわち，療育をすべきか，すべきでないか…という。しかしそれら２つのベクトルは矛盾しつつも，その矛盾を内在して対人援助の実践に至ることこそが自身の対人援助のリブートなのではないかと内省してもいます。

私の対人援助観の止揚が，どのようなリブートとなるのか，また別の機会にご報告させていただけたら幸いです。

－つづく－

タイトル名「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第 11 回：第 2 章–その 4–

私のこの本

著　：二階堂哲
企画：渡辺修宏
　　小幡知史
　　二階堂哲

ホモ・サピエンスの力の源泉



ユヴァル・ノア・ハラリ「サピエンス全史」では，私たちホモ・サピエンスが食物連鎖の頂点に上り詰め，生態系の頂点に君臨できたのは，「虚構（フィクション）」の力が鍵となっていると書かれています。

人間が安定した関係性を維持できる人数は，150 人が限界で，それ以上になると相互理解が難しくなります。しかし虚構を信じる力によって，神話や宗教，法律，人権，平等，会社，国家を生み出し，多数の人と繋がれるようになった人類は，生物として最強になっていき，他の生物を支配し，滅亡させていくことになります。

ホモ・サピエンスが獲得した，この虚構を作り出す力とは，どのようなものなのでしょうか？

虚構を生み出す言語行動



2021 年の企画ワークショップでは，谷晋二（2020）「言語と行動の心理学」を取り上げさせていただきました。この本には，人間の言語と認知に関する行動分析学的な理論である「関係フレーム理論」について書かれています。この関係フレーム理論こそ，虚構を生み出す力として機能している行動的原理といえます。

この虚構を作り出す言葉の力には，ダークサイトとライトサイドの二つの側面があります。ヒトは時には言葉によって苦しみ鬱々とする一方で，言葉によって人々は協力し合って困難な事態も克服してきました。

この虚構を作り出す言葉の力に行動分析学が科学的な

メスを入れて，その機能を解き明かし，そして活用しようとしています。

高い自己肯定感が好ましいとは限らない

この関係フレーム理論から分析すると，高い自己肯定感を育てようとする指導が必ずしも好ましいとは言えないことが分かってきます。「何かができる」，「有能である」，「他者の役に立つ」など，一見ポジティブな評価を一方的に与える指導を行った場合，反対の関係フレームが派生的に作り出され，「役に立たないのであれば，存在しないほうがよい」という自己否定につながることがあるといいます。

こうしたことを避けるために，「ダメな部分ももっている」，「良い部分ももっている」という階層的なフレームづけを習得させることが重要であるとしています。このことは関係フレーム理論が，言葉のダークサイド面の解決に役立つことを示しています。

知能（ＩＱ）は Bad word



言葉のライトサイド的側面を，関係フレーム理論を使って伸ばす取り組みも行われています。イギリスの研究者たちが取り組んでいる SMART Brain Training はオンライン上で，関係反応を訓練することで，知能指数を大きく向上させる取り組みを行い，大きな実績を残しているといいます。これまで，知能というと生涯を通じて安定したものであると考えられてきましたが，「知能は，特性でなく，生涯を通じて変化するし，学習によって変化する行動である」ということを実証してきました。

関係反応づけの正確さと流暢性を高めることで，知能指数は大きく伸びるという事実は，これからの教育を変える力を秘めていると感じます。

関係フレーム理論はおもしろい

言葉のもつ力に行動分析学としてどう立ち向かうのか，関係フレーム理論がその一つの答えだと思います。本の中身について紹介させていただきましたが，私の誤読があるかもしれませんので，興味がありましたらぜひ手に取ってみてください！

－つづく－

第 12 回：第 2 章–その 5–

悩み苦しんだ時に支えとなった書籍

著：長谷川福子
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

2021 年に開催された対人援助学会年次大会において，渡辺修宏先生，二階堂哲先生，小幡知史先生，神山努先生，そして私の 5 名で，「対人援助実践をリブートするこの 1 冊」というタイトルで学会企画ワークショップを開催しました。このワークショップは渡辺先生，二階堂先生と小幡先生の 3 名が 2020 年度にも行ったワークショップの続編であり，光栄にも 2021 年度にお声をかけて頂き，参加させて頂きました。これまでのワークショップの総括を 2022 年度の年次大会で二階堂先生が行っていますので（ポスター発表），是非そちらもご覧ください。

渡辺先生の言葉を借りると「対人援助の実践や臨床で行き詰ったら，そこからの脱却，リブートを試みる。そんなリブートのスイッチは，もしかしたら良書なのかもしれない。 そんな思いを伝えたくて，思い切って手を上げた企画」でした。対人援助について，また人生観や様々な価値観に対して新たな気づきや視点をもたらす格好の機会となりました。そしてプレゼンターからの語りやオーディエンスの方々との語りによって，さらなる考察を深めるというまたとない機会でした。

自己紹介

私は，現在，対人援助に関わる様々な仕事に携わっています。例えば，障害児通所支援事業所で児童発達支援に関わらせて頂いたり，総合病院の小児科の心理師として働いていたり，電話やオンライン，対面での女性相談に関わらせて頂いたりしています。加えて，大学の学生相談にも携わった事がありました。これだけ見ると，何を専門としている人なのか疑問を持たれる方が多いのではないでしょうか。実は私も自分が何を専門としている者なのか分からなくなっています(笑)。けれども，対人援助への情熱は人一倍あると自負しています。

なお，対人援助の仕事に携わってきた履歴は年数で数えるとまだまだ数年です。けれども

子どもから大人まで非常に幅広い年齢層の方々と関わってきました。そして，様々なバックグラウンド，ニーズを持つ方々とも出会ってきました。経験歴の浅い私が，様々な年齢層の方，様々なバックグラウンド，様々なニーズを持つ方々と出会う中で，沢山のことに悩み，苦しんできたことは読者の皆さんも容易に想像できると思います。まさにその通りで，自分の対応の仕方について悩み，そして対応をどのように改善すれば良いのか苦しみ，時にはミスをしてしまったと涙を流し，そんな日々の中で仕事へ行く足取りが重くなることが多々ありました。思い出すだけでも，胸がギュッと締め付けられるような思いです。

しかし，そのような日々が続いた訳ではありません。時には，同じ職場の方に相談に乗ってもらい，時には知り合いの心理師の方のスーパーバイズを受けたりしました。これらの機会は，心を軽くさせたり，具体的な改善法を知ったり，自分の仕事に対するフィードバックを受けるのにとても有益でした。一方で，人に助けられただけではなく，様々な書籍，映画にも沢山助けられてきました。時間，場所，相手の負担を気にすることなく，自分を解放できたり，違う視点に気づかせてくれたり，励ましてくれたり。そんな相棒のような存在でした。以下に，私の対人援助実践をリブートしてくれた書籍などについて簡単にお話したいと思います。

自分は何がしたかったのか？

私は，大学入学前から，心理学に強い興味を持っており，特にロジャーズの来談者中心療法を学びたいと思っていました。心理学の講義をいくつか受けているうちに，「カウンセリングを学びたいと思っていたが，なぜ自分はカウンセリングをやりたいのか分からなくなった…。誰かを支援するというのは自己満足なのではないか。」と自問自答を繰り返していました。自分は何がしたいのかと悩んでいる中，自分がまずやりたかったことは，「人の心理(心の働き)について知る」ことだったと閃き，実験的行動分析学を中心に学んでいくことを決めました。小学生のころから手塚治虫のブラックジャックが好きなのですが，いつもその複雑な心の動きの描写に関心がありました。その時の気持ちが，この選択に繋がったのではないかと思います。大学卒業後は，大学院へ。大学院でも動物を対象とした実験心理学系の研究を行い，対人援助とは程遠い場所にいましたが，ひょんなことから，当時，同じ大学にいた，被害者学の研究員の方から女性相談のアルバイトを紹介して頂き，女性相談の道へ。

女性相談の経験はもちろんはじめてだったので，分からないことだらけ。学部で学んだ知識をフル活用して共感的理解，傾聴などを心がけて対応するも，うまくいかないことが多々

ありました。時には相談者の方に，叱られたり，呆れられたような対応をされることもあったり…本当に心が辛くなることがありました。もちろん，他の相談員の方にフィードバックを貰ったり，対応の方法について相談しました。



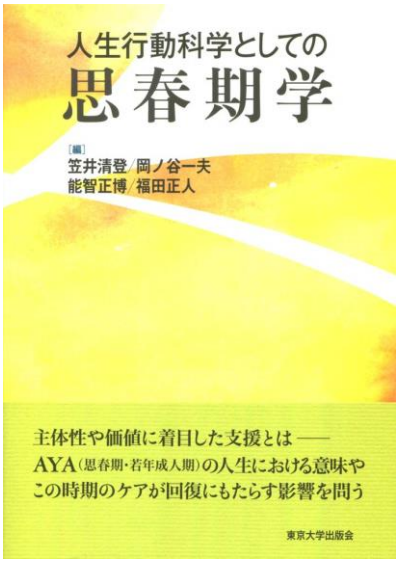
↑手塚治虫(1982)「ダリ」から一部抜粋
(https://tezukaosamu.net/jp/manga/258.html)

そんな時，私は大好きな手塚治虫の漫画「ダリ」を思い出し，久しぶりに読み返しました。自分には足りなかった「よりそい」について再考させられたり，「どんと身構えて待っている安心感」に気づくことに。

それ以降は，この２つを意識するようになりました。もちろん，今でもうまくいかないときはありますが，自分が相談者にとっての「ダリ」となれるよう，話しやすい環境をつくり，相手の語りに応答していくよう頑張っています。最近では，小児科での勤務の際，ついつい自分の方が年上なので，指示的な応答になってしまいそうな時があったので，心の中で「自分はダリだ…」と暗示をかけるようにしています。そして，時々，漫画を読み返しては，心をホッと休ませています。

援助や支援に援用する知識の獲得

援助や支援の場にいるときは「ダリ」を心がけていますが，専門的な知識ももちろん必要です。その際，非常に役に立ったのが「人生行動科学としての思春期学」です。



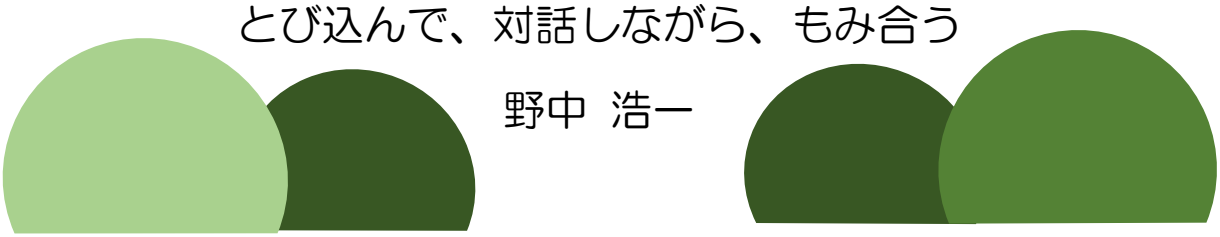
最近では，未就学児から大学生まで，若い方々を対象とした援助で苦慮することが多くなっていたので，これらの世代の方たちを取り巻く問題や，この世代の多くの方が直面する問題などを包括的に知りたいと考えていました。そんな時，東京大学付属病院で行っている研修会に参加し，「人生行動科学としての思春期学(笠井・岡ノ谷・能智・福田, 2020)」を知りました。まさに私が求めていた本だとも言えます。

島根の中山間地から Work as Life

第７回

とび込んで、対話しながら、もみ合う

野中 浩一



今回の文章では、日本や世界の変化に伴う「対立、分断、格差」の断片を概観し、それに対するアプローチを「課題解決の当事者性」「島根」「人それぞれ」「いじめ」という観点から考えていきたい。

アントニオ

私はプロレス世代ではない。プロレスよりも先にキン肉マンを知った。幼稚園のときから
よく分からず集め始めたガチャガチャのキン消し（※1)。その後、元ネタになっているアニメ「キン肉マン」を知った。超人と呼ばれる異形のレスラー達がリングの上で戦う姿に、自然と馴染んでいた。

プロレス＝キン肉マンだった子ども時分の私にとって、ジャイアント馬場やアントニオ猪木はテレビに出ているタレントという認識であり、ものまねをされていたり、昔を振り返る番組で知ったりという程度であった。

その後私が大人になり、アントニオ猪木氏が国会議員になったニュースや、猪木氏の訪朝が北朝鮮から歓待されている一方で国内の一部からは批判されているといったニュースを目にする中で、なにか引っ掛かりのような、興味のようなものを感じていた。そうした思いが募り、先日、長年猪木を撮り続けている写真家の原悦生氏の記録本「猪木」を購読した。

「この道を行けば、どうなるものか。危ぶむなかれ。行けばわかるさ。」90 年当時、国連安保理から経済封鎖を受けていたイラクに対し、猪木氏は「私にできる限りのことはしま

す。私があなた方のために何かできることはありませんか」との姿勢で臨み、日本を含めた多くの国から非難を集めていた当時のイラクで、プロレス、サッカー、音楽を軸とした祭典を開催し友好関係を築き、イラクに残されて帰れずにいた日本人の帰国を実現させたとのエピソードが書かれていた。

この部分だけを切り取ると美談めいてしまい実情と反することになりかねない。国際社会（と報道機関が呼称している一部の先進国）の非難の対象となっている国に、いち国会議員として交友を築き、命の危機と立場を危うくするリスクが高い中で渦中に飛び込み、祭典を実現するまでに至った事実。その困難さは並大抵のものではないだろう。

まず相手を理解しようとする。そのために懐にとびこむ。そして一緒に考え行動する。答えを想定してから動くのではなく、動きながら材料を集めて答えに近づいていく。この姿勢は、自国のものさしで悪者を特定し、制裁という名の暴力によって、机上の手続きで（なんの関与もない人も巻き込んで）一方的に締め上げるやり方に強い違和感をもっている私に、課題解決における当事者性の大切さを改めて感じさせてくれた。

時代の先進地「しまね」

『この 1 年で日本の人口が「島根県の人口分」減少…』というタイトルの WEB 記事が目に飛び込んできた。幻冬舎 GOLD ONLINE の島原俊英氏の記事だ。

日本の人口が、「2020 年からの 1 年間では約 64 万人が減少（※2)」し、「ほぼ島根県一県の人口が 1 年で消えてしまった」と書いてあった。島根県はこういうネガティブな話題の引き合いに出されることが多いなと自虐的な感覚を受けつつも、この危機は、積み重なって身近なところに大きな影響を及ぼすまでは多くの人が見て見ぬ状況にならざるを得ないのだろうとの感想をもった。

またこの記事では、宮崎県による中小企業労働事情実態調査をもとに、人口減少の「経営上の障害」として、「人材不足（質の不足)」と「労働力不足（量の不足)」が挙げられている。この点は経営者として私自身がここ数年、まさに身につまされているところである。

私が運営する松江未来学園において高校生の進路指導をしている中でも、人手不足を実感する機会が多い。島根県内で来年春に卒業予定の高校生のうち就職を希望する１００７人に対し、企業からの８月末時点での求人数は３０５５人（３．０３倍）だったと島根労働局が公表しているとおり、人を求める企業は多く、働きたいという高校生は少ない。私自

身、地元中小企業の担当者から「求人を出しても 1 件も応募がない」という声を聞くこともあり、「地方＝仕事がない」といったステレオタイプなイメージに反して、少なくとも島根県の高卒求人は超売り手市場である。

私が事業主として初めて人を雇ったのが 32〜33 歳頃だっただろうか。正社員 1 名、パート職員 5 名。あれから 10 年以上が経ち、ハローワークの求人や知人からの紹介等で、年に数人程度の面接をし、総勢 30 名以上を雇用してきた。だからこそ、ここ最近の人手不足に関する危機感、そして今後さらに著しい雇用情勢の変化が起こることへの警戒感は高い。

総務省統計局『世界の統計 2022』によれば、2020 年の日本の中位年齢（人口を年齢順に並べたとき，その中央で人口を 2 等分する境界点にある年齢）は 48.6 歳で、同資料で比較できる 37 か国中で最も高い数字になっている。こうした高齢化は、組織や管理者の側からすれば、そもそも「人を集めることが難しい（量の不足)」ことと、その組織やその業務に「適合していない人でも受け入れざるをえない（質の不一致)」という両面がある。反対に働く側からすれば、旧来であれば「入れなかったような企業に入れる可能性が高まる」一方で、「自分の能力やキャパシティを超えた業務量や立ち回りを求められる」ことになりかねない。

島根県はもともと全国で 2 番目に人口が少なく、全国で 3 番目に高齢化率が高い (※3)。このことから、人口減少の影響が日本の中でも早く実感される地域なのではないかと思っている。そういう感覚があるからだろうか。ここ数年、行きつけの店のいくつかでサービスや接客の質が落ちたような、気配り目配りが行き届いていないような、そんなことを感じるようになった。

豊かさから生まれた課題

テレビのニュースからは「格差」「対立」「分断」といった言葉をよく聞く。この言葉からは、人々の先行き不安、生存が脅かされる緊張感、過剰な防衛本能からくる攻撃性を感じる。

『暴力と不平等の人類史』の中でウォルター・シャイデルは、「所得と富の不平等」が完新世以降、生産資源の蓄積・保存およびそれに伴う社会規範の発達とともに、形を変えながら強化・増幅され、「上位 1 万分の 1」に富を集中させてきたと述べている。そして、こうした持てる者と持たざる者の格差を是正してきたのが「大量動員戦争、変革的革命、国家の破綻、致死的伝染病」といった非業の死を伴う 4 つの暴力的破壊であるとも述べてい

る。裏を返せば、平和で豊かな時世には、余剰の生産および資産の世襲により、政治権力と経済的な利権の影響の下で、富の集中と格差の拡大が顕著になるということでもある。

また、石田光規は「対立を回避するために、他者に対する批判や意見を憚り、気を遣い合うことに重きをおく社会」を「人それぞれの社会」と呼び、「人と無理に付き合わなくてもよい気楽さ」と「つながりから切り離される不安」が同居すると述べている。自身で人づきあいを選べるメリットがある反面、自分が人から選ばれないと孤立する恐れが生じる社会。こうした社会を生きる人たちに「友達といるより一人が落ち着く」にもかかわらず、「友達と連絡をとっていないと不安」が生じているという。このアンビバレントな感覚を表す言葉は、私が普段関わる子どもたちにも当てはまるように感じられる。

さらに石田は「人それぞれの社会」では、互いに関心があるようにみせつつ、つながりから緩やかに退き自らを守る「ゆるやかな撤退」をする性質と、話し相手を選び同じ意見をもつと分かっている人と「結託する」性質をもつと述べている。そしてこうした「人それぞれ」をめぐるさまざまな問題には「相手の姿があまり見えていない」「当事者どうしの対話がない」という共通点があると問題提起している。この当事者性の薄さ、相手を理解しようとする姿勢の希薄は、ものごとを混迷させ、「対立」「分断」を助長する要因となると私は考えている。

以上のように「格差」が是正されるために暴力的破壊を必要とし、「対立」を回避するために人それぞれの「分断」が起こるとするならば皮肉この上ない。そしてこうした「格差」「対立」「分断」の根底には世界が 80 億人にまで膨れ上がることを許容する「豊かさ」がある。

他者への攻撃、それは彼女にとっての防衛

この仕事をはじめて、はじめの 5 年くらいは何度か保護者さんと感情的な対立関係になったことがあった。そのほとんどは一時のものであったが、大きな事態に発展した件が 1 つあった。

かなり以前の話になるが、新入生の女子生徒 3 名と、旧来からいる女子生徒 4 名との折り合いが悪く、お互いが感情的にとげとげした状況、女子のグループにありがちな別グループを疎外するムードで教室がピリついたときがあった。私が呼びかけての話し合いでも事態の収束は見られず、立場が弱く数で劣る新入生の肩身が次第に狭くなっていった。そこで事態を打開すべく、特に攻撃性が強くイライラした感情や不満を口にしてはばからな

い女子生徒 1 人を引き離すことにした。補足であるが、このときの私はまだ、こうした女子の感情的な対立に対する理解が欠けており、お互いの緊張関係を緩め感情を収めるための落としどころが分かっておらず、そのことが事態をより難しくしてしまったと自戒している。

この 1 人の女子生徒のお母さんは入学以前から知っている関係であり、娘のこうした気難しい気質、これまでの学校でも何度も対人関係のトラブルがあったことをよく分かっていたため、今回の対応にも理解を示してもらえるものと考えていた。そして私は入学時に配布していた規約と懲戒規則に基づき、新入生への批判や非難をやめようとしない女子生徒に対して、1 週間クールダウンの時間をとり、新入生たちと距離を置いてもらうよう連絡をした。すると「なんでですか？」という強い反発とともに、その女子生徒のお母さんの口から今回の件に関する不満が次々と発せられた。私は想定外のことに困惑しながらも、後日改めて面談の席を設けることにした。

面談当日、女子生徒とお母さん、私（当時 30 代前半）と 20 代の男性職員、50 代の女性職員との 5 名で面談を行った。面談は穏やかならざる雰囲気の中で、お母さんが終始強硬な姿勢で今回の件への不満を言い、一方で私はその感情を受けながらこちらの立場や考えを伝えるという、お世辞にもいい話し合いとは言えない対立による平行線の時間が続いた。そんな話し合いが終わりに近づいたように思われる頃、おもむろに 20 代の男性職員が涙を流して嗚咽し始めた。瞬間、その場にいたほかの 4 人誰もが男性職員の涙に驚き、何が起きたか分からず時間が止まった。すぐに話し合いは再開され、しかし誰もが突然の涙の意味をよく理解できないまま、なんとなく気勢を削がれた状態となり、ほどなく面談は解散となった。

面談が終わり、私が 20 代の男性職員 Y くんと 2 人になったとき、「さっきの涙はどういう意味だったんだろう」と聞いてみた。この Y くん、私がフリースクールの運営を始めた初年度の（元）生徒であり、その後、高校を出て大学を卒業して私の誘いで働いている職員である。すると Y くんは「野中さんは今回のことで毎日遅くまで頑張ってるのに、なんでこんな酷いことを言われないといけないのかと思ったら泣けてきました」とのことであった。私はこの言葉を聞き、彼の感情に触れて、半分は困惑し、半分は毎日私の仕事ぶりをすぐそばで見て理解してくれていることへの嬉しさと有り難さを感じた。それとともに、これまで問題自体に焦点を当てて対処しようとしていた自分に気づき、多少視界が開けたような感覚を得た。

これまでの経験上、男子と女子とでは、脳やホルモンバランス、身体能力や社会的立ち位置の差異により、集団の中での緊張場面における行動や対応が異なると感じている。男

子が攻撃的になったときは、「暴言」を吐いたり「叩いたり蹴ったり」するなど直接的に怒りを表現することが多い。一方で女子が攻撃的になると、裏で根回しして「仲間外れ」にすることや、「聞えよがしに悪口や陰口」を言う間接的な手段で攻撃する場面を見ることが多い。また、男子は「競争や対戦」に馴染みやすく、「勝負事で勝ちを目指す」ことが好きで、序列を認め合いながら「上下関係の中で役割を果たす」気質がある。一方で女子は「みんな一緒」の関係が心地よく、仲間だと認識した関係性の中で同調し合い、会話を交わして「共感」を育みながら「身近な地盤を固める」気質がある。(※4) もちろん皆が皆そうとは言わないが。

つまり、私はその女子生徒やお母さんにとっての敏感なポイントを刺激していたこと、当たり前のことであるが、女子生徒もお母さんも排除されたくないのだということに改めて思い至った。そして今回のトラブルの発端、その女子生徒が新入生を疎外し、聞えよがしの陰口で追いやっていたのは、傍から見ればいじめ（攻撃）であるが、本人にとっては傷つきやすい自分が脅かされているように感じられ、その緊張や不安からくる抑えきれない感情が言葉や態度に表れた結果（防衛）であると理解した。既に手遅れではあったが、その後は面談で得た理解をもとに、傷つきやすさによる不安や緊張からくる防衛感覚を意識しつつ、事態の収束に動いた。

この経験から、なにかしらの生徒間のトラブルがあったときは、まず前提として「だれも排除しない」「みんなをファミリーとして包括していく」「一緒に考えて一緒に前に進んでく」という意志を私自身が肚に据えて事に当たっている。そして生徒たちの「責められるのではないか、怒られるのではないか、謝らされるのではないか」という不安と緊張をよそに、私はどちらにも与しないニュートラルな状態で、気楽に「これまでの情報整理」と「双方の気持ちの確認」を行うようになった。そして最後に「あなたはどうしたいの」という問いかけをし、本人たちに関係の決定権を委ねるよう心掛けている。

時代を感じながら日々を営む

これから先の日本（及び先進諸国と呼ばれている国々）において、人口減少の中でいくつもの大きな変化が起こることが予測される。ネガティブな観点からは「経済危機」「倒産や失業」かもしれないし、「大災害」とそれに伴う人員・資金・資材等の不足による対応不全かもしれない。他方、こうしたネガティブな予測を人類史の一場面と捉えたならば、格差を平等化する装置である「戦争」「革命」「崩壊」「疫病」による大きな破壊と再生の予兆と捉えることもできるかもしれない。また、先進国における人口減少とインド・アフリカを中心とした未曾有の人口増加は人類史上類を見ないことであり、世界が連携や協調を必

要とするほどに、対立や分断の火種は尽きないことであろう。

こうした世界情勢の大風呂敷を広げながら、私が島根の片隅で何ができるのかと言えば、わが身がぐらつかないように日々を営み、身近な人が孤立したり疎外されたりしないように小さな場をもつことくらいである。世界と対話し紛争解決に奔走してきたアントニオ猪木氏やカール・ロジャーズに思いを馳せながら。

＜語句注釈＞

※1　キン消し

キン肉マン消しゴムの略。少年ジャンプ誌上で 1979 年から 1987 年にかけて連載されていたキン肉マンのキャラクターを形どった塩化ビニール人形。消しゴムと名乗りながら実際にノートの文字を消そうとするとえんぴつの黒い跡が広がり、消えるどころか汚れてしまうことから、私を含め当時の子どもたちをやや当惑させ、消しゴムの定義とはなにかを考えるきっかけとなった（私見）。

※2　人口の減少

厚生労働省の人口動態統計のよると、2020 年における出生数は 84 万 835 人、死亡数は 137 万 2755 人で、自然増減数は△53 万 1920 人であり、翌年 2021 年における出生数は 81 万 1622 人、死亡数は 143 万 9856 人で、自然増減数は△62 万 8234 人である。

※3　島根県の高齢化率

総務省統計局が公表した人口推計（令和２年４月）による。島根県の高齢化率は 34.3％で山口県と同率の３位である。島根県より高齢化率が高いのは、秋田県（37.2％）と高知県（35.2％）。

※4　男性の攻撃性、競争心、上下関係

ここで触れている男性の傾向はあくまで本質的なものである。昨今の日本は、男性のアグレッシブな側面が否定されやすい社会であり、かつ高齢化によりその勢い自体の衰えもある。そのため、表向き、現代を生きる男性の攻撃的側面は抑圧されやすく、攻撃性や競争心や上下関係といった特徴は、女性だけでなく男性の中でも否定されやすい傾向にあると感じている。

＜引用・参考文献＞

原悦生（2022）『猪木』　辰巳出版

石田光規（2022）『「人それぞれ」がさみしい　「やさしく・冷たい」人間関係を考える』　筑摩書房

ウォルター・シャイデル著　鬼澤忍/塩原通緒訳（2019）『暴力と不平等の人類史　戦争・革命・崩壊・疫病』　東洋経済新報社

インターネットによる参考・引用

島原俊英（2022）『この１年で日本の人口が「島根県の人口分」減少…近い将来、地方都市の半数が消滅する見通しに真実味』幻冬舎 GOLD ONLINE

https://gentosha-go.com/articles/-/46284

総務省統計局『世界の統計 2022』

https://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2022al.pdf

かぞくのはなし

きむら　あきこ

第四話　コロナ感染！

前回に引き続き、「病」をテーマにして記してみようと思います。‘かぞくのはなし’ではなく、もはや、‘やまいのはなし’とテーマ変更した方が良いのではないかと思うほど、今年は発熱にやられてしまっています。

コロナ感染症も、これだけ広がっているのですから、自分だけはかからない、という強気もなく、いつ罹患するかわからない、という気持ちで日々、用心して過ごしていた矢先でした。仕事を終えての帰り道。妙な寒さを感じていました。北海道の 11 月は、急激な寒さと降雪が突然やってきます。「今日は、ずいぶん冷えているな・・・」位に思っていたところ、帰宅後数時間のうちに、40 度近い発熱でした。

今回は、コロナ感染後の振り返りとして、いざ感染！した時に、あって良かったこと、今後に備えるためのメモとして記してみたいと思います。

あったらいいな・・・

まず、**解熱剤**。ひとまずは、高熱を下げ体力温存。悪寒が取れたところで、大抵は、熱は高止まり。そのタイミングで解熱剤を使うのがよいでしょう。手元にあったのは、カロナールとロキソニン。まずは、カロナールを使ってみることにしました。結局、発熱は 3 日間続いたのですが、カロナールでは、解熱効果が弱め。３９度代の熱は 38 度代半ばくらいがせいぜいの効果でした。途中、ロキソニンを使うと、37 度代まで解熱しました。（とは言うものの、すぐに熱があがってしまいます。）一時でも熱が下がると体がほんの少しらくになるのです。解熱効果のある薬の使用がよかったです。ただし、発熱が三日間も継続し、解熱剤を使い続けたせいで、解熱はするものの、胃痛に泣かされました。胃薬も一緒に服用していたのだけれど・・・

夜間の熱は解熱剤でしのぎ、本番は朝を迎えてからです。案の定、発熱外来

には電話が通じません。通じたところで、発熱外来は受付終了。結局は、前回（8 月）同様、家で様子を見るだけか、と諦めつつ、札幌市が無料で提供している､コロナ抗原検査キットを娘に取りに行ってもらいました｡検査をすると、すぐに陽性反応となったので、コロナ陽性者登録センターに登録をしました。今回は、娘が検査キットを取りに行ってくれたので良かったのですが、日ごろから家に**抗原検査キットを 1 セット**位常備した置いた方が、キット良いでしょう。(ダジャレです・・・)

ついでに、**水分など**を買ってもらいました。喉が痛くて食事も喉を通らないですが、最初の発熱 3 日間は、水分でなんとか乗り切ることができました。具合の悪い時に､「栄養は大事！」と言われますが、実際には、弱っている体に無理して食べ物を詰め込んでも、消化器官も弱まっている場合も多くあります。食欲があって食べられる元気があれば良いですが、そうでない場合には、あまり食べ物を摂ることをマストとはせず、まずは、水分摂取を優先した方がよさそうです。

食材などは、札幌市が提供してくれる支援物資が、感染後 4 日目に届きました｡噂よりもずっと早く届きましたが､玄関前に置かれた支援物資が重たくて、玄関内に入れるのが大変でした。米やレトルトご飯、水分などが入っていて、非常に有難い一方、衰弱した体にインスタント食品は受け付けにくいので、手をつけることはありませんでした。

どうしても果物が食べたくなって、**ネットスーパー**を利用して食材を届けてもらいました。便利な世の中です。

そして、なんと言っても、**スマホ**は大事でした。娘たちとラインで安否確認し､励ましてもらいました｡一人暮らしは､孤独とか､寂しいとかは全くなく、むしろ他者への感染を気にせず動けるので、感染状態にある時には気が楽でした。また、自宅療養に不安を覚える人もいるかもしれません。持病や、症状悪化の恐れがあれば別ですが、そうでなければ、自宅で療養するのが一番気が楽なのではないかと感じます。余談ですが、私は、10 月に持病のコントロールのために､10 日間ほど入院加療しましたが､治療のため致し方なかったとはいえ、やはり入院生活は、様々なストレスがありました。

さて、熱が下がっても、仕事復帰には時間がかかりました。職場の体制上、10 日間の自宅療養と、PCR 検査の結果待ちで復帰日が決まりました。
熱が下がると、いつまでも寝転んではいられない。仕事復帰に向けて体を慣らさなくてはなりません。この間、時間を有意義に使うことが必要でした。必要に迫られた読み物を 700 ページほど読みこみました。まとまった時間が与えられたのは良かった、と捉えることにしました。

あったらいいな、の品は、①解熱剤、②コロナ抗原検査キット、③水分、④

ネットスーパー、⑤スマホ、⑥時間を有効に使える楽しみ、でした。

コロナ感染のあとに・・・

コロナ感染後には、体のだるさが続いています。また、オミクロン株の感染では、味覚や嗅覚障害は少ないと言われていますが、私の場合には、味覚がおかしいです。塩味を強く感じ、甘みは比較的感じやすいですが、辛味や苦みが分かりにくいです。大好きなコーヒーを飲んでも、お湯を飲んでいるようです。食事をしていても、何か足りないような、塩気が強いような、とにかくいつもと少し違うのです。何を食べても、これまでのような、「美味しい」と感じることがなくなり、結局のところ、食に対する欲がなくなってしまいました。お腹は空いているのに、食べたいと思わない、という状態で、若干痩せました。いずれにしても、これらの回復には時間が必要だと思いますので、あまり気にせず、基本的な生活リズムは崩さないようにしていこうと思います。

コロナ感染後、一番驚いたこと。それは、８３歳の母の記憶です。８３歳一人暮らしの母は元気に毎日を過ごしていますが、私のことをひどく心配していました。持病のコントロールとはいえ、10 月に入院加療し、11 月はコロナ感染で寝込んでいる、という私の状態に、「あんたは、体が丈夫な方ではないよね・・・」と言い、「一つ気になっていることがあるのだけれど。」と電話口で言いました。何のことか、と聞き返したところ、それは、私が小学３年生、9歳の頃のことでした。

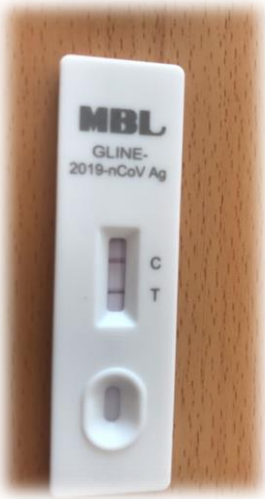
学校の休み時間に、私は、グラウンドに設置されていた「手シーソー（今はなき昭和の遊具）」で友人と上がったり、下がったりして遊んでいました。私が、空高く真上まで上がったところで、真下にいた友人が私を見上げて急な恐怖心が沸き上がったのでしょう。「こわい～」と言って、その手を離しました。私は、高いところから、地面にたたきつけられ落下です。途中から記憶はありません。どうにかして、先生に運ばれたのかもしれませんが、保健室で休んでいました。しばらくして授業に出たものの、ふらふらして体を保てなくなったところで、結局、母が学校へ迎えにきて、そのまま病院へ行きました。幸い大事には至らず、こうして今を迎えています。けれども、母は、「あの時、担任の先生がすぐに連絡をくれなかった。早く対処しなかったせいで、体に影響が出ているのではないかとずっと気にしていた・・・」と言いました。

なんという事でしょう。もう 44 年前のことです。そして、その時の出来事は、衝撃的ではありつつも、私にはほとんど影響はなく通り過ぎた出来事です。コロナ感染と、小学校３年生の頃、44 年も前の出来事を結びつける母の思考には驚きです。いいえ、思考ではなく、記憶力に驚きです。

８３歳になる母は、５０を過ぎている我が子をいつまでも思ってくれているのだな、と改めて感じました。
私は、母の一言で、古い記憶がよみがえりました。そして、やんちゃだった私はいつも元気でした。
元気な時も、そうでない時も、周りの誰かの記憶の中に、今日も生きています。

おわり

抗原検査キッドで陽性反応



札幌市からの支援物資。
有難いですね。





ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（3）

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことだと思います。技術と技能を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

対人援助学会年次大会デビューしました！

対人援助学マガジンの皆様、こんにちは！
「第 14 回年次大会@新潟」に参加することができ、たいへん光栄で嬉しかったです。オンラインではありましたが、学会ホームページの役員の皆様やマガジンでお名前を拝見していた方々のご尊顔を拝し、ご講演やコメントをお聴きすることができたことは本当に貴重な機会でした。
特に、齋藤　恒先生のお話には激しく心を打たれ、お話を伺いながら思わず泣いてしまいました。利潤追求のエゴイズムに国も企業も染まり漂流してしまう中で、長年新潟水俣病患者さん達の治療に従事されるだけでなく、その苦しみに全身全霊で寄り添い、力になって来られた先生のご研究と実践の道を語られるお声は慈愛に満ちておられました。実のところ、最初は、自分と仲間の実践と研究の成果を少しでも知っていただく機会になったらと、そのような一方的な思いで参加申込をしたのですが、大会に参加して、そのような気持ちでいたことを恥じました。これが学術大会に参加するということなのだなと感動しました。環境は違いますがロックトインという状態にあって長年通り過ぎられてしまっている方々の意思疎通支援の実践と研究をライフワークとする一人の小さき者として、でも、齋藤先生のお心に少しでも近づけるよう、精進することを誓いました。
そして！約 10 年間細々と続けてきた上述の意思疎通支援の実践が、昨年親友が繋いでくれた縁で、一つの技術の開花のきっかけとなったことを大いに喜びつつ、この度、開発者の仲間を筆頭発表者として、ポスターセッションに参加することができました！

「脳卒中片麻痺者の麻痺側上肢操作に基づく意思疎通支援装置の有効性評価」

初めての大会参加で、筆頭発表者の岡田さんとは、「質問してくださる人いるかなあ」とドキドキしていたのですが、たくさん質問やコメントをお寄せいただき思わず興奮してしまいました。そして、意識があるのにそれが伝わらず苦しんでおられる方々に思いを馳せ、研究に温かい関心を示してくださり、研究の意義を評価
してくださるコメントに感激してまた涙。大会って感動と感謝の涙と共にあるのだと、大会っていいなーと思いました。また、今回の発表のために快く協力してくださった脳卒中後遺症による片麻痺の方々が、「いつも支援してもらう立場の自分たちが、楽しい上に研究に参加して役に立て

るのはすごくうれしいことだ」と言ってくださったことは本当に嬉しかったです。この発表実績を協力者の皆様と共に誇りにしたいと思います！

筆頭発表者の岡田さんと、共同発表者で今回いろいろアドバイスをくれた増尾さんからコメントです。

岡田浩さん
第 14 回大会に参加させていただきありがとうございました。
また、当日はたくさんのご質問やコメントを頂き「開発を行って良かった」と、とても励みになりました。
興味を持っていただいた方、今回の研究発表にご協力いただいた脳卒中後遺症者の方ありがとうございました。
また、現在ご協力いただいている当事者の方、ご協力ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。
自由な意思疎通を目指しましょう！
まだ課題もありますが、使う方が喜んでいただけるような製品にしたいと思います。

増尾明さん
岡田さん、高木さん、学会発表お疲れ様でした。
これまでの地道な取り組みが形となったことを大変嬉しく思います!
これからも課題解決を重ね、実用的なツール化に向けて取り組んでいきましょう！

ヨミトリ君プロジェクトの公式サイトができました

ヨミトリ君プロジェクトとは、「オリジナルの意思疎通支援装置（愛称：ヨミトリ君）を用いて病気や事故等の後遺症による麻痺等の運動障害で意思疎通が困難になった、いわゆるロックトイン・シンドローム（以下ロックトイン）の状態にある障害当事者の方々を支援、交流する非営利の事業（活動）」と定義しています。
本プロジェクトのコンセプトを考えた時に、対人援助学会の学会スローガン「研究だけに留まらない　実践だけにも留まらない」が大きな指針となりました。
意思疎通支援は、ヨミトリ君による科学的検証のみで完結しない。
ヨミトリによる当事者との対話だけでも完結しない。

・先ずあるべきは障害当事者の「必ず言葉は届く」というあきらめない気持ち
・ご家族・支援者の、「私たちの大切な人は、絶対にわかっている・意思を表出している」と信じる気持ち・そして日々の気づき
・ヨミトリ君（技術）による支援、検証と証明
・ヨミトリ（技能）による介助付きコミュニケーション（対話）



この4つの連携、相互補完をダイアモンド・フォーメーションと称し、
4 点しっかりとつながりながら、各分野の専門家・研究者の方の助言をいただきながら、一丸となって、意思表出に全力で取り組む。この思いを胸に、プロジェクトを推進していく。その発信の場として、ヨミトリ君プロジェクトのホームページを開設しました。ヨミトリ君プロジェクトの説明図を作成してみました。ご覧ください。

ヨミトリ君プロジェクトのホームページは、ヨミトリ君開発者でヨミトリ君プロジェクトリーダーであり、第 14 回大会ポスターセッションで筆頭発表者を務めた岡田さんが代表を務める一般社団法人愛知情報教育支援協会のホームページをプラットフォームとしています。
今後、当事者、ご家族のご賛同・了承を得ながら、支援事例の実際を積極的に公開していきたいと思います。
ヨミトリ君プロジェクトホームページをぜひご訪問ください！

ヨミトリ君HP
http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitol-kun-project/

東海地区遷延性意識障害者と家族の会ひまわりとの連携が始まりました

本年 7 月に、東海地区遷延性意識障害者と家族の会ひまわり（以下「ひまわり」）に正式に入会しました。ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（1）で書いたように（p.309, l.15）、2013 年の 9 月に初めてひまわりの行事に参加して以来、気が付けば 9 年が経過していました。この間のヨミトリの実践の積み重ねにより、ロックトインの状態にある方にヨミトリによって意思疎通の一定の効果をあげられる確信は持ちつつありましたが、そうは言っても、ただ「意思の表出をお手伝いできます」「チャンスをください」と叫んだところで、「はい、ではヨミトリお願いします」と簡単にご依頼いただけるわけはありません。
そこでも、意思疎通支援装置ヨミトリ君の登場は効果絶大でした。本年次大会のポスター発表にも記載した本年 3 月の脳卒中片麻痺者を対象としたヨミトリ君体験会のリハーサルに、ふと思い

立って、ひまわりの代表の外山敏和さんに見に来られませんかとお声掛けしてみました。外山さんとは、2013 年のひまわり講演会の際に、初めて参加して緊張していた私に気さくに話しかけてくださったのをきっかけに、以来、たまに、ふと思い出した時にちょっとメッセージをお送りして、といった程度のお付き合いでしたが、3 月の体験会リハーサルの時に、なぜか、「外山さんをお呼びしなさい」という声がどこかから聞こえたような気がして、でも迷ったりしながら結局、思い切って連絡したのがリハーサルの前日でした。非常に多忙でお仕事で全国を飛び回っている外山さんがたまたま名古屋におられて、たまたま翌日少し空いているお時間があった、奇跡のようなタイミングでした。
岡田さん、増尾さんとも会っていただき、ヨミトリ君の説明をし、私のヨミトリの今のレベルとどのように取っているかを聞いていただきました。これが今年の一つの大きな転機となりました。
7 月にひまわりに入会後、定期的に開催されているオンラインでの会員交流ミーティングで、折に触れヨミトリやヨミトリ君による支援事例をご紹介していたところ、ミーティング参加者の有志の方数名にヨミトリ君プロジェクトに体験参加していただく企画が立ち上がり、11 月から協働の取り組みが始まりました。
結論を先に言うと、病気や事故による後遺症で遷延性意識障害と診断された方、それぞれ診断を受けて、7 年、14 年、18 年の 3 名の方、いずれも初回でヨミトリ君のパネルスイッチを操作でき、ゲームも楽しまれた方もおられました。そしてヨミトリでは全員意思疎通ができ、特に意識障害歴 14 年と 18 年の方とは、たくさんたくさんお話しできました！
とにかく当事者ご本人がご自身でパネル操作をできることに先ず驚かれ、、そしてヨミトリで「とてもうれしい」「たのしいなー」と書いてくださり、同席したご家族にもたいへん喜んでいただけるという、支援者として至福の展開が、ずっと続いている状態です。
そして、そして！この明日は 2 回目の体験という日の前日、驚愕のニュースが飛び込んで来ました！

実は、その「前日」というのが、マガジン投稿の締め切り日でした。驚愕のニュース、衝撃の真実は、「翌日」の体験時にしっかり検証して、次回の「ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しましょ！（4）」でレポートします。
どうぞお楽しみに！

ご一緒しましょ！

*****
<プロフィール>
インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。コミュニケーション支援の任意団体「ご一緒しましょ」代表。脳卒中障害者のいきがいづくり「NPO 法人ドリーム」理事。「東海地区遷延性意識障害者と家族の会 ひまわり」会員。第 52 回 NHK 障害福祉賞優秀賞。
ご一緒しましょHP https://www.goisshoshimasho.com/

先生のための16のことば

第2回　「教師は何の専門家？」

スクールアドバイザー　原田　孝

学校の先生方の業務は、非常に多種にわたります。授業をするのはもちろんですが、教育の目的が子どもたちの成長発達の支援という認識ですので、成長発達に関わることがすべて業務ということができます。いじめや不登校、虐待やネグレクトのご家庭への対応、ある時はカウンセラーのように話をきいてあげないといけません。また、ある時は様々な行事で荷物を運んだりテントを立てたりします。旅行の際は旅行業者のように子どもたちを連れて名所めぐりもします。盗難や器物破損があると警察のように捜査をすることもあります。進路の相談、将来の相談、家庭での出来事などを聴いてあげないといけません。このように先生に求められるスキルは多岐にわたるのです。

一方、教育現場では多くの種類の研修があり、これらはそれぞれの部署に紹介されて、それぞれの担当の方が研修にゆかれます。そして特定の専門的なスキルを身に付けることとなります。進路ならこの先生、生活指導ならこの先生、カウンセリングならこの先生、教務ならこの先生というように専門性がここに生まれてきます。

そこで、このような質問を先生方にしてみましょう。

「教師は何の専門家？」

このような質問をされると、当然のことですが「教育の専門家です」という答えが返ってくるでしょう。教育はいいかえると、子どもの成長発達を支援す

る仕事ですので、教師はその専門家ということになります。では、先生方は子どもの成長発達の理論をどこまでご存じなのでしょう。

保護者さんが不登校や反抗で、おうちでの対応に困られたとき先生のところに相談に来られることはよくあります。その時の先生の答えとしてよく見受けられるのは、例えば次のような言葉です。

「思春期は難しいですからね〜。私たちもよくわからないのですよ。ご一緒に考えましょう」

と答えられる方とか、また他には、

「以前によく似たお子さんがいらっしゃいました。その時に保護者さんはこのようにされていましたよ。」

と経験をもとに対応をアドバイスされる方などがよく見受けられます。

この相談に対するベストなアドバイスはそれぞれのケースで異なり、これだというものはありません。ただ、それぞれのケースへの正しいアドバイスへと導く対応は在り、それは以下のようなものでしょう。

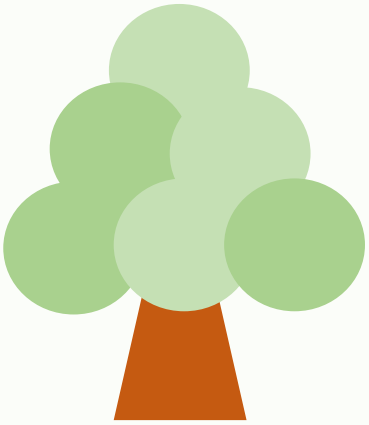
「もう少し、詳しく聞かせてください」

と情報をできるだけ多く聴かせていただくことでしょう。

さて、ここで先生方は、この話をよく聞くという対応をされた後に、どのように分析して、対応をアドバイスされるのでしょう。このアドバイスまでが先生方の仕事なのですが、この分析の前の段階、つまり情報を聴くだけで止まってしまう方が多いかもしれません。ここに教師の弱点が見えてきます。

子どもたちの成長発達の理論をあまり理解されていない方は、その情報からの分析と適切なアドバイスができません。そこで、その弱点をカバーするために、その先生方の中には上記にあるような専門性を身に付けて守りを固められる方がいらっしゃいます。もしかするとそれが教師としての成長が遅くなる理由なのかもしれません。

教師として、一番はじめに身に付けるべき専門性は「子どもの成長発達の専門家」としての専門性ではないでしょうか。



こかげのにちじょう②

～二人で協力してマンガ家になろう～

鳴海　明敏

11 月某日

小学 6 年生の美華さんと、中学 2 年生の志野さんですが、これまではそれほど仲がいいわけではなかった二人が、このところ急接近しています。

聞いてみると、「ちゃお」というマンガ雑誌が作品を募集しているので、二人で協力して応募するのだということです。そして、将来は、学園を出て高校を卒業して、専門学校でマンガの勉強そして、その後は、二人で同居して、マンガ家として生活して行くのだそうです。さらに、「ちゃお」の募集に向けて、ホラー系と恋愛系の二本の作品を作り上げて、応募することして、ストーリーは美華さんが担当し、絵は志野さんが担当すると、二人の役割分担もできているようです。

二人の普段の様子から、この関係がいつまで続くのかなあと思いながら、子どもたちから自分の「将来の夢」について聞くことが少なかったので、とても嬉しくなりました。

11 月某日

今年の 6 月から 7 月にかけて、入所児童や職員にコロナ陽性者が次々出て、保健所からクラスター認定されてしまいました。陽性児童については、小さくとても狭い施設なので形式的な対応だったのですが、施設内で隔離対応をしました。一方、元気なこどもたちは、行事の中止や活動の制限で、我慢を強いることになりました。

陽性になった職員は、自宅待機ということなので、その分勤務出来る職員には無理を強いることになってしまいました。職場で陽性の子どもたちに対応することになるので、自分の家族への感染を避けるために、ホテルから職場に通勤するようにした職員もいました。

なんとかして第 7 波をやり過ごして、ようやく落ち着いてきたところだったのですが、現在高校生の男児が一人陽性になり、施設内で隔離生活をしています。また、家族から感染した職員が一人自宅待機しています。

ニュースでは第８波という言葉も聞かれるようになりましたが、なんとかこの程度で収まって欲しいものだと、祈るような思いで生活しています。

11 月某日

小・中学生は、市立小・中学校の分教室に通っています。分教室では、給食を提供して貰えているのですが、お願いしているのですが、修学旅行はまだ実現していません。小学校６年生と中学３年生は、「学園旅行」と称して、小学生は日帰りで、中学生は一泊に日程で、職員と一緒に県内の近場に旅行しています。

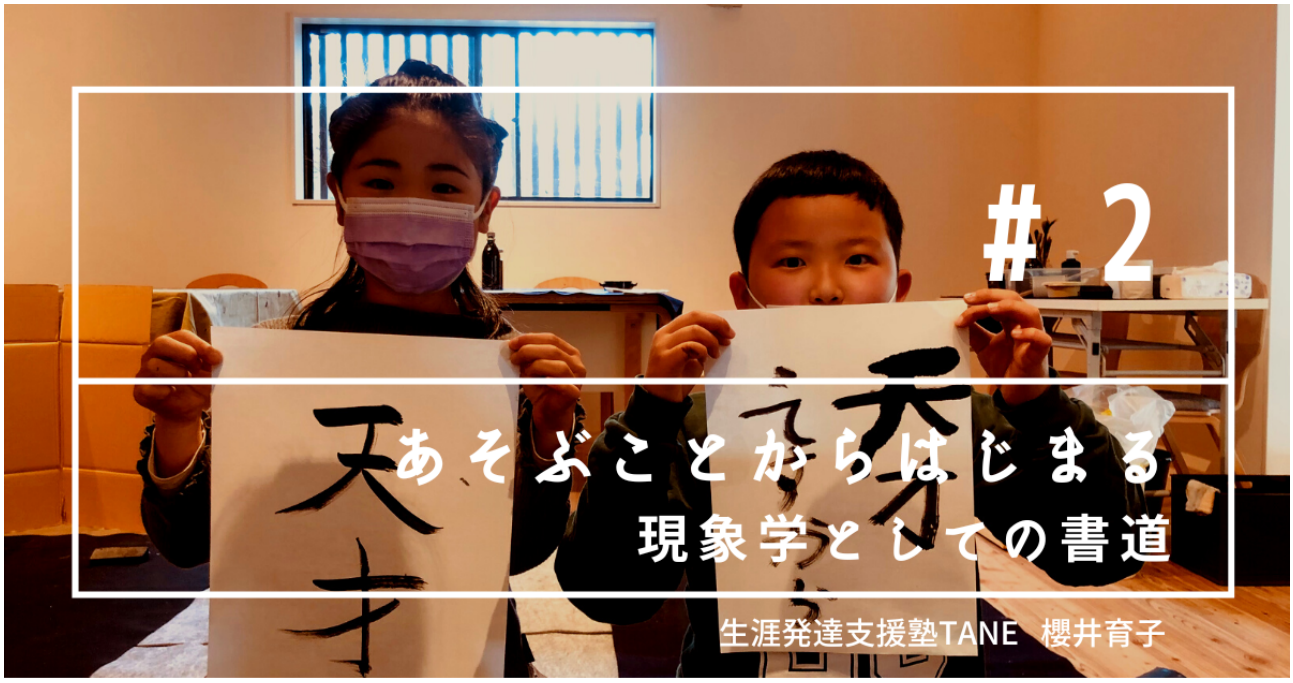
11 月某日

夕べの宿直職員から、夕べはとても穏やで段階①だったと報告があった。学園では、午前、午後、夜間と一日を三つに区切って、その時間帯の子どもたちの全体的な印象を記録して、申し送りで報告してもらっている。その評価は、その時間帯に勤務していた職員の”個人的な・感覚的な印象“で、「平穏で、落ち着いており、楽だったー①」から「とてもとても大変だった⑤」までの５段階で評価してもらっている。

毎日のように、誰かがイラついて暴れたり、仲良く遊んでいたのにこじれて衝突したり、椅子が倒され机の上のものがぶちまけられたり、ドアを蹴り外されたりということがあり、勤務する職員は大変なのだが、それぞれ職員が感じる大変さには、かなり大きな個人差があるだろうと思っているので、このような“個人的な・感覚的な印象”による評価を採用している。

どういう風の吹き回しなのか、とっても穏やかな“無風状態”が出現するときがある。子どもたちの顔ぶれなのか、職員の組み合わせなのか、それらの相乗効果なのか、その辺の仕組みが分かればいいなあと思っているのだが。

（了）



はじめに

「書道塾taneのすみあそびワークショップ」は、全国どこにでも荷物を担いで移動している。とはいっても、宮城県内がほとんどで、これまでには東京、山形などにちょこっと。「教えない書道」「誰でも調子に乗れる書道」などとは言ってもイメージが掴めない。「書道」というのがちょっと抵抗があるのかもしれないな、と思い、結局のところはまず「あそび」なのだいうことで、「すみあそびワークショップ」という形で落ち着いた。ワークショップなので、指導者がいるのではない。そこにいるのはファシリテーターであるから、自分のことを「書道ファシリテーター」と言うことにした。あそびの場における、ファシリテーターの役割も含めて、この場で何が起きているのかを、考察してみることにする。

あそび足りない！

新しい道具を見たときに、人はどういう反応をするのか。「さあ、自由にやってみていいですよ」という声掛けに、本気で自由になれる人は本当にごくわずかである。もちろん、こだわりが強かったり、見通しが立たないと不安になるという特性の持ち主に対してはある程度、レクチャーやルールが必要だからそれが前提ではある。しかし、いわゆる「おとな」で、文字も書ける、習字体験のある人にとって、筆を目の前にして「さあ、自由に！」が最もハードルが高い。書道塾taneの展示を見に来た人たちは、口々に言う。「ああ、のびのびとして、自由でいいですね！」。それなのに、自分がいざ筆を持ってみると、どうもそれができない。

特別支援学校には「遊びの指導」という授業がある。学生時代に学んだときはその言葉に違和感を覚えた。遊びはそもそも自発的なものなのに、なぜ指導なのだろう、と。熱心な学生だった私は、その中で「遊び方」を教えることはもちろんだが、本人にとってそれが遊びなのかどうかを、よく見極めたり、そこに少しのきっかけを与えることで本人の自発的な行為が増えていく、というようなことを学んだ。当時はまだなじみの少ない言葉だった「ファシリテーション」という言葉も、そのときに出会った。本人がまず何をしたいのかを見つめる、そしてそれが円滑に、あるいは本人の望んだ方向性に向かったり、さらにはもっと楽しさを導くような、かかわり。そこで出会う「ひと」と「もの、こと」の重要性について、自分のテーマとして大事にしてきた。ところが、やはり問題なのは「おとな」である。遊び方を知らない。知らなければ知らないでいい

のだが、知らないのに教えようとするから大変である。固定化された遊び、子どもが遊ぼうとすると、止めてしまうという現象がさまざまなところで見られる。遊び足りないのは「おとな」である。だから、「さあ、自由に！」ができないのだ。

あそび切る！

「すみあそび」の現場では、やりたいことをやりきってもらう。たとえば初めて墨をみた子どもは、その真っ黒い墨液そのものに関心を持つ。「わあ、まっくろ！」と叫ぶ。筆は、「ふわふわだ！」と言ってそのまま触る。この段階での道具との出会いが本当に大事だ。ふわふわしている、動物の毛なのかな、これで書くのか、黒いのつけたらどうなるの、頭の中にはそういう疑問で溢れている。世界との出会いの瞬間。「驚き」や「感動」で埋め尽くされているときに脳は最も柔軟に、創造力を掻き立てられている。もう頭の中は、「やってみたい！！」に支配されているのだ。だからこそ、その瞬間にやってみたいことを実現してもらう。待ったなしである。啐啄。ここで「やりたい」と思ったことを自分で実現することは、「やりたい放題させる」ということとは違う。たとえば学校の習字の時間には決してできないような、「手と足形をとる」という子どもたちが大好きなあれ。「やってみたい！」と言ったら、そのためにいそいそと用具を準備し、こちらがもうそれはそれは壮大な思いつきだね！これをやりたいなんて最高じゃん！と一緒にワクワクしながら手伝う。「わあ、冷たい」「ちょっと気持ちいい」「まっくろだ」と自由な言葉を聞きながら、大事な拓本でもとるかのように丁寧に一緒に手形を取る。「最高の作品だね！」と言葉をかける。あの達成感のある笑顔が最高だ。そのあと待っている「手と足を洗う」という作業が、その達成感で満たされた子どもたちは苦にしない。「ああ、楽しかった」という余韻の中でせっせと自分の手足をきれいにしていく。さらには、後片付けや、あいさつまでもが、丁寧になっていくのだ。もはや、何かの儀式のような、静けさのある、それでいてのびのびとした自由な遊び。こうしてあそび切った子どもたちは、どんどん自分の好きなことに夢中になっていく。

おとなのあそび場の重要性

大人こそ「遊びの指導」が必要かもしれない。そう思うようになって始めたのが「OTONA書道」の時間であるが、実は指導など必要はなかった。書道塾taneの特徴である、多様な人が集うという場は、そもそも他者の枠組みを外す遊びの要素がたくさん含まれている。つまり、障害があったり、年齢が違ったり、興味関心が違ったりすることが、他者にとっては重要な刺激となり、「こんなことをやっているんだ」「つぎはそれをやってみよう」という、書を通した双方向のコミュニケーションが成り立つ。大人は「何を書いたの？」と問いがちだが、自由な彼らとともに書いているうちに「書く」という行為そのものを楽しんでいる自分に気がつく。書家の石川九楊は「誰も文字など書いてはいない」（二玄社）という本の中で、「書きぶりを書く」と表現している。私たちが本来持っている「書く」ことへの欲求に、さらに注目してすみあそびを展開していきたい。

櫻 井 育 子（生涯発達支援塾TANE 代表）
宮城県在住，1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。
「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。
「つなぎめを学ぶ講座」，「旅する書道塾tane」も開催中。http://ikuko-sakurai.com

社会教育の周縁

（１）社会教育って何だろう？

山本 竜司（社会教育主事／社会人大学院生）

「社会教育」って何だろう？

身近なところでいえば、PTA や子ども会などは社会教育団体であるとされる。また、NPO の活動分野（特定非営利活動の種類）の一つに、「社会教育の推進を図る活動」が挙げられている。しかし、他にも、「まちづくりの推進」、「学術、文化、芸術又はスポーツの振興」、「環境の保全を図る活動」、「人権の擁護又は平和の推進を図る活動」、「国際協力の活動」、「男女共同参画社会の形成の促進を図る活動」、「子どもの健全育成を図る活動」なども挙げられている。それらと、「社会教育」は何がちがうのだろうか？

私は、地方自治体の社会教育主事として 20 年余り働いてきたが、いまだに「社会教育とは何か？」という問いに対してスッキリと答えることができない。いわんや、社会教育の専門職ということになっている「社会教育主事とは何か？」について質問されるといまでも困ってしまう。自己紹介すると、「ああ、社会（科）の先生ですか」などと言われる始末である。

法律上、社会教育とは、「学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエ

ーシヨンの活動を含む)」(社会教育法第２条）と定義されている。つまり、「学校教育以外の全部」というわけである[1]。定義がこんなわけだから、社会教育を明確に説明することが難しいのは当然と言えるかもしれない。ちなみに、社会教育主事の職務は、「社会教育を行う者に専門的技術的な助言と指導を与える。ただし、命令及び監督をしてはならない」(第９条 3）とされている。これまた具体性に欠ける内容である。当然、社会教育に、学校教育のような学習指導要領があるわけでもない[2]。よくいえば多様性に富んでおり、わるくいえばあいまいでわかりにくいのが社会教育の特質といえるかもしれない。

ずっとそんな悩みを抱えていた私は、「社会教育ってなんだろう？」という問題に挑むため、社会人大学院の門を叩いた。いまでも厄介なテーマを選んでしまったと煩悶している。大学では当然ながら、学術的な作法に従った論文を書かねばならない。しかし、そういった作法で表現できる前段階のさまざまな思考を大切にしたいと私は思っている。本連載をその場とさせていただければ幸いである。本連載は、時々のトピックや様々な視点を取り混ぜ、社会教育の「周縁」を行ったり来たりしながら、社会教育の本質に迫ろうという試みである。対人援助にどう関係するかは追々ふれていきたいと思う。

---

[1] よく似た言葉である「生涯学習」と異なる点は、生涯学習は個人の学習活動に重心があることに対して、社会教育は「組織的な教育活動」に重心があるという点だと考えてよいだろう。

[2] ともに「教育」がつくが、社会教育は学校教育のレプリカではない。しかしながら、地方自治体の教育委員会に置かれる社会教育主事は、教員籍（公立学校の先生）からの任用というパターンが多い（ちなみに筆者は教員籍ではない)。

コソダテ ノ シンリ Vol.1

中谷陽輔

コソダテ ノ シンリ？

心理学を専攻していた学生時代、友人がよく「心理の真理は、心裏を審理することや！」と言葉遊びをしていました。本稿のタイトルがどの“シンリ”なのか‥については さておき（その一文の意味が真実かどうかもさておき）とりあえずはその時々による、ということにしておきたいと思います。

そんな少し曖昧さのあるタイトルを冠して、対人援助学マガジンが記念すべき第50号の節目を迎えた後に、そっと新連載を始めたいと思います。

かたや”コソダテ”について、漢字変換をすると、「子育て」が真っ先に出てきます。一方、いつから誰からともなく、「孤育て」と示すこともでてきています。ということで、本連載のタイトルにある”コソダテ”については、子育て（孤育ても含む）ということで、曖昧さは比較的に少なそうです。

一人で子育てを行うということ

「ワンオペ育児」という言葉が『2017 年ユーキャン新語・流行語大賞』にノミネートされてから早 5 年が経過しました。2014 年、ある飲食チェーンで深夜労働をすべて一人で行う勤務、いわゆるワンオペレーション勤務が常態化していたことが報道され、「ワンオペ」が注目されました。そこから、親（多くの場合、母親）の片方一人で子育て負担を背負って行っている状態を「ワンオペ育児」というようになったようです。

個人的に、「ワンオペ育児」という言葉は、もう一方の親を批判するニュアンスが含まれているように感じられるため、あまり好きではありません。

「ワンオペ育児」という言葉が浸透するもう少し前から、核家族化や少子化が進む現代日本において、家族や親族の協力が得られず近所との付き合いも希薄な状態、いわば子育てが孤立化した状態が、「孤育て」と示され、問題視されてきました。

その状態自体は、親子それぞれにとって、できるだけ解消に向けて考え、手立てを講じていった方がいいと考えられます。

進化心理学的に、ヒトはそもそも、共同養育のスタイルで子育てをするようにできている、という言説があります。ヒト以外の霊長類では、他の個体が長期間にわたって子どもを育てるということ自体がほとんどなく、共同養育というのは、ヒト独自の進化の過程で獲得されてきたようです。ヒトの進化の歴史を読み解くまでもなく、大家族や地域に支えられながら子育てを行うということは、日本に限っても昭和時代ごろまでは、一般的な光景であったかと思います。

また神経心理学的にも、女性ホルモンの一つである「エストロゲン」は、女性が妊娠し出産まで増加するのに、出産後に急減し、その結果として女性（母親）は、母乳の分泌が可能となる一方、強い不安・孤独を感じやすくなることがわかっています。一見、赤ちゃんのいる母親が、ホルモンの影響とはいえ、精神的に不安定になるというのは、その赤ちゃんにとって生存の可能性が低くなるように感じられます。ただそういった母親のもとで育った子どもが、ヒトの進化の過程で生き残ってきたからこそ、そういったホルモンの働きもまた、残っているのです。

その事実への解釈の一つとして、出産直後の母親に代わって子どもを養育したり身の回りのことを行う人がいる環境、いわば、母親が孤立しなくてすむ、共同養育が可能な環境が、ヒトの生存に不可欠だった、ということができます。

ある 40 代男性（以下 Cl）の事例

ここまで、「コソダテノシンリ」というタイトルの説明を兼ねて、「孤育て」について、心理学的にも理にかなっていない根拠を示してきました。

そこで、ある一つの事例を紹介したいと思います。

・主訴：子育てに苦労している人をみると、感情が大きく揺れ動いてしまう。
　そんな自分がどのように子育てに向き合うとよいか、話し合いたい。
・家族構成：4 人家族。妻（病院勤務の専門職・正社員）と共働き。未就学児が2人。
・Cl の原家族：父は元・大手企業の技術者。母はパート。父母ともに同一の他県出身（車で片道 2～3 時間の距離）。Cl は4人きょうだいの第2子。現在、父母・長子・Cl は関西在住（それぞれ別世帯）、第 3・4 子は結婚してそれぞれ関東在住。
・成育歴・経過：X-40 年頃、関西で出生。Cl が幼少期～思春期頃まで、父が他県へ単身赴任（車で片道 6～7 時間の距離）。その間、母は一人で家事・育児を担う。X-20 年頃、大学生となった Cl は心理学を専攻し、家を出て一人暮らしを始める。大学院に進学後、臨床の仕事を非常勤で始め、X-10 年頃、研究の道から子ども福祉臨床の現場へ（現職）。妻とは非常勤先で出会って交際がスタートし、Cl の就職を機に結婚。2人の子どもを授かり、Cl は、それぞれの出生に合わせて育児休業を取得。

この Cl は、幼少期から4人を「孤育て」する母のもとで育ちました。そして現在、仕事でもプライベートでも「子育て」と縁深い生活で、頭の中の大きな比重を占めているようです。主訴にあるように、どうやって“コソダテ”と向き合うかということ自体、Cl の重要なテーマになっていそうですよね。

・・・そんな Cl が私です。連載を通じて、自分なりの“コソダテノシンリ”と向き合っていきたいと思います。改めまして、宜しくお願いいたします。

【参考文献】

- 浜屋祐子・中原淳（2017).『育児は仕事の役に立つ：「ワンオペ育児」から「チーム育児」へ』. 光文社
- 明和政子（2013）. 霊長類としてのヒトの子育てを考える 日本心理学会(編) 心理学ワールド第 62 号(特集 みんなで子育て 心理学からの提言)日本心理学会, pp.9-12.
- NHK（2016）. NHK スペシャル『ママたちが非常事態!?：最新科学で迫るニッポンの子育て』 ＜https://www.nhk.or.jp/special/mama/archive1.html＞(最終閲覧日 2022 年 11 月 22 日)

＜プロフィール＞
児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。
大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、早 10 年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育てまみれの日々を送っている。
プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。
(https://childcare-support.hatenablog.jp/)

《特別連載》

家族面接の実践から里親家族支援を考える

その１　ジェノグラム フリートーク (Zoom 開催)

早樫　一男

坂口　伊都

千葉　晃央

大谷　多加志

《はじめに》

「ジェノグラムを活用した相談面接入門（中央法規出版　2021 年 7 月)」に携わった執筆メンバーを中心に、家族について理解を深めようという趣旨で「ジェノグラム　フリートーク」を実施しました。誌上に載録しましたので、読者の皆様も、《ステップ》ごとに、ぜひ参加ください。

【参加メンバー】

進　行　：早樫一男（京都大和の家）
事例提出：坂口伊都（家族関係支援・相談援助　憩都）　サポート：千葉晃央（京都光華女子大学）
コメント：古川秀明（ふるかわ家族カウンセリング研究所）　興津真理子（同志社大学）
　　寺本紀子（寺本社会福祉士事務所）　中谷陽輔（京都大和の家）

《ステップ①》

□家族情報から考える　「父　30代後半　母　40代半ば　長女　中学 2 年　長男　小学 6 年」
◆読者のみなさまも、まずはこの家族情報からこの家族について思いを巡らせてください。

進：家族情報からまずは考えてください。ちなみに、父と母の年齢差はどれぐらいですか？
提：５歳ぐらいです。
Ｏ：ご夫婦が 5 歳ぐらい離れていて、母が上というのが、「ほぉ」という感じになるなぁと思いました。
Ｔ：母が再婚なのかなって…。二人の子どもたちを連れて、5 歳ぐらい年下の男性と再婚したのかなと思いました。
Ｎ：父が若いなと…。T さんの話を聞いて、再婚と言われればそうかもしれないと思いました。私も同世代ですが、中学生の子どもがいるって結構少なくて…。

Ｆ：どれぐらい前の時点での情報なのかが気になりました。年の差については、今の家族だったら違和感ない。10 年ぐらい前なら意味合いが変わってくる。20 年前でもまた意味合いが変わってくる。父が 20 代半ばぐらいで長女が生まれたというのは、今だったら早いのでしょうね。僕らの時代だったら、割とあったかなという感じもする…。

《ステップ②》

進：「この家族情報はどれぐらい前ですか？」という質問がありましたが、今から 9 年前ぐらいです。この時期に養育里親として、子どもを預かってみようという話が出てきたとのことです。

◆この追加情報を聞いて、読者のみなさんはどのようなことを思い浮かべますか？

Ｆ：長女、長男も養育里子の可能性もあるということでしょうか？

提：里子ではないです。実の子どもさんです。

Ｆ：誰が主導で養育里親のことを決めたのか、父と母と二人で決めたのか、母がやるって言うんで、父もそれに賛成したのか、決定権に興味を持ちました。

進：家族の中の決定権はどう思いますか？

Ｆ：年齢差から見たら、決定権は母みたいな感じはします。父は「君が決めるなら、それでいいよ」みたいな感じかな。子どもたちがどういう意見を出すのかも興味深い。長女は思春期でしょう。長男も思春期を迎える時期なので、いくつぐらいの子を里子として預かるかというのも課題と思う。それに、家族の相談力と言うんでしょうかね、ものすごく必要になると思います。反対する人は一人もいないのかとういうことも気になりました。

進：決定権や子どもらの思いが話題になりました。他の人はどうですか？

Ｔ：母が思って、家族に相談したと思います。母が可愛がっていた後輩が病気で亡くなって、その人の子どもが施設に預けられるという話になっているのを聞いて、「養育里親を始めて、その子を育ててみたい」と母が言い出した物語を想像しました。というのは、「里親を始めたい」というのは突然、言い出す話でもないから、何か強烈な出来事があって決心したというか、一大決意をして家族に相談したのかなと…。

Ｆ：今の仮説は素晴らしいですね。物語性があって、その続きも聞きたくなりました…。

進：なるほど。母の思いというか、物語があったんじゃないかと…。

Ｏ：私も母かなって考えたんですけど、父からというのはどんな時にありうるだろうかというのも考えてみました。例えば、専門職で働いていて、里親に関心を持っておられて、「是非この機会に！」という強い希望を持たれたということもあり得ると思いました。子どもたちはどんなことを思うのかなと考えると、「男の子がいいとか女の子がいいみたいなことを言ってもいいのかな」「何歳ぐらいがいい」「子どもの希望はどれぐらい反映されるのだろうか」など、思いそうな気もする。また、「どうなるのかな」と、子どもたちの気持ちはザワザワするなって思いました。

進：迎え入れる側の子どもとして、自分たちの意見はどんな風に伝えたらいいのかと思うかもしれない。子どもたちは、どんな希望を持つと思いますか？

Ｏ：どうですかねぇ。自分より小さな子が来るとイメージするかなぁ。「そうだといいな」と思いそうな気がします。自分たちより上の年齢とか近い年齢の子が来るとかは思いもよらないという感じがしました。

Ｎ：母がパワーを持っていそうなイメージがありました。その理由として、再婚でなければ、父は２０代半ば、母は 30 歳前後に結婚。その後、出産とすれば、母がパワーを持っていそうと思った。追加情報で 9 年ぐらい前という事でしたが、その時期に養育里親を知っているということは、何らかの専門性がある方なのだろうなぁと思いました。里親って、養子縁組を前提に、「お子さんが欲しい」というのが多いと思う。「養育里親

を始めたい」と相談されているということは、母には何らかの思いがあるからなのかなぁと…。また、母は里親のことも説明する力があるのだろうなぁと…。母が家族に相談するってことは、相談が受け入れられる見込みがあった家庭というか、家族の仲は悪くないのかなとも思いました。

進：突然ですが、提出者やＣさんにここまでの感想を聞いてみようと思います。

Ｃ：人柄とか人格とかじゃなくて、いろんな環境が重なった中でどう生きるかみたいな感じで、人って生きているのかなあということを思いながら聞いていました。

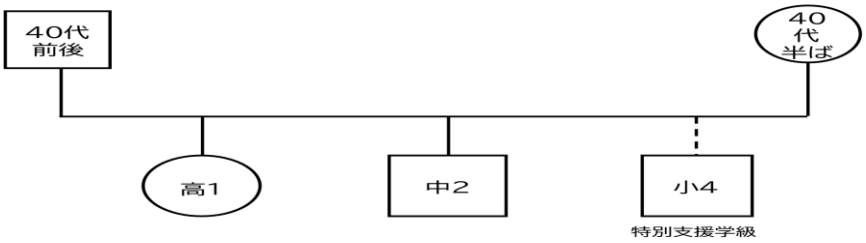
提：面白いなぁと思いながら聞いていました。２０代半ばの父と 30 歳前後の母。母にパワーあるというのが、なるほどねと思いながら聞いていました。子どもたちは自分たちよりも年下という条件を出したと聞いています。

進：みなさん、ありがとうございます。実はここまでは、準備運動みたいなもので、ここからが本番です。ジェノグラムを見ていただいて、いろいろと思いつくことを喋ってもらおうと考えています。

《ステップ③》

◆読者の方も次のジェノグラムを見ながら思いを巡らせ、さらに各コメントにも目を通してください。

ある家族に思い巡らせる



提：このご家族に里子が来た時期のジェノグラムです。小４（9 歳）の里子は特別支援学級に在籍です。

進：ステップ①の情報の時期から 2 年余り進んでいます。里親の認定前研修や認定、里子の候補との出会いや交流などがあり、実際に里子を預かった時点でのジェノグラムです。このジェノグラムを見て、父、母、長女、長男、里子、それぞれの思いや家族全体について思うことを喋ってください。

Ｏ：里子は実親とはもう会わないという感じですかね？

提：親御さんとの交流は、ほとんどなかったそうです。

Ｏ：里親宅と実親宅を行ったり来たりするのは、結構複雑過ぎて、しんどいなと思いましたので、ずっとここなんだという方が里子自身の安定感、安心感が確保できるのだろうと考えました。一方で、上の二人がどんな気持ちでいるのかと思うと、里子とどう関わるかといった戸惑いもあると感じました。子ども三人は高校、中学校、小学校と皆違うので、何となくコミットしづらいかなと…。

進：なるほど。三人はなかなかコミットしづらいか。

Ｏ：小学校同士だったら何か一緒にするとか、共通の話題があるかなと思ったんですけど、それぞれ活動する世界が違っても不思議ではないという気がしました。

Ｔ：「この子を里子として迎え入れたい」というより、「里親になりたい」という気持ちが先にあって、この子を

選んだという順番かなと思ったら、親たちに何らか、里親になりたい動機があるのかなと思いました。例えば、母は子どもたちと関係する専門職で、いろいろ困難な状態にある子どもたちをいっぱい見ていて、翻って自分の子どもたちを見てみると恵まれているなと…。だから里子を預かって、「世の中のことを子どもたちに学んで欲しい」というような動機があったのではと思いました。

進：小学生の男の子が一人家族に加わったということについて、皆それぞれ、どんな感じで迎え入れたのかなぁと思うのですが、その辺りはどうですか。

Ｎ：家族として養育里親になるというのはすごい覚悟でもあると思う。養育里親になろうとしたのは誰かということについては、今の時点ではわからないにしても、受け入れた家族メンバーは、ある程度は納得するまで話したと思う。一方で、実際には思っていたのと違うという感じが出てきても不思議じゃない。誰が解消役になったのか…。仮に母が進めた場合でも、夫婦で支えあってという感じだとすれば、父が仲介役とか、子どもらの不満の受け皿となっていたのかもしれないと思った。また、妻の相談役になっていたのかもしれないと…。子ども視点になれば、長女と里子との距離感は微妙で気にすると思う。また、小学生の課題がある子を養育里親として受けてくれる人ってかなりレアではないかと思う。幼児さんぐらいを受け入れることが多いのではという印象がある中で、よく受けはったと思う。実際に受け入れると、思っていたのと違うといろいろな人が感じたかもしれない。大変だったと思うし、大変さを誰が緩和してくれたり、中和してくれたのだろうと思いました。

Ｆ：里子を受け入れようと思う物語がわかりにくいので、T さんのストーリーはわかりやすいと思った。子どもがいないご夫婦が、里子を迎えるっていうのは割とわかりやすい。既に実子が 2 人いてその上で里子を迎える動機がわからないなぁと思って、今頭の上にクエッションマークがいっぱい出ています。

進：実子を育てる中でさらに子どもを預かろうというには、それなりの思いがある。例えば、広く社会の役に立てればとか…。何らかの事情や経過がある子どもを預かろうと思う方の物語や思いはとても大事になると思います。

Ｔ：家族はそれなりの心構えを持って里子を預かる合意をしても、実際に預かる時点では、子どもたちも含めて、迎える準備ができていたのかを知りたかった。母が恵まれた我が子たちにいろいろ世間のことを知って欲しいと思って、困難な子を預かろうとしたという私の発想だと、家族の合意がしっかりとできて、準備がある程度できていないと預かれないだろうと思った。

進：一定の合意はあったと思うが、一方で、どこまで具体的なことをイメージできているかは微妙なところもあると思う。里子を預かり、一緒に暮らすという父母の思いと長女長男が年下の子どもと一緒に暮らすという思いや物語と現実は必ず一致をしているとも言えないかなと…。子どもたちなりにどこまでイメージできているかというのは、子どもたち三人の年齢とか思いも含めてなかなか微妙かなと…。提出者から感想などがありますか。

提：聞いていて感じたのは、やはり家族にスポットが当たるんだなぁと…。長女、長男の思いはいっぱい出てきたけど、里子の思いってあまり出てこなかった印象があって、里子の思いをどう思うかを聞いてみたいと思いました。

進：里子の思いについてはどう思いますか？ちなみに、里子はこの家で預かってもらう前には、ご家族との顔合わせや宿泊体験みたいなことは当然やっています。

Ｎ：里子さんは思っていたことがどうだったのだろうか、どこまで想像していたのか、想像できる能力があったのだろうかなど、思いました。実際には、思っていたのと違う感はあるだろうなぁ、孤独感もあっただろうなぁとも思いました。里親宅で生活するって言われて、イメージできる方が難しいだろうな。思っていたのと何がどう違うか、本人も言語化しにくいし、誰がその思いを汲めるのかっていう課題もあるだろうなと…さらに、共有している家族の歴史が違う。里子が来る前の 10 年前に行った遊園地の思い出はこの子にない。家族の歴史が違う 9 年間があったことも、誰がどのように穴埋めできるんだろうかと…。誰かが仲介してた

らいいけれど、偏っちゃうと負担だろうと思う。思いを汲む人が家族内にいたのであれば、孤立しないかもしれないって、そんなことを思いました。

Ｏ：どういう風にしてここに来ることになったのかみたいなことは、里子さんにはやっぱりわからないままじゃないかと思いました。長女や長男がどう関わってくれるかによっても居心地は全然違うだろうし、そもそも、二人をどのように呼ぶのか等、とても戸惑ったような気がしました。

Ｔ：私も同じようなことを思いました。この子はこの家で生活するということを一応承知してきているのだけど、一般的な家族像を描くというのは想像しにくいと思った。ここまでにいくつかのマッチングの場面があったかもしれないと思うが、その都度話が成立せずに、この家族は受け入れてくれるということになって、「試しに行ってみようかな」っていう気持ちで里親宅に行ったのかなと想像しました。父や母、姉や兄ができるっていう過大な期待は持たずに…。だから、そんなに失望もないのかなっていうような感想です。

Ｆ：この子の生育歴の中で、産みの親の記憶を持っているのかどうかっていうのは気になります。自分の親の所に戻りたいって俺だったら思うのかなぁって…。でもその親がボコボコボコボコ虐待していてほんまに恐ろしい目にあっていたら、逆にまた新しい家に行くのも怖いなぁとも思うし、そうやって思うとさっぱりわかりません。

進：限られた情報しか出していない中でフリーに喋ってもらっているのですが、その後のことを喋ってもらいます。

提：この子は中学では特別支援学校の方に進んでいます。家の中ではお金の持ち出しがあり、急にいなくなったりとか、いろんな事が起きました。行動が大きくなるとやっぱり振れ幅も大きくなる。警察に捜索願を出しに行ったり、いろんな事が起きて、結局、一家庭でこの子を守るということが非常に難しくなり、中学生の途中で、この家から離れることになりました。その時には、「いやや、離れたくない」っていうことでしたが、結局、施設で生活することになりました。現在、この家族はボランティアという形での面会交流を継続中です。

進：今回、皆さんにどんな風に考えますかと投げかけてみようと思ったのは、里子を受けた家族の中で、どんなことを思ったり感じたりしていたんだろうなあということを想像するかを聞いてみたいと思ったからです。4～5 年、一緒に暮らす中で、しんどくなった、難しくなったということがあるのですが、家族それぞれの思いやどんなことが起こっていたのかなぁということ、また、どんな手助けがあったらこの子も含めて、このご家庭の生活を続けられたと思うのかということも聞いてみたいと考えました。この年齢の里子を受ける時に、この里子はもちろん、家族にもどんなサポートがあったら良かったのだろうというようなことも含めて思いつくことを喋ってください。

Ｎ：この子がご家庭からいなくなった時のそれぞれの気持ちとどういうサポート支援があればそういうことにならなかったということですよね。それぞれ思いはあるし、里子さんが来た時にそれぞれなりに決意はあったり、覚悟はしていたと思う。望んでいた結果ではなかっただろうなと思うとやっぱり、悔しさとか悲しさとかもあるし、いろんな複雑な気持ちが、それぞれにあるんだろうなぁって思いました。本人も含めて、どういうサポートがあったらということですけど、この子の思いを代弁してもらったり、腑に落ちる形で対応してもらえる存在があればと思ったが、実際には難しかったのだろうなと思う。

Ｔ：預かる前の合意というのを最初にちゃんと作るというのは難しいなというのはわかったんですけど、実際にこの子が家に来て以降、次から次にいろんなことが起きますよね。実子でもいろんなことが起きる。ステップファミリーも…。けど、養育里親っていうのはもっと難しいなと思いました。本当の親子になるわけでもないし、籍も入らない。この子の場合は 3 番目の子どもとして、新しい家族を作り出すという覚悟とか、作り出すプロセスに支援が入るということがなかったのかなという感想を持ちました。早樫さんが家族面接や造形法をするとか、何か新しい家族作りをする支援、家族システムに関われるような支援があれば、問題はたびたび起きるのだろうけど、起こるたびにそれを家族で話し合っていくということができていったら徐々

に家族になっていったのかなと…。里親のサポート体制ってまだまだできていないと思うので、養育里親制度を進めていくのであれば、そこら辺をちゃんと整備してやらないとこのような結末が量産されていくという感想です。

Ｏ：本当に難しいなと思っていて、こうなってみるとやっぱりなぜ里子を引き取ろうと思われたというところに戻っちゃうと思いました。里親を始める時に、こんな困難があるということがどんな風に知らされるんだろうなと…。どんな風に里親教育みたいな感じができるんですかね。困難をどう超えていくかというところを、何かある都度、話をしていくとか、そういうところに支援がないとやっていけないって思いました。また、9歳の子の異質さみたいなものを埋めるっていうのが、この年齢からだとすごく難しいなぁというのを思っていました。もしかしたら、小さなお子さんを引き取ることは、親御さん自身の年齢的なことも考えて避けはったんかなと…。あまり年齢の下のお子さんを引き取るのは止めようかというような相談はあったのかもしれないと思っていて、いろんな事が絡んでこうなったのだと思うけども、つながりが切れない形でボランティアをされているところが親御さんたちの誠意だなと感じています。

Ｆ：一番の感想はナイスチャレンジだと思ったことです。普通、なかなか里親をやろうと思わないだろうから、やろうとする優しさと思いやりみたいなところは 120%尊敬します。どんなサポートがあったらいいかと考えたのですけど、里子を預かってからの４～５年の間には、長女も長男も進路の時期が入ってくるし、そうなってくると親御さんもそのサポートというのはとても必要になる。そうなった時にこの子がちょっと寂しい思いした可能性はあるかなと思った。それから家族だけに閉じないシステムというかサポートも必要やったんかなと思いました。

進：ありがとうございます。Ｃさんが喋って、提出者さんに喋ってもらってひと区切りにします。

Ｃ：やっぱり皆で考えるというのが大事だなと改めて思っていました。

提：ありがとうございます。里子は産まれてすぐ乳児院に入った子で、「家庭を全く知らないから家庭というのをこの子に味合わせてやりたい」という思いでのつながりと聞いています。長男はお兄ちゃん役として、この子と向き合おうと頑張っていたのですが、やっぱり里子自身の課題もあり、長男はフェイドアウトしていったという感じです。長女は家族の救世主みたいな役割になってしまったので、間をとりもったりなど、しんどい面があったというのが後からわかったとのことです。放課後デイサービスも使っていましたし、ガイドヘルパーも使っていたようです。小学校の先生とはすごく連携が取れて、「お母さん大変ね」って言われながら綱渡りのようにやっていけたようですが、中学 2 年になったら、学校では OK だけど、放課後デイサービスではダメ、家でもダメと言われるという状況で上手くいかなくなって、試し行動みたいなのがドンドン大きくなっていったとのことです。連携ができているかいないかというか、その子を見る眼差しが同じか同じでないかっていうことによって、崩れてしまうということや、家族は迎え入れるつもりでいたのですけど、家族バランスが全部焼野原になっていったと聞いています。ナイスチャレンジと言われたことは伝えておきます。救われた思いになるんじゃないかと思いました。

進：今の話を聞いてこれだけは伝えておこうということがあればよろしくお願いします。

Ｏ：苦労をされたにも関わらず、切れずにつながっておられるというところにすごく希望を感じています。すごいエネルギーを使って、関わっておられたんだと思いました。

Ｔ：小４から中２までという年月を一緒に暮らしていたんですよね。すごいなって…。そこまで上手くいってて、いろんな関係者との間でガラガラと崩れていった無念さみたいなものとともに、何年かやれていたというのを聞けてよかったです。本当に素晴らしいチャレンジだと思います。実行したご夫婦やご家族は凄いなと思います。

Ｎ：こういった課題や年齢の子を受け入れてくれる里親さんってなかなかいないと思う。家族の歴史をどう作っていくか、トラブルを乗り越えることも含めて、大変な中をよくチャレンジされたなって…。この子は里親家族と出会えて幸せな面があったと思う。思い続けてくれる人がいるとか、形は離れたとしても、どんな形

でも関わろうとしてくれている人がいること自体がこの子の人生にとって幸せなことと思う。そんなことを伝えたくなりました。

提：生活をともにしていた時間があるからこそ、今会うとお互いにものすごくいい関係のようです。この子にとっては、適当に甘えられる存在であり、元里親としても可愛い存在のようです。時間も区切られている中でものすごくリラックスして会えるっていうのは、あの生活があったからできているんだなぁっていうことを私も感じています。

Ｆ：先ほどのジェノグラムを見た時に、母はきっと北川景子さんみたいな素敵な人やろうなと思った。福祉や心理の専門職って、理屈ではあれこれ言うと思うんです。でも、この子を預かりたいと思いを形にしたっていうのが素晴らしいなぁと思いましてね、ご主人はたぶん反町隆史さんみたいな頼りがいがある人なんやろうなと思います。

進：提供者から最後に一言どうぞ。

提：今回事例を提供して、いろいろと相談にのる形で関わってきた私も凄く救われたなって思っています。ありがとうございます。

進：2 時間、ありがとうございました。

《あとがき》

この間、国は里親委託を推進している状況を踏まえ、里親家族に焦点をあてたジェノグラムフリートークを実施しました。ちなみに、就学年齢後の里親委託は、「中途養育」と言われることがありますが、就学後の里子を受け入れた里親に対する支援に関わる課題は少なくありません。家族全体の構造や機能を視野に入れた支援は十分ではありません。今回のフリートークで出てきたキーワードとしては、「家族の歴史」への視点の大切さと歴史のギャップを埋める知恵や工夫です。また、「きょうだいサブシステム」への視点も重要なポイントです。この２点は、ステップファミリーとも異なる里親家族の特殊性と考えられます。

里親がわが子を育てた（育てている）といった子育て経験の有無に関わらず、里親支援担当者は里子を受け入れる前の「家族の多面的理解」と受け入れ後の「家族の発達」への視点や支援のスキルが何よりも必要ではないかと感じた次第です。

★次回掲載予告★

今回のジェノグラムフリートークを踏まえて、「里親家族の支援に何が必要か！」というテーマ（仮）での意見交換を掲載予定です。



対人援助学マガジン読書会報告

対人援助学マガジン読書会（第 6 回）実施報告

2022 年 11 月 24 日（木）の 21 時より、第 6 回目の「対人援助学マガジン読書会」をオンラインで開催しました。

第 6 回の指定図書は、玉村文さんの「応援、母ちゃん！」でした。玉村さんは対人援助学マガジン 41 号から連載をスタートしており、2022 年 11 月現在 9 回まで連載されていました。連載開始時は第 I 子を産まれた後から。その後 2 年半の連載の中で、生まれてきたお子さんはどんどん成長し、そして第 2 子も生まれて…と刻々と変わりゆく状況の中での、まさにリアルタイムの連載です。

読書会では、子育てをしながらの仕事を続ける中でのご苦労や、家庭内での家事分担のことなど、「現代の子育て家庭の実際」について、参加者も含めて実体験や考えを述べあいました。この報告に細かくは書ききれませんが、「もっと父親も育児参加を！」とか「もっと働きやすい社会を！」という一般論ではない、個別的な家族や夫婦のあり方について考えていく時間となりました。

ご参加くださった皆さん、ありがとうございました！次回は 2023 年の夏ごろの予定です。

第 6 回読書会指定図書執筆者：玉村文さん

地域若者サポートステーションを経て、現在、南青少年活動センター勤務、アフターケア担当。33 歳で初めて出産し一児の母。母親業と対人援助の仕事をしながら生きる日常を書いていこうと思います。趣味は、ヨガとイラスト描き（対人援助学マガジン 41 号執筆者短信より抜粋）。

連載では、ご自身の子育てを題材に、子育て場面の「あるある」を描きながらも、連載のテーマでもある「応援」や、他者の助けを受け止める力「受援力」など、援助職の視点も交え、まさに援助職者の子育てのリアルがあふれる連載となっている。

（編集部）

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

突然のウクライナ侵攻からずいぶん時間が経ってしまった。それを見る世の中はだんだん、対岸の火事になってきているように思える。

そんな中、旧友漫画家・篠原ユキオが、ウクライナの漫画家達のために、風刺マンガ展**「ウクライナからの手紙」**を一人で準備し、京都で開催した（その後、関東でも開催された）。その作品の一部が今号に掲載されている。（HITOKOMART 特別編）是非、ご覧頂きたい。

また、マンガ展開催の要望があれば、作品の無料貸し出しが可能とのこと。大学の展示スペースとか公共施設のギャラリーなどでの開催をご検討いただけると幸いです。編集部に連絡くだされば つなぎます。

＊

マガジン51号締め切りの直前、11 月 19-20 日に対人援助学会新潟大会がzoomで実施され参加した。新潟水俣病に焦点を当てた、しかし医療には留まらず、私達の現在に繋がる様々な社会構造的な課題が明らかにされた。

今号に大会参加者からの寄稿もある。本間毅大会委員長の連載**「新潟水俣病を学び、考えたこと」**も合わせてお読みいただければと思う。

＊

今号からの新規連載者は2名、久々の復帰1名。このところ毎号、希望者がある。ますます多方面からの対人援助的活動の報告が積み重ねられていく。

コロナきっかけだったが zoom 活用が普及して、マガジンの活動拡大も気軽にできるようになった。「執筆者トーク」や「読書会」など、負担にならないよう楽しみながら、頭脳エクササイズを積んでいきたい。私にはボケ防止行動でもあるが（笑）。

しかし、それにしてもこの執筆者数、事情による休載やハプニングといろいろあるので大変だ。今のところごく少数の習慣的原稿遅延者以外は、皆さん紳士、淑女である。それが定例刊行を支えてくれている。有難い事だ。

編集員（チバ　アキオ）

奈良の西大寺に以前住んでいたという人と話しをする機会があった。私も西大寺の隣、高の原に住んだことがある。西大寺にある「ならファミリー」も、以前あった「百貨店そごう」（回転展望レストランが大好きでした）も日常の買い物スポットだった。今回の元首相暗殺事件では西大寺駅前が舞台になった。今日話した人は、犯人を昔から知っているという。本当にまじめなバスケ部の先輩だったと話す。沢木耕太郎著『テロルの決算』は社会党委員長であった浅沼稲次郎の暗殺犯を描いたノンフィクションである。「昭和の衝撃事件！」というような本には必ず載っていたこの 1960 年の事件。令和の事件のこともあり手に取って読んだ。こうした人と向き合う仕事をしていると二つの事件を見て思うことはいくつかある。その一つは今も世界各地で起こっている暴力の歴史である。

大雑誌シリーズを古本屋で購入した。各時代ごとの様々な雑誌記事を転載し、まとめて本にしている。「明治編」「大正編」「昭和戦前」「昭和戦中」「昭和戦後」の 5 冊である。記事は時代の情勢に関する記事や暮らし、風俗に関する記事が多い。朝鮮戦争景気に沸く神戸の会社社員の歓喜の声とか、戦争で負けて進駐軍が来たら女性は笑顔を向けてはいけない！とか、「乳バンド」と「乳カバー」の違いを機能から解説した広告とか…。私にとっては歴史上の人物もみんな現役で「今」に関する文章を寄せている。東京裁判で東条英機の頭をはたいた大川周明も、太宰治も、永井荷風もみんな現役バリバリ。読んでいてわかるのは歴史の事実の多くが忘れ去られるということである。昭和8年3月3日の昭和三陸地震と津波に関する記述も 2011 年を知って読むと複雑な思いがある。公娼の廃止論議も活発で、炭鉱の事故、青函連絡船の沈没事故、帝銀事件の犯人の家族の手記もある。これらに共通しているのはやはり「暴力」の要素である。

マガジンは雑誌である。これらの「大雑誌シリーズ」を見ていると、雑誌は雑誌としての使命があるように思う。独自性もある。

本になったり、論文になったりしないところにも人の暮らしはある。そして、その暮らしには暴力も含まれている。社会的暴力、制度的暴力、構造的暴力…。こうした「力の格差」に向き合っている感じがしてならな

い。「暴力」の要素が社会にあるならば、することは一つである。負けないぐらいそうでない要素を社会に含めばいい。マガジンも、学会大会も、支援のあゆみもそのポジションにある大事な要素であり、コンテンツである。ますます元気に行こう。

編集員(オオタニ　タカシ)

短信でも書いたのですが、対人援助学会に関連した活動が活性化しています。11 月は、学会の大会と読書会、そして 51 号の編集作業ということで、ある意味、対人援助学会を味わい尽くす月間となりました。

先日の編集会議は、大会や読書会を受けての話題も含みながら進むことになりました。大会のテーマは「新潟水俣病と私たち」でした。恥ずかしながら、昭和 50 年代生まれの私にとって、「新潟水俣病」とは教科書に載っている「公害」のひとつのトピックであり、既に解決された過去の問題という認識でした。しかし、そこで起こっていることは現在進行形であり、学ぶほどに被爆者の問題や原発被災地の問題、ハンセン病や女性の性被害の問題など、さまざまな課題と相似形を成していることに気づかされることとなりました。

一方の読書会では「応援、母ちゃん！」の執筆者の玉村さんを囲んで、現代の育児、家事、子育て談義が大いに盛り上がりました。日本の社会が形成する現代の子育て環境というマクロな視点と、パートナーと共同で取り組む子育てというミクロな視点の両方に目を向けながらも、肝要なのは、自分ごとを大きな語りでぼかしてしまわずに自分ごととして引き受けるということなのかな、というのが今の時点での理解です。

対人援助学マガジン

通巻51号

第13巻　第3号

２０２２年１２月１５日発行

http://humanservices.jp/

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第52号は2023年3月15日
発刊の予定です。
原稿締切2023年2月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021
大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

表紙の言葉

このイラストは、本誌連載者の一人である荒木晃子さんの、島根県で不妊治療と里親制度をつなぐ活動のパンフレット表紙画として使ったもののヴァリエーションだ。

この絵の森にはちょっと奇妙な奴らが散見される。ＴＶ画面に切り取られた美しい森の奥には、何やら怪しい者たちが潜んでいそうだ。

そもそも森の奥には、いろいろなものが隠れ住んでいるもので、童話にも「森の中」はいろいろ登場する。

大きな森の木の下が、楽しく遊べるとは限らない。富士山麓に広がる青木ヶ原樹海のようなところが、世界中にたくさんあると思う。

団士郎　(2022/12/15)

対人援助学会
Japanese Association of Science for Human Services

第 14 回大会参加記

大会テーマ：「新潟水俣病と私たち」

主催：対人援助学会・退院支援研究会

2022 年 11 月 19 日（土）～20 日（日）

WEB 上での開催

盛会で幕を下ろした第 14 回大会。参加者の声を集めました。トップバッターは 1 日目の司会も務めてくださった梁陽日さん！

梁陽日ヤンヤンイル

対人援助学会第 14 回大会に関わっての思い入れ

今回の対人援助学会新潟大会は、コロナ感染対策のために残念ながら現地で開催されずにオンラインのみになりましたが、それでも地元実行委員会から出された新潟水俣病をメインにした研究テーマの重厚さは変わらず、参加した私たち一人ひとりに対人援助に携わることの意味やあり方を問い質してくれる意義深い学び場となりました。

人によっては「何で今さら新潟水俣病？」「対人援助学とどういう関連があるのか」と戸惑われた方もいたかもしれません。しかし、今回の本間大会長をはじめ退院支援研究会の実践の背景にもある、長年脈々と新潟水俣病の支援で受け継がれてきた援助職の方々の一貫した姿勢、それは清濁併せ呑みながらも徹底して人を大切にする立場に立つ姿に対人援助の原点を見出し、私自身は大きく心を揺さぶられる思いをしました。

あらためて今回の問題提起をはじめ貴重な証言の数々から、日本の近現代の歴史は国家や社会の繁栄や発展とセットで語られることが多いですが、その神話の陰でその時々の権力の横暴や利潤追求によって解体、翻弄されていく人々の生の闘いの歴史でもあり、現在の生存権保障や人権確立のために今も続く長いプロセスであることを痛感します。新潟水俣病も高度経済成長がもたらす地元経済の影響力の強さから、行政、地域、医療関係者が沈黙する中で、齋藤恒先生が周辺の圧力を跳ね除けて真相究明に道を切り開き、志同じくする萩野直路さんなどの仲間たちとの立ち上がりによって長い年月かけて救済の道に導かれたことは本当に尊敬に値する尊い行いです。

この一連の学びの流れから私は対人援助とは、未熟な人間が不完全な世界と向き合い、不充分ながらも人と関わり合う中で世の中を変えていく、自らを解放する尽きることのない人間解放の普遍的なプロセスではないか、という思いが良い意味で確信として捉えることができた思いです。

社会福祉分野において、日本も採択している世界共通の原理である国際ソーシャル

ワーカー連盟が定めた倫理綱領の「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」は下記のよう援助職とは何かを定義している。「ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい。(IFSW;2014.7)」

これに倣って日本ソーシャルワーカー連盟の原理においても人権や社会正義、多様性の尊重の具現化を謳っている。しかし実際の現場で対人援助職は様々な人々や事象と出会っていながら、問題解決の礎の中に社会正義や人権の発揮をミッションとして抱えながら果たせているだろうか。

その反面、ある地方社会福祉士会の HP には、倫理綱領の紹介と併せて支援とは何かの説明が次のような文言である。「社会福祉法に基づき、公正・中立的に福祉サービスの理念や具体的なサービス内容について専門的な視点から実施し、『利用者の立場に立った』『良質かつ適切な』福祉サービスの提供に資することを目的とする」

ここから読み取れるとしたら、実質的に崇高な理念と現実の日常業務との矛盾や乖離があり、組織の一員として限定された枠組みの中でいかにうまく立ち回るか。同調圧力やバーンアウトと隣り合わせの職場にあって生きがいやりがいを育むことの困難さに直面しつつも、目の前の誰々さんのため、生活のために一生懸命働いている現場の人たちとつながることも重要なプロセスであろう。だからこそ、昔の使い古されたものとして現場で見向きもされない「社会正義」や「人間解放」の意味を問い続け、時代状況や困難さとの綱渡り状態の中にあっても一緒に現場にこだわり、多くの人たちと築き上げることができる希望の方途として、今後の対人援助学会につながる私たちの働き（それは研究、実践・臨床・交流、参加等あらゆることを意味する）は決して小さくないはずです。

対人援助学会が今年度から 3 ヵ年計画で大会会場を設定(2022 年新潟、2023 年広島、2024 年京都)することで、各地方における対人援助研究・実践のネットワークづくりと学会のボトムアップをめざす試みが始まりました。まだまだ歴史が浅い小さな学会で不十分な事柄は多くあるかもしれませんが、この 3 ヵ年の試みは私たちの行動次第で大きく変化しうるダイナミズムの可能性を感じています。

今後とも多くの人たちと一緒に携わって良かったと思える大会づくり、対人援助学のプラットホームを創っていくことにチャレンジしていけたら幸いです。

追記

本来ならば大会運営責任者の一人として全体を概括する文章がふさわしいところですが、今回は純粋に一参加者として見た大会で感じたことを書かせて頂きました。また他のプログラムやポスターセッションについて言及がないことは決して軽視している

わけではなく、現状で思いが溢れすぎてすべてをまとめて書ききれないことから、新潟水俣病での学びに焦点を当てて書いたことをご理解、ご容赦下さると有難く思います。

次は、ワークショップ 2 つでも活躍された大谷さん！

大谷多加志

対人援助学会　第 14 回大会参加録

2022 年 11 月 19 日・20 日の両日で、対人援助学会第 14 回大会が開催されました。学会と関わるようになって 10 年以上が経過していますが、実は大会に参加したのはこれが 2 度目です。一応言い訳をすると、以前は土日に研修の運営をする仕事をしていたため、土日は仕事とバッティングしていることが大半で、ほぼ参加を検討できる状況になかったという事情もあります。

今回は 2020 年度の大会以来、2 度目の参加でしたが、企画ワークショップ 2 件に関わらせて頂きました。ひとつが企画と司会を担当した「対人援助学マガジン特別企画リアルタイム執筆者短信」、もう一つが対人援助学会の研究会と関わる企画である「サステナブル（持続可能）な研究会のつくり方～学会設立以前から 13 年続く、対人援助学会研究会のセブンルール～」でした。今回は能動的な形で大会に関わることができたので、自分なりの記憶を残しておくことも意図して、大会参加録を書かせて頂くことにしました。公開版の日記、みたいなつもりで書いていこうと思います。

ひとつ目の企画である「リアルタイム執筆者短信」は、文字通り、いつも対人援助学マガジンの巻頭にある執筆者短信をリアルタイムで行おうという企画で、短信に書いて下さっているような近況を執筆者の方にそれぞれお話頂き、それに対するフロアからの質問や感想などを織り交ぜて進行していく予定でした。とはいえ、本番の時に誰が参加して下さるのかは、実は当日になるまで全くわかりませんでした。大会参加者数だけはおおよそわかっていたものの、そのうち何名がマガジン執筆者の方なのか？そもそもこの企画に参加して下さるのか？はまったく不明だったからです。大会前日に、編集長から「明日の企画はどう進行するの？」とお尋ねがあり、「出たとこ勝負です！」と返したところ、LINE のグループビデオ通話機能を使って緊急ミーティングを開いて頂くという不安に満ちた前夜でした。

「リアルタイム執筆者短信」は、大会開会直後の最初のプログラムです。どのくらい参加者がいるか…とドキドキしていると、参加者は 30 名強、うち執筆者の方が 10 名ちょっとという状況でした。参加者がとても少ないパターンと、とても多いパターンの両方を想定していましたが、結果「ちょうどよい」集まり具合となり、ワークショップ冒頭の企画者挨拶の中でも思わず『ちょうどよい人数で、よかったです！』と口走ってしまいました。執筆者としては、大会長の本間先生、学会理事長の中村先生、村本先生ほか、多くの方がご参加くださいました。少しずつ初めましてではない執筆者の方が増えてきたことを嬉しく思いつつ、執筆者の皆さんの近況やこぼれ話を楽しくお聞きしま

した。ちなみに、リアルタイム執筆者短信の企画趣旨には、次のように記していました。

『本ワークショップではこの「執筆者短信」をリアルタイムで行うことで、通常の誌面では起こり得ない相互交流や意見交換の機会とし、対人援助学マガジンや対人援助学会のさらなる展開や活性化につながることを目標とする。執筆者はもちろんのこと、執筆者以外の読者の参加も大歓迎であり、参加者と執筆者が幅広く交流する機会となることを期待したい。』

結果的には、事前の期待通り、通常ではできない相互交流の場となったと感じており、企画者としても満足感のある時間を過ごすことができました。

2つ目の企画である「サステナブル（持続可能）な研究会のつくり方　～学会設立以前から13年続く、対人援助学会研究会のセブンルール～」は、メインの進行を千葉さんが勤めて下さるので、ひとつ目に比べると気楽な構えで参加しました（ひとつ目も“出たとこ勝負！”とか言っているわけですから、十分気楽そうですが）。ただ開始直前の打ち合わせで、『最後のセブンルールは大谷が提示する』という段取りが急遽決まったため、一気に前のめりで参加する形になりました。このワークショップについては記録係も担っていたため、記録を残すという意味で、少し詳しく議論の経過を説明しようと思います。

このワークショップは3部構成になっていて、

① 研究会初期メンバーからのコメント
② 2022年度から研修・交流委員になったメンバーからのコメント
③ フロアとのディスカッション

の流れで進行しました。

最初は、研究会が設立された当初から関わっていた千葉さんと中島先生から。研究会は現在まで51回開催されているのですが、実は当初は学会設立前の「設立準備会」の段階から始まっており、月1回ペースという、かなりの高頻度で開催されていたことを、この企画を通して初めて知りました。

千葉さんからは、研究会初回の案内文の中から、現在の研究会に通じるいくつかの理念が紹介されました。それが、「融合と連携」「多様な職種と領域」「援助実践の振り返り」「オープンな会」「修了生や関連の援助職者を招いた勉強会」という点です。

また、中島先生と千葉さんのお二人からは、情報発信や会場確保の苦労や試行錯誤などが語られました。Yahooブログで情報発信を行っていたところ、Yahooブログ自体が廃止となり、学会HPに移転した経過など、長く続けていればこそのご苦労もあることがうかがえました。会場確保の問題から2018年以降一時休止状態になっていた研究会が、コロナ禍を経てオンライン形式で復活して今を迎えているという状況もあり、時代の力は追い風にも逆風にもなるのだと感じました。

研究会の特徴として、前半1時間が主にゲストのお話、後半1時間はグループでの討議という流れで、参加者は全員何かしゃべって帰る、という構造になっていた点が挙げられます。聞くだけにならず、全員発信する形になっていたことは、この会が研修

会ではなく研究会として位置付けられていたことを象徴していると思います。

ちなみに、研究会で登壇するゲストには、謝金は支払われていません。実を言えば交通費の支給さえないのです。これも、研修会であればあり得ないことでしょう。ゲストへの支払いがないという点については賛否があるかもしれませんが、事実としては51回に渡って講師は登壇しています。もちろん、お知り合いの方などこの条件で引き受けてくれそうな人を人選したというご苦労もあったことと思いますが、それにしてもゲストの方々はなぜ引き受けてくれたのでしょうか。

ワークショップでは過去の登壇者に対して質問として投げかけられました。すると「よい取り組みだと思っているけれど、伝える場所がないから…」という声がありました。つまり、リターンがあることが動機になっているのではなく、まず「伝えたいこと」が先にあるということです。これはよく考えると、対人援助学マガジンとも同じです。マガジンも、執筆者は原稿料をもらったりはしておらず、むしろ学会費を支払いながら執筆をしているのですから。知っているからこそ、知っている者の務めとして、人に知らせたり共有したりする。これは対人援助学会自体の特徴と言えるのかもしれません。

他にもさまざまなお話があったのですが、まとめきれそうにもないので、このくらいにして、最後に当日まとめた「サステナブルな研究会を作るためのセブンルール」を記して区切りに使用と思います。

対人援助学会研究会のセブンルール（2022



年 11 月現在、大谷案）

① 形式的義務からの自由（申込・資料なしゆるふわルール）
② お金からの自由（会場費・参加費なし）
③ 定期開催（次を予定する）
④ 企画者側に無理がない（ ＋ 役得）
⑤ 交流・雑談の時間を作る（つながる・広がる・偶然性）
⑥ コンテンツの消費にしない
⑦ ゲストのネットワークにつながる

他にも、大会では今年度の研究会でもテーマとしてきた「新潟水俣病」についての企画ワークショップがあり、また次年度大会に向けての理事会企画「広島の被爆樹木による平和教育」がありました。

この部分は、他の方が参加記録を残してくださると思いますので、詳細はそちらでと思いますが、「正義か、生存か、ではなく」という言葉が強く記憶に残りました。人生は簡単にこのどちらかに割り切れるようなものではありません。「そうは言っても現実は…」「いのちあってのことでしょう」と言うことはたやすいですが、そのような葛藤を抱えながら生きる人々を支えることこそ、「対人援助」の本質であると思うのです。

2 日間を通して、たくさんの刺激を受け、また次回に向けての期待も高まる、大会参加でした。参加記を読んでくださった皆さま、来年は広島です！ぜひ参加をご検討下さい！

次は、少し違った角度から。いつも学会の広報・ホームページを担当してくださっている乾さん、川原さんは今回も大会の前から事務局役割を熱心にしてくださいました。そして、そこでいつもご協力いただいているのは「株式会社ディレクターズ・ユニブ」の板倉一成さんです。このマガジンがこうして読むことができるのも、大会がオンラインで毎年開催できるのもディレクターズ・ユニブさんのサポートあってこそ。…ということで当日 2 日間に運営サポートをしてくださった板倉さんからも！

板倉一成

株式会社ディレクターズ・ユニブ

対人援助学会　第 14 回大会 参加記

対人援助学会第 14 回大会@新潟をオンラインサポートの立場から振り返ってみます。

きっかけは、前職の大学コンソーシアム京都の上司である京都橘大学の乾明紀さんから連絡があり、自分の会社でウェブサイトの制作と保守・管理している対人援助学会の大会のオンラインサポートをしてほしいという依頼からでした。コロナ禍以降、映像とウェブ、グラフィックを守備範囲の中心としている弊社では、大小問わずかなりの数のオンライン配信やオンラインイベントの運営やサポートを実施してきたが、学会のサポートのお声はかかってこなかった。

年度末にかけて駆け込みの案件が増えてきて、また年末に向けてタスクが山積みの僕は、どのみち、この時期は休日出勤が予想できたので、初めての学会のお仕事という

楽しみも重なり、二つ返事で受託のお返事をさせていただいた。

6年前から立命館大学や龍谷大学で映画・ゲーム・アニメなどのコンテンツ産業について、非常勤講師で偉そうに講釈を垂れるようにはなったが、体系的に物事を学んだわけでもなく、撮影現場や居酒屋でいろんな人と話をして積み上げた「街場の映画論」ぐらいしか手持ちにないインチキ講師としては、「学会」なんて聞いたら、どんな専門的な話題が繰り広げられるのか、どんな激しい議論が交わされるのだろう、と多くの想像に駆られた。

まずは内容をさることながら、オンラインサポートについては、ほとんどサポートすることなく、順調に進行したと言って問題ない。僕自身も自分の授業を対面からオンラインに切り替えた苦労を思い返しながら、多くの先生が僕よりも教育現場の中心で、「どうしたらオンラインでも豊かな教育を構築できるか」という問いに腐心していたこと考えれば、オンラインツールやトラブルなどに対する対応力の高さは頷ける。

その中で、今後の申し送りと反省点を、一点ずつ記載しておきたい。

Zoom において今後の運用で注意したいのが、同じルームに入退室を繰り返す形で運用する場合、入室したタイミングからしかチャットが閲覧できないので、後から入室したユーザーは入室以前のやり取りが把握できないという点である。長時間のオンラインイベントの場合、チャットで繰り返しお知らせを出すか、別の掲示板などを活用するかなどの対応策が必要である。

反省点としては、オンラインのポスターセッションのコメント機能のエラーである。現在も原因の把握を進めているが、特定の環境下で文字数が多くなりすぎるとエラーが出るというものである。この辺も次年度は改善できるようにしたい。

内容については、言及できるほど知識や経験を持ち合わせいないが、1日目・2日目と「新潟水俣病」について大変貴重なお話を聞くことができた。「新潟水俣病」といえば、学生時代に傾倒した数多くのドキュメンタリー映画の中に、佐藤真監督の『阿賀に生きる』がある。これまで見てきたテレビにも、映画にも、それこそ教科書にも載っていない姿がスクリーンに映し出されるのを見て、20歳の僕は大いに衝撃を受けたことを今でも覚えている。齋藤先生のお話を聞き、映画で見た阿賀に生きる人々の表情を思い出した。

また「サステナブル（持続可能）な研究会のつくり方　～学会設立以前から 13 年続く、対人援助学会研究会のセブンルール～」については、先生たちの実践の振り返りからの言葉も多く、示唆に富む内容であると感じました。僕自身、企画やプロジェクトの案件ごとにチームを作り、目標を達成すれば解散を繰り返すという、すごく消耗的なビジネスの中で仕事をしていることからも、もっと持続的で長期的なプロジェクトを運営していけるチームのあり方を現在、模索しており、大変参考になる内容でした。小さなことですが、○○先生を○○さんと呼ぶ

などは、チーム内では次の日から実践している。

振り返るとサポートを横に置き、一番、学び、楽しんでいたのは僕かもしれない。「学会」というカッコは外れ、この開かれた会の一員として、いつの間にか僕まで文章を書いている。笑顔の千葉さんのお誘いを安請け合いした自分を憎みながらも、コマーシャルとは対極にある部分として、楽しんで書いている自分がいました。

以上

directors univ
映像・WEB・印刷制作 / 映画配給・映画祭企画運営
お見積りは無料です ☎ 075-222-5525

株式会社ディレクターズ・ユニブ

(directors-univ.co.jp)

次は、次回 15 回大会につながる「広島の被爆樹木による平和教育」の発表者もしてくださった來須さんです！

來須真紀

対人援助学会に参加して

今回、対人援助学会に初めて参加させていただきました。

初参加で、発表者という重責を仰せつかりかなり緊張するデビューでしたが、たくさんの方々のおかげで、なんとか発表も終えることができました。ありがとうございました。

発表を聞いていただいた方はお分かりだと思いますが、私は小学校の教員です。学校の社会的な役割は多岐に渡りますが、その中の一つとして、後世に伝えていかなければならない事実を伝え、そこから考え、実践し自分の未来と世界の未来を切り開いていく力をつけるということがあると私は思っています。発表させていただいた戦争、原爆のことはそれにあたる実践です。この度、新潟水俣病に関する様々なことと学習させていただき、教員としてこの事実をどこまでどのように伝え、そこから何を考えさせたらよいかと考えています。もちろん、発達段階というものがありますので、学習内容や方法は熟慮しなければなりませんが、今後、実践例なども探しながら模索していきたいと思っています。

個人的にとても心に残ったのは、出産に関することです。私は、初産が３６歳で、高齢出産です。高齢出産の場合は出生前診断をしたほうが良いということが言われ始めた時期で、私も出生前診断をするかどうか迷っておりました。そんな時、かかりつけの産婦人科の先生に「授かったんだから、いまさらどうもこうもないでしょ。」と言われました。私はこの言葉で救われ、母親になろうと気持ちを新たにしたことを今でも覚えています。この先生のお世話になることができてよかったと思えた瞬間でした。２日間の学びの中で、自分で判断することができないまま、家族を作る権利を奪われた人たちのことに思いをはせていました。１０年前、出生前診断をしようと思った自分と目

を覆い、耳を塞ぎたくなるような事実を重ね合わせました。かかりつけの先生の言葉に感謝しつつ１０年前の自分に対する複雑な思いがあふれてきました。安易に新しい情報や〇〇したほうがよいという世論に振り回され、自分自身の意思や気持ちを自分で捨ててしまっていたこと、そしてそんな迷い道から自分の道に戻してくれたのは先生の一言だったことに今更ながら気づかされました。そんな１０年前の自分のふりかえりをした２日間でした。

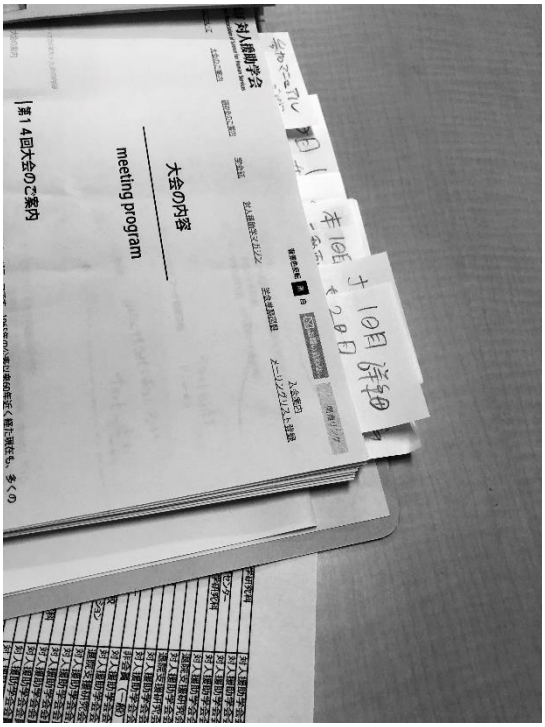
最後に、参加させていただいたご縁に心から感謝しております。ありがとうございました。

千葉晃央

「新潟」から「広島」へ

第 14 回大会は、とても印象に残る二日間でした。まずは公害問題をテーマに対人援助とは何か？を考える経験でした。大会前の研究会 2 回、マガジン連載から始まり、本間大会長の精力的な活動のおかげで、様々な側面から接近することができました。しかもそれだけではない。こうした問題に長年向き合ってきた方との出会いである。ゲストに来てくださったり、同時に参加者としても同じ時間を過ごしてくださったり…。まさに対人援助という領域が広がり、同時に共通の願いを実感する経験でした。

オンラインポスター発表にもチャレンジをしました。コメントから気づきもいただき、大変ありがたかったです。準備段階で相



談した大谷さんからの「ポスターはパワーポイントがおすすめ！」に従ってよかったです。パワーポイントはオンラインでの発表には適していると感じました。他の方のポスター発表もほとんど読ませていただきました。コメントも複数入れさせてもらいました。読んで、考えて、思考が広がり、自分の知っていることつながることもありました。頭を巡らせていることも楽しかったです。

ワークショップでは研修交流委員会として『サステナブル（持続可能）な研究会のつくり方～学会設立以前から 13 年続く、対人援助学会研究会のセブンルール～』を担当しました。中島弘美先生とのラジオトークで振り返る 13 年からスタート。そして、実録！委員の生の声！コーナーでは今年から委員に加わったでは渡辺修宏先生、大谷多加志先生、早樫一男先生から！そして、ゲストに登壇してくださった方！参加者からのお声もいただいた。最終的には、研究会を持

続可能にしたセブンルール 7 つを大谷さんが決めてくださった。なかなか私たちらしくていい！早速参考にして始めてみたいという即レスもいただいた。

そして、対人援助学マガジン編集部として、リアルタイム執筆者短信！も開催。大谷さんの安定の進行に、横から安心して楽しくチャチャ入れ的参加。著者の方とオンラインとはいえ、コミュニケーションができるという充実タイム。執筆者の正木恵子さんは、千葉が 20 代の時から同じところで学び、今もこうして一緒に何かするご縁！でも久々の再会に感激！涙が出ました。

この大会では大会の準備から、当日の運営の一端も経験。大会長本間先生、乾さん、川原さんと電話で打ち合わせもしながら当日まで。学会大会が様々な過程を経て開催され、当日のサポートもどういう体制が必要なのか、どういう動きが必要なのかを知りました。広報・ホームページ推進担当委員会の乾先生、川原さんに感謝。当日はディレクターズ・ユニブの板倉さんもサポートに。いつもマガジンの最終アップを担ってくださっているので、また違う形でこうしてご一緒に。千葉もオンライン大会 2 日間のサポート係をしました。でも、そもそもこうして一緒にできることがうれしい。バーベキューでも、食事会でもいいのかもしれないけど、学会ということを一緒にできたのはまた心地よい喜びがあります。

他者に尽くす、未来を創る、幸せをつくることを使命に持つといってもいい対人援助の領域。こうした学会自体も、関与している者にとってはある種援助的でもある。気が付くと、学会があるからできた経験も学びもずいぶん多くなってきました。そして、もう来年の動きが始まっています。援助すべき課題もなくなることはなく、むしろ進展し、広がる。それらに負けずに、支援者も進み、広がるためにまた動いていきますか。

ということで、次回第 15 大会は 2023 年 11 月初旬の土日、広島で開催！もうすでに打ち合わせが始まっています！また、大会で会いましょう！

★予告★

対人援助学会

第 15 回大会

2023 年 11 月初旬

土日開催予定！

ご予定ください！

